

太史公自序疏證

吉 本 道 雅

序言

太史公自序は、『史記』を理解する上での關鍵とみなされてきた。太史公自序に対する注釋、あるいは太史公自序を中心的な資料とする司馬遷研究には枚擧の暇が無い*1。

太史公自序は、およそ七段に分かれる*2。すなわち、

- (一)「昔在顓頊」：司馬氏系譜
- (二)「太史公學天官於唐都」：司馬談
- (三)「太史公既掌天官、不治民。有子曰遷」：司馬遷の出仕まで
- (四)「是歲天子始建漢家之封」：司馬談の遺命
- (五)「上大夫壺遂曰」：壺遂との對話
- (六)「七年而太史公遭李陵之禍」：李陵の禍
- (七)「維昔黃帝」：百三十篇の序

である。

とりわけ『史記』の性格を問題とする場合に重視されているのが、(四) 司馬談の遺命・(五) 壺遂との對話であるが、これらが對話篇の形式を採ることの意味を追求した研究は寡聞にして知らない。

この二つの對話篇は、「設論」に屬するものと考え。『文選』卷四十五は「設論」の項目を立て、東方朔「答客難」・楊雄「解嘲」・班固「答賓戲」を収める。「解嘲」は『太玄』の序に当たり、「答賓戲」は『漢書』敘傳に収められている。これは、太史公

*1 近年の研究として過常寶「傳統的構建及其意義：《史記・太史公自序》相關內容解讀」（『第十一屆漢代文學與思想國際學術研討會論文集』、國立政治大學中國文學系、2019）・程蘇東「“詭辭”以見義：論《太史公自序》的書寫策略」、《嶺南學報》11、2019）がある。なお、先行研究の包括的検討については、別稿を準備中である。

*2 張大可・梁建邦『史記論贊與世情研究』（『史記研究集成』4、華文出版社、2005）。

自序の對話篇が「設論」であることに倣ったものである。「答賓戲」が「戲」と題する
 ように、これらは架空の對話であり、その内容も滑稽の言に類する。「設論」の戯作性
 は東方朔「答客難」に明らかである*3。

太史公自序の對話篇を「設論」と判断する所以は後述に委ねるが、(四) (五) が「設
 論」であれば、太史公自序のほかの部分にしても、「設論」と同様の滑稽の言を基調と
 するものと考えることが自然である。太史公自序は滑稽の言の形式を採用することに
 よって、ありうべき筆禍の回避を圖ったものと考え*4。

第二に考慮したいのが、『漢書』司馬遷傳の構成の意味するところである。司馬遷傳
 は『漢書』の列傳においては特異な構成を採っている。すなわち、

(一) 太史公自序の引用：冒頭より太史公自序を引用する。『漢書』における列傳の書
 式を逸脱している。『史記』とは若干の文字の異同があり、百三十篇の序は篇目のみを
 引き、「遷之自叙云爾。而十篇缺、有錄無書」で結ぶ。「遷之自叙云爾」と殊更に明記
 していることが注目される。太史公自序と班固の司馬遷に對する理解の相違をあらか
 じめ明示したものにほかならない。

(二) 報任安書の引用：「遷既被刑之後、爲中書令、尊寵任職。故人益州刺史任安予遷書、
 責以古賢臣之義。遷報之曰」の書き出しののち、報任安書を引く。

(三) 司馬遷死後：「遷既死後、其書稍出。宣帝時、遷外孫平通侯楊惲祖述其書、遂宣
 布焉。至王莽時、求封遷後、爲史通子。」

(四) 論贊

である。

この構成は、(一) 太史公自序において提示された虚構を、(二) 報任安書・(四) 論
 贊に據って段階的に解體し、司馬遷の實像を再構築する過程とってよい。一體、太
 史公自序は『史記』に豫想される不特定の讀者、「後世聖人君子」を對象とする。「設論」
 の文體から、虚實の交錯は豫想されようが、伏在するはずの司馬遷の「眞意」は、個々
 の讀者の推量に委ねられる。對するに、報任安書は、同じく武帝に仕えた「故人」任
 安に宛てたものであり、事實關係において虚構を差し挟む餘地はない。司馬遷傳は、

*3 谷口洋「客難」をめぐる(『中國文學報』43、1991)。

*4 吉本「史記編次考」(『東亞文史論叢』2003)。

報任安書によって太史公自序の虚構を開示し、論贊において時間の経過によって客観化・記號化された司馬遷の歴史的意義を説くのである。

以上、本稿の基本的な趣旨をあらかじめ提示した。以下の記述はこの所見を具体的に説明するものとなる。

ここで、太史公自序の分析に先立ち、司馬遷が自身の言説を特権化していることを確認しておこう。

一人稱代名詞の「余」/「予」は同音だが、先秦秦漢文獻現行本における使用頻度には顕著な特徴が認められる。すなわち、『左傳』および『逸周書』の一部・『楚辭』の戦國部分・『國語』・『呂氏春秋』・『韓非子』において「余」が専用もしくは優越することを除き、戦國および前漢前期文獻はより一般的には「予」を専用するのである*5。

	詩	書	論語	左傳	孟子	儀禮	禮記	大戴禮	逸周書	楚辭・戰國	莊子	墨子	管子	晏子春秋	公羊	穀梁	國語	呂氏春秋	荀子	韓非子	戰國策	楚辭・前漢	新書	韓詩外傳	春秋繁露	淮南子	史記
余	1	0	0	169	1	0	1	0	20	106	7	1	2	1	0	0	53	17	0	5	1	11	1	2	0	4	109
予	91	146	23	3	44	3	27	5	70	15	74	17	2	1	3	1	5	1	4	1	1	5	3	17	6	6	59

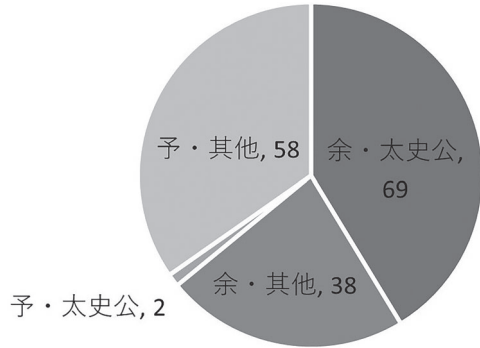
一人稱代名詞が本来「余」を用いたことは西周・春秋金文が専ら「余」を用いることによって明らかである。なお精密な材料の収集・検討を要するが、さしあたり以下のシナリオを提示しよう。すなわち、まずは『論語』に認められるように、戦國前期に「余」⇒「予」の代替が発生し、儒家において編纂された『詩』『書』においても『詩』の祖本ないし『書』の原資料における「余」が「予」に置換される。一方で、三晉や楚においては戦國期を通じて「余」の使用が續いた。

前漢に入ると『楚辭』の表現を繼承した辭賦を除き、おそらくは齊魯の學の優勢に基づき、「予」が専ら用いられた。然るに、『史記』においては「余」/「予」の對立において「余」が卓越する。ある意味で反時代的な言語狀況が認められるのである。

『史記』における「余」/「予」の使用狀況を整理するとグラフのようになる。實のところ、「余」の用例のうち69例は太史公の自稱である。それ以外の38例は、『左傳』の

*5 表参照。『逸周書』『楚辭』は筆者の計量、それ以外は朱慶之「上古漢語“吾”“予/余”等第一人称代詞在口語中消失的時代」(『中國語文』2012-3)による。『史記』の例数につき、筆者のそれとわずかな差があるが、一般的な傾向を確認することには影響しないので修正していない。

引用が20例、『左傳』に類似した材料の引用が6例、屈原賦3例、司馬相如賦3例であわせて32例となる。他方、「予」の太史公以外の事例58例は、『書』の引用が32例、『書』に準ずる逸書および『尚書大傳』の引用が10例、『論語』など孔子言が9例、賈誼賦3例であわせて54例となる。



要するに、『史記』における「余」/「予」は、まずは原資料の表現を保存したものといえるが、「余」の卓越は、太史公が自稱に用いたことが何より決定的だったということになる。

「余」を専ら用いた太史公の言説は、読者にとっては、『左傳』の登場人物の發言を彷彿させるものであった。同時代的な言語状況からの逸脱である。そのことは、報任安書がもっぱら「僕」を用いることと對照的である。「余」を用いることによって、司馬遷は『史記』の言語空間における自らの言説を特權化しているのである。

この事實に示唆されるように、司馬遷の言語には様々な「仕掛け」が伏在している。このことは、とりわけ自述として提示された太史公自序を解析する際につねに留意されねばならない。

一 司馬氏の系譜

昔在顓頊、命南正重以司天、北正黎以司地。唐虞之際、紹重黎之後、使復典之、至于夏商、故重黎氏世序天地。其在周、程伯休甫其後也。當周宣王時、失其守而爲司馬氏。昔 顓頊に在りては [1]、南正重に命じて以て天を司り、北正黎以て地を司らしむ [2]。唐虞之際 [3]、重黎の後を紹ぎ、復た之を典らしめ、夏商に至る、故に重黎氏世 天地を序づ。其の周に在りては、程伯休甫 [4] 其の後なり。周宣王 (827-782BC) の時に当たり、其の守を失いて司馬氏と爲る。

[1] 昔在顓頊 『國語』楚語下の引用である。「昔在」は『書序』堯典「昔在帝堯」に見える。

『國語』楚語下	太史公自序
<p>及少皞之衰也、九黎亂德、民神雜糅、不可方物。夫人作享、家爲巫史、無有要質。民置於祀、而不知其福。烝享無度、民神同位。民瀆齊盟、無有嚴威。神狎民則、不蠲其爲。嘉生不降、無物以享。禍災薦臻、莫盡其氣。</p> <p>顓頊受之、乃命南正重司天以屬神、命火正黎司地以屬民、使復舊常、無相侵瀆、是謂絕地天通。其後、三苗復九黎之德、堯復育重黎之後、不忘舊者、使復典之。以至於夏、商、故重黎氏世敘天地、而別其分主者也。其在周、程伯休父其後也、當宣王時、失其官守而爲司馬氏。</p>	<p>昔在顓頊、命南正重以司天、北正黎以司地。</p> <p>唐虞之際、紹重黎之後、使復典之、至于夏商、故重黎氏世序天地。其在周、程伯休甫其後也。當周宣王時、失其守而爲司馬氏。</p>

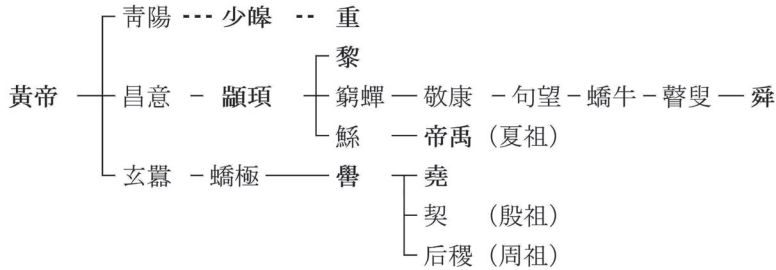
『史記』曆書も同じく楚語下を引く。

『國語』楚語下	曆書
<p>及少皞之衰也、九黎亂德、民神雜糅、不可方物。夫人作享、家爲巫史、無有要質。民置於祀、而不知其福。烝享無度、民神同位。</p> <p>民瀆齊盟、無有嚴威。神狎民則、不蠲其爲。嘉生不降、無物以享。</p> <p>禍災薦臻、莫盡其氣。顓頊受之、乃命南正重司天以屬神、命火正黎司地以屬民、使復舊常、無相侵瀆、是謂絕地天通。其後、三苗復九黎之德、</p> <p>堯復育重、黎之後、不忘舊者、使復典之。</p>	<p>少皞氏之衰也、九黎亂德、民神雜擾、不可放物、</p> <p>禍菑薦至、莫盡其氣。顓頊受之、乃命南正重司天以屬神、命火正黎司地以屬民、使復舊常、無相侵瀆。</p> <p>其後三苗服九黎之德、故二官咸廢所職、而閏餘乖次、孟陬殄滅、攝提無紀、曆數失序。</p> <p>堯復遂重黎之後、不忘舊者、使復典之、而立義和之官。</p>

[2] 命南正重以司天北正黎以司地 楚語下の「火正黎」を太史公自序は「北正黎」に作る。楚語下の「南正」「火正」の非對稱を嫌って「火正」を「北正」に改めたもの

であろうが、曆書や太史公自序を引用する『漢書』司馬遷傳*6はともに「火正」に作る。

また、司馬彪『續漢書』*7の自序は「南正黎」を稱する*8。司馬彪は司馬懿の弟である進の孫に当たり*9、晉室司馬氏は下文に見える司馬印の子孫を稱する*10。



なお、『左傳』昭二十九

社稷五祀、是尊是奉。木正曰句芒、火正曰祝融、金正曰蓐收、水正曰玄冥、土正曰后土。…少皞氏有四叔、曰重、曰該、曰修、曰熙、實能金、木及水。使重爲句芒、該爲蓐收、修及熙爲玄冥、世不失職、遂濟窮桑、此其三祀也。顓頊氏有子曰黎、爲祝融。共工氏有子曰句龍、爲后土、此其二祀也。

は、重を少皞の子孫、黎（黎）を顓頊の子とする。

	水正玄冥：修・熙	
金正蓐收：該	土正后土：句龍	木正句芒：重
	火正祝融：黎	

*6 『漢書』司馬遷傳「昔在顓頊、命南正重司天、火正黎司地。唐虞之際、紹重黎之後、使復典之、至于夏商、故重黎氏世序天地。其在周、程伯休甫其後也。當宣王時、官失其守而爲司馬氏。」

*7 『隋書』經籍志二「續漢書八十三卷（晉祕書監司馬彪撰。）」

*8 『史記正義』太史公自序「司馬彪序云、南正黎、後世爲司馬氏。」

*9 『晉書』司馬彪傳「司馬彪字紹統、高陽王睦之長子也。」・宗室傳「譙剛王遜字子悌、宣帝弟魏中郎進之子也。…高陽王睦字子友、譙王遜之弟也。」

*10 『晉書』宣帝紀「宣皇帝諱懿、字仲達、河內溫縣孝敬里人、姓司馬氏。其先出自帝高陽之子重黎、爲夏官祝融。歷唐・虞・夏・商、世序其職。及周、以夏官爲司馬。其後程伯休父、周宣王時、以世官克平徐方、錫以官族、因而爲氏。楚漢間、司馬卬爲趙將、與諸侯伐秦。秦亡、立爲殷王、都河內。漢以其地爲郡、子孫遂家焉。自卬八世、生征西將軍鈞、字叔平。鈞生豫章太守量、字公度。量生潁川太守儁、字元異。儁生京兆尹防、字建公。帝即防之第二子也。」

[3] 唐虞之際 『論語』 泰伯「舜有臣五人而天下治。武王曰、予有亂臣十人。孔子曰、才難、不其然乎。唐虞之際、於斯爲盛。有婦人焉、九人而已。三分天下有其二、以服事殷。周之德、其可謂至德也已矣。」

[4] 程伯休甫 程伯休父は『詩序』大雅 / 常武「常武、召穆公美宣王也。有常德以立武事、因以爲戒然。」・『詩』「王謂尹氏、命程伯休父、左右陳行、戒我師旅。率彼淮浦、省此徐土。不留不處、三事就緒。」に宣王の時、淮夷遠征の軍帥をつとめたことが見える。毛傳は「程伯休父始命爲大司馬」と注するが、「大司馬」は、楚語下「程伯休甫其後也。當周宣王時、失其守而爲司馬氏」韋昭注「程、國。伯、爵。休父、名也。失官守、謂失天地之官、而以諸侯爲大司馬。詩曰、王謂尹氏、命程伯休父、是也。」に據るものであろう。ここで留意すべきは、「司馬氏」の「氏」が姓氏ではなく、官職名に後續する呼稱*11 であることである。卿以下の身分の家系が、官職を姓氏に用いることは事例を得るが*12、内諸侯である程伯休父にはそもそも妥当しない。太史公自序は、楚語下の「司馬氏」を姓氏に附會することで、自らを上古の天官である重黎の子孫と強辯しているのである。

司馬氏世典周史。惠襄之間、司馬氏去周適晉。

司馬氏世周史を典る [1]。惠襄の間 [2]、司馬氏 周を去りて晉に適く [3]。

[1] 司馬氏世典周史 『史記會注考證』は「未知何據」とする。この記述もまた詭辯を重ねたものといわざるを得ない。楚語下の重黎は天官であり、前漢時代の太史令も同じく天官である。一方で、

齊太史書曰、崔杼弑莊公、崔杼殺之。其弟復書、崔杼復殺之。少弟復書、崔杼乃舍之。(齊世家) *13

晉太史董狐書曰、趙盾弑其君、以視於朝。盾曰、弑者趙穿、我無罪。太史曰、子爲正卿、而亡不出境、反不誅國亂、非子而誰。孔子聞之、曰、董狐、古之良史也、

*11 類例として、『左傳』襄二十五「南史氏」・昭二「大史氏」を挙げうる。

*12 晉の荀林父は、中行の將をつとめ（『左傳』僖二十八「晉侯作三行以禦狄。荀林父將中行、屠擊將右行、先蔑將左行。」）、「中行伯」と稱され（『左傳』宣十五）、その子孫は「中行氏」と稱されている。

*13 『春秋經』襄二十五「夏五月乙亥、齊崔杼弑其君光。」『左傳』「大史書曰、崔杼弑其君。崔子殺之。其弟嗣書、而死者二人。其弟又書、乃舍之。南史氏聞大史盡死、執簡以往。聞既書矣、乃還。」

書法不隱。宣子、良大夫也、爲法受惡。惜也、出疆乃免。(晉世家)^{*14}

は、『左傳』に取材し、「太史」を『春秋經』の材料となった歴史記録を主管する史官とする。司馬遷はこれらの事例を以て、天官たる「史」を史官とする詭辯を弄しているのである。さらに上文ですでに重黎の子孫が天官を失ったとある記述は、「司馬氏世典周史」というこの記述と明らかに噛み合わない。

なお、『史記索隱』太史公自序に引く衛宏説に「衛宏云、司馬氏、周史佚之後。」とある。史佚は、『禮記』曾子問

曾子問曰、下殤土周葬于園、遂輿機而往、塗邇故也。今墓遠、則其葬也如之何。

孔子曰、吾聞諸老聃曰、昔者史佚有子而死、下殤也。墓遠。召公謂之曰、何以不棺斂於宮中。史佚曰、吾敢乎哉。召公言於周公。周公曰、豈。不可。史佚行之。

下殤用棺衣棺、自史佚始也。

によれば、周初の人であり、司馬氏を程伯休父の子孫とする太史公自序の記述に齟齬する。

[2] 惠襄之間 周惠王 (676-652BC)・襄王 (651-619BC)。『左傳』昭二十六「至于惠王、天不靖周、生頹禍心、施于叔帶。惠襄辟難、越去王都。」

周宣王 — 幽王 — 平王 — 太子洧父 — 桓王 — 莊王	┌	僖王 — 惠王	┌	襄王
	└	王子頹	└	王子帶

[3] 去周適晉 類似の表現は、趙世家「叔帶之時、周幽王無道、去周如晉、事晉文侯、始建趙氏于晉國。」に見えるが、むしろ注目すべきは、下文の隨會の曾祖父である隰叔が、『國語』晉語八「昔隰叔子違周難於晉國」韋昭注「隰叔、杜伯之子。違、避也。宣王殺杜伯、隰叔避害適晉。」に見えるように、周から晉に亡命していることである。

司馬遷の家系は実際には秦將・司馬錯にまでしか遡らない。他方、周宣王の時の程伯休父を司馬氏の開祖とする以上、司馬氏の周から秦への移動を説明せねばならない。周から晉への移動は史書に散見し、また晉から秦への移動はほかならぬ劉氏に關聯す

*14 『春秋經』宣二「秋九月乙丑、晉趙盾弑其君夷臯。」『左傳』「太史書曰、趙盾弑其君。以示於朝。宣子曰、不然。對曰、子爲正卿、亡不越竟、反不討賊、非子而誰。宣子曰、嗚呼。詩曰、我之懷矣、自詒伊感、其我之謂矣。孔子曰、董狐、古之良史也、書法不隱。趙宣子、古之良大夫也、爲法受惡。惜也、越竟乃免。」

る記述がある。そこで、まずは「去周適晉」としたものである。趙氏や范氏の周から晉への移動は、宣王・幽王といった西周末年だが、司馬氏については、宣王の時に程伯休父が司馬氏となり、ついで「司馬氏世典周史」とするので、西周末年に移動を置くことはできない。一方で、後述の如く、司馬氏は、620BCの晉の隨會の秦への亡命に隨従せねばならない。結果的に、混亂が伝えられる「惠襄之間」に晉への移動が定められたものであろう。

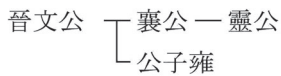
晉中軍隨會奔秦、而司馬氏入少梁。

晉の中軍隨會 秦に奔り [1]、而して司馬氏 少梁に入る [2]。

[1] 晉中軍隨會奔秦 隨會は士會。『左傳』宣十七 (592BC)「范武子將老」杜注「老、致仕。初受隨、故曰隨武子、後更受范、復爲范武子。」に見えるように、隨は采邑の名であり、ついで同じく采邑の名を用いて士氏は范氏と通稱されるようになる。

士會奔秦の経緯は以下の如くである。

『左傳』文六 (621BC)「八月乙亥、晉襄公卒。靈公少、晉人以難故、欲立長君。趙孟曰、立公子雍。…使先蔑、士會如秦逆公子雍。」



文七 (620BC)「秦康公送公子雍于晉、…穆嬴日抱大子以啼于朝、…宣子與諸大夫皆患穆嬴、且畏偪、乃背先蔑而立靈公、以禦秦師。…戊子、敗秦師于令狐、至于刳首。己丑、先蔑奔秦、士會從之。」

文十三 (614BC)「晉人患秦之用士會也、…乃使魏壽餘僞以魏叛者以誘士會、執其帑於晉、使夜逸。請自歸于秦、秦伯許之。履士會之足于朝。秦伯師于河西、魏人在東。壽餘曰、請東人之能與夫二三有司言者、吾與之先。使士會、士會辭曰、晉人、虎狼也、若背其言、臣死、妻子爲戮、無益於君、不可悔也。秦伯曰、若背其言、所不歸爾帑者、有如河。乃行。繞朝贈之以策、曰、子無謂秦無人、吾謀適不用也。既濟、魏人譟而還。秦人歸其帑、其處者爲劉氏。」

士會は597BCに上軍將、593BCに中軍將に就任する*15。

*15 『左傳』宣十二 (597BC)「荀林父將中軍、先穀佐之。士會將上軍、郤克佐之。趙朔將下軍、

ここで確認しておきたいのは、士會が晉に歸國した際に秦に残留した劉氏を漢室の祖とする言説である。これは『漢書』高帝紀

贊曰、春秋晉史蔡墨有言、陶唐氏既衰、其後有劉累、學擾龍、事孔甲、范氏其後也。而大夫范宣子亦曰、祖自虞以上爲陶唐氏、在夏爲御龍氏、在商爲豕韋氏、在周爲唐杜氏、晉主夏盟爲范氏。范氏爲晉士師、魯文公世奔秦。後歸于晉、其處者爲劉氏。劉向云、戰國時劉氏自秦獲於魏。秦滅魏、遷大梁、都于豐、故周市說雍齒曰、豐、故梁徙也。是以頌高祖云、漢帝本系、出自唐帝。降及于周、在秦作劉。涉魏而東、遂爲豐公。豐公、蓋太上皇父。其遷日淺、墳墓在豐鮮焉。及高祖即位、置祠祀官、則有秦・晉・梁・荆之巫、世祠天地、綴之以祀、豈不信哉。由是推之、漢承堯運、德祚已盛、斷蛇著符、旗幟上赤、協于火德、自然之應、得天統矣。

の劉向説に明示される。班固が示すように、これは『左傳』文十三に加えて、昭二十九

秋、龍見于絳郊。魏獻子問於蔡墨曰、吾聞之、蟲莫知於龍、以其不生得也、謂之知。信乎。對曰、人實不知、非龍實知。古者畜龍、故國有豢龍氏、有御龍氏。獻子曰、是二氏者、吾亦聞之、而不知其故。是何謂也。對曰、昔有鬲叔安、有裔子曰董父、實甚好龍、能求其耆欲以飲食之、龍多歸之、乃擾畜龍、以服事帝舜、帝賜之姓曰董、氏曰豢龍、封諸鬲川、鬲夷氏其後也。故帝舜氏世有畜龍。及有夏孔甲、擾于有帝、帝賜之乘龍、河・漢各二、各有雌雄。孔甲不能食、而未獲豢龍氏。有陶唐氏既衰、其後有劉累、學擾龍于豢龍氏、以事孔甲、能飲食之。夏后嘉之、賜氏曰御龍、以更豕韋之後。龍一雌死、潛醢以食夏后。夏后饗之、既而使求之。懼而遷于魯縣、范氏其後也。

および襄二十四

二十四年春、穆叔如晉。范宣子逆之、問焉、曰、古人有言曰、死而不朽、何謂也。穆叔未對。宣子曰、昔句之祖、自虞以上爲陶唐氏、在夏爲御龍氏、在商爲豕韋氏、在周爲唐杜氏、晉主夏盟爲范氏、其是之謂乎。

に基づく。

樂書佐之。]・宣十六（593BC）「十六年春、晉士會帥師滅赤狄甲氏及留吁・鐸辰。三月、獻狄俘。晉侯請于王。戊申、以獻冕命士會將中軍、且爲大傅。」

堯の子孫である劉氏が秦にあったことは『左傳』に根據をもつ。しかしながら、秦の劉氏から高祖劉邦に至る部分は文獻的根據をもたず、かつ矛盾に満ちている。

高帝紀は、秦の劉氏が魏の捕虜となって魏人となり、大梁陥落（225BC^{*16}）ののち、魏が豊に遷都し、高祖の祖父が豊公となったとする。魏の豊への遷都は、高帝紀

（二世二年 208BC）十二月、楚王陳涉爲其御莊賈所殺。魏人周市略地豊沛、使人謂雍齒曰、豊、故梁徙也、今魏地已定者數十城。齒今下魏、魏以齒爲侯守豊。不下、且屠豊。雍齒雅不欲屬沛公、及魏招之、即反爲魏守豊。沛公攻豊、不能取。沛公還之沛、怨雍齒與豊子弟畔之。

を論據とする。しかしながら、大梁陥落で魏は滅亡しているのであり、したがって「豊、故梁徙也」を遷都と解することはできない。

そもそも、高祖は、皇甫謐『帝王世紀』^{*17}によれば、秦昭襄王五十一年（256BC）の出生であり^{*18}、また高祖本紀

高祖、沛豊邑中陽里人、姓劉氏、字季。父曰太公、母曰劉媪。其先劉媪嘗息大澤之陂、夢與神遇。是時雷電晦冥、太公往視、則見蛟龍於其上。已而有身、遂産高祖。によれば、確かに豊で出生している。大梁陥落（225BC）の際にはすでに三十二歳の壯年であり、その祖父が大梁陥落後の豊遷都によって豊公に任ぜられたとすることは年代的にも成り立ちようが無い。『漢書』高帝紀が劉向説を正確に引用していない可能性も否定できない。

豊のあたりはもと宋の領土であり、286BCに宋が齊に征服され、ついで284BCに齊湣王が敗滅したのち、魏の領土となった。楚世家 / 頃襄王十八年（281BC）には、魏が宋の舊領に設置した大宋・方輿の二郡が見える^{*19}。「豊、故梁徙也」とは、284BC以降の宋舊領接收ののち、大梁から豊に魏人が入植したことを指すものであろう。沛公の稱謂から類推すれば、豊公は豊の縣令に当たる。しかしながら、豊公が實在したとしても、高祖の系譜が一世代増えるだけのことであり、劉氏が秦から魏に移動したこ

*16 六國年表「(秦始皇) 二十二 (225BC) 王賁擊魏、得其王假、盡取其地。」「(魏王假) 三 (225BC) 秦虜王假。」・魏世家「三年 (225BC)、秦灌大梁、虜王假、遂滅魏以爲郡縣。」

*17 『隋書』經籍志二「帝王世紀十卷 (皇甫謐撰。起三皇、盡漢・魏。)」

*18 『史記集解』高祖本紀「皇甫謐曰、高祖以秦昭王五十一年生、至漢十二年、年六十二。」

*19 楚世家「還射圉之東、解魏左肘而外擊定陶、則魏之東外棄而大宋、方輿二郡者舉矣。」

とは、依然文獻の根據を缺くのである。

漢家堯後説は、『漢書』眭弘傳

孝昭元鳳三年（73BC）正月、泰山萊蕪山南匈匈有數千人聲、民視之、有大石自立、高丈五尺、大四十八圍、入地深八尺、三石爲足。石立後有白鳥數千下集其旁。是時昌邑有枯社木臥復生、又上林苑中大柳樹斷枯臥地、亦自立生、有蟲食樹葉成文字、曰、公孫病已立、孟推春秋之意、以爲石柳皆陰類、下民之象、（而）泰山者岱宗之嶽、王者易姓告代之處。今大石自立、僵柳復起、非人力所爲、此當有從匹夫爲天子者。枯社木復生、故廢之家公孫氏當復興者也。孟意亦不知其所在、即說曰、先師董仲舒有言、雖有繼體守文之君、不害聖人之受命。漢家堯後、有傳國之運。漢帝宜誰差天下、求索賢人、禴以帝位、而退自封百里、如殷周二王後、以承順天命。孟使友人內官長賜上此書。時、昭帝幼、大將軍霍光秉政、惡之、下其書廷尉。奏賜、孟妄設祲言惑眾、大逆不道、皆伏誅。後五年、孝宣帝興於民間、即位、徵孟子爲郎。

に見えるように、昭帝元鳳三年（78BC）には確實に存在していた。

武帝 — 戾太子 — 史皇孫 — 宣帝
 └ 昭帝

漢家堯後説は、この記述が文獻的に最も早く年代づけられるが、そのことは、漢家堯後説が眭弘の創唱に係ることを意味しない。ここで留意すべきは、眭弘が「漢家堯後」を自明の前提として議論を展開していることである。そもそも眭弘は董仲舒の弟子である嬴公の弟子であって公羊學派に屬する*20。その眭弘が自ら『左傳』を繙いて漢家堯後説を構築することは、よほど考えにくい。「漢家堯後」は、眭弘に先立ってすでに一定程度普及していたものとする。漢家堯後説は、劉氏の秦⇒魏⇒豐の移動を主張するものであったはずであり、上掲の『漢書』高帝紀の劉向・班固の言説と近似するものであったと思われる。

*20 『漢書』儒林傳「而董生爲江都相、自有傳。弟子遂之者、蘭陵褚大・東平嬴公・廣川段仲・溫呂步舒。大至梁相、步舒丞相長史、唯嬴公守學不失師法、爲昭帝諫大夫、授東海孟卿・魯眭孟。孟爲符節令、坐說災異誅、自有傳。」・眭弘傳「眭弘字孟、魯國蕃人也。少時好俠、鬥雞走馬、長乃變節、從嬴公受春秋。以明經爲議郎、至符節令。」

[2] 而司馬氏入少梁 少梁は327BCに夏陽と改名する*21。下文に見えるように、司馬遷に連なる系譜は秦に仕えた司馬錯から明らかになる。司馬錯の家系は夏陽を本貫とし、後述するように、司馬靳が葬られた華池*22、司馬昌～司馬喜が葬られた高門*23、司馬遷が生まれた龍門*24はいずれも夏陽の周縁である。

ここでは、司馬氏が隨會に従って晉から秦へ亡命し、少梁に定住したことをいう。太史公自序は、これ以降、司馬氏は秦人となり、司馬錯以後、秦・前漢に出仕するという推移を示しているのである。ところが、このシナリオはやはり矛盾に満ちている。すなわち、少梁はもとの梁伯の國で、641BCに秦に併合されたが*25、617BC、晉に奪取され*26、降って354BCに秦が魏より奪取するが*27、ふたたび魏に奪回された模様で、330BCに魏から秦に割譲されている*28。620BCに隨會が秦に出奔した時點では、少梁は、確かに秦の支配下にあったが、617BCには晉に奪取されている。少梁の司馬氏が秦人となるのは、330BC以降となるのである。少梁の推移はいずれも『史記』に見え、司馬遷は秦人としての少梁司馬氏の成立が330BCであったことは承知していたはずである。それにも関わらず、隨會奔秦だけを記すことには、相當の理由があったに相違ない。

そもそも、司馬氏の家史において、『史記』に先行する文獻に根據をもつのは、『國語』

*21 『漢書』地理志 / 左馮翊「夏陽、(故少梁、秦惠文王十一年(327BC)更名。禹貢梁山在西北、龍門山在北。有鐵官。莽曰冀亭。)」

*22 『史記索隱』太史公自序「晉灼云、在鄂縣、非也。案司馬遷碑在夏陽西北四里。」『史記正義』太史公自序「括地志云、華池在同州韓城縣西南七十里、在夏陽故城西北四里。」

*23 『史記索隱』太史公自序「案、蘇說非也。案遷碑、在夏陽西北、去華池三里。」『史記正義』太史公自序「括地志云、高門原俗名馬門原、在同州韓城縣西南十八里。漢司馬遷墓在韓城縣南二十二里。夏陽縣故城東南有司馬遷冢、在高門原上也。」

*24 『史記集解』太史公自序「徐廣曰、在馮翊夏陽縣。駟案、蘇林曰、禹所鑿龍門也。『史記正義』「括地志云、龍門在同州韓城縣北五十里。其山更黃河、夏禹所鑿者也。龍門山在夏陽縣、遷即漢夏陽縣人也、至唐改曰韓城縣。」

*25 『左傳』僖十九(641BC)「初、梁伯好土功、亟城而弗處、民罷而弗堪、則曰、某寇將至。乃溝公宮、曰、秦將襲我。民懼而潰、秦遂取梁。」・十二諸侯年表 / 秦表「(穆公)十九(641BC)滅梁。梁好城、不居、民罷、相驚、故亡。」

*26 『左傳』文十(617BC)「十年春、晉人伐秦、取少梁。夏、秦伯伐晉、取北徵。」・十二諸侯年表 / 晉表「(靈公)四(617BC)伐秦、拔少梁。秦取我北徵。」・秦表「(康公)四(617BC)晉伐我、取少梁。我伐晉取北徵。」

*27 六國年表 / 秦表「(孝公)八(354BC)與魏戰元里、斬首七千、取少梁。」・魏表「(惠王)十七(354BC)與秦戰元里、秦取我少梁。」

*28 六國年表 / 秦表「(惠文王)八(330BC)魏入少梁河西地于秦。」

楚語下の記述する周宣王(827-782BC)の時代における程伯休父の司馬任官までである。それ以後、316BCの司馬錯登場までの記述は文獻的な根據をもたない。それどころか、少梁に關聯する記述に認められるように、『史記』そのものに、それを否定する材料が散見する。

『史記』は『左傳』文十三「其處者爲劉氏」や襄二十四を用いないが、夏本紀は、『左傳』昭二十九を引用し*29、堯の子孫に劉氏があったこと、延いては漢家堯後説の存在は承知していたはずである。しかし、高祖本紀は、高祖の父・太公にしか言及しない。司馬遷は漢家堯後説を虚構として用いなかったのである。

司馬遷は、意圖的に虚構性に満ちた司馬氏の家史を提示し、その中で、司馬氏の少梁移住という最重要事件に關聯して隨會奔秦に言及することで、漢家堯後説を想起させ、それが司馬氏家史と同様に虚構であることを暗示したものと考える。

自司馬氏去周適晉、分散、或在衛、或在趙、或在秦。其在衛者、相中山。在趙者、以傳劍論顯、蒯聵其後也。

司馬氏 周を去り晉に適く自り、分散し、或いは衛に在り [1]、或いは趙に在り、或いは秦に在り。其の衛に在る者、中山に相たり [2]。趙に在る者、劍論を傳うるを以て顯る、蒯聵其の後なり [3]。

[1] 分散或在衛 曆書「幽・厲之後、周室微、陪臣執政、史不記時、君不告朔、故疇人子弟分散、或在諸夏、或在夷狄、是以其祿祥廢而不統。」

[2] 其在衛者相中山 中山相司馬喜(熹)は、『戰國策』中山策の「司馬熹使趙」「司馬熹三相中山」「陰姬與江姬爭爲后。司馬熹謂陰姬公曰」の三章および『呂氏春秋』應言*30・魯仲連鄒陽列傳 / 鄒陽獄中上書*31に見える。衛人であることは、太史公自序にしか見えない。

齊宣王の對燕出兵(316BC)に關與した中山王響およびその子胤嗣舒盜の作器に見

*29 夏本紀「帝孔甲立、好方鬼神、事淫亂。夏后氏德衰、諸侯畔之。天降龍二、有雌雄、孔甲不能食、未得豢龍氏。陶唐既衰、其后有劉累、學擾龍于豢龍氏、以事孔甲。孔甲賜之姓曰御龍氏、受豕韋之後。龍一雌死、以食夏后。夏后使求、懼而遷去。」

*30 『呂氏春秋』應言「司馬喜難墨者師於中山王前以非攻、曰、先生之所術非攻夫。墨者師曰、然。曰、今王興兵而攻燕、先生將非王乎。墨者師對曰、然則相國是攻之乎。司馬喜曰、然。墨者師曰、今趙興兵而攻中山、相國將是之乎。司馬喜無以應。」

*31 魯仲連鄒陽列傳 / 鄒陽獄中上書「昔者司馬喜黷脚於宋、卒相中山。」

える司馬騫を司馬熹とする説がある一方、『漢書』古今人表は、中中の列の韓武子（六國年表：424-409BC）・田大公和（六國年表：386-385BC）の間に司馬喜を置く。確實な年代は不明といわざるを得ない。

[3] 在趙者以傳劍論顯蒯聃其後也 「在趙者以傳劍論」を、何法盛『晉書』*³²および司馬無忌*³³『司馬氏系本』は司馬凱であるとする*³⁴。

「蒯聃」につき如淳は、「刺客傳之蒯聃也」（『史記正義』太史公自序）とする。刺客列傳

荆軻嘗游過榆次、與蓋聶論劍、蓋聶怒而目之。荆軻出、人或言復召荆卿。蓋聶曰、曩者吾與論劍有不稱者、吾目之。試往、是宜去、不敢留。使使往之主人、荆卿則已駕而去榆次矣。使者還報、蓋聶曰、固去也、吾曩者目攝之。

には趙の榆次において荆軻が劍を論じたことが見えるが、その相手は蓋聶であって蒯聃ではない。張文虎『舒藝室隨筆』卷四は、「蓋聶」を「蒯聃」の譌とする。沈欽韓『漢書疏證』卷二十九 / 司馬遷傳は、『淮南子』主術訓に司馬蒯蕢が見えることを指摘し*³⁵、如淳を誤とする。後文では、項羽十八王の一人、殷王司馬卬（206-205BC）を司馬蒯聃の「玄孫」とする。司馬蒯聃は前4世紀後期あたりの人となろう。對するに、刺客列傳では、蓋聶の記述の前に、

荆卿好讀書擊劍、以術說衛元君、衛元君不用。其後秦伐魏、置東郡、徙衛元君之支屬於野王。

と、241BCの衛の野王遷徙*³⁶が見える。荆軻は、228BCに始皇帝暗殺に失敗して死んでおり*³⁷、蓋聶の逸話は241-228BCのこととなる。司馬卬を遡ること二十～三十年であり、卬の玄祖父司馬蒯聃に同定することは困難である。如淳説に従うならば、現行

*³² 『隋書』經籍志二「晉中興書七十八卷（起東晉。宋湘東太守何法盛撰。）」

*³³ 『晉書』宗室傳「譙剛王遜字子悌、宣帝弟魏中郎進之子也。…秦始二年薨。二子、隨、承。定王隨立。薨、子邃立、沒于石勒、元帝以承嗣遜。…父檻送承荊州、刺史王廙承敦旨於道中害之、時年五十九。敦平、詔贈車騎將軍。子無忌立。」

*³⁴ 『史記索隱』太史公自序「案、何法盛晉書及司馬氏系本名凱。」・『史記正義』太史公自序「何法盛晉書及晉譙王司馬無忌司馬氏系本皆云名凱。」

*³⁵ 『淮南子』主術訓「故握劍鋒以離、北宮子・司馬蒯蕢不使應敵。」

*³⁶ 六國年表 / 魏表「(景潛王) 二 (241BC) 秦拔我朝歌。衛徙濮陽徙野王。」

*³⁷ 六國年表 / 秦表「(始皇帝) 二十 (228BC) 燕太子使荆軻刺王、覺之。王翦將擊燕。」

本の刺客列傳に脱落があるということになろう。

在秦者名錯、與張儀爭論、於是惠王使錯將伐蜀、遂拔、因而守之。

秦に在る者 錯と名づく [1]、張儀と爭論し、是に於いて惠王 錯をして將として蜀を伐たしめ、遂に抜き、因りて之に守たり。

[1] 在秦者名錯 司馬錯の蜀征服を、秦本紀は惠文王後元九年(316BC)に繋げる*38。司馬錯・張儀の論争は、『戰國策』秦策一に見えるが、これを引用する張儀列傳は、これを「秦惠王十年、使公子華與張儀圍蒲陽、降之。」の前に置く。「秦惠王十年」は惠文王前元十年(328BC)なので*39、論争を前元九年(329BC)に繋げていることになる。張儀列傳の下文は、惠文王後元八年(317BC)の秦の韓・趙大破*40を載せる*41。司馬錯・張儀の論争において、張儀は、伐韓を主張するわけだが、韓を大破した翌年の議論としては内容的に不都合である。そのため、張儀列傳は、敢えて後元九年の事件を前元九年に改めているのである。司馬遷にとっては少梁司馬氏の開祖である司馬錯の傳承された唯一の言論であったため、廢棄するわけにはいかず、無理な改變を敢えて施してまでこれを存置したものである。なお、司馬錯が蜀の「守」をつとめたことは傍證を得ない。

錯孫靳、事武安君白起。而少梁更名曰夏陽。靳與武安君阬趙長平軍、還而與之俱賜死杜郵、葬於華池。

錯の孫靳、武安君白起に事う [1]。而して少梁改めて名づけて夏陽と曰う [2]。靳 武安君と趙の長平の軍を阬す [3]、還りて之と俱に死を杜郵に賜わり [4]、華池に葬らる。

[1] 事武安君白起 司馬錯につづき司馬靳は軍職を務めている。戰國後期以降の官僚制の展開は、官職の世襲を排除するようになるが、一方で、司馬錯・司馬靳の軍職、司馬昌・司馬無澤の財務、司馬談・司馬遷の天官の如く、特殊な技能を要する職種については實質的な世襲が頻見する。國家による技能の教習が不十分で、むしろそうし

*38 秦本紀「(惠文王後)九年(316BC)、司馬錯伐蜀、滅之。」その他、司馬錯は秦本紀「(昭襄王)六年(301BC)、蜀侯輝反、司馬錯定蜀。」「(二十七年280BC)又使司馬錯發隴西、因蜀攻楚黔中、拔之。」、六國年表「(秦昭襄王)六(301BC)蜀反、司馬錯往誅蜀守輝、定蜀。日蝕、晝晦。伐楚」に見える

*39 六國年表/秦表「(惠文王)十(328BC)張儀相。公子桑圍蒲陽、降之。魏納上郡。」

*40 六國年表/秦表「(惠文王後)八(317BC)與韓、趙戰、斬首八萬。」

*41 張儀列傳「明年、齊又來敗魏於觀津。秦復欲攻魏、先敗韓申差軍、斬首八萬、諸侯震恐。」

た技能が特定の家系に蓄積されたためである。司馬靳については、「事」とあるので下僚ではなく、白起の私的なスタッフとなる。

[2] 而少梁更名曰夏陽 秦本紀「十一年、…更名少梁曰夏陽。」は、惠文王前元十一年（327BC）に繋げる。上文「而司馬氏入少梁」の直後にあったものが錯簡したものであろう。

[3] 阬趙長平軍 昭襄王四十七年（260BC）*42。

[4] 賜死杜郵 白起は邯鄲包圍に反対して失脚し、死を賜った。秦本紀は昭襄王五十年（257BC）十二月、白起王翦列傳は十一月とする*43。

靳孫昌、昌爲秦主鐵官、當始皇之時。蒯聵玄孫印爲武信君將而徇朝歌。諸侯之相王、王印於殷。漢之伐楚、印歸漢、以其地爲河內郡。昌生無澤、無澤爲漢市長。無澤生喜、喜爲五大夫、卒、皆葬高門。

靳の孫昌、昌 秦の主鐵官 [1] と爲り、始皇の時に當たる。蒯聵の玄孫印 [2] 武信君 [3] の將と爲りて朝歌を^{とな}徇う。諸侯の相い王たるや、印を殷に王とす。漢の楚を伐つに、印 漢に歸し、其の地を以て河内郡と爲す。昌 無澤を生む、無澤 漢の市長と爲る。無澤 喜を生む、喜 五大夫 [4] となる、卒し、皆な高門に葬らる。

[1] 主鐵官・市長 司馬昌・司馬無澤は財務官僚をつとめている。『漢書』百官公卿表「内史、周官、秦因之、掌治京師。景帝二年分置左〔右〕内史。右内史武帝太初元年更名京兆尹、屬官有長安市、尉兩令丞、又都水、鐵官兩長丞。左内史更名左馮翊、屬官有廩犧令丞尉。又左都水、鐵官、雲壘、長安四市四長丞皆屬焉。』『二年律令』秩律に「長安市」が見え、秩六百石である。鐵官の秩については明文がないが。百官公卿表において鐵官と並列される都水は秩律に見え、やはり秩六百石である。

*42 秦本紀「〔昭襄王〕四十七年（260BC）、秦攻韓上黨、上黨降趙、秦因攻趙、趙發兵擊秦、相距。秦使武安君白起擊、大破趙於長平、四十餘萬盡殺之。」・白起王翦列傳「四十七年、秦使左庶長王齧攻韓、取上黨。上黨民走趙。趙軍長平、以按據上黨民。…括軍敗、卒四十萬人降武安君。武安君計曰、前秦已拔上黨、上黨民不樂爲秦而歸趙。趙卒反覆。非盡殺之、恐爲亂。乃挾詐而盡阬殺之、遺其小者二百四十人歸趙。前後斬首虜四十五萬人。趙人大震。」

*43 秦本紀「五十年（257BC）十月、武安君白起有罪、爲士伍、遷陰密。…十二月、…武安君白起有罪、死。」・白起王翦列傳「秦王乃使使者賜之劍、自殺。武安君引劍將自刎、曰、我何罪于天而至此哉。良久、曰、我固當死。長平之戰、趙卒降者數十萬人、我詐而盡阬之、是足以死。遂自殺。武安君之死也、以秦昭王五十年十一月。死而非其罪、秦人憐之、鄉邑皆祭祀焉。」

[2] 司馬印 秦楚之際月表「(漢元年 206BC 正月) 分爲殷。(二月) 王司馬印始、故趙將。(三月) 二 都朝歌。…(二年 205BC 三月) 十四 降漢、印廢。(四月) 爲河内郡、屬漢。」

[3] 武信君 陳人武臣は、陳涉の將軍として趙地を平定して武信君を稱し*44、二世元年(209BC)八月、自立して趙王となったが、四箇月目の二年(208BC)十一月に殺害された*45。

[4] 五大夫 『漢書』百官公卿表「爵、一級曰公士、二上造、三簪褭、四不更、五大夫、六官大夫、七公大夫、八公乘、九五大夫、十左庶長、十一右庶長、十二左更、十三中更、十四右更、十五少上造、十六大上造、十七駟車庶長、十八大庶長、十九關内侯、二十徹侯。皆秦制、」司馬喜は仕官せず、ために爵のみを稱している。『二年律令』賜律

賜不爲吏及宦皇帝者、關内侯以上比二千石、卿比千石、五大夫比八百石、公乘比六百石、公大夫官大夫比五百石、大夫比三百石、不更比有秩、簪褭比斗食、上造公士比佐史。毋爵者、飯一斗肉五斤酒大半斗醬少半升。司寇徒隸、飯一斗、肉三斤、酒少半斗、鹽廿分升一。(291-293)

の「不爲吏」に當たるが、五大夫は八百石相當でかなりの高爵である。文帝十二年(168BC)の納粟授爵に基づくものであろう*46。司馬昌・司馬無澤が二代續いて財務官僚をつとめたことが蓄財の契機であったことは容易に想像される。

喜生談、談爲太史公。

喜 談を生む、談 太史公 [1] と爲る。

[1] 太史公 太史令を指す。官職名に「公」を附する稱謂は、扁鵲倉公列傳「太倉公者、齊太倉長、臨菑人也、姓淳于氏、名意。」に用例を得る。淳于意は齊の太倉長であったため、太倉公、さらに倉公と通稱されている*47。

*44 張耳陳餘列傳「陳餘乃復說陳王曰、…於是陳王以故所善陳人武臣爲將軍、邵騷爲護軍、以張耳・陳餘爲左右校尉、予卒三千人、北略趙地。武臣等從白馬渡河、至諸縣、說其豪桀曰、…豪桀皆然其言。乃行收兵、得數萬人、號武臣爲武信君。」

*45 秦楚之際月表 / 趙表「(二世元年 209BC 八月) 武臣始至邯鄲、自立爲趙王、始。…(二年 208BC 十一月) 四 李良殺武臣、張耳・陳餘走。」

*46 『漢書』食貨志「於是文帝從錯之言、令民入粟邊、六百石爵上造、稍增至四千石爲五大夫、萬二千石爲大庶長、各以多少級數爲差。錯復奏言、…上復從其言、乃下詔賜民十二年租稅之半。」

*47 下文「爲太史公書序略」に對する『史記索隱』に「案、桓譚云、遷所著書成、以示東方朔、

奉常、秦官、掌宗廟禮儀、有丞。景帝中六年更名太常。屬官有太樂・太祝・太宰・太史・太卜・太醫六令丞、(『漢書』百官公卿表)

太史令一人、六百石。本注曰、掌天時・星曆。凡歲將終、奏新年曆。凡國祭祀・喪・娶之事、掌奏良日及時節禁忌。凡國有瑞應・災異、掌記之。

太祝令一人、六百石。本注曰、凡國祭祀、掌讀祝、及迎送神。

太宰令一人、六百石。本注曰、掌宰工鼎俎饌具之物。凡國祭祀、掌陳饌具。

大(子)〔予〕樂令一人、六百石。本注曰、掌伎樂。凡國祭祀、掌請奏樂、及大饗用樂、掌其陳序。(『續漢書』百官志)

に見えるように、國家祭祀は太常に屬する太史令・太祝令・太宰令・太樂令がこれを實務的に擔當した。

「太史公」につき、『史記集解』太史公自序

如淳曰、漢儀注太史公、武帝置、位在丞相上。天下計書先上太史公、副上丞相、序事如古春秋。遷死後、宣帝以其官爲令、行太史公文書而已。

は、衛宏『漢儀注』の説を示すが、『二年律令』にすでに「太史」が見え、武帝時に太史公を設置したという記述からしてすでに成り立たない。一體、司馬遷に關わる衛宏の言説、さらに『後漢書』衛宏傳の記述は總じて不審の點が多い*48。

二 司馬談

太史公學天官於唐都、受易於楊何、習道論於黃子。太史公仕於建元・元封之間、

太史公 天官を唐都 [1] に學び、易を楊何 [2] に受け、道論を黃子 [3] に習う。太史公 建元・元封の間に仕う、

朔皆署曰太史公、則謂太史公是朔稱也。亦恐其說未盡。蓋遷自尊其父著述、稱之曰公。或云遷外孫楊惲所稱、事或當爾也。」とあるが、司馬遷が「太史公」を自稱していることに噛み合わない。

*48 『後漢書』儒林列傳 / 衛宏「初、九江謝曼卿善毛詩、乃爲其訓。宏從曼卿受學、因作毛詩序、善得風雅之旨、于今傳於世。」の毛詩序衛宏制作説は經學史上極めて重要だが、陳啓源『毛詩稽古編』卷九 / 小雅 / 鹿鳴之什 / 魚麗がすでに指摘するように、司馬相如列傳 / 難蜀父老文「且夫王事固未有不始於憂勤、而終於佚樂者也。」が、『詩序』小雅 / 魚麗「魚麗、美萬物盛多、能備禮也。文武以天保以上治內、采薇以下治外、始於憂勤、終於逸樂、故美萬物盛多、可以告於神明矣。」を引用しており、衛宏制作説は成立しがたい。

[1] 唐都

至今上即位、招致方士唐都、分其天部。而巴落下閔運算轉曆、然後日辰之度與夏正同。(曆書)

夫自漢之爲天數者、星則唐都、氣則王朔、占歲則魏鮮。(天官書)

唐都は、方士であり占星術の第一人者であった。天文を意味する「天官」は『史記』に初見する。

[2] 楊何

孔子傳易於瞿、瞿傳楚人馯臂子弘、弘傳江東人矯子庸疵、疵傳燕人周子家豎、豎傳淳于人光子乘羽、羽傳齊人田子莊何、何傳東武人王子中同、同傳菑川人楊何。何元朔中(128-123BC)以治易爲漢中大夫。(仲尼弟子列傳)

自魯商瞿受易孔子、孔子卒、商瞿傳易、六世至齊人田何、字子莊、而漢興。田何傳東武人王同子仲、子仲傳菑川人楊何。何以易、元光元年(134BC)徵、官至中大夫。(儒林列傳)

楊何は、易學の第一人者である。『易』は儒學の經典だが、同時に「卜筮之書」でもある。司馬談が唐都・楊何に師事したのは、太史令としての職責上の必要からであろう。太史令が術數一般に通じたことは、『漢書』藝文志

詔光祿大夫劉向校經傳諸子詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍醫李柱國校方技。

に窺われる。

[3] 黃子 黃子は、儒林列傳

清河王太傅轅固生者、齊人也。以治詩、孝景時爲博士。與黃生爭論景帝前。黃生曰、湯武非受命、乃弑也。轅固生曰、不然。夫桀紂虐亂、天下之心皆歸湯武、湯武與天下之心而誅桀紂、桀紂之民不爲之使而歸湯武、湯武不得已而立、非受命爲何。黃生曰、冠雖敝、必加於首。履雖新、必關於足。何者、上下之分也。今桀紂雖失道、然君上也。湯武雖聖、臣下也。夫主有失行、臣下不能正言匡過以尊天子、反因過而誅之、代立踐南面、非弑而何也。轅固生曰、必若所云、是高帝代秦即天子之位、非邪。於是景帝曰、食肉不食馬肝、不爲不知味。言學者無言湯武受命、不爲愚。遂罷。是後學者莫敢明受命放殺者。

の黃生であり*49、黃老思想を奉じたことで黃子・黃生と通稱されたのであろう。湯武の放伐を弑君に非ずとして肯定することは、『孟子』梁惠王下

齊宣王問曰、湯放桀、武王伐紂、有諸。孟子對曰、於傳有之。曰、臣弑其君、可乎。

曰、賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘、殘賊之人謂之一夫。聞誅一夫紂矣、未聞弑君也。に見える。對するに、『莊子』雜篇 / 盜跖「湯放其主、武王殺紂。自是之後、以強陵弱、以眾暴寡。湯・武以來、皆亂人之徒也。」は、湯武の放伐こそが亂世の始まりとして、これを糾弾するのである。黃生の主張は『莊子』の流れを汲むものであり、黃老思想が道家の發展形であることを示す。

愍學者之不達其意而師悖、乃論六家之要指曰、易大傳、「天下一致而百慮、同歸而殊塗。」
夫陰陽・儒・墨・名・法・道德、此務爲治者也、直所從言之異路、有省不省耳。

學者の其の意に達せずして師に悖るあわを愍れみ、乃ち六家の要指を論じて [1] 曰く、易大傳、「天下 致を一にして慮を百にし、歸を同じくして塗を殊にす [2]。」夫れ陰陽・儒・墨・名・法・道德 [3]、此れ務めて治を爲す者なり、直まだ従りて言う所の路を異にし [4]、省不省有るのみ。

[1] 論六家之要旨 陰陽・儒・墨・名・法・道德の六家を論評し、道家を最上とする。使用語彙は道家のそれが目立つ。

[2] 易大傳 『易』繫辭傳下「子曰、天下何思何慮。天下同歸而殊塗、一致而百慮、」

[3] 道德 「道德」は『老子』が道德經であることに由來する。「道德」を老子に關聯づけることは老子韓非列傳「老子脩道德、其學以自隱無名爲務。居周久之、見周之衰、迺遂去。至關、關令尹喜曰、子將隱矣、彊爲我著書。於是老子迺著書上下篇、言道德之意五千餘言而去、莫知其所終。」に初見。

[4] 異路 『淮南子』本經訓「五帝三王、殊事而同指、異路而同歸。晚世學者、不知道之所一體、德之所總要、取成之跡、相與危坐而說之、鼓歌而舞之、故博學多聞、而不免於惑。」・脩務訓「聖人之從事也、殊體而合于理、其所由異路而同歸、其存危定傾若一、志不忘於欲利人也。…夫墨子跣跡而趨千里、以存楚・宋。段干木闔門不出、以安秦・魏。夫行與止也、其勢相反、而皆可以存國、此所謂異路而同歸者也。」

嘗竊觀陰陽之術、大祥而眾忌諱、使人拘而多所畏。然其序四時之大順、不可失也。儒

*49 『史記集解』太史公自序「徐廣曰、儒林傳曰黃生、好黃老之術。」

者博而寡要、勞而少功、是以其事難盡從。然其序君臣父子之禮、列夫婦長幼之別、不可易也。墨者儉而難遵、是以其事不可徧循。然其彊本節用、不可廢也。法家嚴而少恩。然其正君臣上下之分、不可改矣。名家使人儉而善失真。然其正名實、不可不察也。道家使人精神專一、動合無形、膽足萬物。其爲術也、因陰陽之大順、采儒墨之善、撮名法之要、與時遷移、應物變化、立俗施事、無所不宜、指約而易操、事少而功多。儒者則不然。以爲人主天下之儀表也、主倡而臣和、主先而臣隨。如此則主勞而臣逸。至於大道之要、去健羨、絀聰明、釋此而任術。夫神大用則竭、形大勞則敝。形神騷動、欲與天地長久、非所聞也。

嘗て竊かに觀るに陰陽の術 [1]、大祥にして忌諱 [2] 衆く、人をして拘とらわれて畏るる所 [3] 多からしむ。然るに其の四時の大順を序つづる [4] は、失う可からざるなり。儒者 [5] 博くして要寡なく [6]、勞して功少なし [7]、是を以て其の事 盡くは従い難し。然るに其の君臣父子の禮を序じ、夫婦長幼の別を列するは [8]、易う可からざるなり。墨者 [9] 儉にしてしたが遵い難し、是を以て其の事 徧あまねく循う可からず。然るに其の本を彊くし用を節するは [10]、廢す可からざるなり。法家嚴にして恩少なし [11]。然るに其の君臣上下の分 [12] を正すは、改む可からず。名家 [13] 人をして儉にして善く眞を失わしむ。然るに其の名實 [14] を正すは、察せざる可からざるなり。道家 [15] 人をして精神專一ならしめ、動 無形に合し、萬物を膽足す [16]。其の術と爲るや、陰陽の大順に因り [17]、儒墨 [18] の善を采り、名法の要を撮り、時と遷移し [19]、物に應じて變化し [20]、俗を立て事を施すに、宜しからざる所無し、指約にして操り易し [21]、事少くして功多し [22]。儒者則ち然らず。以爲えらく人主天下の儀表なり [23]、主倡して臣和し [24]、主を先にして臣隨う [25]。此くの如くすれば則ち主勞して臣逸す。大道の要 [26] に至りては、健羨を去り、聰明をしりぞけ [27]、此を釋すてて術に任ず [28]。夫れ神大いに用うれば則ち竭つき、形大いに勞すれば則ち敝やぶる [29]。形神騷動すれば [30]、天地と長久ならん [31] と欲するも、聞く所に非ざるなり [32]。

[1] 陰陽之術 「陰陽」「術」の關聯は封禪書「騶衍以陰陽主運顯於諸侯、而燕齊海上之方士傳其術不能通」に初見。

[2] 忌諱 『老子』五十七章「天下多忌諱、而人彌貧。」

[3] 所畏 『老子』二十章「人之所畏、不可不畏。」

[4] 序四時之大順 『大戴禮』曾子天圓「聖人慎守日月之數、以察星辰之行、以序四時之順逆、謂之麻、截十二管、以索八音之上下清濁、謂之律也。律居陰而治陽、麻居陽而治陰、律麻迭相治也、其間不容髮。」

[5] 儒者 『孟子』滕文公上「儒者之道、古之人若保赤子、此言何謂也。」に初見。

[6] 博而寡要 『春秋繁露』玉英「故春秋之道、博而要、詳而反一也。」

[7] 勞而少功 「勞而無功」は『管子』形勢「母與不可、母彊不能、母告不知。與不可、彊不能、告不知、謂之勞而無功。」に初見。

[8] 然其序君臣父子之禮列夫婦長幼之別 『新語』道基「於是先聖乃仰觀天文、俯察地理、圖畫乾坤、以定人道、民始開悟、知有父子之親、君臣之義、夫婦之別、長幼之序。於是百官立、王道乃生。」は君臣・父子・夫婦・長幼のみを列挙する。

[9] 墨者 『孟子』滕文公上「墨者夷之」に初見。

[10] 彊本節用 『荀子』天論「彊本而節用、則天不能貧。養備而動時、則天不能病。脩道而不貳、則天不能禍。」

[11] 法家嚴而少恩 「法家」は本條に初見。「少恩」は『史記』に初見*50。

[12] 君臣上下之分 『管子』君臣下「是以爲人上者患而不勞也、百姓勞而不患也、君臣上下之分素、則禮制立矣。」

[13] 名家 本條に初見。

[14] 名實 「名實」は、『孟子』告子下「淳于髡曰、先名實者、爲人也。後名實者、自爲也。夫子在三卿之中、名實未加於上下而去之、仁者固如此乎。」に初見。

*50 秦始皇本紀「繚曰、秦王爲人、蜂準、長目、顰鳥膺、豺聲、少恩而虎狼心、居約易出人下、得志亦輕食人。」・老子韓非列傳「太史公曰、老子所貴道、虛無、因應變化於無爲、故著書辭稱微妙難識。莊子散道德、放論、要亦歸之自然。申子卑卑、施之於名實。韓子引繩墨、切事情、明是非、其極慘礪少恩。皆原於道德之意、而老子深遠矣。」・孫子吳起列傳「太史公曰、世俗所稱師旅、皆道孫子十三篇、吳起兵法、世多有、故弗論、論其行事所施設者。語曰、能行之者未必能言、能言之者未必能行。孫子籌策龐涓明矣、然不能蚤救患於被刑。吳起說武侯以形勢不如德、然行之於楚、以刻暴少恩亡其軀。悲夫。」・伍子胥列傳「吳太宰嚭既與子胥有隙、因讒曰、子胥爲人剛暴、少恩、猜賊、其怨望恐爲深禍也。」・商君列傳「太史公曰、商君、其天資刻薄人也。跡其欲干孝公以帝王術、挾持浮說、非其質矣。且所因由嬖臣、及得用、刑公子虔、欺魏將卬、不師趙良之言、亦足發明商君之少恩矣。余嘗讀商君開塞耕戰書、與其人行事相類。卒受惡名於秦、有以也夫。」

[15] 道家 本條に初見。

[16] 精神專一動合無形瞻足萬物 「精神」「無形」「萬物」を連ねることは、『莊子』外篇 / 知北遊「夫昭昭生於冥冥、有倫生於無形、精神生於道、形本生於精、而萬物以形相生。」に初見。「專一」は、『孫子』軍爭「夫金鼓旌旗者、所以一人之耳目也。人既專一、則勇者不得獨進、怯者不得獨退、此用眾之法也。」など軍事關係の文脈における用例が目立つ。「瞻足」は、『春秋繁露』諸侯「生育養長、成而更生、終而復始其事、所以利活民者無已、天雖不言、其欲瞻足之意可見也。」に初見。

[17] 因陰陽之大順 「陰陽」と「順」を關聯づけることは、『新語』慎微「若湯・武之君、伊・呂之臣、因天時而行罰、順陰陽而運動、上瞻天文、下察人心、以寡服眾、以弱制強、革車三百甲卒三千、征敵破眾、以報大讎、討逆亂之君、絕煩濁之原、天下和平、家給人足、疋夫行仁、商賈行信、齊天地、致鬼神、河出圖、洛出書、因是之道、寄之天地之間、豈非古之所謂得道者哉。」に初見する。

[18] 儒墨 『莊子』內篇 / 齊物論「故有儒墨之是非、以是其所非而非其所是。」

[19] 與時遷移 『荀子』非相「未可直至也、遠舉則病繆、近世則病傭。善者於是間也、亦必遠舉而不繆、近世而不傭、與時遷徙、與世偃仰、緩急羸紉、府然若渠匱槩括之於己也。」・儒效「與時遷徙、與世偃仰、千舉萬變、其道一也。」「遷移」は『荀子』君道「故校之以禮、而觀其能安敬也。與之舉措遷移、而觀其能應變也。與之安燕、而觀其能無流惰也。接之以聲色、權利、忿怒、患險、而觀其能無離守也。」

[20] 應物變化 『呂氏春秋』論人「故知一、則應物變化、闊大淵深、不可測也。」

[21] 指約而易操 『管子』桓公問「齊桓公問管子曰、吾念有而勿失、得而勿忘、爲之有道乎。對曰、勿創勿作、時至而隨、毋以私好惡害公正、察民所惡以自爲戒。黃帝立明臺之議者、上觀於賢也、堯有衢室之問者、下聽於人也。舜有告善之旌、而主不蔽也。禹立諫鼓於朝、而備訊唉。湯有總街之庭、以觀人誹也。武王有靈臺之復、而賢者進也。此古聖帝王所以有而勿失、得而勿忘者也。桓公曰、吾欲效而爲之、其名云何。對曰、名曰噴室之議、曰法簡而易行、刑審而不犯、事約而易從、求寡而易足。人有非上之所過、謂之正士、內於噴室之議、有司執事者咸以厥事奉職而不忘、爲此噴室之事也、請以東郭牙爲之、此人能以正事爭於君前者也。桓公曰、善。」・李斯列傳「李斯恐懼、重爵祿、不知所出、乃阿二世意、欲求容、以書對曰、…若此然後可謂能明申、韓之術、而脩商

君之法。法脩術明而天下亂者、未之聞也。故曰、王道約而易操也。」

[22] 事少而功多 『莊子』外篇 / 天地「有械於此、一日浸百畦、用力甚寡而見功多、夫子不欲乎。…用力少、見功多者、聖人之道。」

[23] 儒者則不然以爲人主天下之儀表也 『淮南子』主術訓「人主之術、處無爲之事、而行不言之教、清靜而不動、一度而不搖、因循而任下、責成而不勞。是故心知規而師傅論導、口能言而行人稱辭、足能行而相者先導、耳能聽而執正進諫。是故慮無失策、謀無過事、言爲文章、行爲儀表於天下、進退應時、動靜循理、不爲醜美好憎、不爲賞罰喜怒、名各自名、類各自類、事猶自然、莫出於己。」「是故人主之立法、先自爲檢式儀表、故令行於天下。」

道家との對比のもとに儒者を批判する。「論六家之要指」では、下文「至於大道之要、去健羨、絀聰明、釋此而任術」「乃合大道、混混冥冥。」と、道家を賞賛する文脈において「大道」を用いる。『漢書』司馬遷傳論贊は「論大道則先黃老而後六經」と、司馬遷を批判するが、『史記』において儒・道に關聯して「大道」に言及するのは、この二例のみであり、論贊の司馬遷批判は「論六家之要指」を對象とするものとなる。後述の如く、論贊は、『史記』に關して司馬談に全く言及しない。太史公自序が「論六家之要指」を司馬談の著作とすることも、司馬遷の虚構とみなしているものとなろう。

[24] 主倡而臣和 『淮南子』泰族訓「英俊豪傑、各以小大之材處其位、得其宜、由本流末、以重制輕、上唱而民和、上動而下隨、四海之内、一心同歸、背貪鄙而向義理、其於化民也、若風之搖草木、無之而不靡。」

[25] 主先而臣隨 『莊子』外篇 / 天道「君先而臣從、父先而子從、兄先而弟從、長先而少從、男先而女從、夫先而婦從。」

[26] 大道之要 『淮南子』原道訓「是故清靜者、德之至也。而柔弱者、道之要也。虛無恬愉者、萬物之用也。肅然應感、殷然反本、則淪於無形矣。」

[27] 絀聰明 『莊子』內篇 / 大宗師「顏回曰、墮肢體、黜聰明、離形去知、同於大通、此謂坐忘。」

[28] 釋此而任術 『淮南子』主術訓「人主之於用法、無私好憎、故可以爲命。夫權輕重不差蟲首、扶撥枉橈不失鍼鋒、直施矯邪不私辟險、姦不能枉、讒不能亂、德無所立、怨無所藏、是任術而釋人心者也、故爲治者不與焉。」

[29] 夫神大用則竭形大勞則敝 『莊子』外篇 / 刻意「故曰、形勞而不休則弊、精用而不已則勞、勞則竭。水之性、不雜則清、莫動則平。鬱閉而不流、亦不能清。天德之象也。」・『淮南子』精神訓「故心者、形之主也。而神者、心之寶也。形勞而不休則蹶、精用而不已則竭、是故聖人貴而尊之、不敢越也。」

[30] 形神騷動 『淮南子』原道訓「形神相失也。故以神爲主者、形從而利。以形爲制者、神從而害。貪饕多欲之人、漠暝於勢利、誘慕於名位、冀以過人之智植于高世、則精神日以耗而彌遠、久淫而不還、形閉中距、則神無由入矣。」・俶眞訓「昔公牛哀轉病也、七日化爲虎。其兄掩戶而入覘之、則虎搏而殺之。是故文章成獸、爪牙移易、志與心變、神與形化。方其爲虎也、不知其嘗爲人也。方其爲人、不知其且爲虎也。二者代謝舛馳、各樂其成形。狡猾鈍悞、是非無端、孰知其所萌。夫水嚮冬則凝而爲冰、冰迎春則泮而爲水、冰水移易于前後、若周員而趨、孰暇知其所苦樂乎。是故形傷于寒暑燥溼之虐者、形苑而神壯。神傷乎喜怒思慮之患者、神盡而形有餘。故罷馬之死也、剝之若槁。狡狗之死也、割之猶濡。是故傷死者其鬼燒、時既者其神漠。是皆不得形神俱沒也。」

[31] 與天地長久 『老子』七章「天長地久。天地所以能長久者、以其不自生、故能長久。是以聖人後其身而身先、外其身而身存。以其無私、故能成其私。」

[32] 非所聞也 『韓詩外傳』卷二「李離對曰、臣居官爲長、不與下吏讓位。受爵爲多、不與下吏分利。今過聽殺人、而下吏蒙其死、非所聞也。不受命。」・卷八「說曰、三公之位、我知其貴於刀俎之肆矣。萬鍾之祿、我知其富於屠年之利矣。今見爵祿之利、而忘辭受之禮、非所聞也。」

夫陰陽四時、八位、十二度、二十四節各有教令、順之者昌、逆之者不死則亡、未必然也、故曰「使人拘而多畏」。夫春生夏長、秋收冬藏、此天道之大經也、弗順則無以爲天下綱紀、故曰「四時之大順、不可失也」。

夫れ陰陽四時、八位、十二度、二十四節各の教令有り、之に順う者は昌え、之に逆う者は死せざれば則ち亡ぶ [1]、未だ必ずしも然らざるなり、故に曰く「人をして拘われて畏るる所多からしむ」。夫れ春生み夏長じ、秋收め冬藏す [2]、此れ天道の大經なり [3]、順わざれば則ち以て天下の綱紀 [4] を爲す無し、故に曰く「四時の大順、失う可からざるなり」。

[1] 順之者昌逆之者不死則亡 『淮南子』覽冥訓「夫道者、無私就也、無私去也、能者有餘、拙者不足、順之者利、逆之者凶。」「故情勝欲者昌、欲勝情者亡。」・爰盎晁錯列傳「太史公曰、袁盎雖不好學、亦善傳會、仁心爲質、引義慷慨。遭孝文初立、資適逢世。時以變易、及吳楚一說、說雖行哉、然復不遂。好聲矜賢、竟以名敗。晁錯爲家令時、數言事不用。後擅權、多所變更。諸侯發難、不急匡救、欲報私讎、反以亡軀。語曰、變古亂常、不死則亡、豈錯等謂邪。」

[2] 春生夏長秋收冬藏 『新語』道基「傳曰、天生萬物、以地養之、聖人成之。功德參合、而道術生焉。故曰、張日月、列星辰、序四時、調陰陽、布氣治性、次置五行、春生夏長、秋收冬藏、陽生雷電、陰成霜雪、養育群生、一茂一亡、潤之以風雨、曝之以日光、溫之以節氣、降之以殞霜、位之以眾星、制之以斗衡、苞之以六合、羅之以紀綱、改之以災變、告之以禎祥、動之以生殺、悟之以文章。」・『淮南子』本經訓「四時者、春生夏長、秋收冬藏、取予有節、出入有時、開闔張歛、不失其敘、喜怒剛柔、不離其理。」・主術訓「天氣爲魂、地氣爲魄、反之玄房、各處其宅。守而勿失、上通太一。太一之精、通於天道。天道玄默、無容無則、大不可極、深不可測、尚與人化、知不能得。昔者神農之治天下也、神不馳於胸中、智不出於四域、懷其仁誠之心、甘雨時降、五穀蕃植、春生夏長、秋收冬藏。月省時考、歲終獻功、以時嘗穀、祀于明堂。」

[3] 天道之大經 『春秋繁露』官制象天「何謂天之大經。三起而成日、三日而成規、三旬而成月、三月而成時、三時而成功。寒暑與和、三而成物。日月與星、三而成光。天地與人、三而成德。由此觀之、三而成一、天之大經也。」

[4] 天下綱紀 『淮南子』泰族訓「五帝三王之道、天下之綱紀、治之儀表也。」
夫儒者以六藝爲法。六藝經傳以千萬數、累世不能通其學、當年不能究其禮、故曰「博而寡要、勞而少功」。若夫列君臣父子之禮、序夫婦長幼之別、雖百家弗能易也。
夫れ儒者 六藝を以て法と爲す。六藝經傳 千萬を以て數え、累世 其の學に通ずる能わず、當年 其の禮を究むる能わず [1]、故に曰く「博くして要寡なく、勞して功少なし」。若し夫れ君臣父子の禮を列し、夫婦長幼の別を序するは、百家と雖も易うる能わざるなり [2]。

[1] 當年不能究其禮 『晏子春秋』外篇第八「仲尼之齊、見景公、景公說之、欲封之以爾稽、以告晏子。晏子對曰、不可。彼浩裾自順、不可以教下。好樂緩于民、不可使

親治。立命而建事、不可守職。厚葬破民貧國、久喪道哀費日、不可使子民。行之難者在內、而傳者無其外、故異于服、勉于容、不可以道眾而馴百姓。自大賢之滅、周室之卑也、威儀加多、而民行滋薄。聲樂繁充、而世德滋衰。今孔丘盛聲樂以侈世、飾弦歌鼓舞以聚徒、繁登降之禮、趨翔之節以觀眾、博學不可以儀世、勞思不可以補民、兼壽不能殫其教、當年不能究其禮、積財不能贍其樂、繁飾邪術以營世君、盛爲聲樂以淫愚其民。其道也、不可以示世。其教也、不可以導民。今欲封之、以移齊國之俗、非所以導眾存民也。公曰、善。于是厚其禮而留其封、敬見不問其道、仲尼迺行。」*51

[2] 雖百家弗能易也 『荀子』君道「人主欲得善射、射遠中微者、縣貴爵重賞以招致之。內不可以阿子弟、外不可以隱遠人、能中是者取之。是豈不必得之之道也哉。雖聖人不能易也。欲得善馭、及速致遠者、一日而千里、縣貴爵重賞以招致之。內不可以阿子弟、外不可以隱遠人、能致是者取之。是豈不必得之之道也哉。雖聖人不能易也。」

墨者亦尚堯舜道、言其德行曰、「堂高三尺、土階三等、茅茨不翦、采椽不刮。食土簋、啜土刑、糲梁之食、藜藿之羹。夏日葛衣、冬日鹿裘。」其送死、桐棺三寸、舉音不盡其哀。教喪禮、必以此爲萬民之率。使天下法若此、則尊卑無別也。夫世異時移、事業不必同、故曰「儉而難遵」。要曰彊本節用、則人給家足之道也。此墨子之所長、雖百家弗能廢也。墨者も亦た堯舜の道を尚ぶ [1]、其の德行を言うに曰く、「堂高三尺、土階三等、茅茨^{とわと}翦^きらず、采椽^{けず}刮^{けず}らず。土簋に食らい、土刑に啜り、糲梁の食、藜藿の羹。夏日葛衣、冬日鹿裘 [2]。」其の死を送るや、桐棺三寸、音を舉ぐるも其の哀を盡くさず [3]。喪禮を教うるに、必ず此れを以て萬民の率と爲す。天下の法 [4] をして此くの若くせしむれば、則ち尊卑 別無きなり [5]。夫れ世異り時移り [6]、事業 必ずしも同じからず [7]、故に曰く「儉にして遵い難し」。要に曰く本を彊くし用を節するは、則ち人給家足 [8] の道なり。此れ墨子の長ずる所、百家と雖も廢する能わざるなり [9]。

[1] 墨者亦尚堯舜道 『韓非子』顯學「孔子・墨子俱道堯・舜、而取舍不同、皆自謂眞堯・舜、」

[2] 堂高三尺土階三等茅茨不翦采椽不刮食土簋啜土刑糲梁之食藜藿之羹夏日葛衣冬

*51 孔子世家「景公說、將欲以尼谿田封孔子。晏嬰進曰、夫儒者滑稽而不可軌法。倨傲自順、不可以爲下。崇喪遂哀、破產厚葬、不可以爲俗。游說乞貸、不可以爲國。自大賢之息、周室既衰、禮樂缺有間。今孔子盛容飾、繁登降之禮、趨詳之節、累世不能殫其學、當年不能究其禮。君欲用之以移齊俗、非所以先細民也。」

日鹿裘 『韓非子』五蠹「堯之王天下也、茅茨不翦、采椽不斲、糲糲之食、藜藿之羹、冬日麕裘、夏日葛衣、雖監門之服養、不虧於此矣。」·李斯列傳「而二世責問李斯曰、吾有私議而有所聞於韓子也、曰、堯之有天下也、堂高三尺、采椽不斲、茅茨不翦、雖逆旅之宿不勤於此矣。冬日鹿裘、夏日葛衣、糲糲之食、藜藿之羹、飯土甌、啜土鉶、雖監門之養不穀於此矣。」·『韓詩外傳』卷八「齊景公使人於楚、楚王與之上九重之臺、顧使者曰、齊有臺若此乎。使者曰、吾君有治位之坐、土階三等、茅茨不翦、樸椽不斲者、猶以謂爲之者勞、居之者泰、吾君惡有臺若此者。楚王蓋悒如也。使者可謂不辱君命、其能專對矣。」

[3] 其送死桐棺三寸舉音不盡其哀 『墨子』公孟「子墨子謂程子曰、儒之道足以喪天下者、四政焉。儒以天爲不明、以鬼爲不神、天鬼不說、此足以喪天下。又厚葬久喪、重爲棺槨、多爲衣衾、送死若徙、三年哭泣、扶後起、杖後行、耳無聞、目無見、此足以喪天下。又弦歌鼓舞、習爲聲樂、此足以喪天下。又以命爲有、貧富壽夭、治亂安危有極矣、不可損益也、爲上者行之、必不聽治矣。爲下者行之、必不從事矣、此足以喪天下。」·『韓非子』五蠹「墨者之葬也、冬日冬服、夏日夏服、桐棺三寸、服喪三月、世主以爲儉而禮之。」·『淮南子』覽冥訓「逮至夏桀之時、主闇晦而不明、道瀾漫而不修、棄捐五帝之恩刑、推蹶三王之法籍、是以至德滅而不揚、帝道揜而不興、舉事戾蒼天、發號逆四時、春秋縮其和、天地除其德、仁君處位而不安、大夫隱道而不言、群臣準上意而懷當、疏骨肉而自容、邪人參耦比周而陰謀、居君臣父子之間、而競載驕主而像其意、亂人以成其事、是故君臣乖而不親、骨肉疏而不附、植社堦槁而裂、容臺振而掩覆、犬群嗥而入淵、豕銜蓐而席澳、美人掣首墨面而不容、曼聲吞炭內閉而不歌、喪不盡其哀、獵不聽其樂、西老折勝、黃神嘯吟、飛鳥鍛翼、走獸廢腳、山無峻榦、澤無洼水、狐狸首穴、馬牛放失、田無立禾、路無莎蘋、金積折廉、璧襲無理、磬龜無腹、著策日施。」

[4] 天下法 『禮記』中庸「是故君子動而世爲天下道、行而世爲天下法、言而世爲天下則。遠之則有望、近之則不厭。」

[5] 尊卑無別 『大戴禮』禮三本「郊止天子、社止諸侯、道及士大夫、所以別尊卑。」·『淮南子』齊俗訓「夫禮者、所以別尊卑、異貴賤。」

[6] 世異時移 『淮南子』齊俗訓「是故世異則事變、時移則俗易。」

[7] 事業不必同 『莊子』外篇 / 駢拇「故此數子者、事業不同、名聲異號、其於傷性

以身爲殉、一也。臧與穀、二人相與牧羊、而俱亡其羊。問臧奚事、則挾策讀書。問穀奚事、則博塞以游。二人者、事業不同、其於亡羊均也。」

[8] 人給家足 『新語』慎微「若湯・武之君、伊・呂之臣、因天時而行罰、順陰陽而運動、上瞻天文、下察人心、以寡服眾、以弱制強、革車三百甲卒三千、征敵破眾、以報大讎、討逆亂之君、絕煩濁之原、天下和平、家給人足、疋夫行仁、商賈行信、齊天地、致鬼神、河出圖、洛出書、因是之道、寄之天地之間、豈非古之所謂得道者哉。」

[9] 雖百長弗能廢也 『管子』法法「雖聖人能生法、不能廢法而治國。」
法家不別親疏、不殊貴賤、一斷於法、則親親尊尊之恩絕矣。可以行一時之計、而不可長用也、故曰「嚴而少恩」。若尊主卑臣、明分職不得相踰越、雖百家弗能改也。

法家 親疏を別かたず、貴賤を殊にせず [1]、一に法に斷ずれば [2]、則ち親親尊尊の恩絶ゆ [3]。以て一時の計を行ふ可きも、而るに長^{ひき}しく用う可からざるなり [4]、故に曰く「嚴にして恩少なし」。主を尊び臣を卑しみ [5]、分職を明らかにし相い踰越するを得ざるが若きは [6]、百家と雖も改むる能わざるなり [7]。

[1] 不別親疏不殊貴賤 『荀子』禮論「三年之喪、何也。曰、稱情而立文、因以飾群、別親疏貴賤之節、而不可益損也。故曰、無適不易之術也。」

[2] 一斷於法 『韓非子』有度「此其所以然者、由主之不上斷於法、而信下爲之也。」

[3] 親親尊尊之恩 『荀子』禮論「故先王案爲之立文、尊尊親親之義至矣。」・『禮記』經解「喪祭之禮廢、則臣子之恩薄、而倍死忘生者眾矣。」

[4] 可以行一時之計而不可長用也 『呂氏春秋』義賞「文公曰、雍季之言、百世之利也。咎犯之言、一時之務也。焉有以一時之務先百世之利者乎。」「長用」は『國語』鄭語「公曰、謝西之九州、何如。對曰、其民沓貪而忍、不可因也。唯謝・邾之間、其冢君侈驕、其民怠沓其君、而未及周德。若更君而周訓之、是易取也、且可長用也。」に見える。

[5] 尊主臣卑 『管子』霸言「主尊臣卑、上威下敬、令行人服、理之至也。」

[6] 明分職不得相踰越 『管子』明法解「故明主之治也、明分職而課功勞、有功者賞、亂法者誅、誅賞之所加、各得其宜、而主不自與焉。」「明主者、明於術數而不可欺也、審於法禁而不可犯也、察於分職而不可亂也。故群臣不敢行其私、貴臣不得蔽其賤、近者不得塞其遠、孤寡老弱不失其所職、境內明辨而不相踰越、此之謂治國。故明法曰、「所謂治國者、主道明也。」

[7] 雖百家弗能改也 『孟子』離婁上「暴其民甚、則身弑國亡。不甚、則身危國削。名之曰幽厲、雖孝子慈孫、百世不能改也。」

名家苛察繳繞、使人不得反其意、專決於名而失人情、故曰「使人儉而善失眞」。若夫控名責實、參伍不失、此不可不察也。

名家苛察 [1] 繳繞、人をして其の意に反するを得ざらしめ [2]、専ら名に決して人情を失う [3]、故に曰く「人をして儉にして善く眞を失わしむ」。若し夫れ名を控^ひきて實を責め、參伍 失わざるは [4]、此れ察せざる可からざるなり。

[1] 苛察 『莊子』雜篇 / 天下「君子不爲苛察、不以身假物。」

[2] 使人不得反其意 『韓詩外傳』卷六「繁文以相假、飾辭以相悖、數譬以相移、外人之身、使不得反其意、則論便然後害生也。」

[3] 專決於名而失人情 『禮記』禮運「龜以爲畜、故人情不失。」

[4] 控名責實參伍不失 『淮南子』要略「明攝權操柄、以制群下、提名責實、考之參伍、所以使人主秉數持要、不妄喜怒也。」

道家無爲、又曰無不爲、其實易行、其辭難知。其術以虛無爲本、以因循爲用。無成執、無常形、故能究萬物之情。不爲物先、不爲物後、故能爲萬物主。有法無法、因時爲業。有度無度、因物與合。故曰「聖人不朽、時變是守。虛者道之常也、因者君之綱」也。羣臣竝至、使各自明也。其實中其聲者謂之端、實不中其聲者謂之竅。竅言不聽、姦乃不生、賢不肖自分、白黑乃形。在所欲用耳、何事不成。乃合大道、混混冥冥。光耀天下、復反無名。凡人所生者神也、所託者形也。神大用則竭、形大勞則敝、形神離則死。死者不可復生、離者不可復反、故聖人重之。由是觀之、神者生之本也、形者生之具也。不先定其神〔形〕、而曰「我有以治天下」、何由哉。

道家 爲す無し、又た曰く爲さざる無し [1]、其の實 行い易きも、其の辭 知り難し [2]。其の術 虛無を以て本と無し、因循を以て用と爲す [3]。成執無し、常形無し [4]、故に能く萬物の情を究む [5]。物の先と爲らず、物の後と爲らず [6]、故に能く萬物の主と爲る [7]。法有りて法無し [8]、時に因りて業を爲す [9]。度有りて度無し、物に因りて與に合す [10]。故に曰く「聖人不朽、時變を是れ守る [11]。虚なる者は道の常なり [12]、因なる者は君の綱なり [13]」。羣臣竝びに至り [14]、各の自ら明らかにせしむるなり [15]。其の實 其の聲に中たる者 之を端と謂い、實

其の聲に中らざる者 之を窾と謂う [16]。窾言聽かざれば [17]、姦乃ち生ぜず [18]、賢不肖自ら分かれ [19]、白黒乃ち形あらわる [20]。用いんと欲する所に在るのみ、何の事か成らざる [21]。乃ち大道に合し [22]、混混冥冥 [23]。天下を光耀し [24]、復た無名に反る [25]。凡そ人の生くる所の者は神なり、託する所の者は形なり。神大いに用うれば則ち竭き、形大いに勞すれば則ちやぶれ [26]、形神離るれば則ち死す [27]。死者 復た生く可からず [28]、離者 復た反る可からず、故に聖人 之を重んず [29]。是れに由りて之を觀れば、神なる者は生の本なり、形なる者は生の具なり [30]。先に其の神〔形〕を定めず [31]、而して「我れ以て天下を治むる有り」と曰う、何に由るや。

[1] 道家無爲又曰無不爲 『老子』三十七章「道常無爲而無不爲。」・四十八章「爲學日益、爲道日損、損之又損之、以至於無爲。無爲無不爲。取天下常以無事、及其有事、不足以取天下。」

[2] 其實易行其辭難知 『老子』七十章「吾言甚易知、甚易行。天下莫能知、莫能行。言有宗、事有君。夫唯無知、是以不我知。知我者希、則我者貴。是以聖人被褐懷玉。」・老子韓非列傳「太史公曰、老子所貴道、虛無、因應變化於無爲、故著書辭稱微妙難識。莊子散道德、放論、要亦歸之自然。申子卑卑、施之於名實。韓子引繩墨、切事情、明是非、其極慘礪少恩。皆原於道德之意、而老子深遠矣。」

[3] 其術以虛無爲本以因循爲用 『呂氏春秋』知道「君服性命之情、去愛惡之心、用虛無爲本、以聽有用之言謂之朝。」「因循」は『淮南子』に初見。要略「時則者、所以上因天時、下盡地力、據度行當、合諸人則、形十二節、以爲法式、終而復始、轉於無極、因循倣依、以知禍福、操舍開塞、各有龍忌、發號施令、以時教期、使君人者知所以從事。」など。

[4] 無成執無常形 「成勢」は『韓非子』難三「物之所謂難者。必借人成勢而勿使侵害己、可謂一難也。」に、「常形」は『孫子』虚實「故兵無常勢、水無常形。能因敵變化而取勝、謂之神。」に見える。

[5] 故能究萬物之情 『莊子』外篇 / 秋水「是未明天地之理、萬物之情也。」・外篇 / 山木「若夫萬物之情、人倫之傳、則不然。」

[6] 不爲物先不爲物後 『老子』六十七章「天下皆謂我大、不肖。夫唯大、故不肖。若肖、久矣其細。我有三寶、持而寶之、一曰慈、二曰儉、三曰不敢爲天下先。夫慈、

故能勇。儉、故能廣。不敢爲天下先、故能成器長。今捨慈且勇、捨儉且廣、捨後且先、死矣。夫慈、以戰則勝、以守則固。天將救之、以慈衛之。」·『淮南子』繆稱訓「故聖人不爲物先、而常制之、其類若積薪樵、後者在上。」

[7] 故能爲萬物主 『春秋繁露』天地之行「是故天執其道、爲萬物主、君執其常、爲一國主。」

[8] 有法無法·有度無度 『管子』版法解「凡國無法、則眾不知所爲。無度、則事無機。有法不正、有度不直、則治辟、治辟則國亂。故曰、正法直度、罪殺不赦。殺僂必信、民畏而懼。武威既明、令不再行。」

[9] 因時爲業 『淮南子』精神訓「是故聖人因時以安其位、當世而樂其業。」

[10] 因物與合 『呂氏春秋』貴信「夫九合之而合、壹匡之而聽、從此生矣。管仲可謂能因物矣。」

[11] 聖人不朽時變是守 『管子』心術「聖人之道、若存若亡。援而用之、歿世不亡。與時變而不化、應物而不移、日用之而不化。」·正世「聖人者、明於治亂之道、習於人事之終始者也。其治人民也、期於利民而止。故其位齊也不慕古、不留今。與時變、與俗化。」·內業「人主安靜、春秋冬夏、天之時也、山陵川谷、地之枝也、喜怒取予、人之謀也、是故聖人與時變而不化、從物而不移。能正能靜、然後能定。」·『淮南子』汜論訓「故聖人法與時變、禮與俗化、衣服器械各便其用、法度制令各因其宜。」「由此觀之、法度者、所以論民俗而節緩急也。器械者、因時變而制宜適也。夫聖人作法而萬物制焉、賢者立禮而不肖者拘焉。」

[12] 虛者道之常也 『淮南子』詮言訓「平者、道之素也。虛者、道之舍也。」

[13] 因者君之綱也 『呂氏春秋』任數「古之王者、其所爲少、其所因多。因者、君術也。爲者、臣道也。爲則擾矣、因則靜矣。因冬爲寒、因夏爲暑、君奚事哉。故曰君道無知無爲、而賢於有知有爲、則得之矣。」

[14] 群臣竝至 『管子』明法解「群臣竝進、筴之以數、則私無所立。故明法曰、動無非法者、所以禁過而外私也。」

[15] 使各自明也 『莊子』外篇 / 田子方「若天之自高、地之自厚、日月之自明、夫何修焉。」

[16] 其實中其聲者謂之端實不中其聲者謂之竅 『管子』君臣上「厚惠不能供、聲實

有間也。』·形勢解「中無情實、則名聲惡矣。」

[17] 窳言不聽 『韓非子』難二「李兌治中山、苦陘令上計而入多。李兌曰、語言辨、聽之說、不度於義、謂之窳言。無山林澤谷之利而入多者、謂之窳貨。君子不聽窳言、不受窳貨、子姑免矣。」

[18] 姦乃不生 『韓非子』難一「君有道、則臣盡力而姦不生。無道、則臣上塞主明而下成私。』·心度「夫國事務先而一民心、專舉公而私不從、賞告而姦不生、明法而治不煩、能用四者強、不能用四者弱。」

[19] 賢不肖自分 『管子』立政「群徒比周之說勝、則賢不肖不分。』·立政九敗解「人君唯毋聽群徒比周、則群臣朋黨、蔽美揚惡、然則國之情僞不見於上、如是、則朋黨者處前、寡黨者處後。夫朋黨者處前、賢不肖不分、則爭奪之亂起、而君在危殆之中矣。故曰、群徒比周之說勝、則賢不肖不分。」

[20] 白黑乃形 『韓非子』解老「凡物之有形者易裁也、易割也。何以論之。有形則有短長、有短長則有小大、有小大則有方圓、有方圓則有堅脆、有堅脆則有輕重、有輕重則有白黑。短長、大小、方圓、堅脆、輕重、白黑之謂理。理定而物易割也。故議於大庭而後言則立、權議之士知之矣。故欲成方圓而隨其規矩、則萬事之功形矣。而萬物莫不有規矩。議言之士、計會規矩也。聖人盡隨於萬物之規矩、故曰、不敢爲天下先。」

[21] 何事不成 『淮南子』主術訓「故中欲不出謂之扃、外邪不入謂之塞。中扃外閉、何事之不節。外閉中扃、何事之不成。弗用而後能用之、弗爲而後能爲之。」

[22] 乃合大道 『韓詩外傳』卷四「夫當世之愚、飾邪說、文姦言、以亂天下、欺惑眾愚、使混然不知是非治亂之所存者、則是范雎·魏牟·田文·莊周·慎到·田駢·墨翟·宋鉞·鄧析·惠施之徒也。此十子者、皆順非而澤、聞見雜博、然而不師上古、不法先王、按往舊造說、務自爲工、道無所遇、而人相從、故曰、十子者之工說、說皆不足合大道、美風俗、治綱紀、然其持之各有故、言之皆有理、足以欺惑眾愚、交亂樸鄙、則是十子之罪也。」

[23] 混混冥冥 『淮南子』原道訓「夫道者、覆天載地、廓四方、柝八極、高不可際、深不可測、包裹天地、稟授無形。原流泉淳、沖而徐盈。混混滑滑、濁而徐清。故植之而塞于天地、橫之而彌于四海、施之無窮而無所朝夕。」

[24] 光耀天下 『呂氏春秋』孝行「愛敬盡於事親、光耀加於百姓、究於四海、此天

子之孝也。」・『淮南子』俶眞訓「有未始有夫未始有有無者、天地未剖、陰陽未判、四時未分、萬物未生、汪然平靜、寂然清澄、莫見其形、若光耀之聞於無有、退而自失也、曰、予能有無、而未能無無也。及其爲無無、至妙何從及此哉。」

[25] 復反無名 『管子』白心「去善之言、爲善之事、事成而顧反無名。能者無名、從事無事。審量出入、而觀物所載。庸能法無法乎。」

[26] 凡人所生者神也所託者形也神大用則竭形大勞則敝 『淮南子』原道訓「夫形者、生之舍也。氣者、生之充也。神者、生之制也。一失位、則三者傷矣。」

なお、『太平御覽』卷三百六十 / 人事部一 / 敍人「漢書曰、司馬遷曰、凡人所以生者、神也。所託者、形也。神大用則竭、形大勞則弊、神離則死。死者不可復生、離者不可復返、故聖人重之。」はこの一節を司馬遷の發言としている。

[27] 形神離則死 『春秋繁露』循天之道「古之道士有言曰、將欲無陵、固守一德。此言神無離形、而氣多內充、而忍饑寒也。」

[28] 死者不可復生 『公羊』襄三十「晉人・齊人・宋人・衛人・鄭人・曹人・莒人・邾婁人・滕人・薛人・杞人・小邾婁人會于澶淵。宋災故。宋災故者何。諸侯會于澶淵、凡爲宋災故也。會未有言其所爲者、此言所爲何。錄伯姬也。諸侯相聚、而更宋之所喪、曰、死者不可復生、爾財復矣。此大事也、曷爲使微者。卿也。卿則其稱人何。貶。曷爲貶。卿不得憂諸侯也。」

[29] 故聖人重之 『管子』侈靡「得人者、卑而不可勝、是故聖人重之、人君重之、故至貞生至信、至言往至統、生至自有道、不務以文勝情、不務以多勝少。」

[30] 形者生之具也 『淮南子』齊俗訓「衰世之俗、以其知巧詐僞、飾眾無用、貴遠方之貨、珍難得之財、不積於養生之具。」・詮言訓「故其身治者、可與言道矣。自身以上至於荒芒爾遠矣、自死而天下無窮爾滔矣、以數雜之壽、憂天下之亂、猶憂河水之少、泣而益之也。龜三千歲、浮游不過三日、以浮游而爲龜憂養生之具、人必笑之矣。」

[31] 不先定其神〔形〕 『呂氏春秋』安死「今多不先定其是非而先疾鬪爭、此惑之大者也。」

三 司馬遷

太史公既掌天官、不治民。有子曰遷。遷生龍門、耕牧河山之陽。年十歲則誦古文。

太史公既に天官を掌り、民を治めず。子有りて遷と曰う。遷 龍門に生まれ [1]、河山の陽に耕牧す [2]。年十歳にして則ち古文を誦す [3]。

[1] 遷生龍門 龍門は、『漢書』地理志 / 左馮翊に「夏陽、(故少梁、秦惠文王十一年(327BC)更名。禹貢梁山在西北、龍門山在北。有鐵官。莽曰冀亭。)」に見える。

下文「卒三歳而遷爲太史令、紬史記石室金匱之書。五年而當太初元年、十一月甲子朔且冬至、天曆始改、建於明堂、諸神受紀。」の「卒三歳」(元封三年 108BC)に對する『史記索隱』に引く『博物志』に「太史令茂陵顯武里大夫司馬遷、年二十八、三年六月乙卯除、六百石」とあり、「太初元年(104BC)」に對する『史記正義』に「遷年四十二歳。」とある。司馬遷の生年は後者によれば景帝中五年(145BC)となる。前者によれば建元六年(135BC)となるが、『博物志』の「年二十八」は「年三十八」の誤寫となろう。

ここで注目したいのは、『博物志』が司馬遷の本貫を京兆尹茂陵とすることである。『漢書』武帝紀 / 建元二年(139BC)に「初置茂陵邑。」とあり、また上文の「太史公仕於建元元封之間」によれば、司馬談は建元年間(140-135BC)に任官していた。司馬遷の本貫が茂陵であるのは、司馬談がその任官を契機に籍貫を左馮翊夏陽縣から茂陵に移したものとすることが無理のない説明となろう。このように考えると、司馬談の移籍は、建元二年～六年の間となり、司馬遷が龍門すなわち夏陽で生まれたのは、移籍以前となる。景帝中五年出生を傍證するものとなる。

[2] 耕牧河山之陽 類似の表現が、『韓詩外傳』卷七「故虞舜耕於歷山之陽、立爲天子、其遇堯也」に見える。自身を舜に比擬するものである。上述の司馬氏系譜が、漢家堯後説を否定し、それを揶揄するものであったことをあらためて想起するならば、この一節は單なる文飾ではなく、滑稽の語りであると考えられる。

[3] 年十歳則誦古文 類似の表現として、まずは屈原賈生列傳「賈生名誼、雒陽人也。年十八、以能誦詩屬書聞於郡中。」を挙げうるが、むしろ注目したいのは、『漢書』東方朔傳

東方朔字曼倩、平原厭次人也。武帝初即位、徵天下舉方正賢良文學材力之士、待

以不次之位、四方士多上書言得失、自銜鬻者以千數、其不足采者輒報聞罷。朔初來、上書曰、臣朔少失父母、長養兄嫂。年十三學書、三冬文史足用。十五學擊劍。十六學詩書、誦二十二萬言。十九學孫吳兵法、戰陣之具、鉦鼓之教、亦誦二十二萬言。凡臣朔固已誦四十四萬言。又常服子路之言。臣朔年二十二、長九尺三寸、目若懸珠、齒若編貝、勇若孟賁、捷若慶忌、廉若鮑叔、信若尾生。若此、可以爲天子大臣矣。臣朔昧死再拜以聞。

である。「年十歲則誦古文」も同様に滑稽の語りであると考ええる。

「十歲」は建元五年（136BC）に当たる。『漢書』は同年における五經博士の設置を伝える*52。

「古文」は下文「周道廢、秦撥去古文、焚滅詩書、故明堂石室金匱玉版圖籍散亂。」に見えるほか、『史記』には以下の用例がある。

太史公曰、學者多稱五帝、尚矣。然尚書獨載堯以來。而百家言黃帝、其文不雅馴、薦紳先生難言之。孔子所傳宰予問五帝德及帝繫姓、儒者或不傳。余嘗西至空桐、北過涿鹿、東漸於海、南浮江淮矣、至長老皆各往往稱黃帝・堯・舜之處、風教固殊焉、總之不離古文者近是。予觀春秋・國語、其發明五帝德・帝繫姓章矣、顧弟弗深考、其所表見皆不虛。書缺有間矣、其軼乃時時見於他說。非好學深思、心知其意、固難爲淺見寡聞道也。余并論次、擇其言尤雅者、故著爲本紀書首。（『史記索隱』「古文即帝德・帝系二書也。近是聖人之說。」）（五帝本紀）

余讀課記、黃帝以來皆有年數。稽其曆譜課終始五德之傳、古文咸不同、乖異。夫子之弗論次其年月、豈虛哉。於是以五帝繫課、尚書集世紀黃帝以來訖共和爲世表。（三代世表）

太史公曰、儒者斷其義、馳說者騁其辭、不務綜其終始。曆人取其年月、數家隆於神運、譜課獨記世諡、其辭略、欲一觀諸要難。於是譜十二諸侯、自共和訖孔子、表見春秋、國語學者所譏盛衰大指著于篇、爲成學治古文者要刪焉。（十二諸侯年表）

群儒既已不能辨明封禪事、又牽拘於詩書古文而不能騁。（封禪書）

太史公曰、孔子言、太伯可謂至德矣、三以天下讓、民無得而稱焉。余讀春秋古文、乃知中國之虞與荆蠻句吳兄弟也。延陵季子之仁心、慕義無窮、見微而知清濁。嗚呼、

*52 『漢書』武帝紀「五年、…置五經博士」・百官公卿表 / 奉常「武帝建元五年初置五經博士、」

又何其閱覽博物君子也。(吳世家)

太史公曰、學者多稱七十子之徒、譽者或過其實、毀者或損其眞、鈞之未睹厥容貌、則論言弟子籍、出孔氏古文近是。余以弟子名姓文字悉取論語弟子問并次爲篇、疑者闕焉。(仲尼弟子列傳)

孔氏有古文尚書、而安國以今文讀之、因以起其家。(儒林列傳)

儒林列傳では「今文」と對比されているので、「古文」は先秦の字體を指すものとなり、吳世家「余讀春秋古文、乃知中國之虞與荆蠻句吳兄弟也」は、『左傳』僖五

大伯・虞仲、大王之昭也。大伯不從、是以不嗣。虢仲・虢叔、王季之穆也。爲文王卿士、勳在王室、藏於盟府。將虢是滅、何愛於虞。

を踏まえた記述であり、『左傳』がとくに「春秋古文」と稱されているのは、『公羊』『穀梁』がもっぱら今文を用いていたのに対し、『左傳』には古文のテキストが存在したからであろう。もっとも、本来、古文を用いる先秦文獻についても、『古文尚書』のように、今文に轉寫されたテキストが通用していたものと思われる。したがって、『史記』の「古文」は先秦の字體から轉じて、上掲の五帝本紀が『帝繫姓』『五帝德』を、十二諸侯年表が『春秋』『國語』を、仲尼弟子列傳が『弟子籍』を具體的に指すことに示されるように、先秦文獻の汎稱となろう。

下文「秦撥去古文、焚滅詩書」・封禪書「詩書古文」は、『詩』『書』を「古文」と並列しているが、この「誦古文」は屈原賈生列傳「誦詩屬書」・『漢書』東方朔傳「十六學詩書、誦二十二萬言」がともに「誦」の対象に『詩』『書』を擧げていることから、『詩』『書』をも含むものと思われる。

その一方で、「古文」が『詩』『書』を含む先秦文獻を代表する表現としてとくに用いられているのは、太史令たるの素養を強調したものかもしれない。『二年律令』史律に、
[試]史學童以十五篇、能風(諷)書五千字以上、乃得爲史。有(又)以八焚(體)試之、郡移其八焚(體)課大史、大史誦課、取取(最)一人以爲其縣令史、殿者勿以爲史。三歲壹并課、取取(最)一人以爲尚書卒史。(475-476)

とある。「八體」は『說文解字』叙に、

是時、秦滅書籍、滌除舊典。大發吏卒、興戍役。官獄職務繁、初有隸書、以趣約易、而古文由此而絕矣。自爾秦書有八體、一曰大篆、二曰小篆、三曰刻符、四曰蟲書、

五日摹印、六日署書、七日殳書、八日隸書。

とあるように、秦の公用字體である。ここでは、「古文」の「絶」が見えるが、官衙における公用字體が「古文」から「隸書」に交代したことを指すものであり、「古文」が全く廢絶したことをいうものではもとよりない。『説文解字』において「古文」が往々にして示されることはそのことを傍證する。

なお、王國維「太史公行年考」（『觀堂集林』卷十一 / 史林三）は、司馬遷が十七八歳で董仲舒に見え、二十歳前後で孔安國に師事したとする。

司馬遷が董仲舒に面識があったことは下文「余聞董生曰」に示唆される。「余聞」という表現は、魯世家「太史公曰、余聞孔子稱曰、甚矣魯道之衰也。洙泗之間斷斷如也」にも見え、それだけでは、董仲舒に直接面識があったことを確言できないが、後述の如く、壺遂との對話で「董生」という敬稱をとくに用いることは、直接面識があったことを壺遂に示したものとなる。王國維がすでに考證していることだが、董仲舒は公孫弘の策謀によって膠西王の相として長安を去り、ついで官を辭して家居した*53。司馬遷が董仲舒の面識を得たのは、膠西王の相となる以前となる。公孫弘が「公卿」となったのは、元朔三年（126BC）*54、司馬遷二十歳の時であり、董仲舒の面識を得たのはそれ以前のこととなる。

ついで、司馬遷の孔安國への師事は、『漢書』儒林傳

孔氏有古文尚書、孔安國以今文字讀之、因以起其家逸書、得十餘篇、蓋尚書茲多於是矣。遭巫蠱、未立於學官。安國爲諫大夫、授都尉朝、而司馬遷亦從安國問故。

遷書載堯典・禹貢・洪範・微子・金縢諸篇、多古文說。

に見える。また、王先謙『詩三家義集疏』は、司馬遷が孔安國より魯詩を授かったことを考證している*55。孔安國については、『漢書』儒林傳 / 兒寬

兒寬、千乘人也。治尚書、事歐陽生。以郡國選詣博士、受業孔安國。貧無資用、

*53 儒林列傳「董仲舒爲人廉直。是時方外攘四夷、公孫弘治春秋不如董仲舒、而弘希世用事、位至公卿。董仲舒以弘爲從諛。弘疾之、乃言上曰、獨董仲舒可使相膠西王。膠西王素聞董仲舒有行、亦善待之。董仲舒恐久獲罪、疾免居家。至卒、終不治產業、以脩學著書爲事。」

*54 『漢書』百官公卿表 / 元朔三年「左內史公孫弘爲御史大夫、」

*55 王先謙『詩三家義集疏』序例「孔安國從申公受詩、爲博士、至臨淮太守、見史記儒林傳。太史公從孔安國問業、所習當爲魯詩。觀其傳儒林首列申公、敘申公弟子首數孔安國、此太史公尊其師傅、故特先之。」

嘗爲弟子都養。時行質作、帶經而鉏、休息輒讀誦、其精如此。以射策爲掌故、功次、補廷尉文學卒史。寬爲人溫良、有廉知自將、善屬文、然儒於武、口弗能發明也。時張湯爲廷尉、廷尉府盡用文史法律之吏、而寬以儒生在其間、見謂不習事、不署曹、除爲從史、之北地視畜數年。還至府、上畜簿、會廷尉時有疑奏、已再見卻矣、掾史莫知所爲。寬爲言其意、掾史因使寬爲奏。奏成、讀之皆服、以白廷尉湯。湯大驚、召寬與語、乃奇其材、以爲掾。上寬所作奏、即時得可。異日、湯見上。問曰、前奏非俗吏所及、誰爲之者。湯言兒寬。上曰、吾固聞之久矣。湯由是鄉學、以寬爲奏讞掾、以古法義決疑獄、甚重之。及湯爲御史大夫、以寬爲掾、舉侍御史。見上、語經學。上說之、從問尚書一篇。擢爲中大夫、遷左內史。

が参考となる。張湯の廷尉在任は元朔三年（126BC）～元狩三年（120BC）^{*56}、兒寬は張湯のもとで、まずは「數年」にわたり北地郡で勤務しており、廷尉史任用に先立ち孔安國に師事したのは、元朔三年をさほど遡らないであろう。王國維は司馬遷の孔安國への師事を「二十左右」とし、これは二十歳で始まる司馬遷の旅行をごく短く見積もったものであろうが、むしろ董仲舒と同様に十代の終わり頃と考えた方がよい。

二十而南游江・淮、上會稽、探禹穴、闢九疑、浮於沅・湘。北涉汶・泗、講業齊・魯之都、觀孔子之遺風、鄉射鄒嶧。扈困鄆・薛・彭城、過梁・楚以歸。

二十 [1] にして南のかた江・淮 [2] に遊び、會稽 [3] に上り、禹穴 [4] を探り、九疑 [5] を闢^{うかが}い、沅・湘 [6] に浮かぶ。北のかた汶・泗 [7] を渉り、齊・魯の都に講業し [8]、孔子の遺風を觀、鄒嶧に郷射す [9]。鄆・薛・彭城に扈困し [10]、梁・楚 [11] を過りて以て歸る。

[1] 二十 元朔三年 (126BC)。『太平御覽』卷二百三十五 / 職官部三十三 / 太史令「漢舊儀曰、承周史官、至武帝置太史公。司馬遷父談、世爲太史。遷年十三、使乘傳行天下、求古諸侯之史記。」は、司馬遷の遊歴を「年十三」とするが、王國維がすでに論ずるように衛宏の妄説である。

[2] 江淮 「江淮」の成語は『左傳』哀九「秋、吳城邗、溝通江・淮。」に初見する。「江淮」とあるものの、以下の具体的な地名は江南に屬する。『史記』各篇の太史公曰

*56 『漢書』百官公卿表 / 元朔三年 (126BC) 「中大夫張湯爲廷尉、五年遷。」・元狩三年 (120BC) 「三月壬辰、廷尉張湯爲御史大夫、六年有罪自殺。」

には、この江南行を反映したと覺しき記述が散見する^{*57}。

[3] 會稽 「會稽」は、『左傳』哀元「吳王夫差敗越于夫椒、報檣李也。遂入越。越子以甲楯五千保于會稽、」に初見。

[4] 禹穴 「禹穴」については、『史記正義』に『括地志』を引く^{*58}。禹と會稽山を關聯づける言説としては、會稽山の會に關するもの^{*59}と、禹を會稽山に葬ったとするもの^{*60}があり、また『管子』封禪および封禪書に「禹封泰山、禪會稽。」と見える。『史記』には、夏本紀「十年、帝禹東巡狩、至于會稽而崩」「太史公曰、…或言禹會諸侯江南、計功而崩、因葬焉、命曰會稽。會稽者、會計也。」・秦始皇本紀「三十七年、…上會稽、祭大禹。」などが見え、『漢書』地理志 / 會稽郡には「山陰、(會稽山在南、上有禹冢・禹井、揚州山。)」とある。なお越世家「越王句踐、其先禹之苗裔、而夏后帝少康之庶子也。封於會稽、以奉守禹之祀。」は禹を會稽と關聯づける言説から派生したものとなろう。

[5] 九嶷 『漢書』地理志 / 零陵郡に「營道、(九嶷山在南。莽曰九嶷亭。)」とある。九嶷山は、『山海經』海內經 / 蒼梧丘(舜葬所)「南方蒼梧之丘、蒼梧之淵、其中有九

*57 五帝本紀「余嘗西至空桐、北過涿鹿、東漸於海、南浮江淮矣、至長老皆各往往稱黃帝、堯、舜之處、風教固殊焉、總之不離古文者近是。」・河渠書「余南登廬山、觀禹疏九江、遂至于會稽太滄、上姑蘇、望五湖。」・春申君列傳「吾適楚、觀春申君故城、宮室盛矣哉。」・屈原賈生列傳「余讀離騷・天問・招魂・哀郢、悲其志。適長沙、觀屈原所自沈淵、未嘗不垂涕、想見其爲人。」・龜策列傳「余至江南、觀其行事、問其長老、云龜千歲乃遊蓮葉之上、著百莖共一根。又其所生、獸無虎狼、草無毒螫。江傍家人常畜龜飲食之、以爲能導引致氣、有益於助衰養老、豈不信哉。」

*58 『史記正義』太史公自序「括地志云、石筍山一名玉筍山、又名宛委山、即會稽山一峰也、在會稽縣東南十八里。吳越春秋云、禹案黃帝中經九山、東南天柱、號曰宛委、赤帝左闕之墳、承以文玉、覆以盤石、其書金簡青玉爲字、編以白銀、皆瑑其文。禹乃東巡、登衡山、血白馬以祭。禹乃登山、仰天而笑、忽然而臥、夢見繡衣男子自稱玄夷倉水使者、卻倚覆釜之山、東顧謂禹曰、欲得我山神書者、齊於黃帝之嶽、岩(岩)〔嶽〕之下、三月季庚、登山發石。禹乃登宛委之山、發石、乃得金簡玉字、以水泉之脈。山中又有一穴、深不見底、謂之禹穴。史遷云、上會稽、探禹穴、即此穴也。」

*59 『國語』魯語下「仲尼曰、丘聞之、昔禹致群神於會稽之山、防風氏後至、禹殺而戮之、其骨節專車。此爲大矣。」・『韓非子』飾邪「禹朝諸侯之君會稽之上、防風之君後至而禹斬之。」

*60 『墨子』節葬下「禹東教乎九夷、道死、葬會稽之山、衣衾三領、桐棺三寸、葛以緘之、紃之不合、通之不埒、土地之深、下毋及泉、上毋通臭。既葬、收餘壤其上、壟若參耕之畝、則止矣。」・『呂氏春秋』安死「禹葬於會稽、不變人徒。」・李斯列傳「禹鑿龍門、通大夏、疏九河、曲九防、決滄水致之海、而股無肱、脛無毛、手足胼胝、面目黎黑、遂以死于外、葬於會稽、」・『淮南子』齊俗訓「禹葬會稽之山、農不易其畝。」

嶷山、舜之所葬、在長沙零陵界中。」・『楚辭』（屈原）離騷「百神翳其備降兮、九疑續其竝迎。」・（屈原）九歌 / 湘夫人「九疑續兮竝迎、靈之來兮如雲。」に見える。秦始皇本紀に「三十七年、…十一月、行至雲夢、望祀虞舜於九疑山。」とあり、司馬遷のこの旅行では、始皇帝に關わる山嶽が散見する。

[6] 沅湘 『楚辭』*61・『淮南子』*62 など楚地の作品に散見する。

[7] 汶泗 「汶泗」は、他に用例を見ない。司馬遷は吳縣から北上して彭城に至ったものであろう。その途中に淮陰がある。淮陰侯列傳*63 に見える淮陰訪問はあるいはこの折りのことであろう。

[8] 講業齊魯之都 儒學の中心地として「齊魯」を連ねることは、『荀子』性惡「天非私齊魯之民而外秦人也、然而於父子之義、夫婦之別、不如齊魯之孝具敬文者、何也。以秦人從情性、安恣孳、慢於禮義故也、豈其性異矣哉。」に初見し、『史記』にも散見する*64。經學の學風について、齊魯が一つの地域をなしていたことが示される。なお、齊世家*65・孔子世家*66 の太史公曰は、この齊魯訪問を踏まえたものであろう。

*61 『楚辭』（屈原）離騷經「濟沅湘以南征兮、就重華而陳詞、」・（屈原）九歌 / 湘君「令沅湘兮無波、使江水兮安流。」・（屈原）九章 / 懷沙「亂曰、浩浩沅・湘、分流汨兮。」・九章 / 昔往日「臨沅湘之玄淵兮、遂自忍而沈流。」

*62 『淮南子』兵略訓「昔者楚人地、南卷沅・湘、北繞潁・泗、西包巴・蜀、東裹郟・淮・潁・汝以爲漚、江・漢以爲池、垣之以鄧林、綿之以方城、山高尋雲、谿肆無景、地形形便、卒民勇敢、蛟革犀兕、以爲甲冑、鐵鍛短縱、齊爲前行、積弩陪後、錯車衛旁、疾如錐矢、合如雷電、解如風雨、然而兵殆於垂沙、眾破於柏舉。」

*63 淮陰侯列傳「吾如淮陰、淮陰人爲余言、韓信雖爲布衣時、其志與眾異。其母死、貧無以葬、然乃行營高敞地、令其旁可置萬家。余視其母冢、良然。假令韓信學道謙讓、不伐己功、不矜其能、則庶幾哉、於漢家勳可以比周・召・太公之徒、後世血食矣。不務出此、而天下已集、乃謀畔逆、夷滅宗族、不亦宜乎。」

*64 封禪書「於是徵從齊魯之儒生博士七十人、至乎泰山下。」・萬石張敖列傳「萬石君家以孝謹聞乎郡國、雖齊魯諸儒質行、皆自以爲不及也。」・儒林列傳「後陵遲以至于始皇、天下竝爭於戰國、儒術既細焉、然齊魯之間、學者獨不廢也。」「夫齊魯之間於文學、自古以來、其天性也。」「言春秋於齊魯自胡毋生、於趙自董仲舒。」「韓生推詩之意而爲內外傳數萬言、其語頗與齊魯間殊、然其歸一也。」「其後兵大起、流亡、漢定、伏生求其書、亡數十篇、獨得二十九篇、即以教于齊魯之間。」

*65 齊世家「吾適齊、自泰山屬之琅邪、北被于海、膏壤二千里、其民闕達多匿知、其天性也。以太公之聖、建國本、桓公之盛、修善政、以爲諸侯會盟、稱伯、不亦宜乎。洋洋哉、固大國之風也。」

*66 孔子世家「余讀孔氏書、想見其爲人。適魯、觀仲尼廟堂車服禮器、諸生以時習禮其家、余祇迴留之不能去云。」

[9] 觀孔子之遺風鄉射鄒嶧 司馬相如列傳 / 子虛賦「乘遺風而射游騏」を踏まえた表現であろう。「遺風」は『楚辭』に初見する*67。『史記』では先王の「遺風」をいう用例が散見する*68。「鄉射」は『漢書』禮樂志に「時、大儒公孫弘・董仲舒等皆以爲音中正雅、立之大樂。春秋鄉射、作於學官、希闊不講。」とある。「鄒嶧」は、『詩』魯頌 / 閟宮「保有鳧繹、遂荒徐宅、至于海邦、淮夷蠻貊。」に「繹」が初見し、また始皇帝がその二十八年に刻石を立てている*69。

[10] 厄困鄱薛彭城 後文に「孔子厄陳蔡、作春秋。」とあり、自身を孔子に比擬したものである。滑稽の語りとなろう。鄱は『漢書』地理志の蕃に当たる*70。鄒・蕃・薛は魯國*71に、彭城は楚國*72に屬する。薛については、孟嘗君列傳の太史公曰に、

吾嘗過薛、其俗閭里率多暴桀子弟、與鄒・魯殊。問其故、曰、孟嘗君招致天下任俠、姦人入薛中蓋六萬餘家矣。世之傳孟嘗君好客自喜、名不虛矣。

とある。あるいは「暴桀子弟」の狼藉に惱まされたのかもしれない。

[11] 梁楚 貨殖列傳「洛陽東賈齊・魯、南賈梁・楚。」の如く、梁楚を一つの地域として連ねることは、『史記』に初見する。『漢書』地理志

*67 『楚辭』(屈原)九章 / 哀郢「哀州土之平樂兮、悲江介之遺風。」・(宋玉)九辯「竊慕詩人之遺風兮、願託志乎素餐。」・(賈誼)惜誓「涉丹水而馳騁兮、右大夏之遺風。」

*68 周本紀「宣王即位、二相輔之、脩政、法文・武・成・康之遺風、諸侯復宗周。」・吳世家「歌唐。曰、思深哉、其有陶唐氏之遺風乎。」(『左傳』襄二十九は「遺民」に作る。)・貨殖列傳「關中自汧、雍以東至河・華、膏壤沃野千里、自虞夏之貢以爲上田、而公劉適邠、大王・王季在岐、文王作豐、武王治鎬、故其民猶有先王之遺風、好稼穡、殖五穀、地重、重爲邪。」

*69 秦始皇本紀「二十八年、始皇東行郡縣、上鄒嶧山。」・封禪書「即帝位三年、東巡郡縣、祠騶嶧山、頌秦功業。」

*70 『史記索隱』太史公自序「鄱本音蕃、今音皮。案、田褒魯記云、靈帝末、有汝南陳子游爲魯相。子游、太尉陳蕃子也、國人諱而改焉。若如其說、則蕃改鄱、鄱皮聲相近、後漸訛耳。然地理志魯國蕃縣、應劭曰、邾國也、音皮。」

*71 『漢書』地理志「魯國、(故秦薛郡、高后元年爲魯國。屬豫州。)戶十一萬八千四十五、口六十萬七千三百八十一。縣六、魯、(伯禽所封。戶五萬二千。有鐵官。)卞、(泗水西南至方與入沛、過郡三、行五百里、青州川。)汶陽、(莽曰汶亭。)蕃、(南梁水西至胡陵入沛渠。)騶、(故邾國、曹姓、二十九世爲楚所滅。嶧山在北。莽曰騶亭。)薛、(夏車正奚仲所國、後遷于邳、湯相仲虺居之。)」

*72 『漢書』地理志「楚國、(高帝置、宣帝地節元年更爲彭城郡、黃龍元年復故。莽曰和樂。屬徐州。)戶十一萬四千七百三十八、口四十九萬七千八百四。縣七、彭城、(古彭祖國。戶四萬一百九十六。有鐵官。)留、梧、(莽曰吾治。)傅陽、(故偃陽國。莽曰輔陽。)呂、武原、(莽曰和樂亭。)留丘、(莽曰善丘。)」

宋地、房、心之分野也。今之沛・梁・楚・山陽・濟陰・東平及東郡之須昌・壽張、皆宋分也。

に見えるように、梁國・楚國を含む宋の舊領である。豊沛^{*73}・大梁^{*74}・箕山^{*75} 訪問はこの歸途のことかもしれない。

於是遷仕爲郎中、奉使西征巴・蜀以南、南略邛・笮・昆明、還報命。

是に於いて遷仕えて郎中と爲り、使を奉じて西のかた巴・蜀以南を征し、南のかた邛・笮・昆明を略し、還りて報命す。

[1] 遷仕爲郎中 郎中は、郎中令に屬する最下級の郎官で、秩比三百石である^{*76}。

司馬遷出仕の年次については、報任安書に「僕賴先人緒業、得待罪輦轂下、二十餘年矣。」とある。後述の如く、報任安書は太始四年（93BC）のものであり、したがって「二十餘年」の起點は、元狩二年（121BC）～元鼎四年（113BC）となる。また、封禪書

太史公曰、余從巡祭天地諸神山山川而封禪焉。入壽宮侍祠神語、究觀方士祠官之意、於是退而論次自古以來用事於鬼神者、具見其表裏。後有君子、得以覽焉。若至俎豆珪幣之詳、獻酬之禮、則有司存。

によれば、司馬遷が「壽宮」の祭祀に扈從していたことは確かである。「壽宮」は、封禪書

文成死明年、天子病鼎湖甚、巫醫無所不致、不愈。游水發根言上郡有巫、病而鬼神下之。上召置祠之甘泉。及病、使人問神君。神君言曰、天子無憂病。病少愈、彊與我會甘泉。於是病愈、遂起、幸甘泉、病良已。大赦、置壽宮神君。…

に見える。『漢書』武帝紀に「元鼎元年（116BC）夏五月、赦天下、大酺五日。」とある。

*73 樊鄴滕灌列傳「吾適豊沛、問其遺老、觀故蕭・曹・樊噲・滕公之家、及其素、異哉所聞。方其鼓刀屠狗賣繒之時、豈自知附驥之尾、垂名漢廷、德流子孫哉。余與他廣通、爲言高祖功臣之興時若此云。」

*74 魏世家「吾適故大梁之墟、墟中人曰、秦之破梁、引河溝而灌大梁、三月城壞、王請降、遂滅魏。」・魏公子列傳「吾過大梁之墟、求問其所謂夷門。夷門者、城之東門也。天下諸公子亦有喜士者矣、然信陵君之接巖穴隱者、不恥下交、有以也。名冠諸侯、不虛耳。高祖每過之而令民奉祠不絕也。」

*75 伯夷列傳「余登箕山、其上蓋有許由冢云。」（『史記正義』「在洛州陽城縣南十三里。」）

*76 『漢書』百官公卿表「郎中令、秦官、掌宮殿掖門戶、有丞。武帝太初元年更名光祿勳。屬官有大夫・郎・謁者、皆秦官。又期門・羽林皆屬焉。…郎掌守門戶、出充車騎、有議郎・中郎・侍郎・郎中、皆無員、多至千人。議郎・中郎秩比六百石、侍郎比四百石、郎中比三百石。中郎有五官、左・右三將、秩皆比二千石。郎中有車・戶・騎三將、秩皆比千石。」

武帝が鼎湖で病んだことは、酷吏列傳

上幸鼎湖、病久、已而卒起幸甘泉、道多不治。上怒曰、縦以我爲不復行此道乎。嗛之。至冬、楊可方受告緡、縦以爲此亂民、部吏捕其爲可使者。天子聞、使杜式治、以爲廢格沮事、棄縱市。後一歲、張湯亦死。

に見え、元鼎二年（115BC）^{*77}の張湯の死の前年なので元鼎元年となる。司馬遷の出仕は元狩二年（121BC）～元鼎元年（116BC）、二十五～三十歳の時に限定される。

さらに報任安書「僕少負不羈之才、長無鄉曲之譽、主上幸以先人之故、使得奉薄技、出入周衛之中。」には、司馬談の縁でようやく出仕したとある。二十代は齊魯の地に遊學し、三十近くなってようやく出仕したものであろう。

なお上掲の封禪書太史公曰に、武帝の巡幸に扈從したことが見えるが、五帝本紀「余嘗西至空桐、北過涿鹿、東漸於海、南浮江淮矣、」の「西至空桐」は、『漢書』武帝紀 / 元鼎五年（112BC）「冬十月、行幸雍、祠五時。遂踰隴、登空同、西臨祖厲河而還。」、封禪書「北過涿鹿、東漸於海」・蒙恬列傳「吾適北邊、自直道歸、行觀蒙恬所爲秦築長城亭障、塹山堙谷、通直道、固輕百姓力矣。」の北邊行は、武帝紀 / 元封元年（110BC）「行自泰山、復東巡海上、至碣石。自遼西歷北邊九原、歸于甘泉。」、河渠書「東闢洛汭・大邳、迎河、行淮・泗・濟・漯洛渠」¹「余從負薪塞宣房、悲瓠子之詩而作河渠書」は、武帝紀 / 元封二年（109BC）「冬十月、行幸雍、祠五時。春、幸緱氏、遂至東萊。夏四月、還祠泰山。至瓠子、臨決河、命從臣將軍以下皆負薪塞河隄、作瓠子之歌。」に見える武帝の巡幸への扈從を踏まえたものと思われる。

[2] 邛笮昆明 邛・笮は、元鼎六年（111BC）^{*78}に設置された越嶲郡・沈犁郡^{*79}、昆明は丁謙の攷證^{*80}によれば、元封二年（109BC）に設置された益州郡^{*81}に屬する嵩唐縣・

*77 漢興以來將相名臣年表 / 元鼎二年「湯有罪、自殺。」

*78 『漢書』武帝紀「（元鼎六年 111BC）馳義侯遣兵未及下、上便令征西南夷、平之。遂定越地、以爲南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九眞・日南・珠崖・儋耳郡。定西南夷、以爲武都・牂柯・越嶲・沈黎・文山郡。」

*79 西南夷列傳「南越破後、及漢誅且蘭・邛君、并殺笮侯、冉駹皆振恐、請臣置吏。乃以邛都爲越嶲郡、笮都爲沈犁郡、冉駹爲汶山郡、廣漢西白馬爲武都郡。…」

*80 丁謙『漢書西南夷兩粵朝鮮傳地理攷證』「嵩・昆明在葉榆・桐師之間、當爲今永昌騰越・順寧等地、師古注謂、嵩即嵩州、昆明在其東南、即南寧州、殊誤。」

*81 『漢書』武帝紀「（元封二年 109BC）又遣將軍郭昌・中郎將衛廣發巴蜀兵平西南夷未服者、以爲益州郡。」

不韋縣あたりとなる。この間の西南夷征服戦争に従軍したのである。

なお河渠書「西瞻蜀之岷山及離碓。」の蜀の岷山・離碓實見はこの折りのことであろう。

四 司馬談の遺命

是歲天子始建漢家之封、而太史公留滯周南、不得與從事、故發憤且卒。而子遷適使反、見父於河洛之間。太史公執遷手而泣曰、「余先周室之太史也。自上世嘗顯功名於虞夏、典天官事。後世中衰、絕於予乎。汝復爲太史、則續吾祖矣。今天子接千歲之統、封泰山、而余不得從行、是命也夫、命也夫。余死、汝必爲太史。爲太史、無忘吾所欲論著矣。且夫孝始於事親、中於事君、終於立身。揚名於後世、以顯父母、此孝之大者。夫天下稱誦周公、言其能論歌文・武之德、宣周邵之風、達太王・王季之思慮、爰及公劉、以尊后稷也。幽厲之後、王道缺、禮樂衰、孔子脩舊起廢、論詩書、作春秋、則學者至今則之。自獲麟以來四百有餘歲、而諸侯相兼、史記放絕。今漢興、海內一統、明主賢君忠臣死義之士、余爲太史而弗論載、廢天下之史文、余甚懼焉、汝其念哉。」遷俯首流涕曰、「小子不敏、請悉論先人所次舊聞、弗敢闕。」卒三歲而遷爲太史令、紬史記石室金匱之書。五年而當太初元年、十一月甲子朔旦冬至、天曆始改、建於明堂、諸神受紀。太史公曰、「先人有言、「自周公卒五百歲而有孔子。孔子卒後至於今五百歲、有能紹明世、正易傳、繼春秋、本詩書禮樂之際。」意在斯乎。意在斯乎。小子何敢讓焉。」

是の歲（元封元年 110BC）天子始めて漢家の封を建つ [1]、而るに太史公 周南に留滯し、從事に與る^{あずか}を得ず、故に發憤して且に卒せんとす [2]。而して子遷^{たまた}適ま使いして反り、父に河洛の間に^{まみ}見ゆ。太史公 遷の手を執りて泣きて曰く [3]、「余が先周室の太史なり。上世自り嘗て功名を虞夏に^{あら}顯わし、天官の事を^{つかさど}典る。後世中衰、予に絶ゆるか [4]。汝復た太史と爲り、則ち吾が祖を^つ續げ。今天子 千歳の統を^つ接ぎ、泰山に封ず、而るに余 行に従うを得ず [5]、是れ命なるかな、命なるかな [6]。余死すれば、汝必ずや太史と爲れ。太史と爲り、吾が論著せんと欲する所を忘るる無かれ。且つ夫れ孝 親に事うるに始まり、君に事うるを中ばとし、身を立つるに終わる。名を後世に揚げ、以て父母を顯わす、此れ孝の大なる者なり [7]。夫れ天下 周公を稱

誦するは、其の能く文・武の徳を論歌し、周邵の風を^の宣べ、太王・王季の思慮を達し、爰に公劉に及び、以て后稷を尊ぶを言うなり [8]。幽厲の後、王道缺け、禮樂衰え、孔子 舊を脩め廢を起こし、詩書を論じ、春秋を作れば、則ち學者 今に至りて之に則る [9]。獲麟自り以來四百有餘歳 [10]、而して諸侯相い兼ね、史記放絶す [11]。今漢興り、海内一統 [12]、明主賢君忠臣死義の士、余 太史と爲りて論載せず、天下の史文を廢す、余甚だ懼る、汝其れ念わん哉。」遷俯首流涕して曰く [13]、「小子不敏なるも、請う悉く先人の次する所の舊聞を論じ、敢えて闕かず [14]。」卒して三歳（元封三年 108BC）にして遷 太史令と爲り、史記石室金匱の書を^ひ紬く。五年にして太初元年（104BC）に當たる、十一月甲子朔旦冬至、天曆始めて改まり、明堂に建て、諸神紀を受く。太史公曰く、「先人 言あり、「周公卒して自り五百歳にして孔子有り。孔子卒して後 今に至るまで五百歳、能く明世を紹ぎ、易傳を正し、春秋を繼ぎ、詩書禮樂の際を^{たず}本ぬ [15]。」意 ^こ斯に在るか。意 斯に在るか。小子何ぞ敢て讓らん [16]。」

[1] 是歳天子始建漢家之封 元封元年（110BC）の封禪をいう。「漢家」は『史記』に初見し、かつ封禪書の「有司皆曰」の一例*82を除けば、全て司馬遷の發言である*83。封禪書の「建漢家封禪」が「建漢家之封」に當たる。

[2] 而太史公留滯周南不得與從事故發憤且卒 上述の如く、國家祭祀は太常に屬する太史令・太祝令・太宰令・太樂令がこれを實務的に擔當した。司馬談についていえば、封禪書

*82 封禪書「有司皆曰、陛下建漢家封禪、天其報德星云。」

*83 秦楚之際月表「太史公讀秦楚之際、曰、初作難、發於陳涉。虐戾滅秦、自項氏。撥亂誅暴、平定海内、卒踐帝祚、成於漢家。五年之間、號令三嬗。自生民以來、未始有受命若斯之亟也。」・樂書「漢家常以正月上辛祠太一甘泉、以昏時夜祠、到明而終。」・封禪書「今天子所興祠、太一、后土、三年親郊祠、建漢家封禪、五年一脩封。」・梁孝王世家「太史公曰、梁孝王雖以親愛之故、王膏腴之地、然會漢家隆盛、百姓殷富、故能植其財貨、廣宮室、車服擬於天子。然亦僭矣。」・淮陰侯列傳（上掲）・張丞相列傳「自漢興至孝文二十餘年、會天下初定、將相公卿皆軍吏。張蒼爲計相時、緒正律曆。以高祖十月始至霸上、因故秦時本以十月爲歲首、弗革。推五德之運、以爲漢當水德之時、尚黑如故。吹律調樂、入之音聲、及以比定律令。若百工、天下作程品。至於爲丞相、卒就之、故漢家言律曆者、本之張蒼。蒼本好書、無所不觀、無所不通、而尤善律曆。」・劉敬叔孫通列傳「太史公曰、語曰、千金之裘、非一狐之腋也。臺榭之榱、非一木之枝也。三代之際、非一士之智也。信哉。夫高祖起微細、定海内、謀計用兵、可謂盡之矣。然而劉敬脫輓輅一說、建萬世之安、智豈可專邪。叔孫通希世度務、制禮進退、與時變化、卒爲漢家儒宗。大直若誦、道固委蛇、蓋謂是乎。」

其明年（元鼎四年 113BC）冬、天子郊雍、議曰、今上帝朕親郊、而后土無祀、則禮不答也。有司與太史公・祠官寬舒議、天地牲角繭栗。今陛下親祠后土、后土宜於澤中園丘爲五壇、壇一黃犢太牢具、已祠盡瘞、而從祠衣上黃。於是天子遂東、始立后土祠汾陰脽丘、如寬舒等議。上親望拜、如上帝禮。

（元鼎五年 112BC）十一月辛巳朔旦冬至、味爽、天子始郊拜太一。…太史公、祠官寬舒等曰、神靈之休、祐福兆祥、宜因此地光域立太時壇以明應。令太祝領、秋及臘間祠。三歲天子一郊見。

に后土・太一の祭祀につき具體的に提言し、それが採用されたことが見える。また、このたびの封禪にしても、「封泰山下東方、如郊祠太一之禮」と、司馬談・寬舒の提言した「郊祠太一之禮」が準用されている。

『漢書』武帝紀 / 元封元年（110BC）

春正月、行幸緱氏。詔曰、朕用事華山、至於中嶽、獲駮麋、見夏后啟母石。翌日親登嵩高、御史乘屬、在廟旁吏卒咸聞呼萬歲者三。登禮罔不答。其令祠官加增太室祠、禁無伐其草木。以山下戶三百爲之奉邑、名曰崇高、獨給祠、復亡所與。行、遂東巡海上。

によれば、封禪に先立ち、武帝は河南郡緱氏縣に至り、中嶽を祀った。「留滯」は、『淮南子』泰族訓

今夫道者、藏精於內、棲神於心、靜漠恬淡、訟繆胸中、邪氣無所留滯、四枝節族、毛蒸理泄、則機樞調利、百脈九竅莫不順比、其所居神者得其位也、豈節拊而毛修之哉。

に見える。心因性の疾病である。武帝に扈從していた太史令司馬談は、洛陽^{*84}で病を發し、封禪への参加を斷念した。

「發憤」は、『論語』述而

葉公問孔子於子路、子路不對。子曰、女奚不曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。

*84 『史記集解』太史公自序「徐廣曰、摯虞曰古之周南、今之洛陽。」また秦本紀「（昭襄王）十四年（293BC）、左更白起攻韓、魏於伊闕、斬首二十四萬、虜公孫喜、拔五城。」の伊闕の戦を『韓非子』説林下「周南之戰、公孫喜死焉。」は「周南之戰」と稱する。

に初見する。『史記』ではこれを引用した孔子世家^{*85}のほか、下文「詩三百篇、大抵賢聖發憤之所爲作也。」や、伯夷列傳^{*86}・儒林列傳^{*87}の太史公言に見え、孔子・太史公の専用語となる。

[3] 太史公執遷手而泣曰 『論語』 雍也

伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰、亡之、命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而有斯疾也。

を踏まえる^{*88}。ここでは太史公(司馬談)と司馬遷を孔子と伯牛に擬えている。司馬遷は自身を「有疾」に見立てており、やはり滑稽の語りである。以下の部分でも孔門師弟の言行が多く用いられる。

[4] 余先周室之太史也自上世嘗顯功名於虞夏典天官事後世中衰絶於予乎 上文「唐虞之際、紹重黎之後、使復典之、至于夏商、故重黎氏世序天地。其在周、程伯休甫其後也。當周宣王時、失其守而爲司馬氏。司馬氏世典周史。惠襄之間、司馬氏去周適晉。」を踏まえる。

司馬氏系譜が虚構であることは上述の如くである。太史令司馬遷は、天官たる「史」を史官に読み替えることで、『史記』編纂の必然性を主張する。そも世襲の「史」という虚構は、天官重黎の後である程伯休父が「司馬氏」となったという楚語下の記述と、父司馬談が太史令であったという事実を根拠に創作されたものである。この虚構のもとでは司馬談もまた世襲の「史」の後裔なのであり、『史記』編纂は司馬談が着手し、その遺命によって司馬遷がこれを継承したという言説は、司馬氏を世襲の「史」とする虚構から必然的に派生した虚構である。

司馬談の遺命、その前提となる司馬談作史もまた虚構であることは、まずは報任安書の司馬談に関する記述

*85 孔子世家「他日、葉公問孔子於子路、子路不對。孔子聞之、曰、由、爾何不對曰、其爲人也、學道不倦、誨人不厭、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。」

*86 伯夷列傳「至近世、操行不軌、專犯忌諱、而終身逸樂、富厚累世不絶。或擇地而蹈之、時然後出言、行不由徑、非公正不發憤、而遇禍災者、不可勝數也。」

*87 儒林列傳「太史公曰、…陳涉起匹夫、驅瓦合適戍、旬月以王楚、不滿半歲竟滅亡、其事至微淺、然而縉紳先生之徒負孔子禮器往委質爲臣者、何也。以秦焚其業、積怨而發憤于陳王也。」

*88 仲尼弟子列傳「伯牛有惡疾、孔子往問之、自牖執其手、曰、命也夫。斯人也而有斯疾、命也夫。」は『論語』雍也の引用である。

僕之先人非有剖符丹書之功、文史星曆近乎卜祝之間、固主上所戲弄、倡優畜之、流俗之所輕也。

に作史のことが何ら述べられていないことに明らかである。

班固の司馬遷傳論贊は班彪の司馬遷論に基づく。班彪の言説は、『後漢書』班彪傳の、彪既才高而好述作、遂專心史籍之間。武帝時、司馬遷著史記、自太初以後、闕而不錄、後好事者頗或綴集時事、然多鄙俗、不足以踵繼其書。彪乃繼採前史遺事、傍貫異聞、作後傳數十篇、因斟酌前史而譏正得失。其略論曰、

を書き出しとする。

『漢書』司馬遷傳	『後漢書』班彪傳
<p>贊曰、自古書契之作而有史官、其載籍博矣。至孔氏纂之、上〔繼〕〔斷〕唐堯、下訖秦繆。唐虞以前雖有遺文、其語不經、故言黃帝、顓頊之事未可明也。</p> <p>及孔子因魯史記而作春秋、</p> <p>而左丘明論輯其本事以為之傳、又纂異同為國語。</p> <p>又有世本、錄黃帝以來至春秋時帝王公侯卿大夫祖世所出。</p> <p>春秋之後、七國竝爭、秦兼諸侯、有戰國策。漢興伐秦定天下、</p> <p>有楚漢春秋。</p> <p>故司馬遷據左氏、國語、采世本、戰國策、述楚漢春秋、接其後事、訖于〔大〕〔天〕漢。其言秦漢、詳矣。</p> <p>至於采經摭傳、分散數家之事、甚多疏略、或有抵牾。亦其涉獵者廣博、貫穿經傳、馳騁古今、上下數千載間、斯以勤矣。</p>	<p>唐虞三代、詩書所及、世有史官、以司典籍、</p> <p>暨於諸侯、國自有史、故孟子曰「楚之檮杌、晉之乘、魯之春秋、其事一也」。</p> <p>定哀之間、魯君子左丘明論集其文、作左氏傳三十篇、又撰異同、號曰國語、二十一篇、由是乘、檮杌之事遂闕、而左氏、國語獨章。又有記錄黃帝以來至春秋時帝王公侯卿大夫、號曰世本、一十五篇。</p> <p>春秋之後、七國竝爭、秦并諸侯、則有戰國策三十三篇。漢興定天下、太中大夫陸賈記錄時功、作楚漢春秋九篇。</p> <p>孝武之世、太史令司馬遷採左氏、國語、刪世本、戰國策、據楚、漢列國時事、</p> <p>上自黃帝、下訖獲麟、作本紀、世家、列傳、書、表凡百三十篇、而十篇缺焉。遷之所記、從漢元至武以絕、則其功也。</p> <p>至於採經摭傳、分散百家之事、甚多疎略、不如其本、務欲以多聞廣載為功、</p>

<p>又其是非頗繆於聖人、論大道則先黃老而後六經、序遊俠則退處士而進姦雄、述貨殖則崇勢利而羞賤貧、此其所蔽也。</p>	<p>論議淺而不篤。其論術學、則崇黃老而薄五經。序貨殖、則輕仁義而羞貧窮。道游俠、則賤守節而貴俗功、此其大蔽傷道、所以遇極刑之咎也。</p>
<p>然自劉向、揚雄博極羣書、皆稱遷有良史之材、服其善序事理、辨而不華、質而不俚、其文直、其事核、不虛美、不隱惡、故謂之實錄。烏呼。以遷之博物洽聞、而不能以知自全、既陷極刑、幽而發憤、書亦信矣。迹其所以自傷悼、小雅巷伯之倫。夫唯大雅「既明且哲、能保其身」、難矣哉。</p>	<p>然善述序事理、辯而不華、質而不野、文質相稱、蓋良史之才也。誠令遷依五經之法言、同聖人之是非、意亦庶幾矣。夫百家之書、猶可法也。若左氏、國語、世本、戰國策、楚漢春秋、太史公書、今之所以知古、後之所由觀前、聖人之耳目也。司馬遷序帝王則曰本紀、公侯傳國則曰世家、卿士特起則曰列傳。又進項羽、陳涉而黜淮南、衡山、細意委曲、條列不經。若遷之著作、採獲古今、貫穿經傳、至廣博也。一人之精、文重思煩、故其書刊落不盡、尚有盈辭、多不齊一。若序司馬相如、舉郡縣、著其字、至蕭、曹、陳平之屬、及董仲舒竝時之人、不記其字、或縣而不郡者、蓋不暇也。今此後篇、慎覈其事、整齊其文、不為世家、唯紀、傳而已。傳曰、「殺史見極、平易正直、春秋之義也。」</p>

『史記』編纂を包括的に語る最古の言説だが、これらにも司馬談は全く言及されない。太史公自序が「設論」であることを了解した上での言説である。

司馬談作史を明言することは、『隋書』

漢氏誅除秦、項、未及下車、先命叔孫通草絀蕝之儀、救擊柱之弊。其後張蒼治律曆、陸賈撰新語、曹參薦蓋公言黃老、惠帝除挾書之律、儒者始以其業行於民間。猶以去聖既遠、經籍散逸、簡札錯亂、傳說紕繆、遂使書分為二、詩分為三、論語有齊、魯之殊、春秋有數家之傳。其餘互有踳駁、不可勝言。此其所以博而寡要、勞而少功者也。武帝置太史公、命天下計書、先上太史、副上丞相、開獻書之路、置寫書之官、外有太常、太史、博士之藏、內有延閣、廣內、祕室之府。司馬談父子、世居太史、採采前代、斷自軒皇、逮于孝武、作史記一百三十篇。詳其體制、蓋史官之舊也。(經籍志一)

至漢武帝時、始置太史公、命司馬談為之、以掌其職。時天下計書、皆先上太史、

副上丞相、遺文古事、靡不畢臻。談乃據左氏、國語、世本、戰國策、楚漢春秋、接其後事、成一家之言。談卒、其子遷又爲太史令、嗣成其志。上自黃帝、訖于炎漢、合十二本紀、十表、八書、三十世家、七十列傳、謂之史記。(經籍志二)

によりやく初見する。班固が司馬遷の事績とするものを司馬談のそれに置き換え、衛宏の言説を附したものであり、二次的創作の域を出ない。

降って清代以降、司馬談作史が具體的に追求されるようになる。代表的な作品が、顧頡剛「司馬談作史」*⁸⁹である。顧頡剛は、

太史公曰。吾聞馮王孫曰、趙王遷、其母倡也、嬖於悼襄王。悼襄王廢適子嘉而立遷。遷素無行、信讒、故誅其良將李牧、用郭開。豈不繆哉。秦既虜遷、趙之亡大夫共立嘉爲王、王代六歲、秦進兵破嘉、遂滅趙以爲郡。(趙世家)

太史公曰、世言荊軻、其稱太子丹之命、天雨粟、馬生角也、太過。又言荊軻傷秦王、皆非也。始公孫季功、董生與夏無且游、具知其事、爲余道之如是。自曹沫至荊軻五人、此其義或成或不成、然其立意較然、不欺其志、名垂後世、豈妄也哉。(刺客列傳)

太史公曰、吾適豐沛、問其遺老、觀故蕭・曹・樊噲・滕公之家、及其素、異哉所聞。方其鼓刀屠狗賣繒之時、豈自知附驥之尾、垂名漢廷、德流子孫哉。余與他廣通、爲言高祖功臣之興時若此云。(樊鄴滕灌列傳)

太史公曰、世之傳酈生書、多曰漢王已拔三秦、東擊項籍而引軍於鞏洛之間、酈生被儒衣往說漢王。迺非也。自沛公未入關、與項羽別而至高陽、得酈生兄弟。余讀陸生新語書十二篇、固當世之辯士。至平原君子與余善、是以得具論之。(酈生陸賈列傳)

において太史公が交際した馮王孫・董生と公孫季弘・樊他廣*⁹⁰・平原君朱建の子の推定される活動年代が司馬遷のそれと隔たっており、したがってこれらの太史公は司馬談であり、これら諸篇は司馬談の作品であるとする。しかしながら、顧頡剛の年代推定は緻密さを欠き、また張大可がすでに指摘するように、司馬遷がずっと年長の人物と交際し

*⁸⁹ 顧頡剛「司馬談作史」(『史林雜識(初編)』、中華書局、1963)。

*⁹⁰ とくに樊鄴滕灌列傳「太史公曰、吾適豐沛」は、司馬遷二十歳時に始まる旅行の一環であり、ここの「太史公」「吾」「余」が司馬遷を指すことは確實である。

たことを否定することはそもそもできず、顧頡剛の議論は排他的には成り立たない*91。

[5] 今天子接千歲之統封泰山而余不得從行 この一節、梁玉繩『史記志疑』卷三十六は

此及下述談語不免失言、封禪之誣、君子嗤之、即封禪書亦深譏焉、而乃以其父不與爲恨乎。

と論評する。父を貶めるような失言とするが、亡父を敢えて戯画化する「設論」ならでの表現である。

[6] 是命也夫命也夫 仲尼弟子列傳は上掲『論語』雍也の「命矣夫」を「命也夫」に作る。『史記』においては、「也夫」は、田儋列傳に1例あるものの*92、上掲仲尼弟子列傳に1例、孔子世家に3例*93、それ以外には、下文「是余之罪也夫。是余之罪也夫。」および商君列傳*94・張丞相列傳*95・惠景間侯者年表*96の「太史公曰」に用いられるのみであり、やはり孔子・太史公の専用語となる。

[7] 且夫孝始於事親中於事君終於立身揚名於後世以顯父母此孝之大者 『孝經』開宗明義

仲尼居、曾子侍、…子曰、夫孝、德之本也、教之所由生也。復坐、吾語汝。身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。夫孝、始於事親、中於事君、終於立身。大雅云、無念爾祖、聿脩厥德。

の孔子言を司馬談に語らせている。

[8] 夫天下稱誦周公言其能論歌文武之德宣周邵之風達太王王季之思慮爰及公劉以尊后稷也 周公の「能論歌文武之德」「達太王王季之思慮」は、『禮記』中庸の孔子言「子曰、…周公成文武之德、追王大王・王季。」を踏まえ、「宣周邵之風」と「周邵」を連

*91 張大可『司馬遷評傳』（『史記研究集成』1、華文出版社、2005）。

*92 田儋列傳「高帝曰、嗟乎、有以也夫。」

*93 孔子世家「桓子喟然歎曰、夫子罪我以群婢故也夫。」「孔子擊磬。有荷蕢而過門者、曰、有心哉、擊磬乎。磴磴乎、莫已知也夫而已矣。」（『論語』憲問「子擊磬於衛。有荷蕢而過孔氏之門者、曰、有心哉。擊磬乎。既而曰、鄙哉。磴磴乎。莫已知也、斯己而已矣。深則厲、淺則揭。」の引用）「孔子既不得用於衛、將西見趙簡子。至於河而聞竇鳴犢、舜華之死也、臨河而歎曰、美哉水、洋洋乎。丘之不濟此、命也夫。」

*94 商君列傳「太史公曰、…卒受惡名於秦、有以也夫。」

*95 張丞相列傳「太史公曰、…然守之日久不得、或爲之日少而得之、至於封侯、眞命也夫。」

*96 惠景間侯者年表「太史公讀列封至便侯、曰、有以也夫。」

ねることは、『莊子』外篇 / 天運

孔子謂老聃曰、丘治詩・書・禮・樂・易・春秋六經、自以爲久矣、孰知其故矣。

以奸者七十二君、論先王之道而明周召之跡、一君無所鈎用。甚矣夫。人之難說也、道之難明邪。

に見える。

[9] 幽厲之後王道缺禮樂衰孔子脩舊起廢論詩書作春秋則學者至今則之 「幽厲」は『孟子』に初見する^{*97}。「王道缺、禮樂衰」を孔子出現の前提とする言説は、『韓詩外傳』^{*98}のほか、下文「周室既衰、諸侯恣行。仲尼悼禮廢樂崩、追脩經術、以達王道、匡亂世反之於正、見其文辭、爲天下制儀法、垂六藝之統紀於後世。作孔子世家第十七。」に見える。「詩書」を連ね孔子に關聯づけることは上掲『莊子』外篇 / 天運にすでに見え、『春秋』制作は『孟子』

世衰道微、邪說暴行有作、臣弑其君者有之、子弑其父者有之。孔子懼、作春秋。春秋、天子之事也、是故孔子曰、知我者、其惟春秋乎。罪我者、其惟春秋乎。…孔子成春秋、而亂臣賊子懼。(滕文公下)

孟子曰、王者之跡熄、而詩亡、詩亡然後春秋作。晉之乘、楚之檮杌、魯之春秋、一也。其事則齊桓、晉文、其文則史。孔子曰、其義則丘竊取之矣。(離婁下)

に初見する。「學者至今則之」に類似の表現としては、孔子世家「孔子布衣、傳十餘世、學者宗之。」がある。

以下、『春秋』に關する言及が續く。太史公書が「史」である以上、『春秋』は究極の模範であり、また司馬遷は前漢末までには「良史之材」としての評價を博することとなる。太史公書を『春秋』に擬えることは、太史公自序の基調といてよい。とはいえ、太史公自序が「設論」である以上、「春秋を繼ぐ」ことを司馬遷の「眞意」とみなすことはやはり躊躇される。果たして報任安書においては、『春秋』への言及はよほ

*97 『孟子』離婁上「暴其民甚、則身弑國亡。不甚、則身危國削。名之曰幽厲、雖孝子慈孫、百世不能改也。詩云、殷鑒不遠、在夏后之世、此之謂也。」・告子上「或曰、性可以爲善、可以爲不善。是故文武興、則民好善。幽厲興、則民好暴。」

*98 『韓詩外傳』卷五「孔子抱聖人之心、彷徨乎道德之城、逍遙乎無形之鄉。倚天理、觀人情、明終始、知得失、故興仁義、厭勢利、以持養之。于是周室微、王道絕、諸侯力政、強劫弱、眾暴寡、百姓靡安、莫之紀綱、禮儀廢壞、人倫不理、於是孔子自東自西、自南自北、匍匐救之。」

ど乏しい。太史公書は

網羅天下放失舊聞、考之行事、稽其成敗興壞之理、凡百三十篇、亦欲以究天人之際、
通古今之變、成一家之言。

と總括され、「天人之際」は『春秋繁露』*99に見えるが、「古今之變」は『淮南子』*100
には見えるものの、春秋學關係の著作には見えない。さらに編纂の動機については

所以隱忍苟活、函糞土之中而不辭者、恨私心有所不盡、鄙沒世而文采不表於後也。

と、「文采」がもっぱら強調されている。『論衡』案書「漢作者多、司馬子長・揚子雲、
河漢也、其餘涇渭也。」において、司馬遷が史家である以上に、楊雄と並ぶ前漢最高の
文章家とされていることが想起される。

[10] 自獲麟以來四百有餘歲 「獲麟」は『春秋經』哀十四「十有四年春、西狩獲麟。」
に見える。元封元年(110BC)は、魯哀公十四年(481BC)の371年後であり、「四百
有餘歲」は「三百有餘歲」の「三」を「三」に誤寫したものであろう。『左傳』の『春
秋經』は哀十六「孔丘卒」で終わるが、『公羊』哀十四は、

十有四年春、西狩獲麟。何以書。記異也。何異爾。非中國之獸也。然則孰狩之。
薪采者也。薪采者則微者也。曷爲以狩言之。大之也。曷爲大之。爲獲麟大之也。
曷爲爲獲麟大之。麟者、仁獸也。有王者則至、無王者則不至。有以告者曰、有麋
而角者。孔子曰、孰爲來哉。孰爲來哉。反袂拭面、涕沾袍。顏淵死、子曰、噫。
天喪予。子路死、子曰、噫。天祝予。西狩獲麟、孔子曰、吾道窮矣。春秋何以始
乎隱。祖之所逮聞也。所見異辭、所聞異辭、所傳聞異辭。何以終乎哀十四年。曰、
備矣。君子曷爲爲春秋。撥亂世、反諸正、莫近諸春秋、則未知其爲是與。其諸君
子樂道堯舜之道與。末不亦樂乎堯舜之知君子也。制春秋之義、以俟後聖、以君子
之爲、亦有樂乎此也。

と「西狩獲麟」を以て『春秋經』を終わり*101、春秋公羊學における決定的な意味を付

*99 『春秋繁露』深察名號「是故事各順於名、名各順於天、天人之際、合而爲一。」

*100 『淮南子』要略「本經者、所以明大聖之德、通維初之道、埒略衰世古今之變、以褒先世之
隆盛、而貶末世之曲政也。」

*101 『左傳』の『春秋經』哀十四は、「西狩獲麟」のあとに「夏四月、齊陳恆執其君、寘于舒州。」
「齊人弒其君壬于舒州。」と、陳恆の齊簡公弒殺を載せる。田齊に仕えた公羊學者がこれを抹消
すべく、「西狩獲麟」に關する記述を造作し、これを以て『春秋經』の終わりとしたのである。

與している。

[11] 史記放絶 「史記」は歴史記録の汎稱である。『史記』では

是以孔子明王道、干七十餘君、莫能用、故西觀周室、論史記舊聞、興於魯而次春秋、上記隱、下至哀之獲麟、約其辭文、去其煩重、以制義法、王道備、人事浹。(十二諸侯年表)

などにおいて孔子との關聯において「史記」が見える*102。

[12] 海内一統 「一統」は『公羊』隱元「何言乎王正月。大一統也。」に初見する。

[13] 遷俯首流涕曰 「流涕」は『禮記』檀弓上「孔子泫然流涕曰」に初見する。

[14] 小子不敏請悉論先人所次舊聞弗敢闕 下文「小子何敢讓焉。」においても「小子」を一人稱に用いるが、同様の用例は、『論語』陽貨「子曰、予欲無言。子貢曰、子如不言、則小子何述焉。」に見える。「…不敏、請…」は、『論語』顏淵「顏淵曰、回雖不敏、請事斯語矣。」・「仲弓曰、雍雖不敏、請事斯語矣。」に初見する。「論先人所次舊聞」の「論」「次」「舊聞」は、上掲十二諸侯年表「論史記舊聞、興於魯而次春秋、」に見える。太史公書が『春秋』に擬えられているのである。「弗敢闕」は、『呂氏春秋』孝行*103の曾子言に見える。

[15] 自周公卒五百歲而有孔子孔子卒後至於今五百歲有能紹明世正易傳繼春秋本詩書禮樂之際 「自周公卒五百歲而有孔子孔子卒後至於今五百歲」は、『孟子』盡心下

孟子曰、由堯舜至於湯、五百有餘歲、若禹・皋陶、則見而知之。若湯、則聞而知之。由湯至於文王、五百有餘歲、若伊尹・萊朱則見而知之。若文王、則聞而知之。由文王至於孔子、五百有餘歲、若太公望・散宜生、則見而知之。若孔子、則聞而知之。由孔子而來至於今、百有餘歲、去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也、然而無有乎爾、則亦無有乎爾。

*102 陳杞世家「孔子讀史記至楚復陳、曰、賢哉楚莊王。輕千乘之國而重一言。」・晉世家「孔子讀史記至文公、曰諸侯無召王、王狩河陽者、春秋諱之也。」・孔子世家「子曰、弗乎弗乎、君子病沒世而名不稱焉。吾道不行矣、吾何以自見於後世哉。乃因史記作春秋、上至隱公、下訖哀公十四年、十二公。據魯、親周、故殷、運之三代。約其文辭而指博。故吳楚之君自稱王、而春秋貶之曰子。踐土之會實召周天子、而春秋諱之曰、天王狩於河陽、推此類以繩當世。貶損之義、後有王者舉而開之。春秋之義行、則天下亂臣賊子懼焉。」

*103 『呂氏春秋』孝行「曾子曰、父母生之、子弗敢殺。父母置之、子弗敢廢。父母全之、子弗敢闕。故舟而不游、道而不徑、能全支體、以守宗廟、可謂孝矣。」

を踏まえる。元封元年（110BC）は、孔子の卒した魯哀公十六年（479BC）の369年後である。後の「五百歳」は何らかの誤寫でなければ前の「五百歳」に揃えた象徴的な数字となろう。

文王を周公に改めているのは、「正易傳、繼春秋、本詩書禮樂之際」に示される六藝が周公に創始され、孔子を経て今に至っているという認識に基づくものである。周公の六藝制作について、『禮記』明堂位は「制禮作樂」をいい、上文に后稷から武王に至る『詩』の制作が見える。『書』については、『今文尚書』二十九篇のうち、大誥～立政の十二篇が周公を主人公とする。『易』については、後述する『左傳』昭二に「易象」と周公を關聯づける記述がある。

問題とすべきはやはり『春秋』と周公との関係である。ここでは「繼春秋」は「正易傳」「本詩書禮樂之際」と並列されており、決して『春秋』が明示的に特化されているわけではない。しかしながら、直後の壺遂との對話において『春秋』が主題とされていることを考慮するならば、周公を文王に代替したことに、單に周公が六藝一般の創始者であるという以上の、周公と『春秋』との関係を追求せねばならない。ここで想起すべきは、上掲十二諸侯年表が、孔子の『春秋』の源流を周の「史記」に求めていることである。『左傳』昭二

二年春、晉侯使韓宣子來聘、且告爲政、而來見、禮也。觀書於大史氏、見易象與魯春秋、曰、周禮盡在魯矣、吾乃今知周公之德與周之所以王也。

では、『魯春秋』を「周公之德」を反映したものとし、周公と『春秋』を關聯づけるが、『史記』はさらに孔子が周に赴いて「史記舊聞」を論じ、それに基づいて魯史の形式で『春秋』を制作したとするのである。周公を文王に代替したのは、太史公書を『春秋』を繼ぐものとし、その源流を周の史記に求めたためと考え得る。

孔子の『春秋』制作については、『漢書』司馬遷傳に「及孔子因魯史記而作春秋」とあるように、魯の「史記」に基づくものとし、遡って『春秋繁露』俞序^{*104}もまた「十二公」を擁する魯史記を想定している。したがって、太史公の周史記説は、『左傳』から派生した独自の見解となる。この事實は、太史公の春秋學が公羊學とは相對的に獨立

*104 『春秋繁露』俞序「仲尼之作春秋也、上探正天端、王公之位、萬民之所欲、下明得失、起賢才、以待後聖、故引史記、理往事、正是非、見王公、史記十二公之間、皆衰世之事、故門人惑、」

したものであることを示唆する。

[16] 意在斯乎意在斯乎小子何敢讓焉 「在斯」は『論語』衛靈公

師冕見、及階、子曰、階也。及席、子曰、席也。皆坐、子告之曰、某在斯、某在斯。

師冕出。子張問曰、與師言之道與。子曰、然。固相師之道也。

に、「何敢」は『論語』公冶長

謂子貢曰、女與回也孰愈。對曰、賜也何敢望回。回也聞一以知十、賜也聞一以知二。

子曰、弗如也。吾與女弗如也。

および先進

子畏於匡、顔淵後。子曰、吾以女爲死矣。曰、子在、回何敢死。

に見える。

五 壺遂との對話

上大夫壺遂曰、「昔孔子何爲而作春秋哉。」太史公曰、「余聞董生曰、「周道衰廢、孔子爲魯司寇、諸侯害之、大夫壅之。孔子知言之不用、道之不行也、是非二百四十二年之中、以爲天下儀表、貶天子、退諸侯、討大夫、以達王事而已矣。」子曰、「我欲載之空言、不如見之於行事之深切著明也。」夫春秋、上明三王之道、下辨人事之紀、別嫌疑、明是非、定猶豫、善善惡惡、賢賢賤不肖、存亡國、繼絕世、補敝起廢、王道之大者也。易著天地陰陽四時五行、故長於變。禮經紀人倫、故長於行。書記先王之事、故長於政。詩記山川谿谷禽獸草木牝牡雌雄、故長於風。樂樂所以立、故長於和。春秋辯是非、故長於治人。是故禮以節人、樂以發和、書以道事、詩以達意、易以道化、春秋以道義。撥亂世反之正、莫近於春秋。春秋文成數萬、其指數千。萬物之散聚皆在春秋。春秋之中、弑君三十六、亡國五十二、諸侯奔走不得保其社稷者不可勝數。察其所以、皆失其本已。故易曰、「失之豪釐、差以千里」。故曰、「臣弑君、子弑父、非一旦一夕之故也、其漸久矣」。故有國者不可以不知春秋、前有讒而弗見、後有賊而不知。爲人臣者不可以不知春秋、守經事而不知其宜、遭變事而不知其權。爲人君父而不通於春秋之義者、必蒙首惡之名。爲人臣子而不通於春秋之義者、必陷篡弑之誅、死罪之名。其實皆以爲善、爲之不知其義、被之空言而不敢辭。夫不通禮義之旨、至於君不君、臣不臣、父不父、子不子。

夫君不君則犯、臣不臣則誅、父不父則無道、子不子則不孝。此四行者、天下之大過也。以天下之大過予之、則受而弗敢辭。故春秋者、禮義之大宗也。夫禮禁未然之前、法施已然之後。法之所爲用者易見、而禮之所爲禁者難知。」

上大夫壺遂曰く [1]、「昔孔子何爲れぞ春秋を作るか。」太史公曰く、「余 董生に聞きて曰く [2]、「周道衰廢し、孔子 魯の司寇と爲り、諸侯 之を害み、大夫 之を壅ぐ [3]。孔子 言の用いられざる、道の行われざるを知るや [4]、二百四十二年の中を是非し [5]、以て天下の儀表と爲し、天子を貶し、諸侯を退け、大夫を討ち、以て王事を達するのみ [6]。」子曰く、「我れ之を空言に載せんと欲するは、之を行事に見わすの深切著明なるに如かざるなり [7]。」夫れ春秋、上は三王の道を明らかにし、下は人事の紀を辨じ、嫌疑を別かち、是非を明らかにし [8]、猶豫を定め、善を善とし惡を惡とし [9]、賢を賢とし不肖を賤しみ [10]、亡國を存し、絶世を繼ぎ [11]、敝を補い廢を起こし [12]、王道の大なる者なり。易は天地陰陽四時五行を著らかにし、故に變に長ず。禮は人倫を經紀し、故に行に長ず。書は先王の事を記し、故に政に長ず。詩は山川谿谷禽獸草木牝牡雌雄を記し、故に風に長ず。樂は立つ所以を樂しみ、故に和に長ず。春秋は是非を辨じ、故に人を治むるに長ず [13]。是の故に禮は以て人を節し、樂は以て和を發し、書は以て事を道い、詩は以て意を達し、易は以て化を道い、春秋は以て義を道う [14]。亂世を撥し之を正に反す、春秋より近きは莫し [15]。春秋文 數萬を成し、其の指 數千 [16]。萬物の散聚皆な春秋に在り。春秋の中、弑君三十六、亡國五十二 [17]、諸侯奔走して其の社稷を保つを得ざる者 勝げて數う可からず [18]。其の所以を察するに、皆な其の本を失うのみ。故に易に曰く、「之を豪釐に失えば、差うこと千里を以てす」 [19]。故に曰く、「臣 君を弑し、子 父を弑するは、一旦一夕の故に非ざるなり、其の漸久し」 [20]。故に國を有つ者は以て春秋を知らざる可からず、前に讒有りて見ず、後に賊有りて知らず [21]。人臣と爲る者以て春秋を知らざる可からず、經事を守りて其の宜を知らず、變事に遭いて其の權を知らず [22]。人の君父と爲りて春秋の義 [23] に通ぜざる者は、必ずや首惡 [24] の名を蒙る。人の臣子と爲りて春秋の義に通ぜざる者は、必ずや篡弑 [25] の誅、死罪の名に陥る。其の實皆な以て善と爲すも、之を爲すに其の義を知らず、之が空言を被りて敢えて辭せず。夫れ禮義の旨に通ぜざれば、君 君たらず、臣 臣たらず、父 父たらず、子

子たらざるに至る [26]。夫れ君 君たらざれば則ち犯され、臣 臣たらざれば則ち誅せられ、父 父たらざれば則ち無道、子 子たらざれば則ち不孝。此の四行なる者は、天下の大過なり。天下の大過を以て之に予うれば、則ち受けて敢て辭せず。故に春秋なる者は、禮義の大宗なり。夫れ禮は未然の前を禁じ、法は已然の後に施す。法の用を爲す所の者は見易く、而るに禮の禁を爲す所の者は知り難し [27]。]

[1] 上大夫壺遂曰 壺遂については、韓長孺列傳に韓安國が梁において推薦した人物として見える *105。韓安國は梁孝王 (178-144BC*106) に仕え、梁共王 (143-137BC*107) が立ったのちに罷免され、ついで建元年間に北地都尉に任ぜられ、建元三年 (138BC*108) に大農令に遷った*109。壺遂は、太初元年 (元封七年 104BC) の改曆の際に、太中大夫であり*110、ついで詹事に至った*111。太中大夫は比千石*112 で銅印黑綬を用い、詹事は二千石*113 で銀印青綬を用いる*114。『漢書補注』宣帝紀に引く王啟原説は、紫綬・青綬・

*105 韓長孺列傳「所推舉皆廉士、賢於己者也。於梁舉壺遂・臧固・邳他、皆天下名士、士亦以此稱慕之、唯天子以爲國器。」

*106 『漢書』諸侯王表「梁孝王武 文帝子。(文帝二年 178BC) 二月乙卯、立爲代王、三年、徙爲淮陽王、十年、徙梁、三十五年 (景帝中六年 144BC) 薨。」

*107 『漢書』諸侯王表「孝景後元年 (143BC)、恭王買嗣、七年 (建元四年 137BC) 薨。」

*108 『漢書』百官公卿表 / 建元三年「北地都尉韓安國爲大農令、三年遷。」

*109 韓長孺列傳「孝王卒、共王即位、安國坐法失官、居家。建元中、武安侯田蚡爲漢太尉、親貴用事、安國以五百金物遺蚡。蚡言安國太后、天子亦素聞其賢、即召以爲北地都尉、遷爲大司農」には「大司農」とあるが、『漢書』百官公卿表「武帝太初元年更名大司農。」によれば、建元三年には「大農令」である。

*110 『漢書』律曆志「至武帝元封七年、漢興百二歲矣、大中大夫公孫卿・壺遂・太史令司馬遷等言、…」

*111 韓長孺列傳「太史公曰、余與壺遂定律曆、觀韓長孺之義、壺遂之深中隱厚。世之言梁多長者、不虛哉。壺遂官至詹事、天子方倚以爲漢相、會遂卒。不然、壺遂之内廉行脩、斯鞠躬君子也。」

*112 『漢書』百官公卿表「大夫掌論議、有太中大夫、中大夫、諫大夫、皆無員、多至數十人。武帝元狩五年初置諫大夫、秩比八百石、太初元年更名中大夫爲光祿大夫、秩比二千石、太中大夫秩比千石如故。」

*113 『漢書』百官公卿表「詹事、秦官、掌皇后・太子家、有丞。屬官有太子率更・家令丞・僕・中盾・衛率・廚廩長丞、又中長秋・私府・永巷・倉・廩・祠祀・食官令長丞。諸宦官皆屬焉。…自太子太傅至右扶風、皆秩二千石、丞六百石。」

*114 『漢書』百官公卿表「凡吏秩比二千石以上、皆銀印青綬、光祿大夫無。秩比六百石以上、皆銅印黑綬、大夫・博士・御史・謁者・郎無。其僕射・御史治書尚符璽者、有印綬。比二百石以上、皆銅印黃綬。」

黒綬を公・卿・大夫に比定する*115。卿は、『論語』郷黨

孔子於郷黨、恂恂如也、似不能言者。其在宗廟・朝廷、便便言、唯謹爾。朝、與下大夫言、侃侃如也。與上大夫言、誾誾如也。

の邢疏に「上大夫、卿也。」とあるように、上大夫とも稱される。一方、報任安書「僕亦嘗廁下大夫之列」・朱博傳「刺史位下大夫、而臨二千石、輕重不相準、失位次之序。」では、『續漢書』百官志によれば六百石の太史令・刺史を下大夫と稱する。青綬・黒綬が上大夫・下大夫となろう*116

[2] 太史公曰余聞董生曰 壺遂の第一の問いに對する回答は、「余聞董生曰」の書き出しに始まる。そもそも自分の意見として提示しておらず、果たして内容的にはいずれも『春秋繁露』など先行文献に見えるものでもあり、そこに司馬遷の獨自性を見出すことは困難である。教科書的記述といってよい。

上述の如く、壺遂との對話の場面で、司馬遷が董仲舒を「董生」と尊稱することは、司馬遷が董仲舒に面識があったことを示唆する。また以下の發言には『春秋繁露』に重なる表現が頻見する。これらの事實から、『史記』に對する公羊學の規範的な影響が主張されることがある。しかしながら、この一節は正に教科書的記述であって、壺遂の第二の問いによって容易に変更されている。そも、『史記』の春秋時代に關する記述が時に『公羊』に取材しつつも、基本的に『左傳』に據っていることを想起するならば、『史記』に對する公羊學の影響を過剰に見積もることは決してできない。班固が「至於采經摭傳、分散數家之事、甚多疏略、或有抵牾。」と批判する所以である。また、儒林列傳の董仲舒の傳においては、「其精如此。進退容止、非禮不行、學士皆師尊之。」「董仲舒爲人廉直」と賞贊を惜しまぬ一方で、

今上即位、爲江都相。以春秋災異之變推陰陽所以錯行、故求雨閉諸陽、縱諸陰、其止雨反是。行之一國、未嘗不得所欲。中廢爲中大夫、居舍、著災異之記。是時遼東高廟災、主父偃疾之、取其書奏之天子。天子召諸生示其書、有刺譏。董仲舒

*115 『漢書補注』宣帝紀「王啟原曰、吏六百石有罪先請、即周禮議貴之遺意。周官小司寇注、議貴、若今時吏墨綬有罪先請、是也。百官表、秩比六百石以上皆銅印墨綬、先鄭以爲貴者蓋漢制以紫綬爲公、青綬爲卿、墨綬比大夫。六百石比大夫。然有其法而無明文。」

*116 阿部幸信「漢朝の「統治階級」について：前漢期における變遷を中心に」（『中央大學文學部紀要（史學）』63、2018）。

弟子呂步舒不知其師書、以爲下愚。於是下董仲舒吏、當死、詔赦之。於是董仲舒竟不敢復言災異。

という醜聞をもあわせて載録しており、司馬遷が董仲舒と面識があったにしても、それは緊密な師弟関係といえるものではなかったといわざるを得ない。したがって、この「董生」の敬稱、『春秋繁露』の多用はこの一節が「設論」にはかならないことを逆に示唆するものとなろう。

[3] 周道衰廢孔子爲魯司寇諸侯害之大夫壅之 「周道衰廢」は、上文の「王道缺禮樂衰」に相當する。孔子が魯の司寇をつとめたことは、『禮記』檀弓上^{*117}に初見し、『春秋繁露』^{*118} について孔子世家^{*119}にも見える。

[4] 孔子知言之不用道之不行也 「道之不行」は、『論語』

子曰、道不行、乘桴浮于海。從我者其由與。(公冶長)

子路曰、不仕無義。長幼之節、不可廢也。君臣之義、如之何其廢之。欲潔其身、而亂大倫。君子之仕也、行其義也。道之不行、已知之矣。(微子)

および『禮記』中庸

子曰、道之不行也、我知之矣。知者過之、愚者不及也。道之不明也、我知之矣。賢者過之、不肖者不及也。人莫不飲食也、鮮能知味也。

などの孔子師弟の言に見える。

[5] 是非二百四十二年之中 「二百四十二年」は『春秋經』の記述する魯隱公元年(722BC)～哀公十四年(481BC)を指す。『春秋繁露』^{*120}に初見する。

[6] 以爲天下儀表貶天子退諸侯討大夫以達王事而已矣 「天下儀表」は、上文「論六家之要指」に「儒者則不然。以爲人主天下之儀表也、」と見える。「貶天子」は、『春秋

*117 『禮記』檀弓上「昔者夫子失魯司寇」

*118 『春秋繁露』五行相生「北方者水、執法、司寇也、司寇尚禮、君臣有位、長幼有序、朝廷有爵、鄉黨以齒、升降揖讓、般伏拜謁、折旋中矩、立則罄折、拱則抱鼓、執衡而藏、至清廉平、賂遺不受、請謁不聽、據法聽訟、無有所阿、孔子是也。爲魯司寇、斷獄屯屯、與眾共之、不敢自專、是死者不恨、生者不怨、」・五行相勝「孔子爲魯司寇、據義行法、」

*119 孔子世家「其後定公以孔子爲中都宰、一年、四方皆則之。由中都宰爲司空、由司空爲大司寇。…定公十四年、孔子年五十六、由大司寇行攝相事、」

*120 『春秋繁露』玉杯「春秋論十二世之事、人道浹而王道備、法布二百四十二年之中、相爲左右、以成文采、其居參錯、非襲古也。」・十指「春秋二百四十二年之文、天下之大、事變之博、無不有也、雖然、大略之要、有十指。」なお上掲十二諸侯年表「王道備、人事浹。」は玉杯を引用している。

繁露』三代改制質文に

故春秋應天作新王之事、時正黑統、王魯、尚黑、紂夏、親周、故宋、とあるように、『春秋』が周王朝に代わる「新王」を主張することを指すものであろう。そうした主張は、上掲『孟子』滕文公下「春秋、天子之事也。」にすでに示唆される。諸侯・大夫を貶することは『公羊』に類見する。「王事」は「新王之事」に当たる。

[7] 子曰我欲載之空言不如見之於行事之深切著明也 『春秋繁露』 俞序「孔子曰、吾因其行事、而加乎王心焉、以爲見之空言、不如行事博深切明。」

[8] 別嫌疑明是非 『春秋繁露』 竹林「是非難別者在此、此其嫌疑相似、而不同理者、不可不察。」

[9] 善善惡惡 『公羊』 *121・『春秋繁露』 *122 に見える。

[10] 賢賢賤不肖 『春秋繁露』 五行變救「不肖在位、賢者伏匿、」・五行五事「王者明、則賢者進、不肖者退、」

[11] 存亡國繼絕世 『論語』 堯曰に「興滅國、繼絕世、」とあり、ついで上掲『公羊』 僖十七に「桓公嘗有繼絕・存亡之功」とある。『春秋繁露』 *123 にも見える。

[12] 補敝起廢 上文「孔子脩舊起廢」に当たる。

[13] 易著天地陰陽四時五行故長於變禮經紀人倫故長於行書記先王之事故長於政詩記山川谿谷禽獸草木牝牡雌雄故長於風樂樂所以立故長於和春秋辯是非故長於治人 『春秋繁露』 玉杯「詩道志、故長於質。禮制節、故長於文。樂詠德、故長於風。書著功、故長於事。易本天地、故長於數。春秋正是非、故長於治人。」

*121 『公羊』 僖十七「夏滅項。孰滅之。齊滅之。曷爲不言齊滅之。爲桓公諱也。春秋爲賢者諱、此滅人之國、何賢爾。君子之惡惡也疾始、善善也樂終。桓公嘗有繼絕存亡之功。故君子爲之諱也。」・昭二十「君子之善善也長、惡惡也短。惡惡止其身、善善及子孫。賢者子孫、故君子爲之諱也。」

*122 『春秋繁露』 楚莊王「屈伸之志、詳略之文、皆應之、吾以其近近而遠遠、親親而疏疏也、亦知其貴貴而賤賤、重重而輕輕也、有知其厚厚而薄薄、善善而惡惡也、有知其陽陽而陰陰、白白而黑黑也。」・玉杯「人受命於天、有善善惡惡之性、可養而不可改、可予而不可去、若形體之可肥鞣而不可得革也。」・竹林「今善善惡惡、好榮憎辱、非人能自生、此天施之在人者也、」

*123 『春秋繁露』 精華「齊桓挾賢相之能、用大國之資、即位五年、不能致一諸侯、於柯之盟、見其大信、一年、而近國之君畢至、鄆幽之會是也。其後二十年之間、亦久矣、尚未能大合諸侯也、至於救邢衛之事、見存亡繼絕之義、而明年、遠國之君畢至、貫澤、陽穀之會是也。」・王道「齊桓晉文擅封致天子、誅亂、繼絕存亡、侵伐會同、常爲本主、曰、桓公救中國、攘夷狄、卒服楚、至爲王者事。」

[14] 是故禮以節人樂以發和書以道事詩以達意易以道化春秋以道義 『莊子』雜篇 / 天下「其在於詩・書・禮・樂者、鄒魯之士、搢紳先生多能明之。詩以道志、書以道事、禮以道行、樂以道和、易以道陰陽、春秋以道名分。」

[15] 撥亂世反之正莫近於春秋 上掲『公羊』哀十四「撥亂世、反諸正、莫近諸春秋、」

[16] 春秋文成數萬其指數千 『春秋繁露』玉杯「春秋赴問數百、應問數千、」

[17] 弑君三十六亡國五十二 『春秋繁露』滅國上「王者、民之所往、君者、不失其群者也。故能使萬民往之、而得天下之群者、無敵於天下。弑君三十六、亡國五十二、小國德薄不朝聘、大國不與諸侯會聚、孤特不相守、獨居不同群、遭難莫之救、所以亡也。」・盟會要「是以君子以天下爲憂也、患乃至於弑君三十六、亡國五十二、細惡不絕之所致也。」

[18] 諸侯奔走不得保其社稷者不可勝數 『春秋繁露』滅國上「諸侯見加以兵、逃遁奔走、至於滅亡、而莫之救、平生之素行可見也。」・兪序「其爲切、而至於殺君亡國、奔走不得保社稷、其所以然、是皆不明於道、不覽於春秋也。」

[19] 故易曰失之豪釐差以千里 『大戴禮』禮察「易曰、君子慎始、差若毫釐、繆之千里。取舍之謂也。」・『禮記』經解「易曰、君子慎始、差若豪釐、繆以千里。此之謂也。」

[20] 故曰臣弑君子弑父非一旦一夕之故也其漸久矣 『易』坤 / 文言傳「臣弑其君、子弑其父、非一朝一夕之故、其所由來者漸矣、由辯之不早辯也。」

[21] 故有國者不可以不知春秋前有讒而弗見後有賊而不知 『春秋繁露』兪序「故衛子夏言、有國家者、不可不學春秋、不學春秋、則無以見前後旁側之危、則不知國之大柄、君之重任也。故或魯窮失國、擯殺於位、一朝至爾、苟能述春秋之法、致行其道、豈徒除禍哉。乃堯舜之德也。」

[22] 守經事而不知其宜遭變事而不知其權 『公羊』は、「經」「權」を對概念とする*124。

*124 『公羊』桓十一「九月、宋人執鄭祭仲。祭仲者何。鄭相也。何以不名。賢也。何賢乎祭仲。以爲知權也。其爲知權奈何。古者鄭國處于留、先鄭伯有善于郟公者、通乎夫人、以取其國而遷鄭焉、而野留。莊公死已葬、祭仲將往省于留、塗出于宋、宋人執之。謂之曰、爲我出忽而立突。祭仲不從其言、則君必死、國必亡。從其言、則君可以生易死、國可以存易亡、少違緩之。則突可故出、而忽可故反、是不可得則病、然後有鄭國。古人之有權者、祭仲之權是也。權者何。權者反於經、然後有善者也。權之所設、舍死亡無所設。行權有道。自貶損以行權、不害人以行權。殺人以自生、亡人以自存、君子不爲也。」

[23] 春秋之義 上揭『孟子』離婁下「孟子曰、王者之跡熄、而詩亡、詩亡然後春秋作。晉之乘・楚之檮杌・魯之春秋、一也。其事則齊桓・晉文、其文則史。孔子曰、其義則丘竊取之矣。」に『春秋』につき「其義」と見える。「春秋之義」と熟することは、上掲『公羊』哀十四「制春秋之義」に初見し、『春秋繁露』に頻見する。

[24] 首惡 『公羊』僖二「虞師・晉師滅夏陽。虞、微國也、曷爲序乎大國之上。使虞首惡也。曷爲使虞首惡。虞受賂、假滅國者道、以取亡焉。」・『春秋繁露』精華「春秋之聽獄也、必本其事而原其志。志邪者、不待成。首惡者、罪特重。本直者、其論輕。」

[25] 篡弑 『春秋經』宣二「秋九月乙丑、晉趙盾弑其君夷獯。」につき、『公羊』宣六は「六年春、晉趙盾・衛孫免侵陳。趙盾弑君、此其復見何。」と議論を展開する。『春秋繁露』玉杯「今案盾事、而觀其心、愿而不刑、合而信之、非篡弑之鄰也、…問者曰、夫謂之弑、而有不誅、其論難知、非蒙之所能見也。故赦止之罪、以傳明之。盾不誅、無傳、何也。曰、世亂義廢、背上不臣、篡弑覆君者多、而有明大惡之誅、誰言其誅。故晉趙盾、楚公子比皆不誅之文、而弗爲傳、弗欲明之心也。」はこれを踏まえつつ「篡弑」を論ずる。

[26] 至於君不君臣不臣父不父子不子 『論語』顔淵「齊景公問政於孔子。孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子。公曰、善哉。信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾得而食諸。」・『春秋繁露』玉杯「父不父則子不子、君不君則臣不臣耳。」

[27] 夫禮禁未然之前法施已然之後法之所爲用者易見而禮之所爲禁者難知 『大戴禮』禮察「凡人之知、能見已然、不能見將然。禮者、禁於將然之前。而法者、禁於已然之後。是故法之用易見、而禮之所爲生難知也。」

壺遂曰、「孔子之時、上無明君、下不得任用、故作春秋、垂空文以斷禮義、當一王之法。今夫子上遇明天子、下得守職、萬事既具、咸各序其宜、夫子所論、欲以何明。」
太史公曰、「唯唯、否否、不然。余聞之先人曰、「伏羲至純厚、作易八卦。堯舜之盛、尚書載之、禮樂作焉。湯武之隆、詩人歌之。春秋采善貶惡、推三代之德、褒周室、非獨刺譏而已也。」漢興以來、至明天子、獲符瑞、封禪、改正朔、易服色、受命於穆清、澤流罔極、海外殊俗、重譯款塞、請來獻見者、不可勝道。臣下百官力誦聖德、猶不能宣盡其意。且士賢能而不用、有國者之恥。主上明聖而德不布聞、有司之過也。且余嘗掌其官、廢明聖盛德不載、滅功臣世家賢大夫之業不述、墮先人所言、罪莫大焉。余所謂述故事、整齊其世傳、非所謂作也、而君比之於春秋、謬矣。」於是論次其文。

壺遂曰く、「孔子の時、上に明君無く、下 任用を得ず [1]、故に春秋を作り、空文を垂れて以て禮義を斷じ、一王の法に當つ [2]。今夫子 上 明天子 [3] に遇い、下職を守るを得、萬事既に具わり、咸な各の其の宜を序^つづ、夫子の論ずる所、以て何を明らかにせんと欲するか。」太史公曰く、「唯唯、否否、然らず [4]。余 之を先人に聞きて曰く、「伏羲至って純厚、易八卦を作る。堯舜の盛んなる、尚書 之を載せ、禮樂^{おこ}作る。湯武の隆^{さか}んなるや、詩人 之を歌う [5]。春秋 善を采り悪を貶し [6]、三代の徳を推し、周室を褒む [7]、獨り刺譏するのみに非ざるなり [8]。」漢興りて以來、明天子に至るまで、符瑞を獲、封禪し、正朔を改め、服色を易え、命を穆清に受け [9]、澤流 極まらず、海外殊俗、譯を重ね塞^たたき、來りて獻見を請う者、勝げて道う可からず。臣下百官力めて聖徳を誦し、猶お其の意を宣盡する能わず。且つ士賢能にして用いられざるは、國を有つ者の恥。主上明聖にして徳 布聞せざるは、有司の過なり [10]。且つ余嘗て其の官を掌り、明聖盛徳を廢して載せず、功臣世家賢大夫の業を滅して述べず、先人の言う所を墮とし、罪 焉より大なるは莫し [11]。余は所謂^{いわゆる} 故事を述べ、其の世傳を整齊し、所謂作に非ざるなり、而るに君 之を春秋に比するは、謬^{あやま}りなり [12]。」是に於いて其の文を論次す [13]。

[1] 上無明君下不得任用 『公羊』 莊四・僖元・僖二・僖十四・宣十一に「上無天子、下無方伯。」とある。孔子世家「孔子既不得用於衛、將西見趙簡子。」

[2] 故作春秋垂空文以斷禮義當一王之法 「空文」は上文の「空言」に当たる。「斷禮義」は、十二諸侯年表「儒者斷其義」に当たる。「當一王之法」については、儒林列傳に「西狩獲麟、曰、吾道窮矣。故因史記作春秋、以當王法、其辭微而指博、後世學者多錄焉。」とある。

[3] 明天子 「明天子」は、『公羊』 莊四*125 に見える。

*125 『公羊』 莊四「紀侯大去其國。大去者何。滅也。孰滅之。齊滅之。曷爲不言齊滅之。爲襄公諱也。春秋爲賢者諱、何賢乎襄公。復讎也。何讎爾。遠祖也。哀公亨乎周、紀侯譜之、以襄公之爲於此焉者、事祖禰之心盡矣。盡者何。襄公將復讎乎紀、卜之曰、師喪分焉。寡人死之、不爲不吉也。遠祖者、幾世乎。九世矣。九世猶可以復讎乎。雖百世可也。家亦可乎。曰、不可。國何以可。國君一體也。先君之恥、猶今君之恥也。今君之恥、猶先君之恥也。國君何以爲一體。國君以國爲體、諸侯世、故國君爲一體也。今紀無罪、此非怒與。曰、非也。古者有明天子、則紀侯必誅、必無紀者。紀侯之不誅、至今有紀者、猶無明天子也。古者諸侯必有會聚之事、相朝聘之道、號辭必稱先君以相接。然則齊紀無說焉、不可以竝立乎天下。故將去紀侯者、不得不去

[4] 夫子所論欲以何明太史公曰唯唯否否不然 「夫子」を二人稱で用いることは、『論語』先進「夫子何哂由也」に見え、曾皙の孔子に対する敬稱である。『史記』においては夫子 51 例のうち、31 例が孔子を指す。単なる敬稱である以上に、孔子に對象を特化した呼稱なのである。上述の如く、壺遂は、建元より以前に出仕しており、「建元・元封之間」に出仕した司馬談と同年輩あるいはさらに年長であろう。その壺遂が太史公を「夫子」と呼ぶ、太史公を孔子に、自身を弟子に見立てることが揶揄であることは明らかである。第一の問いに対する回答があまりに教科書的だったことを承けたものである。第二の問いに対する回答は「唯唯否否不然」ではじまるわけだが、一見して甚だ口語的な表現である。壺遂の急所を突いた問いに一瞬ひるむ様子である。このあたりの表現は、壺遂との對話が「設論」であることを明示するものである。慧眼な読者であれば、太史公書を『春秋』に比擬し、同時代を刺譏するといった太史公自序の隱喩が「設論」という言語空間に展開することの意味を読み取ることはたやすい。司馬遷は自序を言葉遊びとして提示することによって、太史公書に対する筆禍の回避を圖っているのである。

[5] 伏羲至純厚作易八卦堯舜之盛尚書載之禮樂作焉湯武之隆詩人歌之 上掲『孟子』離婁下「王者之跡熄、而詩亡、詩亡然後春秋作。晉之乘・楚之檮杌・魯之春秋、一也。」では、周王朝が衰えて『詩』の制作が終わり、春秋時代に『春秋』の源流となる魯春秋などが出現したとする。ここでは『易』『書』および禮樂が加わり六藝が出揃う。『春秋』に先行する時代として、伏羲・堯舜・湯武が三皇・五帝・三代を代表する。伏羲の『易』制作は『易』繫辭傳下*126 に見える。堯舜・湯武を並べることは、『孟子』に見え*127、『春秋繁露』にも堯舜不擅移湯武不專殺第篇がある。湯武に『詩』が當てられるのは、『孟子』の『詩』『春秋』の序列に従うものであろう。堯舜に『書』が當てられるのは、『書』が

紀也。有明天子、則襄公得爲若行乎。曰、不得也。不得、則襄公曷爲爲之。上無天子、下無方伯、緣恩疾者可也。」

*126 『易』繫辭傳下「古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情。作結繩而爲罔罟、以佃以漁、蓋取諸離。」

*127 『孟子』盡心上「孟子曰、堯舜、性之也。湯武、身之也。」盡心下「孟子曰、堯舜、性者也。湯武、反之也。」

堯典に始まるからである*128。禮樂といえば周公の「制禮作樂」がただちに想起され*129、堯舜に當てることはいささか落ち着かないが*130、湯武に『詩』を配し、『詩』は『春秋』を後續するので、武王のあとに周公の「制禮作樂」を置きえなかったためである。

[6] 春秋采善貶惡 『春秋繁露』威德所生「春秋采善不遺小、撥惡不遺大、」

[7] 推三代之德褒周室 孔子世家「乃因史記作春秋、上至隱公、下訖哀公十四年、十二公。據魯、親周、故殷、運之三代。」の「運之三代」「親周」に相當する。「親周」は上掲『春秋繁露』三代改制質文「故春秋應天作新王之事、時正黑統、王魯、尚黑、緇夏、親周、故宋、」に由來する。

[8] 非獨刺譏而已也 「刺譏」は『春秋繁露』十指*131に初見し、『史記』にも頻見する*132。「刺譏」が危険な行爲であったことは、儒林列傳

中廢爲中大夫、居舍、著災異之記。是時遼東高廟災、主父偃疾之、取其書奏之天子。天子召諸生示其書、有刺譏。董仲舒弟子呂步舒不知其師書、以爲下愚。於是下董仲舒吏、當死、詔赦之。

の董仲舒の事例にうかがわれる。『春秋』は「刺譏」ばかりではないとすることで、壺遂が『春秋』に擬える太史公書も同様であると間接的に辯明するわけだが、『春秋』が、したがって太史公書が基本的に「刺譏」の書であることは決して否定されない。太史公の第二の回答、漢王朝への讚美は「設論」とはいえ輦蹙を禁じ得ぬものだが、實の

*128 五帝本紀「太史公曰、學者多稱五帝、尚矣。然尚書獨載堯以來。而百家言黃帝、其文不雅馴、薦紳先生難言之。」

*129 『禮記』明堂位「武王崩、成王幼弱、周公踐天子之位、以治天下。六年、朝諸侯於明堂、制禮作樂、頒度量、而天下大服。七年、致政於成王。」・『尚書大傳』嘉禾「周公居攝六年、制禮作樂、天下和平。」

*130 もっとも『孟子』告子下「白圭曰、吾欲二十而取一、何如。孟子曰、子之道、貉道也。萬室之國、一人陶、則可乎。曰、不可、器不足用也。曰、夫貉、五穀不生、惟黍生之。無城郭、宮室、宗廟、祭祀之禮、無諸侯幣帛饗餼、無百官有司、故二十取一而足也。今居中國、去人倫、無君子、如之何其可也。陶以寡、且不可以爲國、況無君子乎。欲輕之於堯舜之道者、大貉小貉也。欲重之於堯舜之道者、大桀小桀也。」は「中國」の「禮」を「堯舜之道」と稱している。

*131 『春秋繁露』十指「春秋二百四十二年之文、天下之大、事變之博、無不有也、雖然、大略之要、有十指。…切刺譏之所罰、考變異之所加、天之端、一指也。」

*132 十二諸侯年表「七十子之徒口受其傳指、爲有所刺譏褒諱挹損之文辭不可以書見也。」・六國年表「秦既得意、燒天下詩書、諸侯史記尤甚、爲其有所刺譏也。」・孔子世家「孔子賢者、所刺譏皆中諸侯之疾。」

ところ『春秋』に託けて太史公書が「刺譏」の書であることを暗示しているのであり、きわめて重要な一節であると考え。

[9] 漢興以來至明天子獲符瑞封禪改正朔易服色受命於穆清 「封禪」は『管子』封禪篇に初見し、「受命」の證として舉行され^{*133}、またそれに先立って瑞祥を要するものとされる^{*134}。秦始皇帝がその二十八年(219BC)に封禪を行っている。「受命」を契機に「改正朔、易服色」を行うことは、『禮記』大傳^{*135}に初見する。漢王朝成立ののち、文帝十五年(165BC)に黃龍出現の瑞祥があり、「改曆服色」が検討されたが、後元年(163BC)には中止されている。武帝が即位すると「巡狩封禪改曆服色事」が計劃され、元鼎四年(113BC)の寶鼎出現の瑞祥を契機に、元封元年(110BC)に封禪が行われ、ついで太初元年(104BC)には、太初曆が制定され、服色を黃に改めた^{*136}。

[10] 且士賢能而不用有國者之恥主上明聖而德不布聞有司之過也 「有國者」は、上文「故有國者不可以不知春秋」に、「有司之過」は、『穀梁』成七に見える^{*137}。

[11] 且余嘗掌其官廢明聖盛德不載滅功臣世家賢大夫之業不述墮先人所言罪莫大焉 上文「今漢興、海內一統、明主賢君忠臣死義之士、余爲太史而弗論載、廢天下之史文、余甚懼焉、汝其念哉。」に呼應し、「載」「廢」を共有する。「賢大夫」は、『公羊』昭三十一に見える^{*138}。「罪莫大焉」は、『左傳』7例のほかは、『國語』『戰國策』に各1例

*133 『管子』封禪「管仲曰、古者封泰山禪梁父者七十二家、而夷吾所記者十有二焉。…皆受命然後得封禪。」

*134 『管子』封禪「於是管仲睹桓公不可窮以辭、因設之以事曰、古之封禪、鄙上之黍、北里之禾、所以爲盛、江淮之間、一茅三脊、所以爲藉也。東海致比目之魚、西海致比翼之鳥。然後物有不召而自至者十有五焉。今鳳凰麒麟不來、嘉穀不生、而蓬蒿藜莠茂、鳴鳧數至、而欲封禪、毋乃不可乎、於是桓公乃止。」

*135 『禮記』大傳「聖人南面而治天下、必自人道始矣。立權度量、考文章、改正朔、易服色、殊徽號、異器械、別衣服、此其所得與民變革者也。」

*136 吉本「封禪書疏證」(『京都大學文學部研究紀要』62、2023)。

*137 『穀梁』成七「七年春王正月、鼯鼠食郊牛角。不言日、急辭也。過有司也。郊牛日展斛角而知傷、展道盡矣、其所以備災之道不盡也。改卜牛、鼯鼠又食其角。又、有繼之辭也。其、緩辭也。曰亡乎人矣、非人之所能也、所以免有司之過也。乃免牛。乃者、亡乎人之辭也。免牲者、爲之緇衣纁裳、有司玄端、奉送至于南郊。免牛亦然。免牲不曰不郊、免牛亦然。」

*138 『公羊』昭三十一「冬、黑弓以濫來奔。文何以無邾婁。通濫也。曷爲通濫。賢者子孫、宜有地也。賢者孰謂。謂叔術也。何賢乎叔術。讓國也。其讓國奈何。當邾婁顏之時、邾婁女有爲魯夫人者、則未知其爲武公與。懿公與。孝公幼、顏淫九公子于宮中、因以納賊、則未知其爲魯公子與、邾婁公子與。臧氏之母、養公者也。君幼則宜有養者、大夫之妾、士之妻、則未知臧氏

が見えるのみである。『左傳』の専用表現といってよい。「余」の使用とも相俟って、太史公が『左傳』の登場人物の言語を模倣したことを、あらためて確認させる。

[12] 余所謂述故事整齊其世傳非所謂作也而君比之於春秋謬矣 『論語』述而「子曰、述而不作、信而好古、竊比於我老彭。」を踏まえる。「述」「作」「比」を共有する。ここでは太史公書は「作」ではなく「述」に過ぎないという。下文では確かに、「於是卒述陶唐以來至于麟止」「余述歷黃帝以來至太初而訖」と「述」をいうが、その一方で、百三十篇の序には、

維昔黃帝、法天則地、四聖遵序、各成法度。唐堯遜位、虞舜不台。厥美帝功、萬世載之。作五帝本紀第一。

以下「作」を用いている。『漢書』敘傳が「述」を用いる^{*139}のは、あるいは太史公のこの發言を考慮したものかもしれない。

[13] 論次其文 「論次」は『史記』に初見する。本條と五帝本紀^{*140}・封禪書^{*141}の事例は太史公を主語とし、それ以外の三代世表「夫子之弗論次其年月、豈虛哉。」・儒林列傳「故孔子闕王路廢而邪道興、於是論次詩書、修起禮樂。適齊聞韶、三月不知肉味。自衛返魯、然後樂正、雅頌各得其所。」の2例は孔子を主語とする。孔子と太史公に使用が限定されており、太史公書を孔子の『春秋』に匹敵するものと位置づける表現となる。

之母者、曷爲者也。養公者必以其子入養。臧氏之母聞有賊、以其子易公、抱公以逃。賊至、湊公寢而弑之。臣有鮑廣父與梁買子者、聞有賊、趨而至。臧氏之母曰、公不死也、在是。吾以吾子易公矣。於是負孝公之周訴天子、天子爲之誅顏而立叔術、反孝公于魯。顏夫人者、嫗盈女也、國色也、其言曰、有能爲我殺殺顏者、吾爲其妻。叔術爲之殺殺顏者、而以爲妻。有子焉、謂之盱。夏父者、其所爲有於顏者也。盱幼而皆愛之、食必坐二子於其側而食之。有珍怪之食、盱必先取足焉。夏父曰、以來、人未足、而盱有餘。叔術覺焉、曰、嘻。此誠爾國也夫。起而致國于夏父、夏父受而中分之。叔術曰、不可。三分之、叔術曰、不可。四分之、叔術曰、不可。五分之、然後受之。公扈子者、邾婁之父兄也。習乎邾婁之故、其言曰、惡有言人之國賢若此者乎。誅顏之時、天子死、叔術起而致國于夏父。當此之時、邾婁人常被兵于周、曰、何故死吾天子。通濫、則文何以無邾婁。天下未有濫也。天下未有濫、則其言以濫來奔何。叔術者、賢大夫也。絕之則爲叔術不欲絕、不絕則世大夫也。大夫之義不得世、故於是推而通之也。」

*139 『漢書』敘傳「皇矣漢祖、纂堯之緒、實天生德、聰明神武。秦人不綱、罔漏于楚、爰茲發迹、斷蛇奮旅。神母告符、朱旗乃舉、粵蹈秦郊、嬰來稽首。革命創制、三章是紀、應天順民、五星同晷。項氏畔換、黜我巴、漢、西土宅心、戰士憤怨。乘釁而運、席卷三秦、割據河山、保此懷民。股肱蕭、曹、社稷是經、爪牙信、布、腹心良、平、龔行天罰、赫赫明明。述高紀第一。」

*140 五帝本紀「余并論次、擇其言尤雅者、故著爲本紀書首。」

*141 封禪書「於是退而論次自古以來用事於鬼神者、具見其表裏。」

六 李陵の禍

七年而太史公遭李陵之禍、幽於縲紲。乃喟然而歎曰、「是余之罪也夫。是余之罪也夫。身毀不用矣。」退而深惟曰、「夫詩書隱約者、欲遂其志之思也。昔西伯拘美里演周易。孔子戾陳蔡、作春秋。屈原放逐、著離騷。左丘失明、厥有國語。孫子臏腳、而論兵法。不韋遷蜀、世傳呂覽。韓非囚秦、說難・孤憤。詩三百篇、大抵賢聖發憤之所爲作也。此人皆意有所鬱結、不得通其道也、故述往事、思來者。」於是卒述陶唐以來、至于麟止、自黃帝始。

七年（天漢三年 98BC）にして太史公 李陵の禍に遭い、縲紲に幽せらる。乃ち喟然として歎じて曰く、「是れ余の罪なるかな。是れ余の罪なるかな [1]。身毀^{こぼ}たれて用いられず [2]。」退きて深く惟いて曰く [3]、「夫れ詩書隱約なる者 [4]、其の志を遂げんと欲するの思なり。昔西伯 美里に拘われて周易を演ず [5]。孔子 陳蔡に^{くる}しみて、春秋を作る [6]。屈原放逐せられ、離騷を著す [7]。左丘 明を失いて、厥れ國語有り [8]。孫子 腳を臏せられ、而して兵法を論ず [9]。不韋 蜀に遷り、世^よ呂覽を傳う [10]。韓非 秦に囚われ、說難・孤憤あり [11]。詩三百篇、大抵賢聖發憤の爲作する所なり [12]。此の人皆な意に鬱結する所有りて、其の道を通ざるを得ざるなり [13]、故に往事を述べ、來者を思う [14]。」是に於いて卒に陶唐以來、麟止に至るまでを述べ [15]、黃帝より始む。

[1] 幽於縲紲乃喟然而歎曰是余之罪也夫是余之罪也夫 『論語』公冶長「子謂公冶長、可妻也。雖在縲紲之中、非其罪也。以其子妻之。」と「縲紲 / 紲」を共有する。加えて公冶長*142 は司馬遷*143 と同じく子長を字とする。孔子の「非其罪也」を「是余之罪也夫」への回答に見立てているのである。「喟然而歎曰」は、『論語』子罕

顏淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、

*142 仲尼弟子列傳「公冶長、齊人、字子長。孔子曰、長可妻也、雖在累紲之中、非其罪也。以其子妻之。」

*143 司馬遷の字・子長は、『法言』寡見「或問、司馬子長有言、曰、五經不如老子之約也、當年不能極其變、終身不能究其業。」・君子「淮南說之用、不如太史公之用也。太史公、聖人將有取焉。淮南、鮮取焉爾。必也、儒乎。乍出乍人、淮南也。文麗用寡、長卿也。多愛不忍、子長也。仲尼多愛、愛義也。子長多愛、愛奇也。」に初見する。

博我以文、約我以禮。欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已。に初見。『史記』の16例のうち、孔子世家に5例が見える。孔子と關聯性の強い表現とってよい。

[2] 身毀不用矣 上掲『孝經』開宗明義「身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。」を踏まえた表現であろう。

[3] 退而深惟曰 「退而」は、『論語』

子曰、吾與回言終日、不違如愚。退而省其私、亦足以發。回也、不愚。(爲政)

陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎。對曰、未也。嘗獨立、鯉趨而過庭。曰、學詩乎。

對曰、未也。不學詩、無以言。鯉退而學詩。他日又獨立、鯉趨而過庭。曰、學禮乎。

對曰、未也。不學禮、無以立。鯉退而學禮。聞斯二者。陳亢退而喜曰、問一得三、

聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也。(季氏)

に初見。

[4] 夫詩書隱約者 「隱約」は、『大戴禮』文王官人^{*144}の文王の發言に見える。

[5] 昔西伯拘羑里演周易 周本紀に「西伯蓋即位五十年。其囚羑里、蓋益易之八卦爲六十四卦。」とある。『易』繫辭傳下「易之興也、其當殷之末世、周之盛德邪。當文王與紂之事邪。」を敷衍したものであろう。

[6] 孔子厄陳蔡作春秋 『論語』衛靈公

明日遂行。在陳絕糧、從者病、莫能興。子路愠見曰、君子亦有窮乎。子曰、君子固窮、小人窮斯濫矣。

に「在陳絕糧」とあり、先進「子曰、從我於陳蔡者、皆不及門也。」は陳蔡を連ねる。「厄」は『孟子』盡心下「孟子曰、君子之厄於陳蔡之間、無上下之交也。」に初見する。

[7] 屈原放逐著離騷 屈原賈生列傳^{*145}

[8] 左丘失明厥有國語 左丘明は、『論語』公冶長「子曰、巧言、令色、足恭、左丘

*144 『大戴禮』文王官人「王曰、於乎、女因方以觀之。富貴者觀其禮施也、貧窮者觀其有德守也、嬖寵者觀其不驕奢也、隱約者觀其不懼懼也。」

*145 屈原賈生列傳「王使屈原造爲憲令、屈平屬草稿未定。上官大夫見而欲奪之、屈平不與、因讒之曰、王使屈平爲令、眾莫不知、每一令出、平伐其功、(曰)以爲非我莫能爲也。王怒而疏屈平。屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷。…令尹子蘭聞之大怒、卒使上官大夫短屈原於頃襄王、頃襄王怒而遷之。」

明恥之、丘亦恥之。匿怨而友其人、左丘明恥之、丘亦恥之。」に見えるが、孔子は左丘明を模範とするのであり、先輩のようである。左丘明と『左傳』を關聯づけることは、十二諸侯年表

魯君子左丘明懼弟子人人異端、各安其意、失其眞、故因孔子史記具論其語、成左氏春秋。

に初見し、左丘明の失明は本條以前には見えない。『國語』は、『史記』

予觀春秋・國語、其發明五帝德、帝繫姓章矣、顧弟弗深考、其所表見皆不虛。(五帝本紀)

於是譜十二諸侯、自共和訖孔子、表見春秋・國語學者所譏盛衰大指著于篇、爲成學治古文者要刪焉。(十二諸侯年表)

に、『春秋』『國語』と連なって見える。『春秋』は『左氏春秋』すなわち『左傳』を指すものであろう。

[9] 孫子臚脚而論兵法 孫子吳起列傳*146

[10] 不韋遷蜀世傳呂覽 呂不韋列傳*147

[11] 韓非囚秦說難孤憤 老子韓非列傳*148

[12] 詩三百篇大抵賢聖發憤之所爲作也 「詩三百」は『論語』

*146 孫子吳起列傳「孫武既死、後百餘歲有孫臚。臚生阿鄆之間、臚亦孫武之後世子孫也。孫臚嘗與龐涓俱學兵法。龐涓既事魏、得爲惠王將軍、而自以爲能不及孫臚、乃陰使召孫臚。臚至、龐涓恐其賢於己、疾之、則以法刑斷其兩足而黥之、欲隱勿見。…孫臚以此名顯天下、世傳其兵法。」

*147 呂不韋列傳「是時諸侯多辯士、如荀卿之徒、著書布天下。呂不韋乃使其客人人著所聞、集論以爲八覽・六論・十二紀、二十餘萬言。以爲備天地萬物古今之事、號曰呂氏春秋。布咸陽市門、懸千金其上、延諸侯游士賓客有能增損一字者予千金。…歲餘、諸侯賓客使者相望於道、請文信侯。秦王恐其爲變、乃賜文信侯書曰、君何功於秦。秦封君河南、食十萬戶。君何親於秦。號稱仲父。其與家屬徙處蜀。呂不韋自度稍侵、恐誅、乃飲酖而死。」

*148 老子韓非列傳「悲廉直不容於邪枉之臣、觀往者得失之變、故作孤憤・五蠹・內外儲・說林・說難十餘萬言。然韓非知說之難、爲說難書甚具、終死於秦、不能自脫。…人或傳其書至秦。秦王見孤憤、五蠹之書、曰、嗟乎、寡人得見此人與之游、死不恨矣。李斯曰、此韓非之所著書也。秦因急攻韓。韓王始不用非、及急、迺遣非使秦。秦王悅之、未信用。李斯・姚賈害之、毀之曰、韓非、韓之諸公子也。今王欲并諸侯、非終爲韓不爲秦、此人之情也。今王不用、久留而歸之、此自遺患也、不如以過法誅之。秦王以爲然、下吏治非。李斯使人遺非藥、使自殺。韓非欲自陳、不得見。秦王後悔之、使人赦之、非已死矣。申子、韓子皆著書、傳於後世、學者多有。余獨悲韓子爲說難而不能自脫耳。」

子曰、詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪。(爲政)

子曰、誦詩三百、授之以政、不達。使於四方、不能專對。雖多、亦奚以爲。(子路)
に見える。「發憤」は上文「故發憤且卒」に見える。

[13] 此人皆意有所鬱結不得通其道也 「鬱結」は、屈原賦に類見する*149。「通其道」は『淮南子』泰族訓「孔子欲行王道、東西南北七十說而無所偶、故因衛夫人、彌子瑕而欲通其道。」の孔子關聯の記述に見える。

[14] 故述往事思來者 「往」「來」を對置することは、『論語』

子貢曰、詩云、「如切如磋、如琢如磨。其斯之謂與。子曰、賜也、始可與言詩已矣。告諸往而知來者。(學而)

楚狂接輿歌而過孔子曰、鳳兮。鳳兮。何德之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而、已而。今之從政者殆而。孔子下、欲與之言。趨而辟之、不得與之言。(微子*150)
に見える。

[15] 於是卒述陶唐以來至于麟止自黃帝始 「麟止」は、元狩元年(122BC)、雍で白麟を獲た瑞祥をいう*151。実際には、『史記』は下文「自黃帝始」「太史公曰、余述歷黃帝以來至太初而訖、百三十篇。」にあるように、黃帝から太初年間(104-101BC)までを記述する*152。「卒述陶唐以來」は、孔子が『書』を編纂した際に、堯からはじめたこと*153、「至于麟止」は、『春秋』の記述を「西狩獲麟」で終わったことに擬えたものである。太史公書を孔子に比擬したものであり、現行の『史記』以前に、堯から元狩元年を對象とした書物が構想されていたことを示すものではない。

*149 『楚辭』(屈原)九章 / 惜誦「背膺畔以交痛兮、心鬱結而紆軫。」・九章 / 懷沙「鬱結紆軫兮、離愍而長鞠。」・遠遊「遭沈濁而汙穢兮、獨鬱結其誰語。」

*150 孔子世家「楚狂接輿歌而過孔子、曰、鳳兮鳳兮、何德之衰。往者不可諫兮、來者猶可追也。已而已而、今之從政者殆而。孔子下、欲與之言。趨而去、弗得與之言。」

*151 『漢書』武帝紀「元狩元年冬十月、行幸雍、祠五畤。獲白麟、作白麟之歌。」

*152 建元以來侯者年表が「太初」の覽までしか設けていないことは、『史記』の本來の下限が太初年間(104-101BC)であったことを傍證する。もっとも、『漢書』司馬遷傳に「訖于(大)〔天〕漢。」とあるように、天漢年間(100-97BC)の記述が散見することは司馬遷の追記を示す。李陵の禍で太史令を解任された天漢三年(98BC)を追記の一應の下限とみなしてよからう。

*153 孔子世家「孔子之時、周室微而禮樂廢、詩書缺。追迹三代之禮、序書傳、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事。」

七 百三十篇の序

維昔黃帝、法天則地、四聖遵序、各成法度。唐堯遜位、虞舜不台。厥美帝功、萬世載之。

作五帝本紀第一。

維れ昔黃帝 [1]、天に^{のつと}法り地に^{のつと}則り [2]、四聖 序に^{のつと}遵い [3]、各の法度を成す [4]。唐堯 位を^{ゆず}遜り、虞舜 台^{よろこ}ばず [5]。厥れ帝の功を^{よみ}美し [6]、萬世 之を載す [7]。五帝本紀第一を作る。

[1] 維昔黃帝 以下百三十篇の序である。本篇の内容を略述する形式を採るが、本篇とは往々にして矛盾する*154。これらが基本的に本篇以前に作成された豫告篇の性格をもつことは明らかである。

本紀の序は基本的に四字句を用いる。四字句を連ね最後に「作…」で結ぶありかたは、堯典「昔在帝堯、聰明文思、光宅天下、將遜于位、讓于虞舜、作堯典。」など『書序』を想起させる。『史記』は『書序』を多く引用している。冒頭に「維×××」の四字句を用いることは、五帝本紀第一～秦本紀第五に共有されている。本紀のうち、この五篇は先秦を扱うものとして一個の群をなしていることになる。「維×××」の四字句は大雅 / 文王「維此文王」など『詩』に散見する。

[2] 法天則地 五帝本紀「順天地之紀」に当たる。「×天×地」は『管子』霸言「霸王之形、象天則地、化人易代、創制天下。」に見える。序の表現が本篇に見えず、かえって先行文獻に見える事例が少なくない。太史公自序が本篇に先立って制作されたことを傍證するものとなる。

[3] 四聖遵序 「四聖」は帝顓頊・帝嚳・堯・舜を指す。歴代天子を「×聖」と稱することは、『春秋繁露』楚莊王「舜時、民樂其昭堯之業也、故韶、韶者、昭也。禹之時、民樂其三聖相繼、故夏、夏者、大也。」・『淮南子』脩務訓「嘗試問之矣、若夫神農・堯・舜・禹・湯、可謂聖人乎。有論者必不能廢。以五聖觀之、則莫得無爲、明矣。」などに見える。

[4] 各成法度 「法度」は『論語』堯曰「謹權量、審法度、修廢官、四方之政行焉。」に初見する。

*154 朱東潤『史記考索（外二種）』（華東師範大學出版社、1996）

[5] 唐堯遜位虞舜不台 「唐堯」「虞舜」は司馬相如列傳 / 大人賦「歷唐堯於崇山兮、過虞舜於九疑。」に初見。「遜位」は伯夷列傳「堯將遜位、讓於虞舜、舜禹之間、嶽牧咸薦、乃試之於位、典職數十年、功用既興、然後授政。」に初見。「不台」は五帝本紀「舜讓於德不懌。」の「不懌」に当たり、『書』舜典は「弗嗣」に作る*155。序と本篇で用字が異なる。これも太史公自序の本篇に對する先行を傍證する。

[6] 厥美帝功 五帝本紀に「皆曰、伯禹爲司空、可美帝功。」とある。この一節は『書』舜典に據るが、舜典には「可美帝功」相當部を缺く。「厥〔動詞〕××」は、大雅 / 文王「厥作裸將」など『詩』に用例を得る。

[7] 萬世載之 「萬世×之」は『淮南子』主術訓「今夫權衡規矩、一定而不易、不爲秦、楚變節、不爲胡、越改容、常一而不邪、方行而不流、一日刑之、萬世傳之、而以無爲爲之。」に初見。「載之」は上文「堯舜之盛、尚書載之、禮樂作焉。」に見える。

維禹之功、九州攸同、光唐虞際、德流苗裔。夏桀淫驕、乃放鳴條。作夏本紀第二。

維れ禹の功 [1]、九州の同じくする攸 [2]、唐虞の際に光き [3]、德 苗裔に流る [4]。夏桀淫驕 [5]、乃ち鳴條に放たる [6]。夏本紀第二を作る [7]。

[1] 維禹之功 五帝本紀「唯禹之功爲大、」・越世家「太史公曰、禹之功大矣、」

[2] 九州攸同 夏本紀「於是九州攸同」は『書』禹貢に據る。

[3] 光唐虞際 「唐虞之際」は、『論語』泰伯「舜有臣五人而天下治。武王曰、予有亂臣十人。孔子曰、才難、不其然乎。唐虞之際、於斯爲盛。有婦人焉、九人而已。三分天下有其二、以服事殷。周之德、其可謂至德也已矣。」に初見するが、以後の文獻に見えず、『史記』において頻見する*156。このように『史記』によっていわば復活した表

*155 『史記集解』「徐廣曰、音亦。今文尚書作不怡。怡、懌也。」・『史記索隱』「古文作不嗣、今文作不怡、怡即懌也。謂辭讓於德不堪、所以心意不悅懌也。俗本作澤、誤爾、亦當爲懌。」

*156 秦本紀「太史公曰、秦之先伯翳、嘗有勳於唐虞之際、受土賜姓。」・平準書「太史公曰、農工商交易之路通、而龜貝金錢刀布之幣興焉。所從來久遠、自高辛氏之前尚矣、靡得而記云。故書道唐虞之際、詩述殷周之世、安寧則長庠序、先本細末、以禮義防于利。事變多故而亦反是。」・陳杞世家「舜之後、周武王封之陳、至楚惠王滅之、有世家言。禹之後、周武王封之杞、楚惠王滅之、有世家言。契之後爲殷、殷有本紀言。殷破、周封其後於宋、齊潛王滅之、有世家言。后稷之後爲周、秦昭王滅之、有本紀言。皋陶之後、或封英・六、楚穆王滅之、無譜。伯夷之後、至周武王復封於齊、曰太公望、陳氏滅之、有世家言。伯翳之後、至周平王時封爲秦、項羽滅之、有本紀言。垂・益・夔・龍、其後不知所封、不見也。右十一人者、皆唐虞之際名有功德臣也。其五人之後皆至帝王、餘乃爲顯諸侯。滕・薛・驪、夏・殷・周之間封也、小、不足齒列、弗論

現は少なくない。

[4] 德流苗裔 「苗裔」は『楚辭』（屈原）離騷「帝高陽之苗裔兮、」に初見。「德流子孫」は『史記』に散見する*157。

[5] 夏桀淫驕 「夏桀」は『左傳』昭四「夏桀爲仍之會、有緡叛之。」に初見。「淫慢」は『新書』過秦中「借使秦王論上世之事、竝殷周之跡、以制御其政、後雖有淫驕之主、猶未有傾危之患也。」に初見。

[6] 乃放鳴條 夏本紀「桀走鳴條、遂放而死。」「鳴條」は『書序』湯誓「伊尹相湯伐桀、升自陟、遂與桀戰于鳴條之野、作湯誓。」に初見。「放」は『孟子』梁惠王下「齊宣王問曰、湯放桀、武王伐紂、有諸。」に初見。「乃〔動詞〕××」は大雅／縣「乃召司空」など『詩』に散見する。

[7] 作夏本紀第二 以下、夏本紀第二・殷本紀第三・周本紀第四・秦始皇本紀第六については王朝の滅亡、項羽本紀第七・呂太后本紀第九については、項羽・呂氏の没落に關する否定的な言辭が見える。

維契作商、爰及成湯。太甲居桐、德盛阿衡。武丁得説、乃稱高宗。帝辛湛湏、諸侯不享。作殷本紀第三。

維れ契 商おこを作し [1]、爰こに成湯に及ぶ [2]。太甲 桐おこに居り [3]、德 阿衡に盛んなり [4]。武丁 説を得 [5]、乃ち高宗を稱す [6]。帝辛湛湏 [7]、諸侯 享せず [8]。殷本紀第三を作る。

[1] 維契作商 殷本紀「帝舜乃命契曰、百姓不親、五品不訓、汝爲司徒而敬敷五教、五教在寬。封于商、賜姓子氏。」

[2] 爰及成湯 「爰及」は『詩』に初見し*158、太史公自序「爰及公劉」「爰及宣防」「爰及子奢」など『史記』に類見する。

也。』孔子世家「孔子之時、周室微而禮樂廢、詩書缺。追跡三代之禮、序書傳、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事。」および上文「昔在顛頊、命南正重以司天、北正黎以司地。唐虞之際、紹重黎之後、使復典之、至于夏商、故重黎氏世序天地。」

*157 張耳陳餘列傳「張敖齧其指出血、曰、君何言之誤。且先人亡國、賴高祖得復國、德流子孫、秋豪皆高祖力也。」・樊鄴滕灌列傳「太史公曰、吾適豐沛、問其遺老、觀故蕭・曹・樊噲・滕公之家、及其素、異哉所聞。方其鼓刀屠狗賣繪之時、豈自知附驥之尾、垂名漢廷、德流子孫哉。余與他廣通、爲言高祖功臣之興時若此云。」

*158 『詩』小雅／鴻鴈「爰及矜人」・大雅／縣「爰及姜女」

[3] 太甲居桐 殷本紀「帝太甲居桐宮三年、」

[4] 德盛阿衡 「德盛」は下文「德盛西伯、…作周本紀第四」にも見える。「阿衡」は、『詩』商頌 / 長發「昔在中葉、有震且業。允也天子、降予卿士。實維阿衡、實左右商王。」に初見し、殷本紀に「伊尹名阿衡。」とある。

[5] 武丁得説 殷本紀「武丁夜夢得聖人、名曰説。以夢所見視羣臣百吏、皆非也。於是迺使百工營求之野、得説於傅險中。是時説爲胥靡、築於傅險。見於武丁、武丁曰是也。得而與之語、果聖人、舉以爲相、殷國大治。故遂以傅險姓之、號曰傅説。」は、『書序』説命「高宗夢得説、使百工營求諸野、得諸傅巖、作説命三篇。」に據る。

[6] 乃稱高宗 殷本紀「帝武丁崩、子帝祖庚立。祖己嘉武丁之以祥雉爲德、立其廟爲高宗、遂作高宗彤日及訓。」「高宗」は、『書』無逸「其在高宗、時舊勞于外、爰暨小人。作其即位、乃或亮陰、三年不言。其惟不言、言乃雍、不敢荒寧。嘉靖殷邦、至于小大、無時或怨。肆高宗之享國、五十有九年。」に初見。

[7] 帝辛湛涵 「帝辛」は、『國語』周語上「商王帝辛、大惡於民。」に初見。「湛涵」は、『淮南子』要略に「文王之時、紂爲天子、賦斂無度、殺戮無止、康梁沉涵、宮中成市、作爲炮烙之刑、剝諫者、剔孕婦、天下同心而苦之。」とあり、宋世家にも「紂沈涵於酒」と見える。

[8] 諸侯不享 『穀梁』僖五・昭三十二「天子微。諸侯不享觀。」

維弃作稷、德盛西伯。武王牧野、實撫天下。幽厲昏亂、既喪酆鎬。陵遲至赧。洛邑不祀。作周本紀第四。

維れ弃 稷と作り [1]、德 西伯に盛んなり [2]。武王牧野 [3]、實に天下を撫す [4]。幽厲昏亂 [5]、既に酆鎬を喪う [6]。陵遲して赧に至り [7]。洛邑 祀らず [8]。周本紀第四を作る。

[1] 維弃作稷 周本紀「帝舜曰、弃、黎民始飢、爾后稷播時百穀。封弃於邰、號曰后稷、別姓姬氏。」

[2] 德盛西伯 「西伯」は「孟子曰、伯夷辟紂、居北海之濱、聞文王作、興曰、盍歸乎來。吾聞西伯善養老者。太公辟紂、居東海之濱、聞文王作、興曰、盍歸乎來。吾聞西伯善養老者。二老者、天下之大老也、而歸之、是天下之父歸之也。天下之父歸之、其子焉往。諸侯有行文王之政者、七年之内、必爲政於天下矣。」(離婁上) など『孟子』

に初見。

[3] 武王牧野 「牧野」は『詩』大雅 / 大明「殷商之旅、其會如林。矢于牧野、維予侯興。上帝臨女、無貳爾心。」に初見。

[4] 實撫天下 『新書』制不定「以高皇帝之明聖威武也、既撫天下、即天子之位、而大臣爲逆者乃幾十發。」・『淮南子』齊俗訓「許由・善卷非不能撫天下、寧海內以德民也、然而羞以物滑和、故弗受也。」「實〔動詞〕××」は、大雅 / 抑「實虹小子」など『詩』に用例を得る。

[5] 幽厲昏亂 「幽厲」は『孟子』離婁上「暴其民甚、則身弑國亡。不甚、則身危國削。名之曰幽厲、雖孝子慈孫、百世不能改也。」に初見し、『史記』に類見する*159。「昏亂」は、「親有禮、因重固、間攜貳、覆昏亂、霸王之器也。」(閔元)など『左傳』に初見。

[6] 既喪酆鎬 「既〔動詞〕××」は、大雅 / 皇矣「既受帝祉」など『詩』に用例を得る。「既喪」は『國語』周語上「宣王既喪南國之師」に見える。周本紀は「宣王既亡南國之師」に作る。「酆鎬」は『呂氏春秋』疑似「周宅酆鎬近戎人、與諸侯約、爲高葆禱於王路、置鼓其上、遠近相聞。」に初見。

[7] 陵遲至赧 「陵遲」は『荀子』宥坐*160に初見。『史記』にも散見する*161。

[8] 洛邑不祀 周本紀「周君、王赧卒、周民遂東亡。秦取九鼎寶器、而遷西周公於愚狐。後七歲、秦莊襄王滅東(西)周。東西周皆入于秦、周既不祀。」「洛邑」は『詩』『書』『書序』に見え*162、『史記』に類見するが*163、その間の用例を得ない。「不祀」は『左

*159 高祖功臣侯者年表「蓋周封八百、幽厲之後、見於春秋。」・天官書「幽厲以往、尚矣。」・趙世家「下及幽厲無道」・孔子世家「至幽厲之缺」・儒林列傳「幽厲微而禮樂壞」。また上文に「幽厲之後、王道缺、禮樂衰、」、下文に「幽厲之後、周室衰微、諸侯專政、春秋有所不紀。而譜牒經略、五霸更盛衰、欲睹周世相先後之意、作十二諸侯年表第二。」

*160 『荀子』宥坐「百仞之山任負車登焉、何則。陵遲故也。數仞之牆而民不踰也、百仞之山而豎子馮而游焉、陵遲故也。今之世陵遲已久矣、而能使民勿踰乎、」

*161 樂書「陵遲以至六國、流沔沈佚、」・張釋之馮唐列傳「陵遲而至於二世、天下土崩。」・儒林列傳「後陵遲以至於始皇、天下並爭於戰國、」

*162 『書』多方「爾乃自時洛邑。」・『書序』召誥「成王在豐。欲宅洛邑。使召公先相宅。作召誥。」・『詩序』周頌 / 清廟「清廟、祀文王也。周公既成洛邑、朝諸侯、率以祀文王焉。」

*163 周本紀「成王在豐、使召公復營洛邑、如武王之意。」「太史公曰、學者皆稱周伐紂、居洛邑、綜其實不然。」・六國年表「太史公讀秦記、至犬戎敗幽王、周東徙洛邑、秦襄公始封爲諸侯、作西時用事上帝、僭端見矣。」・劉敬叔孫通列傳「成王即位、周公之屬傅相焉、迺營成周洛邑、以此爲天下之中也、」・匈奴列傳「其後二十有餘年、而戎狄至洛邑、伐周襄王、襄王奔于鄭之汜邑。」

傳』文五「皐陶庭堅不祀」に初見。

維秦之先、伯翳佐禹。穆公思義、悼豪之旅。以人爲殉、詩歌黃鳥。昭襄業帝。作秦本紀第五。

維れ秦の先 [1]、伯翳 禹を佐く [2]。穆公 義を思い [3]、豪の旅を悼む [4]。人を以て殉と爲し、詩 黃鳥を歌う [5]。昭襄 帝を業とす [6]。秦本紀第五を作る [7]。

[1] 維秦之先 秦本紀「秦之先、帝顓頊之苗裔孫曰女脩。」「太史公曰、秦之先爲嬴姓。」
秦始皇本紀「太史公曰、秦之先伯翳、嘗有功於唐虞之際、受土賜姓。」

[2] 伯翳佐禹 秦本紀「女華生大費、與禹平水土。已成、帝錫玄圭。禹受曰、非予能成、亦大費爲輔。帝舜曰、咨爾費、贊禹功、其賜爾皐游。爾後嗣將大出。乃妻之姚姓之玉女。大費拜受、佐舜調馴鳥獸、鳥獸多馴服、是爲柏翳。舜賜姓嬴氏。」「佐禹」は夏本紀「及禹崩、雖授益、益之佐禹日淺、天下未洽。」・殷本紀「契長而佐禹治水有功。」・齊世家「其先祖嘗爲四嶽、佐禹平水土甚有功。」など頻見する。

[3] 穆公思義 秦本紀は「德公生三十三歲而立、立二年卒。生子三人、長子宣公、中子成公、少子穆公。」以外は「繆公」に作る。諡號に用いる「穆」を假借字「繆」に代替することは、『公羊』に初見し^{*164}、以後、『史記』『漢書』に至るまで「穆」「繆」が混用されている。「思義」は『論語』憲問「見利思義」・季氏・子張「見得思義」に初見。

[4] 悼豪之旅 秦本紀「三十六年、繆公復益厚孟明等、使將兵伐晉、渡河焚船、大敗晉人、取王官及郟、以報殽之役。晉人皆城守不敢出。於是繆公乃自茅津渡河、封殽中尸、爲發喪、哭之三日。乃誓於軍曰、嗟士卒。聽無譁、余誓告汝。古之人謀黃髮番番、則無所過。以申思不用蹇叔、百里傒之謀、故作此誓、令後世以記余過。君子聞之、皆爲垂涕、曰、嗟乎。秦繆公之與人周也、卒得孟明之慶。」は「豪」を「殽」に作る。

[5] 以人爲殉、詩歌黃鳥 秦本紀「三十九年、繆公卒、葬雍。從死者百七十七人、秦之良臣子輿氏三人名曰奄息・仲行・鍼虎、亦在從死之中。秦人哀之、爲作歌黃鳥之詩。」は『左傳』文六、さらに『詩』秦風 / 黃鳥に取材する。

[6] 昭襄業帝 「業帝」は下文「子羽暴虐、漢行功德。憤發蜀漢、還定三秦。誅籍業帝、天下惟寧、改制易俗。作高祖本紀第八。」に見える。

*164 『左傳』隱三經「葬宋穆公」を『公羊』隱三は「葬宋繆公」に作る。

[7] 作秦本紀第五 秦本紀第五を秦始皇本紀第六と別に立てることには古來批判があるが、秦本紀の末尾には、

秦王政立二十六年、初并天下爲三十六郡、號爲始皇帝、始皇帝五十一年而崩、子胡亥立、是爲二世皇帝、三年、諸侯竝起叛秦、趙高殺二世、立子嬰、子嬰立月餘、諸侯誅之、遂滅秦、其語在始皇本紀中、

と、秦の滅亡までを記している。秦本紀は本來亡國までの記述を豫定したものであり、それは、夏・殷・周本紀が王朝開始以前を記すのと同じである。ところが、秦本紀が長大になり、さらに秦始皇本紀が長大になることが見込まれたので、當初の豫定を變更して、秦始皇本紀を獨立させ、その一方で秦本紀を「本紀」として完結させるためこの末尾の文章を置いたのである。「二紀實爲一紀」*165 という評價が当たっている。

始皇既立、并兼六國、銷鋒鑄鐻、維偃干革、尊號稱帝、矜武任力。二世受運、子嬰降虜。作始皇本紀第六。

始皇既に立ち [1]、六國を并兼し [2]、鋒を銷かし鐻を鑄 [3]、維れ干革を偃め [4]、號を尊くして帝を稱し [5]、武を矜り力に任ず。二世 運を受け、子嬰降りて虜わる。始皇本紀第六を作る。

[1] 始皇既立 「××既 [動詞]」は、大雅 / 文王「上帝既命」など『詩』に用例を得る。

[2] 并兼六國 「并兼」は『莊子』外篇 / 刻威「此朝廷之士、尊主疆國之人、致功并兼者之所好也。」に初見。『史記』に頻見する。「六國」は秦始皇本紀 / 之罘刻石「六國回辟」に初見。

[3] 銷鋒鑄鐻 秦始皇本紀「於是廢先王之道、焚百家之言、以愚黔首。墮名城、殺豪俊、收天下之兵聚之咸陽、銷鋒鑄鐻、以爲金人十二、以弱黔首之民。』『新書』過秦上は「銷鋒鋌鑄」に作る。

[4] 維偃干革 周本紀「縱馬於華山之陽、放牛於桃林之虛。偃干戈、振兵釋旅、示天下不復用也。」

[5] 尊號稱帝 秦始皇本紀「臣等昧死上尊號、王爲秦皇。命爲制、令爲詔、天子自稱曰朕。王曰、去秦、著皇、采上古帝位號、號曰皇帝。他如議。」

*165 鄭之洪『史記文獻研究』（巴蜀書社、1997）

秦失其道、豪桀竝擾。項梁業之、子羽接之。殺慶救趙、諸侯立之。誅嬰背懷、天下非之。
作項羽本紀第七。

秦 其の道を失い、豪桀竝びに擾る [1]。項梁 之を業とし、子羽 之を接ぐ [2]。
慶を殺し趙を救い、諸侯 之を立つ [3]。嬰を誅し懷に背き、天下 之を非とす [4]。
項羽本紀第七を作る。

[1] 秦失其道豪桀竝擾 項羽本紀「太史公曰、…夫秦失其政、陳涉首難、豪傑讜起、
相與竝爭、不可勝數。」・孝文本紀「夫秦失其政、諸侯豪桀竝起、」・酈生陸賈列傳「且
夫秦失其政、諸侯豪桀竝起、」

[2] 項梁業之子羽接之 下文「重黎業之、吳回接之。…作楚世家第十。」

[3] 殺慶救趙諸侯立之 項羽本紀「王召宋義與計事而大說之、因置以爲上將軍、項
羽爲魯公、爲次將、范增爲末將、救趙。諸別將皆屬宋義、號爲卿子冠軍。…項羽晨朝
上將軍宋義、即其帳中斬宋義頭、…乃相與共立羽爲假上將軍。」

[4] 誅嬰背懷天下非之 項羽本紀「項羽引兵西屠咸陽、殺秦降王子嬰、…項羽出關、
使人徙義帝。曰、古之帝者地方千里、必居上游。乃使使徙義帝長沙郴縣、趣義帝行、
羣臣稍倍叛之、乃陰令衡山王、臨江王擊之、殺義帝江南。」・高祖本紀「新城三老董公
遮說漢王以義帝死故。漢王聞之、袒而大哭。遂爲義帝發喪、臨三日。發使者告諸侯曰、
天下共立義帝、北面事之。今項羽放殺義帝於江南、大逆無道。寡人親爲發喪、諸侯皆
縞素。悉發關內兵、收三河士、南浮江漢以下、願從諸侯王擊楚之殺義帝者。」

子羽暴虐、漢行功德。憤發蜀漢、還定三秦。誅籍業帝、天下惟寧、改制易俗。作高祖
本紀第八。

子羽暴虐 [1]、漢 功德を行ふ [2]。憤 蜀漢に發し [3]、還りて三秦を定む [4]。
籍を誅し帝を業とし、天下惟れ寧んじ、制を改め俗を易う [5]。高祖本紀第八を作る [6]。

[1] 子羽暴虐 「暴虐」は下文「秦既暴虐、楚人發難、項氏遂亂、漢乃扶義征伐。八
年之間、天下三嬪、事繁變眾、故詳著秦楚之際月表第四。」・「別成暴虐、宋乃滅亡。嘉
微子問太師、作宋世家第八。」に見える。

[2] 漢行功德 「功德」は、秦始皇本紀 / 泰山刻石「祇誦功德」に初見。

[3] 憤發蜀漢 「憤發」は秦楚之際月表「故憤發其所爲天下雄」・下文「依之違之、
周公綏之。憤發文德、天下和之。輔翼成王、諸侯宗周。隱桓之際、是獨何哉。三桓爭彊、

魯乃不昌。嘉旦金縢、作周公世家第三。」に見える。「蜀漢」は高祖本紀「王我於蜀漢」など『史記』に初見。

[4] 還定三秦 項羽本紀「漢還定三秦」など『史記』に頻見。

[5] 天下惟寧改制易俗 「惟寧」は、『左傳』僖五「懷德惟寧」に見える^{*166}。「易俗」は、『禮記』樂記を引用する樂書「移風易俗、天下皆寧。」に見える。なお高祖について、「改正易俗」をいうことは、曆書

太史公曰、…漢興、高祖曰、北時待我而起、亦自以爲獲水德之瑞。雖明習曆及張蒼等、咸以爲然。是時天下初定、方綱紀大基、高后女主、皆未遑、故襲秦正朔服色。などの記述と齟齬する。

[6] 作高祖本紀第八 以下、漢代本紀である。高祖本紀第八・孝文本紀第十・孝景本紀第十一・今上本紀第十二の四本紀には否定的な言辭が一切見られない。漢王朝への阿諛である。

惠之早賞、諸呂不台。崇彊祿・産、諸侯謀之。殺隱幽友、大臣洞疑、遂及宗禍。作呂太后本紀第九。

惠の早賞、諸呂^{よろこ}台^ばず [1]。祿・産を崇彊し、諸侯^よ之^ろを謀る [2]。隱を殺し友を幽し [3]、大臣洞疑し、遂に宗禍に及ぶ。呂太后本紀第九を作る。

[1] 諸呂不台 「不台」は上文「虞舜不台。…作五帝本紀第一。」に見える。

[2] 諸侯謀之 呂太后本紀「齊王迺遺諸侯王書曰、高帝平定天下、王諸子弟、悼惠王王齊。悼惠王薨、孝惠帝使留侯良立臣爲齊王。孝惠崩、高后用事、春秋高、聽諸呂、擅廢帝更立、又比殺三趙王、滅梁・趙・燕以王諸呂、分齊爲四。忠臣進諫、上惑亂弗聽。今高后崩、而帝春秋富、未能治天下、固恃大臣諸侯。而諸呂又擅自尊官、聚兵嚴威、劫列侯忠臣、矯制以令天下、宗廟所以危。寡人率兵入誅不當爲王者。」

[3] 殺隱幽友 呂太后本紀「及高祖爲漢王、得定陶戚姬、愛幸、生趙隱王如意。…呂后最怨戚夫人及其子趙王、迺令永巷囚戚夫人、而召趙王。使者三反、趙相建平侯周昌謂使者曰、高帝屬臣趙王、趙王年少。竊聞太后怨戚夫人、欲召趙王并誅之、臣不敢遣王。王且亦病、不能奉詔。呂后大怒、迺使人召趙相。趙相徵至長安、迺使人復召趙王。王來、未到。孝惠帝慈仁、知太后怒、自迎趙王霸上、與入宮、自挾與趙王起居飲食。

*166 『詩』大雅 / 板「懷德維寧」。

太后欲殺之、不得聞。孝惠元年十二月、帝晨出射。趙王少、不能蚤起。太后聞其獨居、使人持醪飲之。」・又「七年正月、太后召趙王友。友以諸呂女爲后、弗愛、愛他姬、諸呂女妒、怒去、讒之於太后、誣以罪過、曰、呂氏安得王。太后百歲後、吾必擊之。太后怒、以故召趙王。趙王至、置邸不見、令衛圍守之、弗與食。其羣臣或竊饋、輒捕論之、趙王餓、乃歌曰、諸呂用事兮劉氏危、迫脅王侯兮彊授我妃。我妃既妒兮誣我以惡、讒女亂國兮上曾不寤。我無忠臣兮何故棄國。自決中野兮蒼天舉直。于嗟不可悔兮寧蚤自財。爲王而餓死兮誰者憐之。呂氏絕理兮託天報仇。丁丑、趙王幽死、以民禮葬之長安民冢次。」
漢既初興、繼嗣不明、迎王踐祚、天下歸心。蠲除肉刑、開通關梁、廣恩博施、厥稱太宗。
作孝文本紀第十。

漢既に初めて興り [1]、繼嗣 明らかならず [2]。王を迎えて踐祚せしめ [3]、天下歸心す [4]。肉刑を蠲除し、關梁を開通し [5]、廣恩博施、厥れ太宗を稱す [6]。孝文本紀第十を作る。

[1] 漢既初興 「×既××」は大雅 / 雲漢「旱既太甚」など『詩』に用例を得る。「初興」は秦始皇本紀 / 之罘刻石「聖法初興」に初見。また下文に「漢既初定、文理未明、蒼爲主計、整齊度量、序律曆。作張丞相列傳第三十六。」と見える。

[2] 繼嗣不明 外戚世家「及孝惠帝崩、天下初定未久、繼嗣不明。」

[3] 迎王踐祚 孝文本紀「丞相陳平、太尉周勃等使人迎代王。…辛亥、皇帝即阼、謁高廟。」

[4] 天下歸心 『論語』堯曰「天下之民歸心焉。」

[5] 蠲除肉刑開通關梁 孝文本紀「孝景皇帝元年十月、制詔御史、…孝文皇帝臨天下、通關梁、不異遠方。除誹謗、去肉刑、賞賜長老、收恤孤獨、以育羣生。」「蠲除」は、李斯列傳「臣請諸有文學詩書百家語者、蠲除去之。」に初見。孝文本紀に「五月、齊太倉令淳于公有罪當刑、…天子憐悲其意、乃下詔曰、…其除肉刑。」貨殖列傳に「漢興、海內爲一、開關梁、弛山澤之禁、」とある。

[6] 厥稱太宗 孝文本紀「丞相臣嘉等言、陛下永思孝道、立昭德之舞以明孝文皇帝之盛德。皆臣嘉等愚所不及。臣謹議、世功莫大於高皇帝、德莫盛於孝文皇帝、高皇帝宜爲帝者太祖之廟、孝文皇帝廟宜爲帝者太宗之廟。天子宜世世獻祖宗之廟。郡國諸侯宜各爲孝文皇帝立太宗之廟。諸侯王列侯使者侍祠天子、歲獻祖宗之廟。請著之竹帛、

宣布天下。制曰、可。」上文「乃種高宗。…作殷本紀第三。」

諸侯驕恣、吳首爲亂、京師行誅、七國伏辜、天下翕然、大安殷富。作孝景本紀第十一。

諸侯驕恣 [1]、吳首^{はじ}めて亂を爲す [2]。京師 誅を行い [3]、七國 辜に伏す。天下翕然 [4]、大安殷富 [5]。孝景本紀第十一を作る。

[1] 諸侯驕恣 淮南衡山列傳「厲王以此歸國益驕恣」

[2] 吳首爲亂 韓長孺列傳「首爲馬邑事者、恢也、」

[3] 京師行誅 「行誅」は『公羊』莊三十二「行誅乎兄」に初見。『史記』には諸侯王と「京師」の對立をいう事例が頻見する^{*167}。

[4] 天下翕然 『韓詩外傳』卷八「海内翕然向風」

[5] 大安殷富 「大安」は惠景間侯者年表「呂氏佐高祖治天下、天下大安。」に見える。「殷富」は孝文本紀「專務以德化民、是以海内殷富、興於禮義。」・律書「歷至孝文即位、…故百姓無内外之繇、得息肩於田畝、天下殷富、粟至十餘錢、鳴雞吠狗、煙火萬里、可謂和樂者乎。」など文帝期に關聯する。

漢興五世、隆在建元、外攘夷狄、內脩法度、封禪、改正朔、易服色。作今上本紀第十二。

漢興りて五世 [1]、隆 建元に在り、外に夷狄^{うちほら}を攘い [2]、内に法度を脩め [3]、封禪し、正朔を改め、服色を易う [4]。今上本紀第十二を作る [5]。

[1] 漢興五世 儒林列傳「故漢興至于五世之間、唯董仲舒名爲明於春秋、其傳公羊氏也。」

[2] 外攘夷狄 『公羊』僖四「桓公救中國、而攘夷狄、卒怙荊、以此爲王者之事也。」

[3] 內脩法度 『新書』過秦上「當是時也、商君佐之、內立法度、務耕織、脩守戰之具。外連衡而鬥諸侯、於是秦人拱手而取西河之外。」

[4] 封禪改正朔易服色 禮書「乃以太初之元改正朔、易服色、封太山、定宗廟百官之儀、以爲典常、垂之於後云。」

[5] 作今上本紀第十二 現行本の孝武本紀は後人が封禪書の一部を載録したもので

*167 禮書「孝景時、御史大夫鼂錯明於世務刑名、數干諫孝景曰、諸侯藩輔、臣子一例、古今之制也。今大國專治異政、不稟京師、恐不可傳後。孝景用其計、而六國畔逆、以錯首名、天子誅錯以解難。」・袁盎鼂錯列傳「鄧公曰、夫鼂錯患諸侯疆大不可制、故請削地以尊京師、萬世之利也。」・吳王濞列傳「京師知其以子故稱病不朝、驗問實不病、諸吳使來、輒繫責治之。」

ある。王鳴盛『十七史商榷』卷二 / 史記二 / 武紀妄補「其有錄無書、豈誠未暇作乎、抑諱而有待也」の未制作説が当たっているよう。余嘉錫*168 は、下文「上記軒轅、下至于茲、著十二本紀」を根據に今上本紀制作を主張するが、太史公自序が本篇に先行するいわば豫告篇であることが氣づかれていない。

維三代尚矣、年紀不可考、蓋取之譜牒舊聞、本于茲、於是略推、作三代世表第一。

維れ三代尚し [1]、年紀 考う可からず [2]、蓋し之を譜牒舊聞に取り [3]、茲に本づき [4]、是に於いて略推し [5]、三代世表第一を作る。

[1] 維三代尚矣 以下、表の序である。四字句を基調とするが、逸脱も少なくない。「尚矣」は『史記』に頻見し*169、下文「司馬法所從來尚矣、…作律書第三。」にも見える。

[2] 年紀不可考 「年紀」は『史記』に初見。晉世家「靖侯已來、年紀可推。」

[3] 蓋取之譜牒舊聞 「譜牒」*170「舊聞」*171ともに『史記』に初見する。「舊聞」は。上文「小子不敏、請悉論先人所次舊聞、弗敢闕。」・下文「罔羅天下放失舊聞」にも見える。

[4] 本于茲 「于茲」は『尚書』に頻見するが、以後『史記』に至るまで見えない。

[5] 於是略推 下文「罔羅天下放失舊聞、王迹所興、原始察終、見盛觀衰、論考之行事、略推三代、錄秦漢、上記軒轅、下至于茲、著十二本紀、既科條之矣。」

幽厲之後、周室衰微、諸侯專政、春秋有所不紀。而譜牒經略、五霸更盛衰、欲睹周世相先後之意、作十二諸侯年表第二。

*168 余嘉錫「太史公書亡篇考」(『輔仁學誌』15-1、1947)。

*169 五帝本紀「太史公曰、學者多稱五帝、尚矣。」・三代世表「太史公曰、五帝、三代之記、尚矣。」・漢興以來諸侯王年表「太史公曰、殷以前尚矣。」・禮書「太史公曰、…余至大行禮官、觀三代損益、乃知緣人情而制禮、依人性而作儀、其所由來尚矣。」・曆書「太史公曰、神農以前尚矣。」・天官書「幽厲以往、尚矣。」・封禪書「自禹興而修社祀、后稷稼穡、故有稷祠、郊社所從來尚矣。」・平準書「太史公曰、…所從來久遠、自高辛氏之前尚矣、靡得而記云。」・匈奴列傳「自淳維以至頭曼千有餘歲、時大時小、別散分離、尚矣、其世傳不可得而次云。」

*170 三代世表「余讀課記、黃帝以來皆有年數。稽其曆譜課終始五德之傳、古文咸不同、乖異。」・十二諸侯年表「太史公讀春秋曆譜課、至周厲王、未嘗不廢書而歎也。」「太史公曰、…譜課獨記世謚、其辭略、」

*171 十二諸侯年表「是以孔子明王道、干七十餘君、莫能用、故西觀周室、論史記舊聞、興於魯而次春秋、上記隱、下至哀之獲麟、約其辭文、去其煩重、以制義法、王道備、人事浹。」・高祖功臣侯者年表「觀所以得尊寵及所以廢辱、亦當世得失之林也、何必舊聞。於是謹其終始、表其文、頗有所不盡本末。著其明、疑者闕之。後有君子、欲推而列之、得以覽焉。」

幽厲の後 [1]、周室衰微し [2]、諸侯 政を専らにし、春秋 ^{しる} 紀さざる所有り。而るに譜牒經略 [3]、五霸更も盛衰し [4]、周世相い先後するの意を睹んと欲し、十二諸侯年表第二を作る。

[1] 幽厲之後 「幽厲之後」は、上文「幽厲之後、王道缺、禮樂衰、孔子脩舊起廢、論詩書、作春秋、則學者至今則之。」に見える。

[2] 周室衰微 周本紀「穆王即位、春秋已五十矣。王道衰微、穆王閱文武之道缺、乃命伯羿申誡太僕國之政、作彛命。復寧。」「平王之時、周室衰微、諸侯彊并弱、齊・楚・秦・晉始大、政由方伯。」・管晏列傳「管仲世所謂賢臣、然孔子小之。豈以爲周道衰微、桓公既賢、而不勉之至王、乃稱霸哉。」

[3] 而譜牒經略 十二諸侯年表「譜牒獨記世謚、其辭略、欲一觀諸要難。」

[4] 五霸更盛衰 十二諸侯年表「於是譜十二諸侯、自共和訖孔子、表見春秋・國語學者所譏盛衰大指著于篇、爲成學治古文者要刪焉。」・孟子荀卿列傳「先序今以上至黃帝、學者所共術、大竝世盛衰、因載其禮祥度制、推而遠之、至天地未生、窈冥不可考而原也。」**春秋之後、陪臣秉政、疆國相王。以至於秦、卒并諸夏、滅封地、擅其號。作六國年表第三。**

春秋の後 [1]、陪臣 政を乗り [2]、疆國相い王たり [3]。以て秦に至り、卒に諸夏を并せ [4]、封地を滅ぼし、其の號を擅ほしいままにす。六國年表第三を作る。

[1] 春秋之後 六國年表「余於是因秦記、踵春秋之後、起周元王、表六國時事、訖二世、凡二百七十年、著諸所聞興壞之端。後有君子、以覽觀焉。」

[2] 陪臣秉政 『論語』季氏「陪臣執國命、三世希不失矣。」に由來する。類似の表現は『史記』に頻見する*172。

[3] 疆國相王 「相王」は『史記』に頻見する*173。

*172 六國年表「是後陪臣執政、大夫世祿、六卿擅晉權、征伐會盟、威重於諸侯。」・曆書「幽厲之後、周室微、陪臣執政、史不記時、君不告朔、故疇人子弟分散、或在諸夏、或在夷狄、是以其禮祥廢而不統。」・封禪書「及後陪臣執政、季氏旅於泰山、仲尼譏之。」・孔子世家「季氏亦僭於公室、陪臣執國政、是以魯自大夫以下皆僭離於正道。」

*173 六國年表「魏襄王元年與諸侯會徐州、以相王。」「(齊宣王)九 與魏會徐州、諸侯相王。」・天官書「近世十二諸侯七國相王、言從衡者繼踵、而臯・唐・甘・石因時務論其書傳、故其占驗凌雜米鹽。」・趙世家「八年、韓擊秦、不勝而去。五國相王、趙獨否、曰、無其實、敢處其名乎。令國人謂曰曰君。」・魏世家「襄王元年、與諸侯會徐州、相王也。追尊父惠王爲王。」・田世家「明

[4] 以至于秦卒并諸夏 類似の表現は『史記』に頻見する*174。

秦既暴虐、楚人發難、項氏遂亂、漢乃扶義征伐。八年之間、天下三嬗、事繁變眾、故詳著秦楚之際月表第四。

秦既に暴虐 [1]、楚人 難を發し [2]、項氏遂に亂し、漢乃ち義を扶けて征伐す [3]。八年の間、天下三嬗 [4]、事繁變眾、故に詳らかに秦楚之際月表第四を著わす。

[1] 秦既暴虐 『新書』過秦中「廢王道而立私愛、焚文書而酷刑法、先詐力而後仁義、以暴虐爲天下始。」・過秦下「二世受之、因而不改、暴虐以重禍。」

[2] 楚人發難 項羽本紀「項王欲自王、先王諸將相。謂曰、天下初發難時、假立諸侯後以伐秦。」・淮陰侯列傳「蒯通曰、天下初發難也、俊雄豪桀建號壹呼、天下之士雲合霧集、魚鱗襍遯、燦至風起。」

[3] 漢乃扶義征伐 高祖本紀「不如更遣長者扶義而西、告諭秦父兄。」・下文「扶義俶儻、不令已失時、立功名於天下、作七十列傳。」

[4] 八年之間天下三嬗 秦楚之際月表「太史公讀秦楚之際、曰、初作難、發於陳涉。虐戾滅秦、自項氏。撥亂誅暴、平定海內、卒踐帝祚、成於漢家。五年之間、號令三嬗。自生民以來、未始有受命若斯之亟也。」「八年」は秦二世元年（209BC）～漢高祖五年（202BC）、「五年」は漢高祖元年（206BC）～五年（202BC）を數える。

[5] 故詳著秦楚之際月表第四 「故詳著」は獨自の表現である。

漢興已來、至于太初百年、諸侯廢立分割、譜紀不明、有司靡踵、疆弱之原云以世。作漢興已來諸侯年表第五。

漢興りて已來 [1]、太初に至るまで百年 [2]、諸侯廢立分割、譜紀 明らかならず、有司 ^つ踵ぐ^な靡し、疆弱の原 以て世すと云う。漢興已來諸侯年表第五を作る。

[1] 漢興已來 上文「漢興以來、至明天子、」

[2] 至于太初百年 高祖功臣侯者年表「至太初百年之間」

年、與魏襄王會徐州、諸侯相王也。」・孟嘗君列傳「宣王九年、田嬰相齊。齊宣王與魏襄王會徐州而相王也。楚威王聞之、怒田嬰。」

*174 六國年表「秦始小國僻遠、諸夏賓之、比於戎翟、至獻公之後常雄諸侯。論秦之德義不如魯衛之暴戾者、量秦之兵不如三晉之彊也、然卒并天下、非必險固便形執利也、蓋若天所助焉。」・河渠書「於是關中爲沃野、無凶年、秦以富彊、卒并諸侯、因命曰鄭國渠。」・平準書「以至於秦、卒并海內。」

維高祖元功、輔臣股肱、剖符而爵、澤流苗裔、忘其昭穆、或殺身隕國。作高祖功臣侯者年表第六。

維れ高祖元功、輔臣股肱 [1]、符を剖きて爵せられ [2]、澤 苗裔に流る [3]、其の昭穆を忘れ、或いは身を殺し國を隕とす [4]。高祖功臣侯者年表第六を作る。

[1] 輔臣股肱 「輔臣」は『韓詩外傳』に初見^{*175}。「股肱」は『書』に初見^{*176}。

[2] 剖符而爵 絳侯周勃世家「賜爵列侯、剖符世世勿絶。」

[3] 澤流苗裔 上文「澤流罔極」「德流苗裔。夏桀淫驕、乃放鳴條。作夏本紀第二。」

[4] 或殺身隕國 高祖功臣侯者年表「餘皆坐法隕命亡國」

惠景之間、維申功臣宗屬爵邑、作惠景間侯者年表第七。

惠景の間、維れ功臣を申べ、宗屬爵邑あり [1]、惠景間侯者年表第七を作る。

[1] 維申功臣宗屬爵邑 下文「吳楚爲亂、宗屬唯嬰賢而喜士、士鄉之、率師抗山東滎陽。作魏其武安列傳第四十七。」

北討彊胡、南誅勁越、征伐夷蠻、武功爰列。作建元以來侯者年表第八。

北のかた彊胡を討ち、南のかた勁越を誅し [1]、夷蠻を征伐し [2]、武功爰に列す [3]。建元以來侯者年表第八を作る。

[1] 北討彊胡南誅勁越 司馬相如列傳 / 難蜀父老文「故北出師以討彊胡、南馳使以誦勁越。」・建元以來侯者年表「自是後、遂出師北討彊胡、南誅勁越、將卒以次封矣。」

[2] 征伐夷蠻 下文「嘉句踐夷蠻能脩其德、滅彊吳以尊周室、作越王句踐世家第十一。」

[3] 武功爰列 「××爰×」は、「四方爰發」(大雅 / 烝民) など『詩』に初見。

諸侯既彊、七國爲從、子弟眾多、無爵封邑、推恩行義、其執銷弱、德歸京師。作王子侯者年表第九。

諸侯既に彊く [1]、七國 從を爲す [2]、子弟眾多、爵封邑無し、恩を推し義を行い [3]、其の執銷弱、德 京師に歸す。王子侯者年表第九を作る。

*175 『韓詩外傳』卷八「五帝既没、三王既衰、能行謙德者、其惟周公乎。文王之子、武王之弟、成王之叔父、假天子之尊位七年、所執贊而帥見者十人、所還質而友見者十三人、窮巷白屋之士所先見者四十九人、時進善者百人、宮朝者千人、諫臣五人、輔臣五人、拂臣六人、載干戈以至於封侯、而同姓之士百人。」

*176 『書』酒誥「妹土嗣爾股肱純。」

[1] 諸侯既疆 下文「收殷餘民、叔封始邑、申以商亂、酒材是告、及朔之生、衛頃不寧。南子惡蒯聵、子父易名。周德卑微、戰國既疆、衛以小弱、角獨後亡。嘉彼康誥、作衛世家第七。」

[2] 七國爲從 下文「諸呂爲從、謀弱京師、而勃反經合於權。吳楚之兵、亞夫駐於昌邑、以貶齊趙、而出委以梁。作絳侯世家第二十七。」

[3] 推恩行義 漢興以來諸侯王年表「漢定百年之間、親屬益疎、諸侯或驕奢、忤邪臣計謀爲淫亂、大者叛逆、小者不軌于法、以危其命、殞身亡國。天子觀於上古、然後加惠、使諸侯得推恩分子弟國邑、故齊分爲七、趙分爲六、梁分爲五、淮南分三、及天子支庶子爲王、王子支庶爲侯、百有餘焉。」・平津侯主父列傳「偃說上曰、古者諸侯不過百里、疆弱之形易制。今諸侯或連城數十、地方千里、緩則驕奢易爲淫亂、急則阻其疆而合從以逆京師。今以法割削之、則逆節萌起、前日鼂錯是也。今諸侯子弟或十數、而適嗣代立、餘雖骨肉、無尺寸地封、則仁孝之道不宣。願陛下令諸侯得推恩分子弟、以地侯之。彼人人喜得所願、上以德施、實分其國、不削而稍弱矣。於是上從其計。」

國有賢相良將、民之師表也。維見漢興以來將相名臣年表、賢者記其治、不賢者彰其事。作漢興以來將相名臣年表第十。

國に賢相良將有り [1]、民の師表なり。維れ漢興以來將相名臣年表^{あら}を見わし、賢者其の治を記し、不賢者 其の事を彰わす。漢興以來將相名臣年表第十を作る。

[1] 國有賢相良將 秦始皇本紀「太史公曰、…善哉乎賈生推言之也。曰、…當此之世、賢智竝列、良將行其師、賢相通其謀、」『新書』過秦下は下線部を缺く。

維三代之禮、所損益各殊務、然要以近性情、通王道、故禮因人質爲之節文、略協古今之變。作禮書第一。

維れ三代之禮 [1]、損益する所 各の務めを殊にす [2]、然るに要するに性情に近く、王道を通ずるを以てす、故に禮は人質に因りて之が節文を爲し [3]、略ぼ古今の變に協う [4]。禮書第一を作る。

[1] 維三代之禮 以下、書の序である。四字句からの逸脱はいよいよ甚だしい。孔子世家「孔子之時、周室微而禮樂廢、詩書缺。追迹三代之禮、序書傳、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事。」

[2] 所損益各殊務 『論語』爲政「子張問、十世可知也。子曰、殷因於夏禮、所損益、

可知也。周因於殷禮、所損益、可知也。其或繼周者、雖百世、可知也。」

[3] 然要以近性情通王道故禮因人質爲之節文 禮書「太史公曰、洋洋美德乎。宰制萬物、役使羣眾、豈人力也哉。余至大行禮官、觀三代損益、乃知緣人情而制禮、依人性而作儀、其所由來尚矣。人道經緯萬端、規矩無所不貫、誘進以仁義、束縛以刑罰、故德厚者位尊、祿重者寵榮、所以總一海內而整齊萬民也。人體安駕乘、爲之金輿錯衡以繁其飾。目好五色、爲之黼黻文章以表其能。耳樂鐘磬、爲之調諧八音以蕩其心。口甘五味、爲之庶羞酸醎以致其美。情好珍善、爲之琢磨圭璧以通其意。故大路越席、皮弁布裳、朱弦洞越、大羹玄酒、所以防其淫侈、救其彫敝。是以君臣朝廷尊卑貴賤之序、下及黎庶車輿衣服宮室飲食嫁娶喪祭之分、事有宜適、物有節文。仲尼曰、禘自既灌而往者、吾不欲觀之矣。」·劉敬叔孫通列傳「叔孫通曰、五帝異樂、三王不同禮。禮者、因時世人情爲之節文者也。故夏·殷·周之禮所因損益可知者、謂不相復也。臣願頗采古禮與秦儀雜就之。」

[4] 略協古今之變 『淮南子』要略「本經者、所以明大聖之德、通維初之道、埒略衰世古今之變、以褒先世之隆盛、而貶末世之曲政也。」·報任安書「亦欲以究天人之際、通古今之變、成一家之言。」

樂者、所以移風易俗也。自雅頌聲興、則已好鄭衛之音、鄭衛之音所從來久矣。人情之所感、遠俗則懷。比樂書以述來古、作樂書第二。

樂なる者は、風を移し俗を易うる [1] 所以なり。雅頌の聲 [2] 興る自り、則ち已に鄭衛の音 [3] を好む、鄭衛の音従りて來る所久し [4]。人情の感ずる所、遠俗則ち懷く。樂書を比して以て來古を述ぶ、樂書第二を作る。

[1] 移風易俗 樂書「故樂行而倫清、耳目聰明、血氣和平、移風易俗、天下皆寧。」以下、樂書の記述は『禮記』樂記の引用である。

[2] 雅頌聲 / 人情之所感 樂書「夫樂者樂也、人情之所不能免也。樂必發諸聲音、形於動靜、人道也。聲音動靜、性術之變、盡於此矣。故人不能無樂、樂不能無形。形而不爲道、不能無亂。先王惡其亂、故制雅頌之聲以道之、使其聲足以樂而不流、使其文足以綸而不息、使其曲直繁省廉肉節奏、足以感動人之善心而已矣、不使放心邪氣得接焉、是先王立樂之方也。是故樂在宗廟之中、君臣上下同聽之、則莫不和敬。在族長鄉里之中、長幼同聽之、則莫不和順。在閭門之內、父子兄弟同聽之、則莫不和親。故

樂者、審一以定和、比物以飾節、節奏合以成文、所以合和父子君臣、附親萬民也、是先王立樂之方也。故聽其雅頌之聲、志意得廣焉。執其干戚、習其俯仰誦信、容貌得莊焉。行其綴兆、要其節奏、行列得正焉、進退得齊焉。故樂者天地之齊、中和之紀、人情之所不能免也。」

[3] 鄭衛之音 樂書「鄭衛之音、亂世之音也、比於慢矣。」「吾端冕而聽古樂則唯恐臥、聽鄭衛之音則不知倦。」

[4] 所從來久矣 天官書「二十八舍主十二州、斗秉兼之、所從來久矣。」平準書「太史公曰、農工商交易之路通、而龜貝金錢刀布之幣興焉。所從來久遠、自高辛氏之前尚矣、靡得而記云。」

非兵不彊、非德不昌、黃帝・湯・武以興、桀・紂・二世以崩、可不慎歟。司馬法所從來尚矣、太公・孫・吳・王子能紹而明之、切近世、極人變。作律書第三。

兵に非ざれば彊からず、徳に非ざれば昌えず [1]、黃帝・湯・武以て興り、桀・紂・二世以て崩ず [2]、愼まざる可けんや [3]。司馬法 従りて來たる所尚し [4]、太公・孫・吳・王子能く紹ぎて之を明らかにし [5]、近世に切にして [6]、人變を極む [7]。律書第三を作る [8]。

[1] 非兵不彊非徳不昌 『淮南子』要略「兵略者、所以明戰勝攻取之數、形機之勢、詐譎之變、體因循之道、操持後之論也。所以知戰陣分爭之非道不行也、知攻取堅守之非徳不強也。誠明其意、進退左右無所失擊危、乘勢以爲資、清靜以爲常、避實就虛、若驅群羊、此所以言兵者也。」

[2] 黃帝湯武以興桀紂二世以崩 黃帝・湯・武を並べる事例は見えない。桀・紂・二世を並べることは、『新語』術事「周公與堯・舜合符瑞、二世與桀・紂同禍殃。」に見える。

[3] 可不愼歟 『孟子』に初見*177。『史記』に類見する*178。

[4] 司馬法所從來尚矣 「所從來」は上文「鄭衛之音所從來久矣。…作樂書第二。」に見える。

*177 『孟子』梁惠王下「國君進賢。如不得已。將使卑踰尊。疏踰戚。可不愼與。」

*178 魯世家「毋逸稱、爲人父母、爲業至長久、子孫驕奢忘之、以亡其家、爲人子可不愼乎。」・楚世家「太史公曰、…勢之於人也、可不愼與。」・外戚世家「夫樂調而四時和、陰陽之變、萬物之統也。可不愼與。」

[5] 太公孫吳王子能紹而明之 「王子」は王子成父。『左傳』文十一（616BC）に「齊襄公之二年（696BC）」に長狄榮如を破ったとあるが、魯世家は「齊惠公之二年（607BC）」に作り、齊世家「惠公二年、長翟來、王子城父 攻殺之、埋之於北門。」・十二諸侯年表「（齊惠公）二 王子成父敗長翟。」も齊惠公二年に繋げる。榮如は、魯文公十一年（616BC）に戦死した長狄僑如の弟なので、齊惠公二年とすべきであり、『左傳』は「惠」を「襄」に誤寫したものとなる*179。

『左傳』文十一	魯世家
冬十月甲午、敗狄于鹹、獲長狄僑如。富父終甥椿其喉以戈、殺之、埋其首於子駒之門、以命宣伯。 初、宋武公之世、鄭瞞伐宋。司徒皇父帥師禦之、彤班御皇父充石、公子穀甥爲右、司寇牛父駟乘、以敗狄于長丘、獲長狄緣斯、皇父之二子死焉。宋公於是以前賞彤班、使食其征、謂之彤門。 晉之滅潞也、獲僑如之弟焚如。齊襄公之二年、鄭瞞伐齊、齊王子成父獲其弟榮如、埋其首於周首之北門。衛人獲其季弟簡如、鄭瞞由是遂亡。	十一年十月甲午、魯敗翟于鹹、獲長翟僑如、富父終甥春其喉以戈、殺之、埋其首於子駒之門、以命宣伯。 初、宋武公之世、鄭瞞伐宋、司徒皇父帥師禦之、以敗翟于長丘、獲長翟緣斯。 晉之滅潞、獲僑如弟焚如。齊惠公二年、鄭瞞伐齊、齊王子城父獲其弟榮如、埋其首於北門。衛人獲其季弟簡如。鄭瞞由是遂亡。

「紹而明之」は、天官書「太史公曰、自初生民以來、世主曷嘗不曆日月星辰。及至五家、三代、紹而明之、」に見える。

[6] 切近世 「近世」は『大戴禮』に初見*180。『史記』に頻見し*181、下文「智足以應

*179 陸燾『左傳附註』卷一 / 文公十一年。

*180 『大戴禮』曾子制言上「近世無賈、在田無野、行無據旅、苟若此、則夫杖可因篤焉。」

*181 天官書「近世十二諸侯七國相王、言從衡者繼踵、而皋・唐・甘・石因時務論其書傳、故其占驗凌雜米鹽。」・伯夷列傳「若至近世、操行不軌、專犯忌諱、而終身逸樂、富厚累世不絕。」・平原君虞卿列傳「虞卿既以魏齊之故、不重萬戶侯卿相之印、與魏齊間行、卒去趙、困於梁。魏齊已死、不得意、乃著書、上採春秋、下觀近世、曰節義・稱號・揣摩・政謀、凡八篇。以刺譏國家得失、世傳之曰虞氏春秋。」・平津侯主父列傳「夫上不觀虞夏殷周之統、而下（脩）〔循〕近世之失、此臣之所大憂、百姓之所疾苦也。」・淮南衡山列傳「夫百年之秦、近世之吳楚、亦足以喻國家之存亡矣。」・游俠列傳「近世延陵・孟嘗・春申・平原・信陵之徒、皆因王者親屬、藉於有土卿相之富厚、招天下賢者、顯名諸侯、不可謂不賢者矣。」・龜策列傳「近世江上人有得名龜、畜置之、家因大富。」・貨殖列傳「必用此爲務、輒近世塗民耳目、則幾無行矣。」

近世之變、寬足用得人。作韓長孺列傳第四十八。」にも見える。

[7] 極人變 『春秋繁露』官制象天「人之材固有四選、如天之時固有四變也。聖人爲一選、君子爲一選、善人爲一選、正人爲一選、由此而下者、不足選也。四選之中、各有節也。是故天選四堤、十二而人變盡矣。盡人之變、合之天、唯聖人者能之、所以立王事也。」

[8] 作律書第三 『漢書』司馬遷傳「遷之自敘云爾。而十篇缺、有錄無書。」に對する張晏注に「遷沒之後、亡景紀・武紀・禮書・樂書・兵書・漢興以來將相年表・日者列傳・三王世家・龜策列傳・傅靳列傳。元成之間褚先生補缺、作武帝紀・三王世家・龜策・日者傳、言辭鄙陋、非遷本意也。」とあり、『史記索隱』太史公自序はこれを承けて「兵書亡、不補、略述律而言兵、遂分曆述以次之。」とする。兵書第三・律曆書第四のうち律曆書の律の部分分割して兵書の缺落を埋め、ついで後人が律書第三・曆書第四に改めたとする説がある^{*182}。曆書の序は律曆雙方に及んでおり、「兵書第三・律曆書第四」説を支持する。

律居陰而治陽、曆居陽而治陰、律曆更相治、間不容鬮忽。五家之文怫異、維太初之元論。作曆書第四。

律 陰に居りて陽を治め、曆 陽に居りて陰を治め、律曆更も相い治め、間 鬮忽を容れず [1]。五家の文怫異、維れ太初の元に論ず [2]。曆書第四を作る。

[1] 律居陰而治陽曆居陽而治陰律曆更相治間不容鬮忽 『大戴禮』曾子天圓「律居陰而治陽、曆居陽而治陰、律曆迭相治也、其間不容髮。」

[2] 五家之文怫異維太初之元論 『史記正義』太史公自序「五家謂黃帝・顓頊・夏・殷・周之曆、其文相戾、乖異不同、維太初之元論曆律爲是、故曆書自太初之元論之也。」
星氣之書、多雜禳祥、不經。推其文、考其應、不殊。比集論其行事、驗于軌度以次、作天官書第五。

星氣の書、多く禳祥を雜え [1]、不經 [2]。其の文を推し、其の應を考うるに [3]、殊らず。比集して其の行事を論じ [4]、軌度に驗して以て次す [5]、天官書第五を作る。

[1] 星氣之書多雜禳祥 「星氣」は『史記』に初見。天官書「爭於攻取、兵革更起、城邑數屠、因以饑饉疾疫焦苦、臣主共憂患、其察禳祥候星氣尤急。」そのほか、「星氣」

*182 余嘉錫「太史公書亡篇考」(『輔仁學誌』15-1、1947)。

は『史記』に頻見する*183。「禋祥」は『淮南子』に初見*184。同じく『史記』に頻見する*185。

[2] 不經 「不經」は『左傳』に初見*186。封禪書「卿因所忠欲奏之。所忠視其書不經、疑其妄書、…。」「上念諸儒及方士言封禪人人殊、不經、難施行。」・孟子荀卿列傳「其語闕大不經、必先驗小物、推而大之、至於無垠。」など方術を非難する用例ばかりである。

[3] 推其文考其應 天官書「太史公推古天變、未有可考于今者。」「其應」は『荀子』に初見*187。封禪書「自古受命帝王、曷嘗不封禪。蓋有無其應而用事者矣、未有睹符瑞見而不臻乎泰山者也。」に見える。

[4] 比集論其行事 「其行事」は、『史記』に頻見する*188。

*183 秦始皇本紀「然候星氣者至三百人、皆良士、畏忌諱諛、不敢端言其過。」・淮南衡山列傳「衡山王以此患、與奚慈、張廣昌謀、求能爲兵法候星氣者、日夜從容王密謀反事。」・佞幸列傳「孝文時中寵臣、士人則鄧通、宦者則趙同、北宮伯子。北宮伯子以愛人長者。而趙同以星氣幸、常爲文帝參乘。鄧通無伎能。」

*184 『淮南子』本經訓「故至人之治也、心與神處、形與性調、靜而體德、動而理通、隨自然之性而緣不得已之化、洞然無爲而天下自和、愴然無欲而民自樸、無禋祥而民不夭、不忿爭而養足、兼包海內、澤及後世、不知爲之者誰何。」・汜論訓「夫見不可布於海內、聞不可明於百姓、是故因鬼神禋祥而爲之立禁、總形推類而爲之變象。」・說山訓「明於奇正資・陰陽・刑德・五行・望氣・候星・龜策・禋祥、此善爲天道者也。」

*185 曆書「幽厲之後、周室微、陪臣執政、史不記時、君不告朔、故疇人子弟分散、或在諸夏、或在夷狄、是以其禋祥廢而不統。」・天官書「幽厲以往、尚矣。所見天變、皆國殊窟穴、家占物怪、以合時應、其文圖籍禋祥不法。」・五宗世家「彭祖不好治宮室、禋祥、好爲吏事。」・孟子荀卿列傳「騶衍睹有國者益淫侈、不能尚德、若大雅整之於身、施及黎庶矣。乃深觀陰陽消息而作怪迂之變、終始・大聖之篇十餘萬言。其語闕大不經、必先驗小物、推而大之、至於無垠。先序今以上至黃帝、學者所共術、大竝世盛衰、因載其禋祥度制、推而遠之、至天地未生、窈冥不可考而原也。」・荀卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道而營於巫祝、信禋祥、鄙儒小拘、如莊周等又猾稽亂俗、於是推儒・墨・道德之行事興壞、序列著數萬言而卒。」

*186 『左傳』襄二十六「故夏書曰、與其殺不辜、寧失不經。懼失善也。」・昭十三「叔向曰、國家之敗、有事而無業、事則不經。」

*187 『荀子』儒效「若夫誦德而定次、量能而授官、使賢不肖皆得其位、能不能皆得其官、萬物得其宜、事變得其應、愼墨不得進其談、惠施・鄧析不敢竄其察、言必當理、事必當務、是然後君子之所長也。」

*188 管晏列傳「太史公曰、…既見其著書、欲觀其行事、故次其傳。」・孫子吳起列傳「太史公曰、…世俗所稱師旅、皆道孫子十三篇、吳起兵法、世多有、故弗論、論其行事所施設者。」・蘇秦列傳「太史公曰、…吾故列其行事、次其時序、毋令獨蒙惡聲焉。」・龜策列傳「余至江南、觀其行事、問其長老、」

[5] 驗于軌度以次 「軌度」は『呂氏春秋』に初見*189。

受命而王、封禪之符罕用、用則萬靈罔不禋祀。追本諸神名山大川禮、作封禪書第六。

受命して王たり [1]、封禪の符罕まれに用う [2]、用うれば則ち萬靈 禋祀せざる罔し [3]。諸神名山大川の禮を追本す [4]。封禪書第六を作る。

[1] 受命而王 『韓詩外傳』に初見*190。「受命而王 / 帝」は『史記』に頻見する*191。

[2] 封禪之符罕用 呂太后本紀「史公曰、孝惠皇帝、高后之時、黎民得離戰國之苦、君臣俱欲休息乎無爲、故惠帝垂拱、高后女主稱制、政不出房戶、天下晏然。刑罰罕用、罪人是希。民務稼穡、衣食滋殖。」

[3] 用則萬靈罔不禋祀 「萬靈」は封禪書「其後黃帝接萬靈明廷」に見える。「罔不」は、殷本紀「今我民罔不欲喪、」*192・秦始皇本紀「二十有六年、初并天下、罔不賓服。」・魯世家「四方之民罔不敬畏。」*193・司馬相如列傳 / 難蜀父老文「於是乃命使西征、隨流而攘、風之所被、罔不披靡。」

[4] 追本諸神名山大川禮 封禪書「太史公曰、余從巡祭天地諸神名山川而封禪焉。」「名山大川」は、『呂氏春秋』に初見*194。『史記』に頻見する*195。

維禹浚川、九州攸寧。爰及宣防、決瀆通溝。作河渠書第七。

維れ禹 川を浚い [1]、九州の寧んずる攸 [2]。爰に宣防に及び [3]、瀆を決し溝を通ず [4]。河渠書第七を作る。

[1] 維禹浚川 「維×××」以下、四字句を用いる。河渠書「書曰、禹抑洪水十三年、過家不入門。陸行載車、水行載舟、泥行蹈屨、山行即橋。以別九州、隨山浚川、任土

*189 『呂氏春秋』古樂「殷湯即位、夏爲無道、暴虐萬民、侵削諸侯、不用軌度、天下患之。」

*190 『韓詩外傳』卷十「季遂立、而養文王、文王果受命而王。」

*191 秦楚之際月表「非大聖孰能當此受命而帝者乎。」・禮書「上聞之、制詔御史曰、蓋受命而王、各有所由興、殊路而同歸、謂因民而作、追俗爲制也。」・封禪書「唯受命而帝者心知其意而合德焉。」

*192 『書』西伯戡黎「今我民罔弗欲喪。」

*193 『書』金縢「四方之民、罔不祇畏。」

*194 『呂氏春秋』季夏紀「令民無不咸出其力、以供皇天上帝、名山大川、四方之神、以祀宗廟社稷之靈、爲民祈福。」

*195 六國年表「禮曰、天子祭天地、諸侯祭其域內名山大川。」・封禪書「天子祭天下名山大川、五嶽視三公、四瀆視諸侯、諸侯祭其疆內名山大川。」「於是始皇遂東遊海上、行禮祠名山大川及八神、求僊人羨門之屬。」「自五帝以至秦、軼興軼衰、名山大川或在諸侯、或在天子、其禮損益世殊、不可勝記。及秦并天下、令祠官所常奉天地名山大川鬼神可得而序也。」「始名山大川在諸侯、諸侯祝各自奉祠、天子官不領。」

作貢。」

[2] 九州攸寧 『書』禹貢は「九州攸同」に作る。夏本紀「於是九州攸同、四奧既居、九山葉旅、九川滌原、九澤既陂、四海會同。」*196。また上文「維禹之功、九州攸同、光唐虞際、德流苗裔。夏桀淫驕、乃放鳴條。作夏本紀第二。」「攸寧」は『詩』小雅 / 斯干「君子攸寧」に初見。下文「與信定魏、破趙拔齊、遂弱楚人。續何相國、不變不革、黎庶攸寧。嘉參不伐功矜能、作曹相國世家第二十四。」にも見える。

[3] 爰及宣房 「爰及」は『史記』に散見する*197。また上文「夫天下稱誦周公、言其能論歌文武之德、宣周邵之風、達太王王季之思慮、爰及公劉、以尊后稷也。」「維契作商、爰及成湯。太甲居桐、德盛阿衡。武丁得説、乃稱高宗。帝辛湛湏、諸侯不享。作殷本紀第三。」・下文「維建遇讒、爰及子奢、尚既匡父、伍員奔吳。作伍子胥列傳第六。」にも見える。「宣房」は、「於是卒塞瓠子、築宮其上、名曰宣房宮。」など河渠書に見える。

[4] 決瀆通溝 「決瀆」*198 「通溝」*199 とともに『管子』に初見。

維幣之行、以通農商。其極則玩巧、并兼茲殖、爭於機利、去本趨末。作平準書以觀事變、第八。

維れ幣の行わるるや [1]、以て農商を通ず [2]。其の極は則ち玩巧 [3]、并兼茲よ殖え [4]、機利に争い [5]、本を去りて末に趨る [6]。平準書を作り以て事變を観る、第八 [7]。

[1] 維幣之行 「維×××」以下、ほぼ四字句を用いる。

[2] 以通農商 平準書「太史公曰、農工商交易之路通、而龜貝金錢刀布之幣興焉。」・貨殖列傳「人民矜懽伎、好氣、任俠爲姦、不事農商。」

[3] 其極則玩巧 貨殖列傳「(武)〔孝〕、昭治咸陽、因以漢都、長安諸陵、四方輻湊

*196 『書』禹貢「九州攸同。四隩既宅。九山刊旅。九川滌源。九澤既陂。四海會同。」

*197 高祖功臣侯者年表「太史公曰、…封爵之誓曰、使河如帶、泰山若厲。國以永寧、爰及苗裔。」・伯夷列傳「父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎。」・衛將軍驃騎列傳「於是天子嘉驃騎之功曰、驃騎將軍去病率師攻匈奴西域王渾邪、王及厥衆萌咸相犇、率以軍糧接食、并將控弦萬有餘人、誅獍驛、獲首虜八千餘級、降異國之王三十二人、戰士不離傷、十萬之衆咸懷集服、仍與之勞、爰及河塞、庶幾無患、幸既永綏矣。以千七百戶益封驃騎將軍。」

*198 『管子』形勢解「神農教耕生穀、以致民利、禹身決瀆、斬高橋下、以致民利、湯武征伐無道、誅殺暴亂、以致民利。」

*199 『管子』立政「洪水潦、通溝瀆、修障防、安水藏、使時水雖過度、無害于五穀。歲雖凶旱、有所粉稷、司空之事也。」

竝至而會、地小人眾、故其民益玩巧而事末也。」

[4] 并兼茲殖 平準書「於是天子與公卿議、更錢造幣以贍用、而摧浮淫并兼之徒。」・平津侯主父列傳「茂陵初立、天下豪桀并兼之家、亂衆之民、皆可徙茂陵、內實京師、外銷姦猾、此所謂不誅而害除。」・酷吏列傳「於是丞上指、請造白金及五銖錢、籠天下鹽鐵、排富商大賈、出告緡令、鉏豪彊并兼之家、舞文巧詆以輔法。」・貨殖列傳「其在閭巷少年、攻剽椎埋、劫人作姦、掘冢鑄幣、任俠并兼、借交報仇、篡逐幽隱、不避法禁、走死地如鶩者、其實皆爲財用耳。」

[5] 爭於機利 貨殖列傳「中山地薄人眾、猶有沙丘紂淫地餘民、民俗懷急、仰機利而食。」「齊・趙設智巧、仰機利。」

[6] 去本趨末 「×本×末」は、『國語』齊語「溥本肇末」に初見。貨殖列傳「故書道唐虞之際、詩述殷周之世、安寧則長庠序、先本緇末、以禮義防于利。事變多故而亦反是。」

[7] 作平準書以觀事變第八 「以觀事變」の挿入は異例である。

太伯避歷、江蠻是適。文武攸興、古公王跡。闔廬弒僚、賓服荊楚。夫差克齊、子胥鴟夷。信詒親越、吳國既滅。嘉伯之讓、作吳世家第一。

太伯 歴を避け [1]、江蠻に是れ適く [2]。文武の興る攸、古公の王跡 [3]。闔廬僚を弒し、荊楚を賓服せしむ。夫差 齊に克ち、子胥鴟夷せらる [4]。詒を信じ越に親しみ [5]、吳國既に滅ぶ。伯の讓を嘉し [6]、吳世家第一を作る [7]。

[1] 太伯避歴 以下、世家の序である。四字句を基調とする。

[2] 江蠻是適 「江蠻」は他に用例を得ず、吳世家「吳太伯、太伯弟仲雍、皆周太王之子、而王季歴之兄也。季歴賢、而有聖子昌、太王欲立季歴以及昌、於是太伯、仲雍二人乃奔荊蠻、文身斷髮、示不可用、以避季歴。」は「荊蠻」に作る。あるいは下文「賓服荊楚」との「荊」字の重複を嫌ったものかもしれない。「××是×」は「南國是式」(大雅 / 崧高) の如く『詩』に見える。世家の序に専用される。

[3] 文武攸興古公王跡 下文「韓厥陰德、趙武攸興。…作韓世家第十五。」「罔羅天下放失舊聞、王跡所興、原始察終、見盛觀衰、論考之行事、」

[4] 子胥鴟夷 「鴟夷」は吳世家に見えず、伍子胥列傳「吳王聞之大怒、乃取子胥尸盛以鴟夷革、浮之江中。吳人憐之、爲立祠於江上、因命曰胥山。」・樂毅列傳「臣聞之、

善作者不必善成、善始者不必善終。昔伍子胥說聽於闔閭、而吳王遠迹至郢。夫差弗是也、賜之鴟夷而浮之江。吳王不寤先論之可以立功、故沈子胥而不悔。子胥不蚤見主之不同量、是以至於入江而不化。」・魯仲連鄒陽列傳「臣聞比干剖心、子胥鴟夷、臣始不信、乃今知之。」などに見える。當初、吳世家收める豫定だった逸話を結局收めなかったわけである。同様の事例は散見し、序の本篇に對する先行を傍證する。

[5] 信嚳親越 吳世家「吳王不聽、聽太宰嚳、卒許越平、與盟而罷兵去。」

[6] 嘉伯之讓 世家序の末二句は、「嘉…、作…」の書式を採る。殷本紀「帝太甲居桐宮三年、悔過自責、反善、於是伊尹迺迎帝太甲而授之政。帝太甲修德、諸侯咸歸殷、百姓以寧。伊尹嘉之、迺作太甲訓三篇、褒帝太甲、稱太宗。」・魯世家「周公既受命禾、嘉天子命、作嘉禾。」に「嘉…、作…」が見え、魯世家は、『書序』「周公既得命禾、旅天子之命、作嘉禾。」に據る。「嘉…、作…」は『書序』を參照して創出された書式となろう。

[7] 作吳世家第一 本篇・『漢書』司馬遷傳ともに「吳太伯世家」に作る。以下、吳世家第一～田完世家第十六は先秦諸侯世家である。越王句踐世家第十一を除き、亡國に關する否定的な言辭を有する。

申・呂肖矣、尚父側微、卒歸西伯、文武是師。功冠羣公、繆權于幽。番番黃髮、爰饗營丘。不背柯盟、桓公以昌、九合諸侯、霸功顯彰。田闕爭寵、姜姓解亡。嘉父之謀、作齊太公世家第二。

申・呂肖^{けず}られ [1]、尚父側微 [2]、卒に西伯に歸し、文武是れ師とす [3]。功 羣公に冠たり [4]、幽に繆權す [5]。番番たる黃髮 [6]、爰に營丘を饗く。柯の盟に背かず、桓公以て昌う [7]、諸侯を九合し [8]、霸功顯彰す [9]。田闕 寵を争い [10]、姜姓解亡す。父の謀を嘉し、齊太公世家第二を作る。

[1] 申呂肖矣 齊世家「太公望呂尚者、東海上人。其先祖嘗爲四嶽、佐禹平水土甚有功。虞夏之際封於呂、或封於申、姓姜氏。夏商之時、申・呂或封枝庶子孫、或爲庶人、尚其後苗裔也。本姓姜氏、從其封姓、故曰呂尚。」

[2] 尚父側微 『書序』舜典「虞舜側微、堯聞之聰明、將使嗣位、歷試諸難、作舜典。」

[3] 卒歸西伯文武是師 齊世家「或曰、太公博聞、嘗事紂。紂無道、去之。游說諸侯、無所遇、而卒西歸周西伯。或曰、呂尚處士、隱海濱。周西伯拘姜里、散宜生・閔夭素

知而招呂尚。呂尚亦曰、吾聞西伯賢、又善養老、盍往焉。三人者爲西伯求美女奇物、獻之於紂、以贖西伯。西伯得以及出、反國。言呂尚所以事周雖異、然要之爲文武師。」

[4] 功冠羣公 「功冠」は、黥布列傳「楚兵常勝、功冠諸侯。」「太史公曰、…功冠諸侯、用此得王、亦不免於身爲世大僂。」に見え、「群公」は、齊世家「居二年、紂殺王子比干、囚箕子。武王將伐紂、卜龜兆、不吉、風雨暴至。群公盡懼、唯太公彊之勸武王、武王於是遂行。十一年正月甲子、誓於牧野、伐商紂。紂師敗績。紂反走、登鹿臺、遂追斬紂。明日、武王立于社、群公奉明水、衛康叔封布采席、師尚父牽牲、史佚策祝、以告神討紂之罪。散鹿臺之錢、發鉅橋之粟、以振貧民。封比干墓、釋箕子囚。遷九鼎、脩周政、與天下更始。師尚父謀居多。」に見える。

[5] 繆權于幽 『史記集解』「徐廣曰、繆、錯也、猶云纏結也。權智潛謀、幽昧不顯、所謂太公陰謀。」・『史記索隱』「案、繆謂綱繆也、音亡又反。又謂太公綱繆、爲權謀於幽昧不明著、謂太公之陰謀也。」・『史記正義』「繆音武彪反。言呂尚綱繆於幽權之策、謂六韜・三略・陰符・七術之屬也。」

[6] 番番黃髮 秦本紀「三十六年、繆公復益厚孟明等、使將兵伐晉、渡河焚船、大敗晉人、取王官及郟、以報殽之役。晉人皆城守不敢出。於是繆公乃自茅津渡河、封殽中尸、爲發喪、哭之三日。乃誓於軍曰、嗟士卒。聽無譁、余誓告汝。古之人謀黃髮番番、則無所過。^{*200}以申思不用蹇叔、百里奚之謀、故作此誓、令後世以記余過。君子聞之、皆爲垂涕、曰、嗟乎。秦繆公之與人周也、卒得孟明之慶。」

[7] 不背柯盟桓公以昌 齊世家「五年、伐魯、魯將師敗。魯莊公請獻遂邑以平、桓公許、與魯會柯而盟。魯將盟、曹沫以匕首劫桓公於壇上、曰、反魯之侵地。桓公許之。已而曹沫去匕首、北面就臣位。桓公後悔、欲無與魯地而殺曹沫。管仲曰、夫劫許之而倍信殺之、愈一小快耳、而弃信於諸侯、失天下之援、不可。於是遂與曹沫三敗所亡地

*200 『書』秦誓「秦穆公伐鄭。晉襄公帥師敗諸嵒。還歸作秦誓。公曰。嗟。我士。聽無譁。予誓告汝羣言之首。古人有言曰。民訟自若是多盤。責人斯無難。惟受責俾如流。是惟艱哉。我心之憂。日月逾邁。若弗云來。惟古之謀人。則曰未就予忌。惟今之謀人。姑將以爲親。雖則云然。尚猷詢茲黃髮。則罔所愆。番番良士。旅力既愆。我尚有之。伉伉勇夫。射御不違。我尚不欲。惟截截善諂言。俾君子易辭。我皇多有之。昧昧我思之。如有一介臣。斷斷猗。無他伎。其心休休焉。其如有容。人之有技。若已有之。人之彥聖。其心好之。不啻若自其口出。是能容之。以保我子孫黎民。亦職有利哉。人之有技。冒疾以惡之。人之彥聖而違之。俾不違。是不能容。以不能保我子孫黎民。亦曰殆哉。邦之杌隉。曰由一人。邦之榮懷。亦尚一人之慶。」

於魯。諸侯聞之、皆信齊而欲附焉。七年、諸侯會桓公於甄、而桓公於是始霸焉。」「以昌」は商君列傳「武王諤諤以昌、殷紂墨墨以亡。」に見える。

[8] 九合諸侯 齊世家「寡人兵車之會三、乘車之會六、九合諸侯、一匡天下。」

[9] 霸功顯彰 『淮南子』汜論訓「昔者曹子爲魯將兵、三戰不勝、亡地千里。使曹子計不顧後、足不旋踵、勿頸於陳中、則終身爲破軍擒將矣。然而曹子不羞其敗、恥死而無功。柯之盟、揄三尺之刃、造桓公之胸、三戰所亡、一朝而反之、勇聞于天下、功立於魯國。管仲輔公子糾而不能遂、不可謂智。遁逃奔走、不死其難、不可謂勇。束縛桎梏、不諱其恥、不可謂貞。當此三者、布衣弗友、人君弗臣。然而管仲免於累繼之中、立齊國之政、九合諸侯、一匡天下。使管仲出死捐軀、不顧後圖、豈有此霸功哉。」

[10] 田闞爭寵 齊世家「簡公四年春、初、簡公與父陽生俱在魯也、監止有寵焉。」「左傳』哀十四「齊簡公之在魯也、闞止有寵焉。」は「監」を「闞」に作る。

依之違之、周公綏之。憤發文德、天下和之。輔翼成王、諸侯宗周。隱桓之際、是獨何哉。三桓爭疆、魯乃不昌。嘉旦金縢、作周公世家第三。

之に依り之に違ひ、周公 之を綏んず [1]。文德を憤發し [2]、天下 之に和す [3]。成王を輔翼し [4]、諸侯 周を宗とす [5]。隱桓の際 [6]、是れ獨り何ぞや [7]。三桓 疆を争ひ [8]、魯乃ち昌えず [9]。旦の金縢を嘉し、周公世家第三を作る [10]。

[1] 依之違之周公綏之 『詩』小雅 / 鴛鴦「乘馬在廄、秣之摧之。君子萬年、福祿綏之。」に類似の句法が見える。

[2] 憤發文德 「憤發」は上文「子羽暴虐、漢行功德。憤發蜀漢、還定三秦。誅籍業帝、天下惟寧、改制易俗。作高祖本紀第八。」に見える。「文德」は、『左傳』昭三十二「昔成王合諸侯城成周、以爲東都、崇文德焉。」に見える。

[3] 天下和之 樂書「喜則天下和之、怒則暴亂者畏之。」

[4] 輔翼成王 魯世家「及武王即位、且常輔翼武王、用事居多。」

[5] 諸侯宗周 「宗」を動詞として用いることは『史記』に初見する*201。

*201 周本紀「宣王即位、二相輔之、脩政、法文・武・成・康之遺風、諸侯復宗周。」・管蔡世家「太史公曰、管蔡作亂、無足載者。然周武王崩、成王少、天下既疑、頼同母之弟成叔、母季之屬十人爲輔拂、是以諸侯卒宗周、故附之世家言。」・伯夷列傳「武王已平殷亂、天下宗周、而伯夷・叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之。」下文に「嘉威・宣能撥濁世而獨宗周、作田敬仲完世家第十六。」と見える。

[6] 隱桓之際 魯周公世家「太史公曰、余聞孔子稱曰、甚矣魯道之衰也。洙泗之間斷斷如也。觀慶父及叔牙閔公之際、何其亂也。隱桓之事。襄仲殺適立庶。三家北面爲臣、親攻昭公、昭公以奔。至其揖讓之禮則從矣、而行事何其戾也。」

[7] 是獨何哉 衛世家「太史公曰、余讀世家言、至於宣公之太子以婦見誅、弟壽爭死以相讓、此與晉太子申生不敢明驪姬之過同、俱惡傷父之志。然卒死亡、何其悲也。或父子相殺、兄弟相滅、亦獨何哉。」

[8] 三桓爭彊 魯世家「十八年二月、文公卒。文公有二妃、長妃齊女爲哀姜、生子惡及視。次妃敬嬴、嬖愛、生子倭。倭私事襄仲、襄仲欲立之、叔仲曰不可。襄仲請齊惠公、惠公新立、欲親魯、許之。冬十月、襄仲殺子惡及視而立倭、是爲宣公。哀姜歸齊、哭而過市、曰、天乎。襄仲爲不道、殺適立庶。市人皆哭、魯人謂之哀姜。魯由此公室卑、三桓彊。」

[9] 魯乃不昌 魯世家「季友母陳女、故亡在陳、陳故佐送季友及子申。季友之將生也、父魯桓公使人卜之、曰、男也、其名曰友、聞于兩社、爲公室輔。季友亡、則魯不昌。及生、有文在掌曰友、遂以名之、號爲成季。其後爲季氏、慶父後爲孟氏也。」

[10] 作周公世家第三 本篇・『漢書』司馬遷傳ともに「魯周公世家」に作るが、周本紀「初、管・蔡畔周、周公討之、三年而畢定、故初作大誥、次作微子之命、次歸禾、次嘉禾、次康誥・酒誥・梓材、其事在周公之篇。」は「周公之篇」に作る。太史公自序の段階では篇名が確定していなかった可能性もある。

武王克紂、天下未協而崩。成王既幼、管蔡疑之、淮夷叛之、於是召公率德、安集王室、以寧東土。燕（易）〔噲〕之禫、乃成禍亂。嘉甘棠之詩、作燕世家第四。

武王 紂に克ち [1]、天下未だ協せずして崩ず [2]。成王既に幼く [3]、管蔡 之を疑い [4]、淮夷 之に叛す [5]、是に於いて召公 德に率い [6]、王室を安集し [7]、以て東土を寧んず [8]。燕易の禫 [9]、乃ち禍亂を成す。甘棠の詩を嘉し [10]、燕世家第四を作る [11]。

[1] 武王克紂 管蔡世家「武王已克殷紂、平天下、封功臣昆弟。」・鄭世家「而周武王克紂後、」

[2] 天下未協而崩 周本紀「武王病。天下未集、」・魯世家「武王克殷二年、天下未集、」

[3] 成王既幼 燕世家「其在成王時、召王爲三公、自陝以西、召公主之。自陝以東、

周公主之。成王既幼、周公攝政、當國踐祚、召公疑之、作君奭。」

[4] 管蔡疑之 周本紀「管叔・蔡叔羣弟疑周公、與武庚作亂、畔周。」・管蔡世家「武王既崩、成王少、周公旦專王室。管叔・蔡叔疑周公之爲不利於成王、乃挾武庚以作亂。周公旦承成王命伐誅武庚、殺管叔、而放蔡叔、遷之、與車十乘、徒七十人從。」・衛世家「武王既崩、成王少。周公旦代成王治、當國。管叔・蔡叔疑周公、乃與武庚祿父作亂、欲攻成周。周公旦以成王命興師伐殷、殺武庚祿父・管叔、放蔡叔、以武庚餘民封康叔爲衛君、居河・淇間故商墟。」・宋世家「武王崩、成王少、周公旦代行政當國。管・蔡疑之、乃與武庚作亂、欲襲成王・周公。周公既承成王命誅武庚、殺管叔、放蔡叔、乃命微子開代殷後、奉其先祀、作微子之命以申之、國于宋。」

[5] 淮夷叛之 魯世家「管・蔡・武庚等果率淮夷而反。周公乃奉成王命、興師東伐、作大誥。遂誅管叔、殺武庚、放蔡叔。收殷餘民、以封康叔於衛、封微子於宋、以奉殷祀。寧淮夷東土、二年而畢定。諸侯咸服宗周。」「伯禽即位之後、有管・蔡等反也、淮夷・徐戎亦竝興反。」

[6] 於是召公率德 召公と三監の亂との關係は、傳世文獻に見えず、燕世家にも記述が無い。管蔡世家「蔡叔度既遷而死。其子曰胡、胡乃改行、率德馴善。周公聞之、而舉胡以爲魯卿士、魯國治。於是周公言於成王、復封胡於蔡、以奉蔡叔之祀、是爲蔡仲。」

[7] 安集王室 「安集」は『詩序』小雅 / 鴻鴈「鴻鴈、美宣王也。萬民離散、不安其居。而能勞來還定、安集之、至于矜寡、無不得其所焉。」に初見する。

[8] 以寧東土 魯世家「管・蔡・武庚等果率淮夷而反。周公乃奉成王命、興師東伐、作大誥。遂誅管叔、殺武庚、放蔡叔。收殷餘民、以封康叔於衛、封微子於宋、以奉殷祀。寧淮夷東土、二年而畢定。諸侯咸服宗周。」

[9] 燕易之禪 「易」は「噲」の誤り。

[10] 嘉甘棠之詩 燕世家「召公之治西方、甚得兆民和。召公巡行鄉邑、有棠樹、決獄政事其下、自侯伯至庶人各得其所、無失職者。召公卒、而民人思召公之政、懷棠樹不敢伐、哥詠之、作甘棠之詩。」

[11] 作燕世家第四 本篇・『漢書』司馬遷傳ともに「燕召公世家」に作る。
管蔡相武庚、將寧舊商。及旦攝政、二叔不饗。殺鮮放度、周公爲盟。大任十子、周以宗彊。嘉仲悔過、作管蔡世家第五。

管蔡 武庚に相たりて、將に舊商を寧んぜんとす。且の政を攝するに及び、二叔 饗せず。鮮を殺し度を放ち [1]、周公 盟を爲す [2]。大任十子 [3]、周以て宗彊。仲の過を悔ゆるを嘉し [4]、管蔡世家第五を作る。

[1] 管蔡相武庚將寧舊商及且攝政二叔不饗殺鮮放度 管蔡世家「於是封叔鮮於管、封叔度於蔡、二人相紂子武庚祿父、治殷遺民。…武王既崩、成王少、周公旦專王室。管叔・蔡叔疑周公之爲不利於成王、乃挾武庚以作亂。周公旦承成王命伐誅武庚、殺管叔、而放蔡叔、遷之、與車十乘、徒七十人從。」「攝政」は『詩序』幽風 / 狼跋「狼跋、美周公也。周公攝政、遠則四國流言、近則王不知周。大夫美其不失其聖也。」「二叔」は『左傳』僖二十四「昔周公弔二叔之不咸」に見える。

[2] 周公爲盟 『禮記』明堂位「昔殷紂亂天下。脯鬼侯以饗諸侯。是以周公相武王以伐紂。武王崩。成王幼弱。周公踐天子之位。以治天下。六年。朝諸侯於明堂。制禮作樂。頒度量。而天下大服。七年。致政於成王。」・『左傳』昭四「夏啟有鈞臺之享。商湯有景亳之命。周武有孟津之誓。成有岐陽之蒐。康有酆宮之朝。穆有塗山之會。齊桓有召陵之師。晉文有踐土之盟。」

[3] 大任十子 「大任」は「太姒」の誤。大任は周本紀に「季歷娶太任」とあるように、季歷の妃、文王の母。管蔡世家「武王同母兄弟十人。母曰太姒、文王正妃也。」

[4] 嘉仲悔過 管蔡世家「蔡叔度既遷而死。其子曰胡、胡乃改行、率德馴善。周公聞之、而舉胡以爲魯卿士、魯國治。於是周公言於成王、復封胡於蔡、以奉蔡叔之祀、是爲蔡仲。」

王後不絶、舜禹是説。維徳休明、苗裔蒙烈。百世享祀、爰周陳杞、楚實滅之。齊田既起、舜何人哉。作陳杞世家第六。

王後 絶えず [1]、舜禹是れ説ぶ。維れ徳休明 [2]、苗裔 烈を蒙る。百世享祀 [3]、爰に周の陳杞 [4]、楚實に之を滅ぼす [5]。齊田既に起こる、舜何人ぞや [6]。陳杞世家第六を作る。

[1] 王後不絶 『詩序』周頌 / 振鷺「振鷺、二王之後來助祭也。」・陳杞世家「太史公曰、舜之徳可謂至矣。禪位於夏、而後世血食者歷三代。及楚滅陳、而田常得政於齊、卒爲建國、百世不絶、苗裔茲茲、有土者不乏焉。至禹、於周則杞、微甚、不足數也。楚惠王滅杞、其後越王句踐興。」

[2] 維德休明 楚世家「八年、伐陸渾戎、遂至洛、觀兵於周郊。周定王使王孫滿勞楚王。楚王問鼎小大輕重、對曰、在德不在鼎。莊王曰、子無阻九鼎。楚國折鉤之喙、足以爲九鼎。王孫滿曰、嗚呼。君王其忘之乎。昔虞夏之盛、遠方皆至、貢金九牧、鑄鼎象物、百物而爲之備、使民知神姦。桀有亂德、鼎遷於殷、載祀六百。殷紂暴虐、鼎遷於周。德之休明、雖小必重。其姦回昏亂、雖大必輕。昔成王定鼎于郊廓、卜世三十、卜年七百、天所命也。周德雖衰、天命未改。鼎之輕重、未可問也。楚王乃歸。」*202

[3] 百世享祀 「百世」は『詩』大雅 / 文王「文王孫子、本支百世。凡周之士、不顯亦世。」に、「享祀」は『詩』魯頌 / 閟宮「春秋匪解、享祀不忒。皇皇后帝、皇祖后稷、」に見える。

[4] 爰周陳杞 司馬相如列傳 / 大人賦「因斯以談、君莫盛於唐堯、臣莫賢於后稷。后稷創業於唐、公劉發跡於西戎、文王改制、爰周邳隆、大行越成、而後陵夷衰微、千載無聲、豈不善始善終哉。然無異端、慎所由於前、謹遺教於後耳。」

[5] 楚實滅之 『左傳』宣十二「漢陽諸姬、楚實盡之、」

[6] 舜何人哉 『孟子』滕文公上「顏淵曰、舜何人也。予何人也。有爲者亦若是。」
收殷餘民、叔封始邑、申以商亂、酒材是告、及朔之生、衛頃不寧。南子惡蒯聵、子父易名。周德卑微、戰國既疆、衛以小弱、角獨後亡。嘉彼康誥、作衛世家第七。
殷の餘民を收め、叔封ぜられて始めて邑し [1]、申ぬるに商の亂を以てし、酒材是れ告ぐ [2]、朔の生まるるに及び、衛頃かたむきて寧んぜず。南子 蒯聵を惡み [3]、子父名を易う。周德卑微 [4]、戰國既に疆く [5]、衛 小弱を以て [6]、角獨り後に亡ぶ [7]。彼の康誥を嘉し、衛世家第七を作る [8]。

[1] 收殷餘民叔封始邑 衛世家「武王已克殷紂、復以殷餘民封紂子武庚祿父、比諸侯、以奉其先祀勿絕。爲武庚未集、恐其有賊心、武王乃令其弟管叔、蔡叔傅相武庚祿父、以和其民。武王既崩、成王少。周公旦代成王治、當國。管叔、蔡叔疑周公、乃與武庚

*202 『左傳』宣三「楚子伐陸渾之戎、遂至於雒、觀兵于周疆。定王使王孫滿勞楚子、楚子問鼎之大小輕重焉。對曰、在德不在鼎。昔夏之方有德也、遠方圖物、貢金九牧、鑄鼎象物、百物而爲之備、使民知神、姦。故民入川澤山林、不逢不若。螭魅罔兩、莫能逢之、用能協于上下、以承天休。桀有昏德、鼎遷于商、載祀六百。商紂暴虐、鼎遷于周。德之休明、雖小、重也。其姦回昏亂、雖大、輕也。天祚明德、有所底止。成王定鼎于郊廓、卜世三十、卜年七百、天所命也。周德雖衰、天命未改。鼎之輕重、未可問也。」

祿父作亂、欲攻成周。周公旦以成王命興師伐殷、殺武庚祿父、管叔、放蔡叔、以武庚殷餘民封康叔爲衛君、居河、淇間故商墟。」

[2] 申以商亂酒材是告 衛世家「周公旦懼康叔齒少、乃申告康叔曰、必求殷之賢人君子長者、問其先殷所以興、所以亡、而務愛民。告以紂所以亡者以淫於酒、酒之失、婦人是用、故紂之亂自此始。爲梓材、示君子可法則。故謂之康誥、酒誥、梓材以命之。康叔之國、既以此命、能和集其民、民大說。」

[3] 南子惡蒯聵 衛世家「太子蒯聵與靈公夫人南子有惡、」

[4] 周室卑微 秦始皇本紀「近古之無王者久矣。周室卑微、五霸既歿、令不行於天下、是以諸侯力政、疆侵弱、眾暴寡、兵革不休、士民罷敝。」*203·李斯列傳「昔者秦穆公之霸、終不東并六國者、何也。諸侯尚衆、周德未衰、故五伯迭興、更尊周室。自秦孝公以來、周室卑微、諸侯相兼、關東爲六國、秦之乘勝役諸侯、蓋六世矣。」

[5] 戰國既疆 「戰國」は戰國時代の諸侯國を指す。曆書「其後戰國竝爭、在於疆國禽敵、救急解紛而已、豈遑念斯哉。」

[6] 衛以小弱 「小弱」は『呂氏春秋』に初見*204。孔子世家「魯小弱、附於楚則晉怒。附於晉則楚來伐。不備於齊、齊師侵魯。」

[7] 角獨後亡 「後亡」は『左傳』に初見*205。燕世家「太史公曰、召公奭可謂仁矣。甘棠且思之、況其人乎。燕（北）〔外〕迫蠻貉、內措齊・晉、崎嶇疆國之間、最爲弱小、幾滅者數矣。然社稷血食者八九百歲、於姬姓獨後亡、豈非召公之烈邪。」

*203 『新書』過秦中「近古之無王者久矣、周室卑微、五霸既滅、令不行於天下、是以諸侯力政。強凌弱、眾暴寡、兵革不休、士民罷弊。」

*204 『呂氏春秋』順說「因則貧賤可以勝富貴矣、小弱可以制疆大矣。」·樂成「以小弱皆壹於爲而猶若此、又況於以疆大乎。」·壹行「小弱而不可知、則強大疑之矣。人之情不能愛其所疑、小弱而大不愛則無以存。故不可知之道、王者行之廢、強大行之危、小弱行之滅。」

*205 『左傳』襄二十二「九月、鄭公孫黑肱有疾、歸邑于公、召室老、宗人立段、而使黜官、薄祭。祭以特羊、殷以少牢、足以共祀、盡歸其餘邑、曰、吾聞之、生於亂世、貴而能貧、民無求焉、可以後亡。敬共事君與二三子。生在敬戒、不在富也。」·襄二十六「叔向曰、鄭七穆、罕氏其後亡者也、子展儉而壹。」·襄二十七「文子告叔向曰、伯有將爲戮矣。詩以言志、志誣其上而公怨之、以爲賓榮、其能久乎。幸而後亡。叔向曰、然、已侈、所謂不及五稔者、夫子之謂矣。文子曰、其餘皆數世之主也。子展其後亡者也、在上不忘降。印氏其次也、樂而不荒。樂以安民、不淫以使之、後亡、不亦可乎。」·襄二十九「叔向聞之、曰、鄭之罕、宋之樂、其後亡者也、二者其皆得國乎。民之歸也。施而不德、樂氏加焉、其以宋升降乎。」·昭二十一「彘曰、子無我迂、不幸而後亡。」·哀二十五「褚師與司寇亥乘、曰、今日幸而後亡。」

[8] 作衛世家第七 本篇・『漢書』司馬遷傳ともに「衛康叔世家」に作る。

嗟箕子乎。嗟箕子乎。正言不用、乃反爲奴。武庚既死、周封微子。襄公傷於泓、君子孰稱。景公謙德、熒惑退行。剔成暴虐、宋乃滅亡。嘉微子問太師、作宋世家第八。

^{ああ}嗟箕子か [1]。嗟箕子か。正言 用いられず、乃ち反て奴と爲る [2]。武庚既に死し、周 微子を封ず。襄公 泓に傷つくも、君子孰か稱する [3]。景公謙德、熒惑退行 [4]。剔成暴虐、宋乃ち滅亡す [5]。微子の太師に問うを嘉し [6]、宋世家第八を作る [7]。

[1] 嗟箕子乎 「嗟××乎」は、『莊子』内篇 / 大宗師「孔子聞之、使子貢往侍事焉。或編曲、或鼓琴、相和而歌曰、嗟來桑扈乎。嗟來桑扈乎。而已反其真、而我猶爲人猗。」

[2] 正言不用乃反爲奴 『論語』微子「微子去之、箕子爲之奴、比干諫而死。孔子曰、殷有三仁焉。」・宋微子世家「箕子者、紂親戚也。紂始爲象箸、箕子歎曰、彼爲象箸、必爲玉楮。爲楮、則必思遠方珍怪之物而御之矣。輿馬宮室之漸自此始、不可振也。紂爲淫泆、箕子諫、不聽。人或曰、可以去矣。箕子曰、爲人臣諫不聽而去、是彰君之惡而自說於民、吾不忍爲也。乃被髮詳狂而爲奴。遂隱而鼓琴以自悲、故傳之曰箕子操。」

[3] 襄公傷於泓君子孰稱 宋世家「宋師大敗、襄公傷股。」「太史公曰、…襄公既敗於泓、而君子或以爲多、傷中國闕禮義、喪之也、宋襄之有禮讓也。」

[4] 景公謙德熒惑退行 宋世家「三十七年、楚惠王滅陳。熒惑守心。心、宋之分野也。景公憂之。司星子韋曰、可移於相。景公曰、相、吾之股肱。曰、可移於民。景公曰、君者待民。曰、可移於歲。景公曰、歲饑民困、吾誰爲君。子韋曰、天高聽卑。君有君人之言三、熒惑宜有動。於是候之、果徙三度。」*206

[5] 剔成暴虐宋乃滅亡 宋世家「辟公三年卒、子剔成立。剔成四十一年、剔成弟偃攻襲剔成、剔成敗奔齊、偃自立爲宋君。」には剔成の暴虐は見えない。

[6] 嘉微子問太師 宋世家「微子開者、殷帝乙之首子而帝紂之庶兄也。紂既立、不明、

*206 『呂氏春秋』制樂「宋景公之時、熒惑在心、公懼、召子韋而問焉、曰、熒惑在心、何也。子韋曰、熒惑者、天罰也。心者、宋之分野也。禍當於君。雖然、可移於宰相。公曰、宰相所與治國家也、而移死焉、不祥。子韋曰、可移於民。公曰、民死、寡人將誰爲君乎。寧獨死。子韋曰、可移於歲。公曰、歲害則民饑、民饑必死。爲人君而殺其民以自活也、其誰以我爲君乎。是寡人之命固盡已、子無復言矣。子韋還走、北面載拜曰、臣敢賀君。天之處高而聽卑。君有至德之言三、天必三賞君。今夕熒惑其徙三舍、君延年二十一歲。公曰、子何以知之。對曰、有三善言、必有三賞。熒惑有三徙舍、舍行七星、星一徙當一年、三七二十一、臣故曰君延年二十一歲矣。臣請伏於陛下以伺候之。熒惑不徙、臣請死。公曰、可。是夕熒惑果徙三舍。」

淫亂於政、微子數諫、紂不聽。及祖伊以周西伯昌之修德、滅阬國、懼禍至、以告紂。紂曰、我生不有命在天乎。是何能爲。於是微子度紂終不可諫、欲死之、及去、未能自決、乃問於太師、少師曰、殷不有治政、不治四方。我祖遂陳於上、紂沈湎於酒、婦人是用、亂敗湯德於下。殷既小大好草竊姦宄、卿士師師非度、皆有罪辜、乃無維獲、小民乃竝興、相爲敵讎。今殷其典喪。若涉水無津涯。殷遂喪、越至于今。曰、太師、少師、我其發出往。吾家保于喪。今女無故告予、顛躋、如之何其。太師若曰、王子、天篤下菑亡殷國、乃毋畏畏、不用老長。今殷民乃陋淫神祇之祀。今誠得治國、國治身死不恨。爲死、終不得治、不如去。遂亡。」

[7] 作宋世家第八 本篇・『漢書』司馬遷傳は「宋微子世家」に作る。

武王既崩、叔虞邑唐。君子譏名、卒滅武公。驪姬之愛、亂者五世。重耳不得意、乃能成霸。六卿專權、晉國以秬。嘉文公錫珪鬯、作晉世家第九。

武王既に崩じ、叔虞 唐に邑す [1]。君子 名を譏り、卒に武公に滅ぶ [2]。驪姬の愛、亂るる者五世 [3]。重耳 意を得ず、乃ち能く霸を成す。六卿 權を専らにし [4]、晉國以て秬す。文公の珪鬯を錫^{たま}わるを嘉し [5]、晉世家第九を作る。

[1] 武王既崩叔虞邑唐 晉世家「武王崩、成王立、唐有亂、周公誅滅唐。成王與叔虞戲、削桐葉爲珪以與叔虞、曰、以此封若。史佚因請擇日立叔虞。成王曰、吾與之戲耳。史佚曰、天子無戲言。言則史書之、禮成之、樂歌之。於是遂封叔虞於唐。唐在河、汾之東、方百里、故曰唐叔虞。姓姬氏、字子于。」

[2] 君子譏名卒滅武公 晉世家「穆侯四年、取齊女姜氏爲夫人。七年、伐條。生太子仇。十年、伐千畝、有功。生少子、名曰成師。晉人師服曰、異哉、君之命子也。太子曰仇、仇者讎也。少子曰成師、成師大號、成之者也。名、自命也。物、自定也。今適庶名反逆、此後晉其能毋亂乎。」「曲沃武公伐晉侯緡、滅之、盡以其寶器賂獻于周釐王。釐王命曲沃武公爲晉君、列爲諸侯、於是盡併晉地而有之。」

[3] 驪姬之愛亂者五世 「亂者五世」は、趙世家「趙簡子疾、五日不知人、大夫皆懼。醫扁鵲視之、出、董安于問。扁鵲曰、血脈治也、而何怪。在昔秦繆公嘗如此、七日而寤。寤之日、告公孫支與子輿曰、我之帝所甚樂。吾所以久者、適有學也。帝告我、晉國將大亂、五世不安。其後將霸、未老而死。霸者之子且令而國男女無別。公孫支書而藏之、

秦讖於是出矣。獻公之亂、文公之霸、而襄公敗秦師於殽而歸縱淫、此子之所聞。」*207

の「晉國將大亂、五世不安」に当たる。晉世家には相當する表現が見えない。

[4] 六卿專權 晉世家「太史公曰、…悼公以後日衰、六卿專權。故君道之御其臣下。固不易哉。」

[5] 嘉文公錫珪鬯 晉世家「天子使王子虎命晉侯爲伯、賜大輅、彤弓矢百、旅弓矢千、秬鬯一卣、珪瓚、虎賁三百人。」

重黎業之、吳回接之。殷之季世、粥子牒之。周用熊繹、熊渠是續。莊王之賢、乃復國陳。既赦鄭伯、班師華元。懷王客死、蘭咎屈原。好諛信讒、楚并於秦。嘉莊王之義、作楚世家第十。

重黎 之を業とし、吳回 之を接ぐ [1]。殷の季世、粥子 之を牒す [2]。周 熊繹を用い、熊渠是れ續ぐ。莊王之賢、乃ち復た陳を國す [3]。既に鄭伯を赦し、師を華元にかえに班す。懷王客死し [4]、蘭 屈原を咎む [5]。諛を好み讒を信じ [6]、楚 秦に并さる。莊王之義を嘉し、楚世家第十を作る。

[1] 重黎業之吳回接之 楚世家「楚之先祖出自帝顓頊高陽。高陽者、黃帝之孫、昌意之子也。高陽生稱、稱生卷章、卷章生重黎。重黎爲帝嚳高辛居火正、甚有功、能光融天下、帝嚳命曰祝融。共工氏作亂、帝嚳使重黎誅之而不盡。帝乃以庚寅日誅重黎、而以其弟吳回爲重黎後、復居火正、爲祝融。」

[2] 殷之季世粥子牒之 楚世家「周文王之時、季連之苗裔曰鬻熊。鬻熊子事文王、蚤卒。」

[3] 莊王之賢乃復國陳 楚世家「莊王乃復國陳後。」

[4] 懷王客死 楚世家「襄王因召與語、遂言曰、夫先王爲秦所欺而客死於外、怨莫大焉。」

[5] 蘭咎屈原 楚懷王抑留をめぐる屈原・子蘭の對立は、屈原賈生列傳には見えるが、楚世家には見えない。「咎」は屈原賈生列傳「楚人既咎子蘭以勸懷王入秦而不反也。」

*207 扁鵲倉公列傳「簡子疾、五日不知人、大夫皆懼、於是召扁鵲。扁鵲入視病、出、董安于問扁鵲、扁鵲曰、血脈治也、而何怪。昔秦穆公嘗如此、七日而寤。寤之日、告公孫支與子輿曰、我之帝所甚樂。吾所以久者、適有所學也。帝告我、晉國且大亂、五世不安。其後將霸、未老而死。霸者之子且令而國男女無別。公孫支書而藏之、秦策於是出。夫獻公之亂、文公之霸、而襄公敗秦師於殽而歸縱淫、此子之所聞。」にもほぼ同文が見える。

に見える。

[6] 好諛信讒 「信讒」は小雅 / 小弁「君子信讒」など『詩』に初見し、『史記』に
幽見する*208。

少康之子、實賓南海、文身斷髮、鼃鱓與處、既守封禺、奉禹之祀。句踐困彼、乃用種・
蠡。嘉句踐夷蠻能脩其德、滅彊吳以尊周室、作越王句踐世家第十一。

少康の子 [1]、實に南海に賓し [2]、文身斷髮、鼃鱓與に處り [3]、既に封禺を守り [4]、
禹の祀を奉ず。句踐 彼に困しみ [5]、乃ち種・蠡を用う。句踐夷蠻にして能く其の
徳を脩め [6]、彊吳を滅ぼして以て周室を尊ぶを嘉し [7]、越王句踐世家第十一を作
る [8]。

[1] 少康之子 / 文身斷髮 / 奉禹之祀 越世家「越王句踐、其先禹之苗裔、而夏后帝
少康之庶子也。封於會稽、以奉守禹之祀。文身斷髮、披草萊而邑焉。」

[2] 實賓南海 楚世家「十七年春、楚莊王圍鄭、三月克之。入自皇門、鄭伯肉袒牽
羊以逆、曰、孤不天、不能事君、君用懷怒、以及敝邑、孤之罪也。敢不惟命是聽。賓
之南海、若以臣妾賜諸侯、亦惟命是聽。若君不忘厲・宣・桓・武、不絕其社稷、使改
事君、孤之願也、非所敢望也。敢布腹心。」

[3] 鼃鱓與處 『國語』越語下「昔吾先君固周室之不成子也、故濱於東海之陔、鼃鼃
魚鱓之與處、而鼃鼃之與同渚。」

[4] 既守封禺 封禺山は、孔子世家「汪罔氏之君守封禺之山、爲蜃姓。」*209 および
下文「吳之叛逆、甌人斬淠、葆守封禺爲臣。作東越列傳第五十四。」に見えるが、越世
家には言及されない。

[5] 句踐困彼 越世家「句踐之困會稽也」

[6] 嘉句踐夷蠻能脩其德 「夷蠻」は『史記』に初見。周本紀「夫先王之制、邦内甸服、
邦外侯服、侯衛賓服、夷蠻要服、戎翟荒服。」*210・吳世家「自太伯作吳、五世而武王克殷、

*208 趙世家「太史公曰、吾聞馮王孫曰、趙王遷、其母倡也、嬖於悼襄王。悼襄王廢適子嘉而立
遷。遷素無行、信讒、故誅其良將李牧、用郭開。豈不繆哉。秦既虜遷、趙之亡大夫共立嘉爲王、
王代六歲、秦進兵破嘉、遂滅趙以爲郡。」・陳丞相世家「大王誠能出捐數萬斤金、行反間、間其
君臣、以疑其心、項王爲人意忌信讒、必内相誅。」・司馬相如列傳 / 哀二世賦「信讒不寤兮、宗
廟滅絕。」

*209 『國語』魯語下「汪芒氏之君也、守封嵎之山者也、爲漆姓。」

*210 『國語』周語上「夫先王之制、邦内甸服、邦外侯服、侯・衛賓服、蠻・夷要服、戎・狄荒服。」

封其後爲二、其一虞、在中國。其一吳、在夷蠻。十二世而晉滅中國之虞。中國之虞滅二世、而夷蠻之吳興。大凡從太伯至壽夢十九世。」および上文「北討疆胡、南誅勁越、征伐夷蠻、武功爰列。作建元以來侯者年表第八。」

[7] 滅疆吳以尊周室 越世家「范蠡事越王句踐、既苦身勦力、與句踐深謀二十餘年、竟滅吳、報會稽之恥、北渡兵於淮以臨齊・晉、號令中國、以尊周室、句踐以霸、而范蠡稱上將軍。」

[8] 作越王句踐世家第十一 『漢書』司馬遷傳は「越世家」に作る。

桓公之東、太史是庸。及侵周禾、王人是議。祭仲要盟、鄭久不昌。子產之仁、紹世稱賢。三晉侵伐、鄭納於韓。嘉厲公納惠王、作鄭世家第十二。

桓公の東するや、太史を是れ庸^{もち}う [1]。周の禾を侵すに及び [2]、王人は是れ議す [3]。祭仲要盟 [4]、鄭久しく昌えず。子産の仁、世を紹^つぎて賢を稱す [5]。三晉侵伐し [6]、鄭 韓に納る。厲公の惠王を納むるを嘉し [7]、鄭世家第十二を作る。

[1] 太史是庸 鄭世家「於是桓公問太史伯曰」

[2] 及侵周禾 鄭世家「(莊公)二十四年(720BC)、…鄭侵周地、取禾。…二十七年(717BC)、始朝周桓王。桓王怒其取禾、弗禮也。…三十七年(707BC)、莊公不朝周、周桓王率陳・蔡・衛・魯伐鄭。」

[3] 王人是議 鄭世家「二十七年，始朝周桓王。桓王怒其取禾，弗禮也。」

[4] 祭仲要盟 鄭世家「宋莊公聞祭仲之立忽、乃使人誘召祭仲而執之、曰、不立突、將死。亦執突以求路焉。祭仲許宋、與宋盟。以突歸、立之。」「要盟」は『左傳』襄九「楚子伐鄭、子駟將及楚平。子孔・子蟜曰、與大國盟、口血未乾而背之、可乎。子駟・子展曰、吾盟固云、唯彊是從、今楚師至、晉不我救、則楚彊矣。盟誓之言、豈敢背之。且要盟無質、神弗臨也。所臨唯信、信者、言之瑞也、善之主也、是故臨之、明神不蠲要盟、背之、可也。乃及楚平。」に初見。孔子世家「蒲人懼、謂孔子曰、苟毋適衛、吾出子。與之盟、出孔子東門。孔子遂適衛。子貢曰、盟可負邪。孔子曰、要盟也、神不聽。」鄭世家には見えない。

[5] 子産之仁紹世稱賢 鄭世家「聲公五年、鄭相子産卒、鄭人皆哭泣、悲之如亡親戚。子産者、鄭成公少子也。爲人仁愛人、事君忠厚。孔子嘗過鄭、與子産如兄弟云。及聞

は「蠻夷」に作る。

子産死、孔子爲泣曰、古之遺愛也。」

[6] 三晉侵伐 鄭世家「獻公十三年卒、子聲公勝立。當是時、晉六卿彊、侵奪鄭、鄭遂弱。」

[7] 嘉厲公納惠王 鄭世家「七年春、鄭厲公與虢叔襲殺王子績而入惠王于周。」
 維驥騮耳、乃章造父。趙夙事獻、衰續厥緒。佐文尊王、卒爲晉輔。襄子困辱、乃禽智伯。
 主父生縛、餓死探爵。王遷辟淫、良將是斥。嘉鞅討周亂、作趙世家第十三。

維れ驥騮耳、乃ち造父を章らかにす [1]。趙夙 獻に事え [2]、衰 厥の緒を續ぎ。
 文を佐け王を尊び、卒に晉の輔と爲る [3]。襄子困辱せられ、乃ち智伯を禽う [4]。
 主父生縛せられ、爵を探るに餓死す [5]。王遷辟淫、良將是れ斥く [6]。鞅の周の亂
 を討つを嘉し [7]、趙世家第十三を作る。

[1] 維驥騮耳乃章造父 趙世家「造父幸於周繆王。造父取驥之乘匹、與桃林盜驪・驊騮・綠耳、獻之繆王。繆王使造父御、西巡狩、見西王母、樂之忘歸。而徐偃王反、繆王日馳千里馬、攻徐偃王、大破之。乃賜造父以趙城、由此爲趙氏。」

[2] 趙夙事獻 趙世家「趙夙、晉獻公之十六年伐霍・魏・耿、而趙夙爲將伐霍。霍公求犇齊。晉大旱、卜之、曰、霍太山爲祟。使趙夙召霍君於齊、復之、以奉霍太山之祀、晉復穰。晉獻公賜趙夙耿。」

[3] 衰續厥緒佐文尊王卒爲晉輔 晉世家「二年春、秦軍河上、將入王。趙衰曰、求霸莫如入王尊周。周晉同姓、晉不先入王、後秦入之、毋以令于天下。方今尊王、晉之資也。三月甲辰、晉乃發兵至陽樊、圍溫、入襄王于周。四月、殺王弟帶。周襄王賜晉河內陽樊之地。」相當する記述は趙世家に見えない。

[4] 乃禽智伯 智伯の「禽」は『史記』に見えない。『韓非子』初見秦「知伯率三國之眾以攻趙襄主於晉陽、決水而灌之三月、城且拔矣。襄主鑽龜筮占兆、以視利害、何國可降。乃使其臣張孟談於是乃潛於行而出、知伯之約、得兩國之眾以攻知伯、禽其身以復襄主之初。」*211、『戰國策』趙策一「張孟談聞之、入見襄子曰、臣遇知過於轅門之外、其視有疑臣之心、入見知伯、出更其姓。今暮不擊、必後之矣。襄子曰、諾。使張孟談見韓・魏之君曰、夜期殺守堤之吏、而決水灌知伯軍。知伯軍救水而亂、韓、魏翼而擊之、

*211 『戰國策』秦策一「知伯帥三國之眾、以攻趙襄主於晉陽、決水灌之、三年、城且拔矣。襄主錯龜、數策占兆、以視利害、何國可降、而使張孟談。於是潛行而出、反智伯之約、得兩國之眾、以攻智伯之國、禽其身、以成襄子之功。」

襄子將卒犯其前、大敗知伯軍而禽知伯。』・『淮南子』人間訓「智伯求地於魏宣子、宣子弗欲與之。任登曰、智伯之強、威行於天下、求地面弗與、是爲諸侯先受禍也。不若與之。宣子曰、求地不已、爲之奈何。任登曰、與之、使喜、必將復求地於諸侯、諸侯必植耳。與天下同心而圖之、一心所得者、非直吾所亡也。魏宣子裂地而授之。又求地於韓康子、韓康子不敢不予。諸侯皆恐。又求地於趙襄子、襄子弗與。於是智伯乃從韓、魏圍襄子於晉陽。三國通謀、禽智伯而三分其國。此所謂奪人而反爲人所奪者也。」

[5] 主父生縛餓死探爵 趙世家「主父欲出不得、又不得食、探爵穀而食之、三月餘而餓死沙丘宮。」

[6] 王遷辟淫良將是斥 趙世家「七年、秦人攻趙、趙大將李牧、將軍司馬尚將、擊之。李牧誅、司馬尚免、趙忽及齊將顏聚代之。趙忽軍破、顏聚亡去。以王遷降。」「太史公曰、吾聞馮王孫曰、趙王遷、其母倡也、嬖於悼襄王。悼襄王廢適子嘉而立遷。遷素無行、信讒、故誅其良將李牧、用郭開。』・廉頗藺相如列傳「趙王遷七年、秦使王翦攻趙、趙使李牧・司馬尚禦之。秦多與趙王寵臣郭開金、爲反間、言李牧・司馬尚欲反。趙王乃使趙蔥及齊將顏聚代李牧。李牧不受命、趙使人微捕得李牧、斬之。廢司馬尚。後三月、王翦因急擊趙、大破殺趙蔥、虜趙王遷及其將顏聚、遂滅趙。」

[7] 嘉鞅討周亂 趙世家「趙簡子在位、晉頃公之九年、簡子將合諸侯戍于周。其明年、入周敬王于周、辟弟子朝之故也。」

畢萬爵魏、卜人知之。及絳戮干、戎翟和之。文侯慕義、子夏師之。惠王自矜、齊秦攻之。既疑信陵、諸侯罷之。卒亡大梁、王假廝之。嘉武佐晉文申霸道、作魏世家第十四。

畢萬 魏を爵せられ、卜人 之を知る [1]。絳の干を戮するに及び、戎翟 之に和す [2]。文侯 義を慕い、子夏 之に師たり [3]。惠王自ら^{ほこ}矜り、齊秦 之を攻む [4]。既に信陵を疑い、諸侯 之を罷む [5]。卒に大梁を亡い、王假 之に廝たり [6]。武の晉文を佐け霸道を^の申ぶるを嘉し [7]、魏世家第十四を作る。

[1] 畢萬爵魏卜人知之 魏世家「獻公之十六年、趙夙爲御、畢萬爲右、以伐霍、耿、魏、滅之。以耿封趙夙、以魏封畢萬、爲大夫。卜偃曰、畢萬之後必大矣、萬、滿數也。魏、大名也。以是始賞、天開之矣、天子曰兆民、諸侯曰萬民。今命之大、以從滿數、其必有眾。初、畢萬卜事晉、遇屯之比。辛廖占之、曰、吉。屯固比入、吉孰大焉、其必蕃昌。」

[2] 及絳戮干戎翟和之 魏世家「魏絳事晉悼公。悼公三年、會諸侯。悼公弟楊干亂行、魏絳辱楊干。悼公怒曰、合諸侯以爲榮、今辱吾弟。將誅魏絳。或說悼公、悼公止。卒任魏絳政、使和戎・翟、戎・翟親附。悼公之十一年、曰、自吾用魏絳、八年之中、九合諸侯、戎・翟和、子之力也。賜之樂、三讓、然後受之。」

[3] 文侯慕義子夏師之 魏世家「文侯受子夏經藝」

[4] 惠王自矜齊秦攻之 「惠王自矜」に当たる記述は『史記』に見えない。『孟子』梁惠王上「梁惠王曰。晉國天下莫強焉。叟之所知也。及寡人之身。東敗於齊。長子死焉。西喪地於秦七百里。南辱於楚。寡人恥之。願比死者壹洒之。如之何則可。」

[5] 既疑信陵諸侯罷之 魏公子列傳「魏安釐王三十年、公子使使遍告諸侯。諸侯聞公子將、各遣將將兵救魏。公子率五國之兵破秦軍於河外、走蒙驁。遂乘勝逐秦軍至函谷關、抑秦兵、秦兵不敢出。當是時、公子威振天下、諸侯之客進兵法、公子皆名之、故世俗稱魏公子兵法。秦王患之、乃行金萬斤於魏、求晉鄙客、令毀公子於魏王曰、公子亡在外十年矣、今爲魏將、諸侯將皆屬、諸侯徒聞魏公子、不聞魏王。公子亦欲因此時定南面而王、諸侯畏公子之威、方欲共立之。秦數使反間、僞賀公子得立爲魏王未也。魏王日聞其毀、不能不信、後果使人代公子將。公子自知再以毀廢、乃謝病不朝、與賓客爲長夜飲、飲醇酒、多近婦女。日夜爲樂飲者四歲、竟病酒而卒。其歲、魏安釐王亦薨。秦聞公子死、使蒙驁攻魏、拔二十城、初置東郡。其後秦稍蠶食魏、十八歲而虜魏王、屠大梁。」魏世家には對應する記述が見えない。

[6] 卒亡大梁王假廝之 魏世家「三年、秦灌大梁、虜王假、遂滅魏以爲郡縣。」

[7] 嘉武佐晉文申霸道 『左傳』僖二十八「魏犢爲右。…魏犢・顛頡怒、曰、勞之不圖、報於何有。燕僖負羈氏。魏犢傷於胸、公欲殺之、而愛其材、使問、且視之。病、將殺之。魏犢束胸見使者、曰、以君之靈、不有寧也。距躍三百、曲踊三百。乃舍之。殺顛頡以徇于師、立舟之僑以爲戎右。」によれば魏武子は軍令違反で戎右を解任されているが、曹世家「令軍毋入釐負羈之宗族間」・晉世家「令軍毋入僖負羈宗家以報德」は魏武子の軍令違反をいわず、魏世家にも「魏武子以魏諸子事晉公子重耳。晉獻公之二十一年、武子從重耳出亡。十九年反、重耳立爲晉文公、而令魏武子襲魏氏之後封、列爲大夫、治於魏。」とあるのみである。「申霸道」は、「嘉…」の形式を維持するための曲筆だが、そも『史記』は魏武子失脚を隠蔽している。

韓厥陰德、趙武攸興。紹絕立廢、晉人宗之。昭侯顯列、申子庸之。疑非不信、秦人襲之。

嘉厥輔晉匡周天子之賦、作韓世家第十五。

韓厥陰德、趙武の興る攸。絶を紹^つぎ廢を立て、晉人 之を宗とす [1]。昭侯顯列、申子 之を庸^{もち}う [2]。非を疑いて信ぜず、秦人 之を襲う [3]。厥の晉を輔け周天子の賦を匡すを嘉し [4]、韓世家第十五を作る。

[1] 韓厥陰德趙武攸興紹絶立廢晉人宗之 韓世家「晉景公十七年、病、卜大業之不遂者爲祟。韓厥稱趙成季之功、今後無祀、以感景公。景公問曰、尚有世乎。厥於是言趙武、而復與故趙氏田邑、續趙氏祀。」「太史公曰、韓厥之感晉景公、紹趙孤之子武、以成程嬰、公孫杵臼之義、此天下之陰德也。韓氏之功、於晉未覩其大者也。然與趙、魏終爲諸侯十餘世、宜乎哉。」

[2] 昭侯顯列申子庸之 韓世家「八年、申不害相韓、脩術行道、國內以治、諸侯不來侵伐。」

[3] 疑非不信秦人襲之 韓世家「王安五年、秦攻韓、韓急、使韓非使秦、秦留非、因殺之。九年、秦虜王安、盡入其地、爲潁州郡。韓遂亡。」

[4] 嘉厥輔晉匡周天子之賦 韓厥の事績に「輔晉匡天子之賦」は見当たらない。

完子避難、適齊爲援、陰施五世、齊人歌之。成子得政、田和爲侯。王建動心、乃遷于共。

嘉威・宣能撥濁世而獨宗周、作田敬仲完世家第十六。

完子 難を避け、齊に適き援を爲す [1]、陰施五世 [2]、齊人 之を歌う [3]。成子政を得 [4]、田和 侯と爲る [5]。王建 心を動かし、乃ち共に遷る [6]。威・宣能く濁世を撥して獨り周を宗とするを嘉し [7]、田敬仲完世家第十六を作る。

[1] 完子避難適齊爲援 田世家「陳完者、陳厲公他之子也。…宣公〔二〕十一年、殺其太子禦寇。禦寇與完相愛、恐禍及己、完故奔齊。」

[2] 陰施五世 「五世」は、田世家「齊懿仲欲妻完、卜之、占曰、是謂鳳皇于蜚、和鳴鏘鏘。有媯之後、將育于姜。五世其昌、竝于正卿。八世之後、莫之與京。」*212に見え、田敬仲完・稷孟夷・潛孟莊・文子須無・桓子無宇を數える。「陰施」は、田世家「無宇卒、生武子開與釐子乞。田釐子乞事齊景公爲大夫、其收賦稅於民以小斗受之、其〔粟〕

*212 『左傳』莊二十二「初、懿氏卜妻敬仲、其妻占之、曰、吉、是謂鳳皇于飛、和鳴鏘鏘、有媯之後、將育于姜。五世其昌、竝于正卿。八世之後、莫之與京。」

予民以大斗、行陰德於民、而景公弗禁。」*213の「陰德」に當たる。

[3] 齊人歌之 田世家「於是田常復脩釐子之政、以大斗出貸、以小斗收。齊人歌之曰、嫗乎采芑、歸乎田成子。」

[4] 田常得政 田世家「平公即位、田常爲相。」

[5] 田和爲侯 田世家「康公之十九年、田和立爲齊侯、列於周室、紀元年。」

[6] 王建動心乃遷于共 田世家「四十四年、秦兵擊齊。齊王聽相后勝計、不戰、以兵降秦。秦虜王建、遷之共。遂滅齊爲郡。天下壹并於秦、秦王政立號爲皇帝。始、君王后賢、事秦謹、與諸侯信、齊亦東邊海上、秦日夜攻三晉、燕、楚、五國各自救於秦、以故王建立四十餘年不受兵。君王后死、后勝相齊、多受秦間金、多使賓客入秦、秦又多予金、客皆爲反間、勸王去從朝秦、不脩攻戰之備、不助五國攻秦、秦以故得滅五國。五國已亡、秦兵卒入臨淄、民莫敢格者。王建遂降、遷於共。故齊人怨王建不蚤與諸侯合從攻秦、聽姦臣賓客以亡其國、歌之曰、松耶柏耶。住建共者客耶。疾建用客之不詳也。」

[7] 嘉威宣能撥濁世而獨宗周 「撥亂世」は、『公羊』哀十四「撥亂世、反諸正、莫近諸春秋、」に見える。齊威王の勤王は、魯仲連鄒陽列傳「昔者齊威王嘗爲仁義矣、率天下諸侯而朝周。周貧且微、諸侯莫朝、而齊獨朝之。」*214に見えるが、田世家には見えない。

[8] 作田敬仲完世家第十六 『漢書』司馬遷傳は「田完世家」に作る。梁玉繩は、「史記篇題未有名諡兼書者、此必後人妄增」とする*215。

周室既衰、諸侯恣行。仲尼悼禮廢樂崩、追脩經術、以達王道、匡亂世反之於正、見其文辭、爲天下制儀法、垂六藝之統紀於後世。作孔子世家第十七。

周室既に衰え、諸侯恣行。仲尼 禮の廢し樂の崩るるを悼み、經術を追脩し、以て王道を達し、亂世を匡して之を正に反し、其の文辭を見わし、天下の爲に儀法を制し、六藝の統紀を後世に垂る。孔子世家第十七を作る。

*213 『左傳』昭二十六「齊侯與晏子坐于路寢。公歎曰、美哉室。其誰有此乎。晏子曰、敢問何謂也。公曰、吾以爲在德。對曰、如君之言、其陳氏乎。陳氏雖無大德、而有施於民。豆區釜鍾之數、其取之公也薄、其施之民也厚。公厚斂焉、陳氏厚施焉、民歸之矣。詩曰、雖無德與女、式歌且舞。陳氏之施、民歌舞之矣。後世若少惰、陳氏而不亡、則國其國也已。」

*214 『戰國策』趙策三「昔齊威王嘗爲仁義矣、率天下諸侯而朝周。周貧且微、諸侯莫朝、而齊獨朝之。」

*215 『史記志疑』卷三十六。

[1] 周室既衰 孔子世家「自大賢之息、周室既衰、禮樂缺有間。」

[2] 諸侯恣行 十二諸侯年表「然挾王室之義、以討伐爲會盟主、政由五伯、諸侯恣行、淫侈不軌、賊臣篡子滋起矣。」・封禪書「自周克殷後十四世、世益衰、禮樂廢、諸侯恣行、而幽王爲犬戎所敗、周東徙維維。」「平津侯主父列傳「諸侯恣行、疆陵弱、眾暴寡、田常篡齊、六卿分晉、竝爲戰國、此民之始苦也。」・儒林列傳「夫周室衰而關雎作、幽厲微而禮樂壞、諸侯恣行、政由疆國。」

[3] 禮廢樂崩 儒林列傳「今禮廢樂崩、朕甚愍焉。」

[4] 匡亂世反之於正 『公羊』哀十四「撥亂世反諸正、莫近諸春秋、」

[5] 見其文辭爲天下制儀法 十二諸侯年表「是以孔子明王道、干七十餘君、莫能用、故西觀周室、論史記舊聞、興於魯而次春秋、上記隱、下至哀之獲麟、約其辭文、去其煩重、以制義法、王道備、人事浹。七十子之徒口受其傳指、爲有所刺譏褒諱挹損之文辭不可以書見也。」

[6] 垂六藝之統紀於後世 高祖功臣侯者年表「帝王者各殊禮而異務、要以成功爲統紀、豈可親乎。」・下文「獵儒墨之遺文、明禮義之統紀、絕惠王利端、列往世興衰。作孟子荀卿列傳第十四。」「垂統」「後世」を連ねることは『孟子』梁惠王下「滕文公問曰、齊人將築薛、吾甚恐。如之何則可。孟子對曰、昔者大王居邠、狄人侵之、去之岐山之下居焉。非擇而取之、不得已也。苟爲善、後世子孫必有王者矣。君子創業垂統、爲可繼也。若夫成功則天也。君如彼何哉。強爲善而已矣。」に初見。「垂統」*216「垂於後世」*217 は『史記』に頻見する。

桀・紂失其道而湯・武作、周失其道而春秋作。秦失其政、而陳涉發迹、諸侯作難、風起雲蒸、卒亡秦族。天下之端、自涉發難。作陳涉世家第十八。

桀・紂 其の道を失いて湯・武^{おこ}作る [1]、周 其の道を失いて春秋作る [2]。秦 其の政を失い [3]、而して陳涉 迹を發し [4]、諸侯 難を作す [5]、風起雲蒸 [6]、

*216 三王世家「而家皇子爲列侯、則尊卑相踰、列位失序、不可以垂統於萬世。」・司馬相如列傳 / 子虛賦「嗟乎、此秦奢侈。朕以覽聽余聞、無事弃日、順天道以殺伐、時休息於此、恐後世靡麗、遂往而不反、非所以爲繼嗣創業垂統也。」

*217 秦始皇本紀 / 泰山刻石「垂于後世」・越王句踐世家「太史公曰、…范蠡三遷皆有榮名、名垂後世。」・伍子胥列傳「太史公曰、…弃小義、雪大恥、名垂於後世、悲夫。」・刺客列傳「太史公曰、…名垂後世」

卒に秦族を亡ぼす [7]。天下の端、涉の難を發する自りす [8]。陳涉世家第十八を作る [9]。

[1] 桀紂失其道而湯武作 「失其道」は、上文「秦失其道、豪桀竝擾。項梁業之、子羽接之。殺慶救趙、諸侯立之。誅嬰背懷、天下非之。作項羽本紀第七。」に見える。

[2] 周失其道而春秋作 『孟子』離婁下「孟子曰、王者之迹熄而詩亡、詩亡然後春秋作。」

[3] 秦失其政 『史記』に類見*218。

[4] 而陳涉發迹 司馬相如列傳 / 封禪文「后稷創業於唐、公劉發迹於西戎、文王改制、爰周邳隆、大行越成、而後陵夷衰微、千載無聲、豈不善始善終哉。」

[5] 諸侯作難 秦始皇本紀「一夫作難而七廟墮」*219

[6] 風起雲蒸 『淮南子』原道訓「風興雲蒸、事無不應。雷聲雨降、竝應無窮。」

[7] 卒亡秦族 秦始皇本紀「山東豪俊遂竝起而亡秦族矣」*220

[8] 自涉發難 「發難」は上文「秦既暴虐、楚人發難、項氏遂亂、漢乃扶義征伐。八年之間、天下三嬗、事繁變眾、故詳著秦楚之際月表第四。」に見える。

[9] 作陳涉世家第十八 「嘉…」の一句を缺く。

成皋之臺、薄氏始基。詘意適代、厥崇諸寶。栗姬負貴、王氏乃遂。陳后太驕、卒尊子夫。嘉夫德若斯、作外戚世家十九。

成皋の臺、薄氏始基。意を詘して代に適き [1]、厥れ諸寶を崇ぶ [2]。栗姬 貴を^{たの}負み、王氏乃ち遂ぐ [3]。陳后太だ驕、卒に子夫を尊ぶ [4]。夫の徳の斯くの若きを嘉し [5]、外戚世家十九を作る。

[1] 成皋之臺薄氏始基詘意適代 外戚世家「薄太后、父吳人、姓薄氏、秦時與故魏王宗家魏媼通、生薄姬、而薄父死山陰、因葬焉。及諸侯畔秦、魏豹立爲魏王、而魏媼內其女於魏宮。媼之許負所相、相薄姬、云當生天子。是時項羽方與漢王相距滎陽、天下未有所定。豹初與漢擊楚、及聞許負言、心獨喜、因背漢而畔、中立、更與楚連和。漢使曹參等擊虜魏王豹、以其國爲郡、而薄姬輸織室。豹已死、漢王入織室、見薄姬有色、

*218 項羽本紀「太史公曰、…夫秦失其政、陳涉首難、豪傑竝起、相與竝爭、不可勝數。」・孝文本紀「夫秦失其政、諸侯豪桀竝起、」・酈生陸賈列傳「且夫秦失其政、諸侯豪桀竝起、」

*219 『新書』過秦上。

*220 『新書』過秦上。

詔內後宮、歲餘不得幸。始姬少時、與管夫人、趙子兒相愛、約曰、先貴無相忘。已而管夫人、趙子兒先幸漢王。漢王坐河南宮成皋臺、此兩美人相與笑薄姬初時約。漢王聞之、問其故、兩人具以實告漢王。漢王心慘然、憐薄姬、是日召而幸之。薄姬曰、昨暮夜妾夢蒼龍據吾腹。高帝曰、此貴徵也、吾爲女遂成之。一幸生男、是爲代王。其後薄姬希見高祖。高祖崩、諸御幸姬戚夫人之屬、呂太后怒、皆幽之、不得出宮。而薄姬以希見故、得出、從子之代、爲代王太后。太后弟薄昭從如代。」

[2] 厥崇諸竇 外戚世家「竇皇后兄竇長君、弟曰竇廣國、…孝文帝崩、孝景帝立、乃封廣國爲章武侯。長君前死、封其子彭祖爲南皮侯。吳楚反時、竇太后從昆弟子竇嬰、任俠自喜、將兵、以軍功爲魏其侯。竇氏凡三人爲侯。」

[3] 栗姬偵貴王氏乃遂 外戚世家「景帝長男榮、其母栗姬。栗姬、齊人也。立榮爲太子。長公主嫫有女、欲予爲妃。栗姬妒、而景帝諸美人皆因長公主見景帝、得貴幸、皆過栗姬、栗姬日怨怒、謝長公主、不許。長公主欲予王夫人、王夫人許之。長公主怒、而日譏栗姬短於景帝曰、栗姬與諸貴夫人幸姬會、常使侍者祝唾其背、挾邪媚道。景帝以故望之。景帝嘗體不安、心不樂、屬諸子爲王者於栗姬、曰、百歲後、善視之。栗姬怒、不肯應、言不遜。景帝恚、心嘆之而未發也。長公主日譽王夫人男之美、景帝亦賢之、又有曩者所夢日符、計未有所定。王夫人知帝望栗姬、因怒未解、陰使人趣大臣立栗姬爲皇后。大行奏事畢、曰、子以母貴、母以子貴、今太子母無號、宜立爲皇后。景帝怒曰、是而所直言邪。遂案誅大行、而廢太子爲臨江王。栗姬愈恚恨、不得見、以憂死。卒立王夫人爲皇后、其男爲太子、封皇后兄信爲蓋侯。」

[4] 陳后太驕卒尊子夫 外戚世家「初、上爲太子時、娶長公主女爲妃。立爲帝、妃立爲皇后、姓陳氏、無子。上之得爲嗣、大長公主有力焉、以故陳皇后驕貴。聞衛子夫大幸、恚、幾死者數矣。上愈怒。陳皇后挾婦人媚道、其事頗覺、於是廢陳皇后、而立衛子夫爲皇后。」

[5] 嘉夫德若斯 「若斯」は『史記』に頻見する*221。

*221 秦楚之際月表「太史公讀秦楚之際、曰、初作難、發於陳涉。虐戾滅秦、自項氏。撥亂誅暴、平定海內、卒踐帝祚、成於漢家。五年之間、號令三嬗。自生民以來、未始有受命若斯之亟也。昔虞·夏之興、積善累功數十年、德洽百姓、攝行政事、考之于天、然後在位。湯·武之王、乃由契·后稷脩仁行義十餘世、不期而會孟津八百諸侯、猶以爲未可、其後乃放弑。秦起襄公、章於文·繆·獻·孝之後、稍以蠶食六國、百有餘載、至始皇乃能并冠帶之倫。以德若彼、用力如此、

漢既譎謀、禽信於陳。越荊剽輕、乃封弟交爲楚王、爰都彭城、以疆淮泗、爲漢宗藩。戊溺於邪、禮復紹之。嘉游輔祖、作楚元王世家第二十。

漢既に譎謀し、信を陳に禽う [1]。越荊剽輕 [2]、乃ち弟交を封じて楚王と爲し、爰に彭城に都し、以て淮泗を疆くし [3]、漢の宗藩と爲る。戊 邪に溺れ [4]、禮復た之を紹ぐ [5]。游の祖を輔くるを嘉し、楚元王世家第二十を作る。

[1] 漢既譎謀禽信於陳 楚元王世家「高祖六年、已禽楚王韓信於陳、乃以弟交爲楚王、都彭城。」

[2] 越荊剽輕 絳侯周勃世家「楚兵剽輕」・貨殖列傳「越・楚則有三俗。夫自淮北沛・陳・汝南・南郡、此西楚也。其俗剽輕、易發怒、地薄、寡於積聚。」

[3] 以疆淮泗 「淮泗」は『書』禹貢「浮于淮泗」「達于淮泗」に初見。

[4] 戊溺於邪 楚元王世家「王戌立二十年、冬、坐爲薄太后服私姦、削東海郡。春、戊與吳王合謀反、其相張尚、太傅趙夷吾諫、不聽。戊則殺尚、夷吾、起兵與吳西攻梁、破棘壁。至昌邑南、與漢將周亞夫戰。漢絕吳楚糧道、士卒飢、吳王走、楚王戊自殺、軍遂降漢。」

[5] 禮復紹之 楚元王世家「漢已平吳楚、孝景帝欲以德侯子續吳、以元王子禮續楚。」維祖師旅、劉賈是與。爲布所襲、喪其荊・吳。營陵激呂、乃王琅邪。怵午信齊、往而不歸、遂西入關、遭立孝文、獲復王燕。天下未集、賈・澤以族、爲漢藩輔。作荊燕世家第二十一。

維れ祖の師旅、劉賈^{あずか}是れ與る [1]。布の襲う所と爲り、其の荊・吳を喪う [2]。營陵呂を激し、乃ち琅邪に王たり [3]。午に怵^{いごな}われ齊を信じ、往きて歸らず [4]、遂に西のかた關に入り、孝文を立つるに遭い、復た燕に王たるを獲 [5]。天下未だ^な集らず [6]、賈・澤 族を以て、漢の藩輔と爲る。荊燕世家第二十一を作る [7]。

[1] 維祖師旅劉賈是與 荊燕世家「荊王劉賈者、諸劉、不知其何屬初起時。漢王元年、還定三秦、劉賈爲將軍、定塞地、從東擊項籍。」

[2] 爲布所襲喪其荊吳 荊燕世家「高祖十一年秋、淮南王黥布反、東擊荊。荊王賈

蓋一統若斯之難也。」・天官書「秦始皇之時、十五年彗星四見、久者八十日、長或竟天。其後秦遂以兵滅六王、并中國、外攘四夷、死人如亂麻、因以張楚竝起、三十年之間兵相駘藉、不可勝數。自蚩尤以來、未嘗若斯也。」・伯夷列傳「堯將遜位、讓於虞舜、舜禹之間、嶽牧咸薦、乃試之於位、典職數十年、功用既興、然後授政。示天下重器、王者大統、傳天下若斯之難也。」

與戰、不勝、走富陵、爲布軍所殺。高祖自擊破布。」

[3] 營陵激呂乃王琅邪 荆燕世家「田生弗受、因說之曰、呂產王也、諸大臣未大服。今營陵侯澤、諸劉、爲大將軍、獨此尚缺望。今卿言太后、列十餘縣王之、彼得王、喜去、諸呂王益固矣。張卿入言、太后然之。乃以營陵侯劉澤爲琅邪王。」

[4] 怵午信齊往而不歸 齊悼惠王世家「使祝午東詐琅邪王曰、呂氏作亂、齊王發兵欲西誅之。齊王自以兒子、年少、不習兵革之事、願舉國委大王。大王自高帝將也、習戰事。齊王不敢離兵、使臣請大王幸之臨菑見齊王計事、并將齊兵以西平關中之亂。琅邪王信之、以爲然、(西)〔迺〕馳見齊王。齊王與魏勃等因留琅邪王、而使祝午盡發琅邪國而并將其兵。琅邪王劉澤既見欺、不得反國、乃說齊王曰、齊悼惠王高皇帝長子、推本言之、而大王高皇帝適長孫也、當立。今諸大臣狐疑未有所定、而澤於劉氏最爲長年、大臣固待澤決計。今大王留臣無爲也、不如使我入關計事。齊王以爲然、乃益具車送琅邪王。」荆燕世家には相當部分が見えない。

[5] 遂西入關遭立孝文獲復王燕 荆燕世家「及太后崩、琅邪王澤乃曰、帝少、諸呂用事、劉氏孤弱。乃引兵與齊王合謀西、欲誅諸呂。至梁、聞漢遣灌將軍屯滎陽、澤還兵備西界、遂跳驅至長安。代王亦從代至。諸將相與琅邪王共立代王爲天子。天子乃徙澤爲燕王、乃復以琅邪予齊、復故地。」

[6] 天下未集 荆燕世家「太史公曰、荆王王也、由漢初定、天下未集、故劉賈雖屬疏、然以策爲王、填江淮之間。劉澤之王、權激呂氏、然劉澤卒南面稱孤者三世。事發相重、豈不爲偉乎。」

[7] 作荆燕世家第二十一 「嘉…」の一句を缺く。『漢書』司馬遷傳は「荆燕王世家」に作る。

天下已平、親屬既寡。悼惠先壯、實鎮東土。哀王擅興、發怒諸呂、駟鈞暴戾、京師弗許。厲之內淫、禍成主父。嘉肥股肱、作齊悼惠王世家第二十二。

天下已に平ぐるも、親屬既に寡^{すくな}し。悼惠先に壯、實に東土を鎮む[1]。哀王擅に興し[2]、怒を諸呂に發す、駟鈞暴戾、京師許さず[3]。厲の内淫、禍主父に成る[4]。肥の股肱たるを嘉し、齊悼惠王世家第二十二を作る。

[1] 天下已平親屬既寡悼惠先壯實鎮東土 齊悼惠王世家「齊悼惠王劉肥者、高祖長庶男也。」「太史公曰、諸侯大國無過齊悼惠王。以海內初定、子弟少、激秦之無尺土封、

故大封同姓、以填萬民之心。及後分裂、固其理也。」

[2] 哀王擅興 齊悼惠王世家「其明年、高后崩。趙王呂祿爲上將軍、呂王產爲相國、皆居長安中、聚兵以威大臣、欲爲亂。朱虛侯章以呂祿女爲婦、知其謀、乃使人陰出告其兄齊王、欲令發兵西、朱虛侯・東牟侯爲內應、以誅諸呂、因立齊王爲帝。齊王既聞此計、乃與其舅父駟鈞・郎中令祝午・中尉魏勃陰謀發兵。」

[3] 駟鈞暴戾京師弗許 齊悼惠王世家「大臣議欲立齊王、而琅邪王及大臣曰、齊王母家駟鈞、惡戾、虎而冠者也。方以呂氏故幾亂天下、今又立齊王、是欲復爲呂氏也。代王母家薄氏、君子長者。且代王又親高帝子、於今見在、且最爲長。以子則順、以善人則大臣安。於是大臣乃謀迎立代王、而遣朱虛侯以誅呂氏事告齊王、令罷兵。」

[4] 厲之內淫禍成主父 齊悼惠王世家「齊厲王、其母曰紀太后。太后取其弟紀氏女爲厲王后。王不愛紀氏女。太后欲其家重寵、令其長女紀翁主入王宮、正其後宮、毋令得近王、欲令愛紀氏女。王因與其姊翁主姦。」「主父偃方幸於天子、用事、因言、齊臨菑十萬戶、市租千金、人衆殷富、巨於長安、此非天子親弟愛子不得王此。今齊王於親屬益疏。乃從容言、呂太后時齊欲反、吳楚時孝王幾爲亂。今聞齊王與其姊亂。於是天子乃拜主父偃爲齊相、且正其事。主父偃既至齊、乃急治王後宮宦者爲王通於姊翁主所者、令其辭證皆引王。王年少、懼大罪爲吏所執誅、乃飲藥自殺。絕無後。」

楚人圍我滎陽、相守三年。蕭何填撫山西、推計踵兵、給糧食不絕、使百姓愛漢、不樂爲楚。作蕭相國世家第二十三。

楚人 我を滎陽を圍み、相い守ること三年。蕭何 山西を填撫し、推計して兵を踵^つぎ、糧食を給して絶たず [1]、百姓をして漢を愛し、楚と爲るを樂^{ねが}わざらしむ [2]。蕭相國世家第二十三を作る [3]。

[1] 楚人圍我滎陽相守三年蕭何填撫山西推計踵兵給糧食不絕 蕭相國世家「關內侯鄂君進曰、羣臣議皆誤。夫曹參雖有野戰略地之功、此特一時之事。夫上與楚相距五歲、常失軍亡衆、逃身遁者數矣。然蕭何常從關中遣軍補其處、非上所詔令召、而數萬衆會上之乏絕者數矣。夫漢與楚相守滎陽數年、軍無見糧、蕭何轉漕關中、給食不乏。陛下雖數亡山東、蕭何常全關中以待陛下、此萬世之功也。今雖亡曹參等百數、何缺於漢。漢得之不必待以全。柰何欲以一旦之功而加萬世之功哉。蕭何第一、曹參次之。」

[2] 使百姓愛漢不樂爲楚 蕭相國世家「客有說相國曰、君滅族不久矣。夫君位爲相國、

功第一、可復加哉。然君初入關中、得百姓心、十餘年矣、皆附君、常復孳孳得民和。上所爲數問君者、畏君傾動關中。今君胡不多買田地、賤貰貸以自汙。上心乃安。於是相國從其計、上乃大說。」

[3] 作蕭相國世家第二十三 蕭相國世家第二十三～絳侯周勃世家第二十七は高祖功臣世家である。否定的な言辭をもたない。

與信定魏、破趙拔齊、遂弱楚人。續何相國、不變不革、黎庶攸寧。嘉參不伐功矜能、作曹相國世家第二十四。

信と魏を定め [1]、趙を破り齊を抜き [3]、遂に楚人を弱む。何に續きて相國たり、變えず革めず [3]、黎庶の寧んずる攸 [4]。參の功を伐り能を矜らざるを嘉し、曹相國世家第二十四を作る。

[1] 與信定魏 曹相國世家「以假左丞相別與韓信東攻魏將軍孫邈軍東張、大破之。因攻安邑、得魏將王襄。擊魏王於曲陽、追至武垣、生得魏王豹。取平陽、得魏王母妻子、盡定魏地、凡五十二城。」

[2] 破趙拔齊 曹相國世家「韓信已破趙、爲相國、東擊齊。」

[3] 續何相國不變不革 曹相國世家「參代何爲漢相國、舉事無所變更、一遵蕭何約束。」

[4] 黎庶攸寧 曹相國世家「百姓歌之曰、蕭何爲法、顛若畫一。曹參代之、守而勿失。載其清淨、民以寧一。」

運籌帷幄之中、制勝於無形、子房計謀其事、無知名、無勇功、圖難於易、爲大於細。作留侯世家第二十五。

籌を帷幄の中に運らし [1]、勝を無形に制す、子房 其の事を計謀するに [2]、知名無く、勇功無し [3]、難を易に圖り、大を細に爲す [4]。留侯世家第二十五を作る [5]。

[1] 運籌帷幄之中制勝於無形 高祖本紀「高祖曰、公知其一、未知其二。夫運籌策帷帳之中、決勝於千里之外、吾不如子房。」・留侯世家「高帝曰、運籌策帷帳中、決勝千里外、子房功也。自擇齊三萬戶。」「太史公曰、…上曰、夫運籌策帷帳之中、決勝千里外、吾不如子房。」

[2] 子房計謀其事 「計謀」は『孫子』九地「凡爲客之道、深入則專、主人不克、掠于饒野、三軍足食、謹養而無勞、併氣積力、運兵計謀、爲不可測、投之無所往、死且不北、死焉不得、士人盡力。」が早い用例である。『史記』に類見する。

[3] 無知名無勇功 『孫子』軍形「古之善戰者、勝于易勝者。故善戰者之勝也、無智名、無勇功。」

[4] 圖難於易爲大於細 『老子』六十三章「爲無爲、事無事、味無味。大小多少、報怨以德。圖難於易、爲大於細。天下難事、必作於易。天下大事、必作於細。是以聖人終不爲大、故能成其大。夫輕諾必寡信、多易必多難、是以聖人猶難之、故終無難。」

[5] 作留侯世家第二十五 「嘉…」の一句を缺く。

六奇既用、諸侯賓從於漢。呂氏之事、平爲本謀、終安宗廟、定社稷。作陳丞相世家第二十六。

六奇既に用い [1]、諸侯 漢に賓從す [2]。呂氏の事、平 本謀を爲し [3]、終に宗廟を安んじ、社稷を定む。陳丞相世家第二十六を作る [4]。

[1] 六奇既用 陳丞相世家「凡六出奇計、輒益邑、凡六益封。奇計或頗祕、世莫能聞也。」

[2] 諸侯賓從於漢 五帝本紀「於是軒轅乃習用干戈、以征不享、諸侯咸來賓從。」

[3] 呂氏之事平爲本謀 陳丞相世家「及呂太后崩、平與太尉勃合謀、卒誅諸呂、立孝文皇帝、陳平本謀也。」

[4] 作陳丞相世家第二十六 「嘉…」の一句を缺く。

諸呂爲從、謀弱京師、而勃反經合於權。吳楚之兵、亞夫駐於昌邑、以扞齊趙、而出委以梁。作絳侯世家第二十七。

諸呂 從を爲し [1]、京師を弱めんことを謀る。而して勃 經に反し權に合す [2]。吳楚の兵、亞夫 昌邑に駐し、以て齊趙を扞し、而して出でて委ぬるに梁を以てす [3]。絳侯世家第二十七を作る [4]。

[1] 諸呂爲從 「諸呂」は上文「惠之早賞、諸呂不台。崇彊祿産、諸侯謀之。殺隱幽友、大臣洞疑、遂及宗禍。作呂太后本紀第九。」「天下已平、親屬既寡。悼惠先壯、實鎮東土。哀王擅興、發怒諸呂、駟鈞暴戾、京師弗許。厲之内淫、禍成主父。嘉肥股肱、作齊悼惠王世家第二十二。」に見える。

[2] 而勃反經合於權 『春秋繁露』玉英「器從名、地從主人之謂制、權之端焉、不可不察也。夫權雖反經、亦必在可以然之域、不在可以然之域、故雖死亡、終弗爲也、公子目夷是也。」

[3] 吳楚之兵亞夫駐於昌邑以扞齊趙而出委以梁 絳侯周勃世家「孝景三年、吳楚反。亞夫以中尉爲太尉、東擊吳楚。因自請上曰、楚兵剽輕、難與爭鋒。願以梁委之、絕其糧道、乃可制。上許之。太尉既會兵滎陽、吳方攻梁、梁急、請救。太尉引兵東北走昌邑、深壁而守。」・吳王濞列傳「七國反書聞天子、天子乃遣太尉絳侯周亞夫將三十六將軍、往擊吳楚。遣曲周侯酈寄擊趙。將軍欒布擊齊。大將軍竇嬰屯滎陽、監齊趙兵。」・魏其武安侯列傳「竇嬰守滎陽、監齊趙兵。」

[4] 作絳侯世家第二十七 「嘉…」の一句を缺く。

七國叛逆、蕃屏京師、唯梁爲扞。偵愛矜功、幾獲于禍。嘉其能距吳楚、作梁孝王世家第二十八。

七國叛逆 [1]、京師を蕃屏するに [2]、唯だ梁のみ扞と爲る [3]。愛を^{たの}偵み功を^{ほこ}り [4]、幾ど禍を獲んとす [5]。其の能く吳楚を距むを嘉し、梁孝王世家第二十八を作る。

[1] 七國叛逆 天官書「吳楚七國叛逆、彗星數丈、天狗過梁野。及兵起、遂伏尸流血其下。」

[2] 蕃屏京師 「蕃屏」は、僖二十四「昔周公弔二叔之不咸、故封建親戚以蕃屏周。」など『左傳』に初見。

[3] 唯梁爲扞 梁孝王世家「其春、吳楚齊趙七國反。吳楚先擊梁棘壁、殺數萬人。梁孝王城守睢陽、而使韓安國・張羽等爲大將軍、以距吳楚。吳楚以梁爲限、不敢過而西、與太尉亞夫等相距三月。吳楚破、而梁所破殺虜略與漢中分。」

[4] 偵愛矜功 梁孝王世家「其後梁最親、有功、又爲大國、居天下膏腴地。地北界泰山、西至高陽、四十餘城、皆多大縣。孝王、竇太后少子也、愛之、賞賜不可勝道。」

[5] 幾獲于禍 梁孝王世家「梁王怨袁盎及議臣、乃與羊勝・公孫詭之屬陰使人刺殺袁盎及他議臣十餘人。逐其賊、未得也。於是天子意梁王、逐賊、果梁使之。乃遣使冠蓋相望於道、覆按梁、捕公孫詭・羊勝。公孫詭・羊勝匿王後宮。使者責二千石急、梁相軫丘豹及內史韓安國進諫王、王乃令勝・詭皆自殺、出之。上由此怨望於梁王。梁王恐、乃使韓安國因長公主謝罪太后、然后得釋。」

五宗既王、親屬洽和、諸侯大小爲藩、爰得其宜、僭擬之事、稍衰貶矣。作五宗世家第二十九。

五宗既に王たり、親屬洽和 [1]、諸侯大小 藩と爲る、爰に其の宜を得 [2]、僭擬の

事 [3]、稍や衰貶す。五宗世家第二十九を作る。

[1] 親屬洽和 「親屬」は上文「天下已平、親屬既寡。…作齊悼惠王世家第二十二。」に見える。「洽和」は『大戴禮』明堂「周時德澤洽和、蒿茂大以爲宮柱、名蒿宮也。」に初見。

[2] 爰得其宜 樂書「此所以祭先王之廟也、所以獻菹醢醢也、所以官序貴賤各得其宜也、此所以示後世有尊卑長幼序也。」

[3] 僭擬之事 『春秋繁露』王道「諸侯得以大亂、篡弑無已、臣下上逼、僭擬天子。」三子之王、文辭可觀。作三王世家第三十。

三子の王たる、文辭 觀る可し [1]。三王世家第三十を作る。

[1] 文辭可觀 三王世家「太史公曰、古人有言曰、愛之欲其富、親之欲其貴。故王者踰土建國、封立子弟、所以褒親親、序骨肉、尊先祖、貴支體、廣同姓於天下也。是以形勢彊而王室安。自古至今、所由來久矣。非有異也、故弗論箸也。燕齊之事、無足采者。然封立三王、天子恭讓、群臣守義、文辭爛然、甚可觀也、是以附之世家。」

末世爭利、維彼奔義。讓國餓死、天下稱之。作伯夷列傳第一。

末世 利を争うに [1]、維れ彼れ義に奔る [2]。國を讓り餓死し、天下 之を稱す [3]。伯夷列傳第一を作る [4]。

[1] 末世爭利 以下、列傳の序である。四字句からの逸脱はいよいよ顯著である。「末世」は『淮南子』本經訓「末世之政、田漁重稅、關市急征、澤梁畢禁、網罟無所布、耒耜無所設、民力竭於徭役、財用殫於會賦、居者無食、行者無糧、老者不養、死者不葬、贅妻鬻子、以給上求、猶弗能澹、愚夫蠢婦皆有流連之心、悽愴之志、乃使始爲之撞大鐘、擊鳴鼓、吹竽笙、彈琴瑟、失樂之本矣。」、「爭利」は『禮記』坊記「民猶爭利而忘義」「民猶忘義而爭利」に初見。

[2] 維彼奔義 「維彼」は大雅 / 皇矣「維彼四國」など『詩』に用例を得る。

[3] 天下稱之 張釋之馮唐列傳「張廷尉由此天下稱之」

[4] 作伯夷列傳第一 以下、列傳の序は否定的な言辭を一切もたない。殺身亡國に至ったものでさえも、その功績をほとんど無理矢理に賞賛する。その不自然さは明白である。太史公書の刺譏の書としての側面を表面的に隱蔽することで、却って刺譏の書たることを暗示するのである。「設論」の技法にほかならない。

晏子儉矣、夷吾則奢。齊桓以霸、景公以治。作管晏列傳第二。

晏子儉なり [1]、夷吾則ち奢 [2]。齊桓以て霸、景公以て治まる。管晏列傳第二を作る。

[1] 晏子儉矣 管晏列傳「晏平仲嬰者、萊之夷維人也。事齊靈公・莊公・景公、以節儉力行重於齊。既相齊、食不重肉、妾不衣帛。其在朝、君語及之、即危言。語不及之、即危行。國有道、即順命。無道、即衡命。以此三世顯名於諸侯。」

[2] 夷吾則奢 管晏列傳「管仲富擬於公室、有三歸、反坫、齊人不以為侈。」*222

李耳無為自化、清淨自正。韓非揣事情、循執理。作老子韓非列傳第三。

李耳無為自化 [1]、清淨自正 [2]。韓非 事情を揣^{はか} [3] り、執理に循う。老子韓非列傳第三を作る。

[1] 李耳無為自化 『老子』三十七章「道常無為而無不為。侯王若能守、萬物將自化。化而欲作、吾將鎮之以無名之朴。無名之朴、亦將不欲。不欲以靜、天下將自正。」・五十七章「故聖人云、我無為、人自化。我好靜、人自正。我無事、人自富。我無欲、人自朴。」

[2] 清淨自正 『老子』四十五章「大成若缺、其用不弊。大盈若沖、其用不窮。大直若屈、大巧若拙、大辯若訥。躁勝寒、靜勝熱、清靜以為天下正。」

[3] 韓非揣事情 老子韓非列傳「太史公曰、老子所貴道、虛無、因應變化於無為、故著書辭稱微妙難識。莊子散道德、放論、要亦歸之自然。申子卑卑、施之於名實。韓子引繩墨、切事情、明是非、其極慘礪少恩。皆原於道德之意、而老子深遠矣。」

自古王者而有司馬法、穰苴能申明之。作司馬穰苴列傳第四。

古の王者自りして司馬法有り、穰苴能く之を申明す [1]。司馬穰苴列傳第四を作る。

[1] 自古王者而有司馬法穰苴能申明之 上文「司馬法所從來尚矣、太公・孫・吳、王子能紹而明之、切近世、極人變。作律書第三。」・司馬穰苴列傳「齊威王使大夫追論古者司馬兵法而附穰苴於其中、因號曰司馬穰苴兵法。太史公曰、余讀司馬兵法、閎廓深遠、雖三代征伐、未能竟其義、如其文也、亦少褒矣。若夫穰苴、區區為小國行師、何暇及司馬兵法之揖讓乎。世既多司馬兵法、以故不論、著穰苴之列傳焉。」

*222 『論語』八佾「子曰、管仲之器小哉。或曰、管仲儉乎。曰、管氏有三歸、官事不攝、焉得儉。然則管仲知禮乎。曰、邦君樹塞門、管氏亦樹塞門。邦君為兩君之好、有反坫。管氏亦有反坫。管氏而知禮、孰不知禮。」

非信廉仁勇、不能傳兵論劍、與道同符、內可以治身、外可以應變、君子比德焉。作孫子吳起列傳第五。

信廉仁勇に非ざれば [1]、兵を傳え劍を論じ [2]、道と符を同じくする能わず、内は以て身を治む可く、外は以て變に應ず可し [3]、君子 徳に比す [4]。孫子吳起列傳第五を作る。

[1] 非信廉仁勇 『淮南子』兵略訓「夫仁勇信廉、人之美才也、然勇者可誘也、仁者可奪也、信者易欺也、廉者易謀也。」

[2] 不能傳兵論劍 「論劍」は刺客列傳「荆軻嘗游過榆次、與蓋聶論劍、蓋聶怒而目之。荆軻出、人或言復召荆卿。蓋聶曰、曩者吾與論劍有不稱者、吾目之。試往、是宜去、不敢留。使使往之主人、荆卿則已駕而去榆次矣。使者還報、蓋聶曰、固去也、吾曩者目攝之。」

[3] 內可以治身外可以應變 「內可以…、外可以…」は、『荀子』性惡「塗之人者、皆內可以知父子之義、外可以知君臣之正、然則其可以知之質、可以能之具、其在塗之人明矣。」に初見する。

[4] 君子比德焉 『荀子』法行「夫王者、君子比德焉。」

維建遇讒、爰及子奢、尚既匡父、伍員奔吳。作伍子胥列傳第六。

維れ建 讒に遇い、爰に子奢に及び、尚既に父を匡わんとし、伍員 吳に奔る。伍子胥列傳第六を作る。

孔氏述文、弟子興業、咸爲師傅、崇仁厲義。作仲尼弟子列傳第七。

孔氏 文を述べ、弟子 業を興す、咸な師傅と爲り [1]、仁を崇び義を厲ます。仲尼弟子列傳第七を作る。

[1] 咸爲師傅 儒林列傳「自孔子卒後、七十子之徒散游諸侯、大者爲師傅卿相、小者友教士大夫、或隱而不見。」

鞅去衛適秦、能明其術、彊霸孝公、後世遵其法。作商君列傳第八。

鞅 衛を去りて秦に適き [1]、能く其の術を明らかにし [2]、孝公を彊霸とし [3]、後世 其の法に遵う。商君列傳第八を作る。

[1] 鞅去衛適秦 商君列傳「商君者、衛之諸庶孽公子也、名鞅、姓公孫氏、其祖本姬姓也。鞅少好刑名之學、事魏相公叔座爲中庶子。」に見えるように、商君は衛人だが、

まずは魏に事え、公叔座の死後、秦に入った。「去衛適秦」は「去魏適秦」の誤りかもしれない。

[2] 能明其術 「能明其×」は、李斯列傳「王者不卻眾庶、故能明其德。」のほか、下文「六國既從親、而張儀能明其說、復散解諸侯。作張儀列傳第十。」「能明其畫、因時推秦、遂得意於海內、斯爲謀首。作李斯列傳第二十七。」に見える。

[3] 彊霸孝公 張儀列傳「聽吾計可以彊霸天下」・魯仲連鄒陽列傳「夫晉文公親其讎、彊霸諸侯。齊桓公用其仇、而一匡天下。」

天下患衡秦母憂、而蘇子能存諸侯、約從以抑貪彊。作蘇秦列傳第九。

天下 秦に衡することの^あ憂く母きを思う [1]、而るに蘇子能く諸侯を存し、從を約して以て貪彊を^{おさ}抑う [2]。蘇秦列傳第九を作る。

[1] 天下患衡秦母憂 「衡秦」は魯仲連鄒陽列傳「今秦人下兵、魏不敢東面。衡秦之勢成、楚國之形危。」に見える。

[2] 約從以抑貪彊 「約從」は楚世家「十一年、蘇秦約從山東六國共攻秦、楚懷王爲從長。」など『史記』に頻見する。

六國既從親、而張儀能明其說、復散解諸侯。作張儀列傳第十。

六國既に從親し [1]、而るに張儀能く其の説を明らかにし、復た諸侯を散解す [2]。張儀列傳第十を作る。

[1] 六國既從親 「從親」は張儀列傳「蘇秦已說趙王而得相約從親」など『史記』に頻見する。

[2] 復散解諸侯 「散解」は『呂氏春秋』古樂「昔古朱襄氏之治天下也、多風而陽氣畜積、萬物散解、果實不成、故士達作爲五弦瑟、以來陰氣、以定群生。」に初見する。

秦所以東攘雄諸侯、樗里・甘茂之策。作樗里甘茂列傳第十一。

秦 東のかた攘いて諸侯に雄たる所以は [1]、樗里・甘茂の策。樗里甘茂列傳第十一を作る [2]。

[1] 秦所以東攘雄諸侯 「雄諸侯」は、六國年表「至獻公之後常雄諸侯」に見える。『新書』過秦下「自繆公以來、至於秦王、二十餘君、常爲諸侯雄。」に由來する表現である。

[2] 作樗里甘茂列傳第十一 『漢書』司馬遷傳も「樗里甘茂列傳」に作るが、本篇は「樗里子甘茂列傳」に作る

苞河山、圍大梁、使諸侯斂手而事秦者、魏冉之功。作穰侯列傳第十二。

河山を苞^つみ [1]、大梁を圍み [2]、諸侯をして手を斂^{おさ}めて秦に事えしむる者は [3]、魏冉の功。穰侯列傳第十二を作る。

[1] 苞河山 「河山」は、秦始皇本紀「秦有餘力而制其敝、追亡逐北、伏尸百萬、流血漂鹵。因利乘便、宰割天下、分裂河山、疆國請服、弱國入朝。」*223 など『史記』に頻見する。

[2] 圍大梁 穰侯列傳「昭王三十二年、穰侯爲相國、將兵攻魏、走芒卯、入北宅、遂圍大梁。」

[3] 使諸侯斂手而事秦者 「斂手」は、春申君列傳「秦・楚合而爲一以臨韓、韓必斂手。」に見える。

南拔鄢郢、北摧長平、遂圍邯鄲、武安爲率。破荊滅趙、王翦之計。作白起王翦列傳第十三。

南のかた鄢郢を抜き、北のかた長平を摧^{くじ}き、遂に邯鄲を圍む [1]、武安 率を爲す。荊を破り趙を滅ぼす [2]、王翦の計。白起王翦列傳第十三を作る。

[1] 南拔鄢郢北摧長平遂圍邯鄲 范雎蔡澤列傳「楚地方數千里、持戟百萬、白起率數萬之師以與楚戰、一戰舉鄢郢以燒夷陵、再戰南并蜀漢。又越韓、魏而攻疆趙、北阬馬服、誅屠四十餘萬之眾、盡之于長平之下、流血成川、沸聲若雷、遂入圍邯鄲、使秦有帝業。」など『史記』に頻見する。

[2] 破荊滅趙 白起王翦列傳「十八年、翦將攻趙。歲餘、遂拔趙、趙王降、盡定趙地爲郡。…王翦果代李信擊荊。…歲餘、虜荊王負芻、竟平荊地爲郡縣。」

獵儒墨之遺文、明禮義之統紀、絕惠王利端、列往世興衰。作孟子荀卿列傳第十四。

儒墨の遺文を獵し [1]、禮義の統紀を明らかにし [2]、惠王の利端を絶ち [3]、往世の興衰を列す [4]。孟子荀卿列傳第十四を作る。

[1] 獵儒墨之遺文 孟子荀卿列傳「荀卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道而營於巫祝、信禳祥、鄙儒小拘、如莊周等又猾稽亂俗、於是推儒・墨・道德之行事興壞、序列著數萬言而卒。」

*223 『新書』過秦上「秦有餘力而制其弊、追亡逐北、伏尸百萬、流血漂櫓、因利乘便、宰割天下、分請山河、疆國裂伏、弱國入朝。」

[2] 明禮義之統紀 上文「周室既衰、諸侯恣行。仲尼悼禮廢樂崩、追脩經術、以達王道、匡亂世反之於正、見其文辭、爲天下制儀法、垂六藝之統紀於後世。作孔子世家第十七。」

[3] 絕惠王之利端 孟子荀卿列傳「太史公曰、余讀孟子書、至梁惠王問、何以利吾國、未嘗不廢書而歎也。曰、嗟乎、利誠亂之始也。夫子罕言利者、常防其原也。故曰、放於利而行、多怨。自天子至於庶人、好利之弊何以異哉。」

[4] 列往世興衰 孟子荀卿列傳「先序今以上至黃帝、學者所共術、大竝世盛衰、因載其禩祥度制、推而遠之、至天地未生、窈冥不可考而原也。」

好客喜士、士歸于薛、爲齊扞楚魏。作孟嘗君列傳第十五。

客を好み士を喜び、士 薛に歸す [1]。齊の爲に楚魏を扞ぐ [2]。孟嘗君列傳第十五を作る。

[1] 好客喜士士歸于薛 孟嘗君列傳「太史公曰、吾嘗過薛、其俗閭里率多暴桀子弟、與鄒・魯殊。問其故、曰、孟嘗君招致天下任俠、姦人入薛中蓋六萬餘家矣。世之傳孟嘗君好客自喜、名不虛矣。」「喜士」は、平原君虞卿列傳「臣聞君之喜士、士不遠千里而至者、以君能貴士而賤妾也。」・魏公子列傳「公子喜士、名聞天下。」「太史公曰、吾過大梁之墟、求問其所謂夷門。夷門者、城之東門也。天下諸公子亦有喜士者矣、然信陵君之接巖穴隱者、不恥下交、有以也。名冠諸侯、不虛耳。高祖每過之而令民奉祠不絕也。」に見える。

[2] 爲齊扞楚魏 孟嘗君列傳「宣王二年、田忌與孫臏、田嬰俱伐魏、敗之馬陵、虜魏太子申而殺魏將龐涓。…宣王九年、田嬰相齊。齊宣王與魏襄王會徐州而相王也。楚威王聞之、怒田嬰。明年、楚伐敗齊師於徐州、而使人逐田嬰。田嬰使張丑說楚威王、威王乃止。」
爭馮亭以權、如楚以救邯鄲之圍、使其君復稱於諸侯。作平原君虞卿列傳第十六。

馮亭を争うに權を以てし [1]、楚に如きて以て邯鄲の圍を救い [2]、其の君をして復た諸侯に稱せしむ [3]。平原君虞卿列傳第十六を作る。

[1] 爭馮亭以權 相當する記述は平原君虞卿列傳の本文には見えない。平原君虞卿列傳「太史公曰、平原君、翩翩濁世之佳公子也、然未睹大體。鄙語曰、利令智昏、平原君貪馮亭邪說、使趙陷長平兵四十餘萬衆、邯鄲幾亡。」・趙世家「趙豹出、王召平原君與趙禹而告之。對曰、發百萬之軍而攻、踰歲未得一城、今坐受城市邑十七、此大利、

不可失也。王曰、善。」

[2] 如楚以救邯鄲之圍 平原君虞卿列傳「秦之圍邯鄲、趙使平原君求救、合從於楚、約與食客門下有勇力文武備具者二十人偕。…平原君既返趙、楚使春申君將兵赴救趙、魏信陵君亦矯奪晉鄙軍往救趙、」

[3] 使其君復稱於諸侯 對應する記述は見えない。

能以富貴下貧賤、賢能詘於不肖、唯信陵君爲能行之。作魏公子列傳第十七。

能く富貴を以て貧賤に下り、賢能にして不肖に詘す [1]、唯だ信陵君 能く之を行うと爲す [2]。魏公子列傳第十七を作る。

[1] 能以富貴下貧賤賢能詘於不肖 魏公子列傳「公子爲人仁而下士、士無賢不肖皆謙而禮交之、不敢以其富貴驕士。」

[2] 唯信陵君爲能行之 李斯列傳「唯明主爲能行之」

以身徇君、遂脫彊秦、使馳說之士南鄉走楚者、黃歇之義。作春申君列傳第十八

身を以て君に^{したが}徇い、遂に彊秦を脱し [1]、馳說の士をして南郷して楚に走らしむる者は [2]、黃歇の義。春申君列傳第十八を作る。

[1] 以身徇君遂脫彊秦 春申君列傳「楚使歇與太子完入質於秦、秦留之數年。楚頃襄王病、太子不得歸。而楚太子與秦相應侯善、於是黃歇乃說應侯曰、…應侯曰、歇爲人臣、出身以徇其主、太子立、必用歇、故不如無罪而歸之、以親楚。秦因遣黃歇。」

[2] 使馳說之士南鄉走楚者 春申君列傳「春申君既相楚、是時齊有孟嘗君、趙有平原君、魏有信陵君、方爭下士、招致賓客、以相傾奪、輔國持權。」

能忍詢於魏齊、而信威於彊秦、推賢讓位、二子有之。作范雎蔡澤列傳第十九。

能く^{はじ}詢を魏齊に忍び [1]、而して威を彊秦に^の信ばし [2]、賢を推して位を讓る [3]、二子 之れ有り [4]。范雎蔡澤列傳第十九を作る。

[1] 能忍詢於魏齊 范雎蔡澤列傳「魏相、魏之諸公子、曰魏齊。魏齊大怒、使舍人笞擊雎、折脅摺齒。」「忍詬」は趙世家「君所以置毋卹、爲能忍詢。」・伍子胥列傳「具爲人剛戾忍詢、能成大事、彼見來之并禽、其勢必不來。」に見える。

[2] 而信威於彊秦 春申君列傳「今王使盛橋守事於韓、盛橋以其地入秦、是王不用甲、不信威、而得百里之地。」

[3] 推賢讓位 『荀子』仲尼「能耐任之、則慎行此道也。能而不耐任、且恐失寵、則

莫若早同之、推賢讓能、而安隨其後。」

[4] 二子有之 下文「離騷有之。作屈原賈生列傳第二十四」

率行其謀、連五國兵、爲弱燕報彊齊之讎、雪其先君之恥。作樂毅列傳第二十。

其の謀を率行し、五國の兵を連ね [1]、弱燕の爲に彊齊の讎に報い [2]、其の先君の恥を雪ぐ [3]。樂毅列傳第二十を作る。

[1] 連五國兵 樂毅列傳「樂毅於是并護趙・楚・韓・魏・燕之兵以伐齊、破之濟西。」

[2] 爲弱燕報彊齊之讎 樂毅列傳「將軍爲燕破齊、報先王之讎、」

[3] 雪其先君之恥 樂毅列傳「若先王之報怨雪恥、夷萬乘之彊國、收八百歲之蓄積、及至奔羣臣之日、餘教未衰、執政任事之臣、脩法令、慎庶孽、施及乎萌隸、皆可以教後世。」
能信意彊秦、而屈體廉子、用徇其君、俱重於諸侯。作廉頗藺相如列傳第二十一。

能く意を彊秦に信ばし、而るに體を廉子に屈し [2]、用て其の君に^{したが}徇い、俱に諸侯に重んぜらる。廉頗藺相如列傳第二十一を作る。

[1] 能信意彊秦而屈體廉子 廉頗藺相如列傳「太史公曰、…相如一奮其氣、威信敵國、退而讓頗、名重太山、其處智勇、可謂兼之矣。」

潛王既失臨淄而奔莒、唯田單用即墨破走騎劫、遂存齊社稷。作田單列傳第二十二。

潛王既に臨淄を失いて莒に奔る [1]、唯だ田單 即墨を用て騎劫を破走し、遂に齊の社稷を存す。田單列傳第二十二を作る。

[1] 潛王既失臨淄而奔莒 田單列傳「及燕使樂毅伐破齊、齊潛王出奔、已而保莒城。」

能設詭說解患於圍城、輕爵祿、樂肆志。作魯仲連鄒陽列傳第二十三。

能く詭説を設けて患を圍城に解き [2]、爵祿を^{ほしま}輕んじ、志を肆にするを楽しむ [2]。魯仲連鄒陽列傳第二十三を作る。

[1] 能設詭說解患於圍城、魯仲連鄒陽列傳「此時魯仲連適游趙、會秦圍趙、聞魏將欲令趙尊秦爲帝、乃見平原君曰、…適會魏公子無忌奪晉鄙軍以救趙、擊秦軍、秦軍遂引而去。於是平原君欲封魯連、魯連辭讓（使）者三、終不肯受。平原君乃置酒、酒酣起前、以千金爲魯連壽。魯連笑曰、所貴於天下之士者、爲人排患釋難解紛亂而無取也。即有取者、是商賈之事也、而連不忍爲也。遂辭平原君而去、終身不復見。」

[2] 輕爵祿樂肆志 魯仲連鄒陽列傳「聊城亂、田單遂屠聊城。歸而言魯連、欲爵之。魯連逃隱於海上、曰、吾與富貴而詘於人、寧貧賤而輕世肆志焉。」

作辭以諷諫、連類以爭義、離騷有之。作屈原賈生列傳第二十四。

辭を作りて以て諷諫し [1]、類を連ねて以て義を争う [2]、離騷 之れ有り。屈原賈生列傳第二十四を作る。

[1] 作辭以諷諫 滑稽列傳「淳于髡者、齊之贅壻也。…以諷諫焉。」「優孟、故楚之樂人也。長八尺、多辯、常以談笑諷諫。」

[2] 連類以爭義 屈原賈生列傳「屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷。離騷者、猶離憂也。夫天者、人之始也。父母者、人之本也。人窮則反本、故勞苦倦極、未嘗不呼天也。疾痛慘怛、未嘗不呼父母也。屈平正道直行、竭忠盡智以事其君、讒人間之、可謂窮矣。信而見疑、忠而被謗、能無怨乎。屈平之作離騷、蓋自怨生也。國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂。若離騷者、可謂兼之矣。上稱帝嚳、下道齊桓、中述湯武、以刺世事。明道德之廣崇、治亂之條貫、靡不畢見。其文約、其辭微、其志潔、其行廉、其稱文小而其指極大、舉類邇而見義遠。其志潔、故其稱物芳。其行廉、故死而不容自疏。濯淖汙泥之中、蟬蛻於濁穢、以浮游塵埃之外、不獲世之滋垢、皜然泥而不滓者也。推此志也、雖與日月爭光可也。」・魯仲連鄒陽列傳「太史公曰、…鄒陽辭雖不遜、然其比物連類、有足悲者、亦可謂抗直不撓矣、吾是以附之列傳焉。」

結子楚親、使諸侯之士斐然爭入事秦。作呂不韋列傳第二十五。

子楚の親を結び、諸侯の士をして斐然として争いて入りて秦に事えしむ [1]。呂不韋列傳第二十五を作る。

[1] 使諸侯之士斐然爭入事秦 秦始皇本紀「秦并海内、兼諸侯、南面稱帝、以養四海、天下之士斐然鄉風、若是者何也。」*224・呂不韋列傳「當是時、魏有信陵君、楚有春申君、趙有平原君、齊有孟嘗君、皆下士喜賓客以相傾。呂不韋以秦之彊、羞不如、亦招致士、厚遇之、至食客三千人。是時諸侯多辯士、如荀卿之徒、著書布天下。呂不韋乃使其客人人著所聞、集論以爲八覽・六論・十二紀、二十餘萬言。以爲備天地萬物古今之事、號曰呂氏春秋。布咸陽市門、懸千金其上、延諸侯游士賓客有能增損一字者予千金。」

曹子匕首、魯獲其田、齊明其信。豫讓義不爲二心。作刺客列傳第二十六。

曹子匕首、魯 其の田を獲、齊 其の信を明らかにす [1]。豫讓 義 二心を爲さず [2]。

*224 『新書』過秦中「秦滅周祀、并海内、兼諸侯、南面稱帝、以四海養。天下之士、斐然嚮風、若是何也。」

刺客列傳第二十六を作る。

[1] 曹子匕首魯獲其田齊明其信

齊世家	刺客列傳
<p>五年、伐魯、魯將師敗。魯莊公請獻遂邑以平、桓公許、與魯會柯而盟。魯將盟、曹沫以匕首劫桓公於壇上、曰、「反魯之侵地。」</p> <p>桓公許之。已而曹沫去匕首、北面就臣位。桓公後悔、欲無與魯地而殺曹沫。管仲曰、「夫劫許之而倍信殺之、愈一小快耳、而弃信於諸侯、失天下之援、不可。」於是遂與曹沫三敗所亡地於魯。諸侯聞之、皆信齊而欲附焉。</p>	<p>曹沫者、魯人也、以勇力事魯莊公。莊公好力。</p> <p>曹沫爲魯將、與齊戰、三敗北。魯莊公懼、乃獻遂邑之地以和。猶復以爲將。齊桓公許與魯會于柯而盟。桓公與莊公既盟於壇上、曹沫執匕首劫齊桓公、桓公左右莫敢動、而問曰、「子將何欲。」曹沫曰、「齊強魯弱、而大國侵魯亦甚矣。今魯城壞即壓齊境、君其圖之。」桓公乃許盡歸魯之侵地。既已言、曹沫投其匕首、下壇、北面就羣臣之位、顏色不變、辭令如故。桓公怒、欲倍其約。管仲曰、「不可。夫貪小利以自快、棄信於諸侯、失天下之援、不如與之。」於是桓公乃遂割魯侵地、曹沫三戰所亡地盡復予魯。</p>

[2] 豫讓義不爲二心 刺客列傳豫讓曰、既已委質臣事人、而求殺之、是懷二心以事其君也。且吾所爲者極難耳。然所以爲此者、將以愧天下後世之爲人臣懷二心以事其君者也。」

能明其畫、因時推秦、遂得意於海內、斯爲謀首。作李斯列傳第二十七。

能く其の畫を明らかにし [1]、時に因りて秦を推し [2]、遂に意を海内に得 [3]、斯謀首と爲る。李斯列傳第二十七を作る。

[1] 能明其畫 酈生陸賈列傳「迺從其畫、復守敖倉、」

[2] 因時推秦 上文「道家無爲、又曰無不爲、其實易行、其辭難知。其術以虛無爲本、以因循爲用。無成執、無常形、故能究萬物之情。不爲物先、不爲物後、故能爲萬物主。有法無法、因時爲業。有度無度、因物與合。」

[3] 遂得意於海內 『老子』三十一章「夫樂殺者、不可得意於天下。」秦始皇本紀「彼見秦阻之難犯也、必退師。安土息民、以待其敝、收弱扶罷、以令大國之君、不患不得

意於海內。貴爲天子、富有天下、而身爲禽者、其救敗非也。」*225

爲秦開地益眾、北靡匈奴、據河爲塞、因山爲固、建榆中。作蒙恬列傳第二十八。

秦の爲に地を開き眾を益し [1]、北のかた匈奴を靡^{なび}かせ [2]、河に據りて塞を爲し [3]、山に因りて固を爲し [4]、榆中を建つ [5]。蒙恬列傳第二十八を作る。

[1] 爲秦開地益眾 匈奴列傳「單于既約和親、於是制詔御史曰、匈奴大單于遺朕書、言和親已定、亡人不足以益眾廣地、匈奴無入塞、漢無出塞、犯（令）〔今〕約者殺之、可以久親、後無咎、俱便。朕已許之。其布告天下、使明知之。」

[2] 北靡匈奴 萬石張叔列傳「是時漢方南誅兩越、東擊朝鮮、北逐匈奴、西伐大宛、中國多事。」・司馬相如列傳 / 喻巴蜀父老檄「然後興師出兵、北征匈奴、單于怖駭、交臂受事、詘膝請和。」

[3] 據河爲塞 秦始皇本紀「地東至海暨朝鮮、西至臨洮・羌中、南至北嚮戶、北據河爲塞、竝陰山至遼東。」

[4] 因山爲固 秦始皇本紀「秦地被山帶河以爲固、四塞之國也。」*226・匈奴列傳「於是漢遂取河南地、築朔方、復繕故秦時蒙恬所爲塞、因河爲固。」

[5] 建榆中 秦始皇本紀「遷北河榆中 三萬家。」・項羽本紀「蒙恬爲秦將、北逐戎人、開榆中地數千里、竟斬陽周。」

填趙塞常山以廣河內、弱楚權、明漢王之信於天下。作張耳陳餘列傳第二十九。

趙を填^{しず}め常山に塞して以て河内を廣め [1]、楚の權を弱め、漢王の信を天下に明らかにす [2]。張耳陳餘列傳第二十九を作る。

[1] 填趙塞常山以廣河內 張耳陳餘列傳「張耳・陳餘說武臣曰、王王趙、非楚意、特以計賀王。楚已滅秦、必加兵於趙。願王毋西兵、北徇燕・代、南收河內以自廣。趙南據大河、北有燕・代、楚雖勝秦、必不敢制趙。」

[2] 弱楚權明漢王之信於天下 張耳陳餘列傳「張耳敗走、念諸侯無可歸者、曰、漢王與我有舊故、而項羽又彊、立我、我欲之楚。甘公曰、漢王之入關、五星聚東井。東井者、秦分也。先至必霸。楚雖彊、後必屬漢。故耳走漢。」

*225 『新書』過秦下「彼見秦阻之難犯、必退師、案土息民、以待其弊。承解誅罷、以令國君、不患不得意於海內。貴爲天子、富有四海、而身爲禽者、其救敗非也。」

*226 『新書』過秦下「秦地被山帶河以爲固、四塞之國也。」

收西河・上黨之兵、從至彭城。越之侵掠梁地以苦項羽。作魏豹彭越列傳第三十。

西河・上黨の兵を収め [1]、從いて彭城に至る [2]。越の梁地を侵掠するは以て項羽を苦しむ [3]。魏豹彭越列傳第三十を作る。

[1] 收西河上黨之兵 「西河」「上黨」を連ねることは、酈生陸賈列傳「夫漢王發蜀漢、定三秦。涉西河之外、援上黨之兵。」に見えるが、魏豹彭越列傳には見えない。

[2] 從至彭城 魏豹彭越列傳「漢王還定三秦、渡臨晉、魏王豹以國屬焉、遂從擊楚於彭城。」

[3] 越之侵掠梁地以苦項羽 魏豹彭越列傳「漢王三年、彭越常往來爲漢游兵、擊楚、絕其後糧於梁地。」

以淮南叛楚歸漢、漢用得大司馬殷、卒破子羽于垓下。作黥布列傳第三十一。

淮南を以て楚に叛し漢に歸す [1]、漢用て大司馬殷を得、卒に子羽を垓下に破る [2]。黥布列傳第三十一を作る。

[1] 以淮南叛楚歸漢 黥布列傳「淮南王曰、請奉命。陰許畔楚與漢、未敢泄也。」

[2] 漢用得大司馬殷卒破子羽于垓下 黥布列傳「六年、布與劉賈入九江、誘大司馬周殷、周殷反楚、遂舉九江兵與漢擊楚、破之垓下。」

楚人迫我京索、而信拔魏趙、定燕齊、使漢三分天下有其二、以滅項籍。作淮陰侯列傳第三十二。

楚人 我に京索に迫る [1]、而るに信 魏趙を抜き、燕齊を定め [2]、漢をして天下を三分して其の二を有ち [3]、以て項籍を滅ぼさしむ。淮陰侯列傳第三十二を作る。

[1] 楚人迫我京索 淮陰侯列傳「信復收兵與漢王會滎陽、復擊破楚京・索之間、以故楚兵卒不能西。」

[2] 而信拔魏趙定燕齊 淮陰侯列傳「魏王豹驚、引兵迎信、信遂虜豹、定魏爲河東郡。…於是漢兵夾擊、大破虜趙軍、斬成安君泜水上、禽趙王歇。…韓信曰、善。從其策、發使使燕、燕從風而靡。…漢四年、遂皆降平齊。」

[3] 使漢三分天下有其二 「三分天下有其二」に相當する記述は、齊世家「天下三分、其二歸周者、太公之謀計居多。」には見えるが、韓信關聯の記述には見えない。

楚漢相距鞏洛、而韓信爲填潁川、盧縮絕籍糧餉。作韓信盧縮列傳第三十三。

楚漢 鞏洛に相い距む、而るに韓信爲に潁川を填む [1]、盧縮 籍の糧餉を絶つ [2]。

韓信盧縮列傳第三十三を作る。

[1] 楚漢相距鞏洛而韓信爲填潁川 韓信盧縮列傳「三年、漢王出滎陽、韓王信・周苛等守滎陽。及楚敗滎陽、信降楚、已而得亡、復歸漢、漢復立以爲韓王、竟從擊破項籍、天下定。五年春、遂與剖符爲韓王、王潁川。」「鞏洛」は同傳「明年春、上以韓信材武、所王北近鞏・洛、南迫宛・葉、東有淮陽、皆天下勁兵處、迺詔徙韓王信王太原以北、備禦胡、都晉陽。」に見える。

[2] 盧縮絶籍糧餉 高祖本紀「漢王聽其計、使盧縮、劉賈將卒二萬人、騎數百、渡白馬津、入楚地、與彭越復擊破楚軍燕郭西、遂復下梁地十餘城。」魏豹彭越列傳「漢王三年、彭越常往來爲漢游兵、擊楚、絶其後糧於梁地。」

諸侯畔項王、唯齊連子羽城陽、漢得以間遂入彭城。作田儋列傳第三十四。

諸侯 項王に畔くも、唯だ齊のみ子羽に城陽に連ぬ、漢 間を以て遂に彭城に入るを得 [1]。田儋列傳第三十四を作る。

[1] 諸侯畔項王唯齊連子羽城陽漢得以間遂入彭城 田儋列傳「榮弟橫、收齊散兵、得數萬人、反擊項羽於城陽。而漢王率諸侯敗楚、入彭城。」

攻城野戰、獲功歸報、噲・商有力焉、非獨鞭策、又與之脫難。作樊鄴列傳第三十五。

攻城野戰 [1]、功を獲て歸りて報ず、噲・商 力有り [2]、獨り鞭策のみに非ず、又た之と難を脱す [3]。樊鄴列傳第三十五を作る [4]。

[1] 攻城野戰 曹相國世家「太史公曰、曹相國參攻城野戰之功所以能多若此者、以與淮陰侯俱。」樊鄴滕灌列傳には見えない。

[2] 獲功歸報噲商有力焉 「歸報」は鄴生陸賈列傳「陸生卒拜尉他爲南越王、令稱臣奉漢約。歸報、高祖大悅、拜賈爲太中大夫。」など、「×有力焉」は同傳「及誅諸呂、立孝文帝、陸生頗有力焉。」など『史記』に頻見するが、樊鄴滕灌列傳には見えない。

[3] 非獨鞭策又與之脫難 「脱」は樊鄴滕灌列傳「還定三秦、從擊項籍。至彭城、項羽大破漢軍。漢王敗、不利、馳去。見孝惠・魯元、載之。漢王急、馬罷、虜在後、常蹶兩兒欲弃之、嬰常收、竟載之、徐行面雍樹乃馳。漢王怒、行欲斬嬰者十餘、卒得脱、而致孝惠・魯元於豐。…惠帝及高后德嬰之脱孝惠・魯元於下邑之間也、乃賜嬰縣北第一、曰、近我、以尊異之。」に二見する。「鞭策」は『史記』ではここにしか見えない。太僕たる夏侯嬰の職務を指す。

[4] 作樊鄴列傳第三十五 本篇・『漢書』司馬遷傳ともに「樊鄴滕灌列傳」に作る。

漢既初定、文理未明、蒼爲主計、整齊度量、序律曆。作張丞相列傳第三十六。

漢既に初めて定まり [1]、文理未だ明らかならず [2]、蒼 主計と爲り [3]、度量を整齊し、律曆を序^つづ [4]。張丞相列傳第三十六を作る。

[1] 漢既初定 張丞相列傳「自漢興至孝文二十餘年、會天下初定、將相公卿皆軍吏。」

[2] 文理未明 蘇秦列傳「秦王曰、毛羽未成、不可以高蜚。文理未明、不可以并兼。」

[3] 蒼爲主計 張丞相列傳「遷爲計相、一月、更以列侯爲主計四歲。是時蕭何爲相國、而張蒼乃自秦時爲柱下史、明習天下圖書計籍。蒼又善用算律曆、故令蒼以列侯居相府、領主郡國上計者。」

[4] 整齊度量序律曆 張丞相列傳「張蒼爲計相時、緒正律曆。以高祖十月始至霸上、因故秦時本以十月爲歲首、弗革。推五德之運、以爲漢當水德之時、尚黑如故。吹律調樂、入之音聲、及以比定律令。若百工、天下作程品。至於爲丞相、卒就之、故漢家言律曆者、本之張蒼。蒼本好書、無所不觀、無所不通、而尤善律曆。」

結言通使、約懷諸侯。諸侯咸親、歸漢爲藩輔。作酈生陸賈列傳第三十七。

言を結び使を通じ、諸侯を約懷す。諸侯咸な親しみ、漢に歸して藩輔と爲る [1]。酈生陸賈列傳第三十七を作る。

[1] 結言通使約懷諸侯諸侯咸親歸漢爲藩輔 酈生陸賈列傳「酈生言其弟酈商、使將數千人從沛公西南略地。酈生常爲說客、馳使諸侯。」「陸賈者、楚人也。以客從高祖定天下、名爲有口辯士、居左右、常使諸侯。」「藩輔」は禮書「孝景時、御史大夫鼂錯明於世務刑名、數干諫孝景曰、諸侯藩輔、臣子一例、古今之制也。」のほか、三王世家に「世爲漢藩輔」が三見する。

欲詳知秦楚之事、維周繆常從高祖、平定諸侯。作傅靳蒯成列傳第三十八。

秦楚の事を詳知せんと欲すれば、維れ周繆常に高祖に従い、諸侯を平定す [1]。傅靳蒯成列傳第三十八を作る。

[1] 欲詳知秦楚之事維周繆常從高祖平定諸侯『漢書』司馬遷傳の「十篇缺」につき、張晏注は傅靳蒯成列傳をその一篇に數える。本篇の周繆に關する記述は、

蒯成侯繆者、沛人也、姓周氏。常爲高祖參乘、以舍人從起沛。至霸上、西入蜀、漢、還定三秦、食邑池陽。東絕甬道、從出度平陰、遇淮陰侯兵襄國、軍乍利乍不利、

終無離上心。以縹爲信武侯、食邑三千三百戶。高祖十二年、以縹爲蒯成侯、除前所食邑。上欲自擊陳豨、蒯成侯泣曰、始秦攻破天下、未嘗自行。今上常自行、是爲無人可使者乎。上以爲愛我、賜入殿門不趨、殺人不死。至孝文五年、縹以壽終、謚爲貞侯。

のみであり、「欲詳知秦楚之事」と嘯み合わない。このため、余嘉錫^{*227}は亡篇説を支持するが、太史公自序が本篇に先行することを考慮すれば、本篇との齟齬は亡篇たるの論據たりえない。

徙疆族、都關中、和約匈奴。明朝廷禮、次宗廟儀法。作劉敬叔孫通列傳第三十九。

疆族を徙し、關中に都し [1]、匈奴に和約す [2]。朝廷の禮を明らかにし [3]、宗廟の儀法を次^{ついで}づ [4]。劉敬叔孫通列傳第三十九を作る。

[1] 徙疆族都關中 劉敬叔孫通列傳「劉敬從匈奴來、因言、匈奴河南白羊・樓煩王、去長安近者七百里、輕騎一日一夜可以至秦中。秦中新破、少民、地肥饒、可益實。夫諸侯初起時、非齊諸田、楚昭・屈、景莫能興。今陛下雖都關中、實少人。北近胡寇、東有六國之族、宗疆、一日有變、陛下亦未得高枕而臥也。臣願陛下徙齊諸田、楚昭・屈・景、燕・趙・韓・魏後、及豪桀名家居關中。無事、可以備胡。諸侯有變、亦足率以東伐。此疆本弱末之術也。上曰、善。迺使劉敬徙所言關中十餘萬口。」

[2] 和約匈奴 劉敬叔孫通列傳「使劉敬往結和親約。」

[3] 明朝廷禮 劉敬叔孫通列傳「叔孫通知上益厭之也、說上曰、夫儒者難與進取、可與守成。臣願徵魯諸生、與臣弟子共起朝儀。」

[4] 次宗廟儀法 劉敬叔孫通列傳「徙爲太常、定宗廟儀法。」

能摧剛作柔、卒爲列臣。欒公不劫於執而倍死。作季布欒布列傳第四十。

能く剛を摧^{くじ}きて柔^なを作し、卒に列臣と爲る [1]。欒公 執^{おびやか}に劫^{おびやか}されて死^{そむ}に倍^{そむ}かず [2]。季布欒布列傳第四十を作る。

[1] 能摧剛作柔卒爲列臣 季布欒布列傳「當是時、諸公皆多季布能摧剛爲柔、朱家亦以此名聞當世。季布召見、謝、上拜爲郎中。」

[2] 欒公不劫於執而倍死 欒布季布列傳「方提趣湯、布顧曰、願一言而死。上曰、何言。布曰、方上之困於彭城、敗滎陽、成皋間、項王所以(遂)不能〔遂〕西、徒以

*227 余嘉錫「太史公書亡篇考」(『輔仁學誌』15-1、1947)。

彭王居梁地、與漢合從苦楚也。當是之時、彭王一顧、與楚則漢破、與漢而楚破。且垓下之會、微彭王、項氏不亡。天下已定、彭王剖符受封、亦欲傳之萬世。今陛下微兵於梁、彭王病不行、而陛下疑以爲反、反形未見、以苛小案誅滅之、臣恐功臣人人自危也。今彭王已死、臣生不如死、請就亨。」

敢犯顏色以達主義、不顧其身、爲國家樹長畫。作袁盎朝錯列傳第四十一。

敢て顏色を犯して以て主義を達し [1]、其の身を顧みず、國家の爲に長畫を樹つ [2]。袁盎朝錯列傳第四十一を作る。

[1] 敢犯顏色以達主義 袁盎鼂錯列傳「太史公曰、袁盎雖不好學、亦善傳會、仁心爲質、引義忼慨。」

[2] 不顧其身爲國家樹長畫 袁盎鼂錯列傳「遷爲御史大夫、請諸侯之罪過、削其地、收其枝郡。奏上、上令公卿列侯宗室集議、莫敢難、獨竇嬰爭之、由此與錯有卻。錯所更令三十章、諸侯皆誼譁疾鼂錯。錯父聞之、從潁川來、謂錯曰、上初即位、公爲政用事、侵削諸侯、別疏人骨肉、人口議多怨公者、何也。鼂錯曰、固也。不如此、天子不尊、宗廟不安。錯父曰、劉氏安矣、而鼂氏危矣、吾去公歸矣。遂飲藥死、曰、吾不忍見禍及吾身。死十餘日、吳楚七國果反、以誅錯爲名。及竇嬰、袁盎進說、上令鼂錯衣朝衣斬東市。」

守法不失大理、言古賢人、增主之明。作張釋之馮唐列傳第四十二。

法を守りて大理を失わず [1]、古の賢人を言いて、主の明を増す [2]。張釋之馮唐列傳第四十二を作る。

[1] 守法不失大理 張釋之馮唐列傳「太史公曰、張季之言長者、守法不阿意。馮公之論將率、有味哉。有味哉。語曰、不知其人、視其友。二君之所稱誦、可著廊廟。書曰、不偏不黨、王道蕩蕩。不黨不偏、王道便便。張季、馮公近之矣。」

[2] 言古賢人增主之明 張釋之馮唐列傳「文帝曰、吾居代時、吾尚食監高袞數爲我言趙將李齊之賢、戰於鉅鹿下。今吾每飯、意未嘗不在鉅鹿也。父知之乎。唐對曰、尚不如廉頗、李牧之爲將也。」

敦厚慈孝、訥於言、敏於行、務在鞠躬、君子長者。作萬石張叔列傳第四十三。

敦厚慈孝 [1]、言に訥、行に敏 [2]、務めて鞠躬に在り [3]、君子長者 [4]。萬石張叔列傳第四十三を作る。

[1] 敦厚慈孝 萬石張叔列傳「萬石君家以孝謹聞乎郡國、雖齊魯諸儒質行、皆自以爲不及也。」

[2] 訥於言敏於行 『論語』里仁「子曰、君子欲訥於言而敏於行。」に由來する。萬石張叔列傳「太史公曰、仲尼有言曰、君子欲訥於言而敏於行、其萬石・建陵・張叔之謂邪。是以其教不肅而成、不嚴而治。塞侯微巧、而周文處調、君子譏之、爲其近於佞也。然斯可謂篤行君子矣。」

[3] 務在鞠躬 『論語』鄉黨「入公門、鞠躬如也。如不容。立不中門、行不履闕。過位、色勃如也、足躩如也、其言似不足者。攝齊升堂、鞠躬如也、屏氣似不息者。出、降一等、逞顏色、怡怡如也。沒階、趨進、翼如也。復其位。蹞蹞如也。執圭、鞠躬如也、如不勝。上如揖、下如授。勃如戰色、足躑躑如有循。享禮、有容色。私覲、愉愉如也。」

[4] 君子長者 衛世家「周公且懼康叔齒少、乃申告康叔曰、必求殷之賢人君子長者、問其先殷所以興、所以亡、而務愛民。」・齊悼惠王世家「代王母家薄氏、君子長者。且代王又親高帝子、於今見在、且最爲長。」

守節切直、行足以厲賢、任重權不可以非理撓。作田叔列傳第四十四。

守節切直 [1]、義は以て廉を言うに足り [2]、行は以て賢を厲ますに足り、重權に任ずれば非理を以て撓む可からず [3]。田叔列傳第四十四を作る。

[1] 守節切直 田叔列傳「切直廉平、趙王賢之、未及遷。」

[2] 義足以言廉 田叔列傳「太史公曰、孔子稱曰、居是國必聞其政、田叔之謂乎。義不忘賢、明主之美以救過。仁與余善、余故并論之。」

[3] 任重權不可以非理撓 田叔列傳「梁孝王使人殺故吳相袁盎、景帝召田叔案梁、具得其事、還報。景帝曰、梁有之乎。叔對曰、死罪。有之。上曰、其事安在。田叔曰、上毋以梁事爲也。上曰、何也。曰、今梁王不伏誅、是漢法不行也。如其伏法、而太后食不甘味、臥不安席、此憂在陛下也。景帝大賢之、以爲魯相。」

扁鵲言醫、爲方者宗、守數精明。後世（修）〔循〕序、弗能易也、而倉公可謂近之矣。

作扁鵲倉公列傳第四十五。

扁鵲 醫を言い、方者の宗と爲り、守數精明 [1]。後世（修）〔循〕序、易うる能わざるなり、而して倉公 之に近しと謂う可し [2]。扁鵲倉公列傳第四十五を作る。

[1] 扁鵲言醫爲方者宗守數精明 扁鵲倉公列傳「至今天下言脈者、由扁鵲也。」

「方者」は扁鵲倉公列傳「扁鵲至虢宮門下、問中庶子喜方者曰、」

[2] 而倉公可謂近之矣 扁鵲倉公列傳「太史公曰、女無美惡、居宮見妒。士無賢不肖、入朝見疑。故扁鵲以其伎見殃、倉公乃匿迹自隱而當刑。緹縈通尺牘、父得以後寧。故老子曰、美好者不祥之器、豈謂扁鵲等邪。若倉公者、可謂近之矣。」

維仲之省、厥凖王吳、遭漢初定、以填撫江淮之間。作吳王濞列傳第四十六。

維れ仲の省、厥れ凖 吳に王たり [1]、漢の初めて定むるに遭い、以て江淮の間を填撫す [2]。吳王濞列傳第四十六を作る。

[1] 維仲之省厥凖王吳 吳王濞列傳「太史公曰、吳王之王、由父省也。」

[2] 以填撫江淮之間 荆燕世家「太史公曰、荆王王也、由漢初定、天下未集、故劉賈雖屬疏、然以策爲王、填江淮之間。」・下文「黥布叛逆、子長國之、以填江淮之南、安剽楚庶民。作淮南衡山列傳第五十八。」

吳楚爲亂、宗屬唯嬰賢而喜士、士鄉之、率師抗山東滎陽。作魏其武安列傳第四十七。

吳楚 亂を爲し、宗屬唯だ嬰のみ賢にして士を喜ぶ、士 之に郷い、師を率いて山東に滎陽に抗す [1]。魏其武安列傳第四十七を作る [2]。

[1] 吳楚爲亂宗屬唯嬰賢而喜士士鄉之率師抗山東滎陽 魏其武安侯列傳「孝景三年、吳楚反、上察宗室諸竇毋如竇嬰賢、乃召嬰。嬰入見、固辭謝病不足任。太后亦慙。於是上曰、天下方有急、王孫寧可以讓邪。乃拜嬰爲大將軍、賜金千斤。嬰乃言袁盎・欒布諸名將賢士在家者進之。所賜金、陳之廊廡下、軍吏過、輒令財取爲用、金無入家者。竇嬰守滎陽、監齊趙兵。七國兵已盡破、封嬰爲魏其侯。諸游士賓客爭歸魏其侯。」

[2] 作魏其武安列傳第四十七 『漢書』司馬遷傳も「魏其武安列傳」に作るが、本篇は「魏其武安君列傳」に作る。

智足以應近世之變、寬足用得人。作韓長孺列傳第四十八。

智は以て近世の變に應ずるに足り、寬は用て人を得るに足る [1]。韓長孺列傳第四十八を作る。

[1] 智足以應近世之變寬足用得人 韓長孺列傳「安國爲人多大略、智足以當世取合、而出於忠厚焉。貪嗜於財。所推舉皆廉士、賢於己者也。於梁舉壺遂・臧固・郅他、皆天下名士、士亦以此稱慕之、唯天子以爲國器。」

勇於當敵、仁愛士卒、號令不煩、師徒鄉之。作李將軍列傳第四十九。

當敵に勇にして、士卒を仁愛し、號令 煩ならず、師徒 之に郷う [1]。李將軍列傳第四十九を作る。

[1] 勇於當敵仁愛士卒號令不煩師徒郷之 李將軍列傳「李廣軍極簡易、然虜卒犯之、無以禁也。而其士卒亦佚樂、咸樂爲之死。我軍雖煩擾、然虜亦不得犯我。」「廣之將兵、乏絕之處、見水、士卒不盡飲、廣不近水、士卒不盡食、廣不嘗食。寬緩不苛、士以此愛樂爲用。」

自三代以來、匈奴常爲中國患害。欲知疆弱之時、設備征討、作匈奴列傳第五十。

三代自り以來、匈奴常に中國の患害と爲る。疆弱の時を知り、備を設け征討せんと欲す [1]、匈奴列傳第五十を作る。

[1] 設備征討 孝文本紀「朕既不能遠德、故憫然念外人之有非、是以設備未息。今縱不能罷邊屯戍、而又飭兵厚衛、其罷衛將軍軍。」

直曲塞、廣河南、破祁連、通西國、靡北胡。作衛將軍驃騎列傳第五十一。

曲塞に直たり、河南を廣げ [1]、祁連を破り [2]、西國を通じ [3]、北胡を靡^{なび}かす。衛將軍驃騎列傳第五十一を作る。

[1] 廣河南 衛將軍驃騎列傳「遂略河南地、至于隴西、捕首虜數千、畜數十萬、走白羊・樓煩王。遂以河南地爲朔方郡。」

[2] 破祁連 衛將軍驃騎列傳「驃騎將軍踰居延至祁連山、捕首虜甚多。」

[3] 通西國 大宛列傳「而匈奴奇兵時時遮擊使西國者。」

大臣宗室以侈靡相高、唯弘用節衣食爲百吏先。作平津侯列傳第五十二。

大臣宗室 侈靡を以て相い高ぶる [1]、唯だ弘用て衣食を節し百吏の先と爲る [2]。平津侯列傳第五十二を作る [3]。

[1] 大臣宗室以侈靡相高 淮南衡山列傳「行珠玉金帛賂諸侯宗室大臣、獨竇氏不與。」に「宗室大臣」が見える。「侈靡」は司馬相如傳「今足下不稱楚王之德厚、而盛推雲夢以爲高、奢言淫樂而顯侈靡、竊爲足下不取也。」「無是公言天子上林廣大、山谷水泉萬物、乃子虛言楚雲夢所有甚眾、侈靡過其實、且非義理所尚、故刪取其要、歸正道而論之。」に見える。「以…相高」は、張釋之馮唐列傳「且秦以任刀筆之吏、吏爭以亟疾苛察相高、」に見える。

[2] 唯弘用節衣食爲百吏先 平津侯主父列傳「汲黯曰、弘位在三公、奉祿甚多。然

爲布被、此詐也。上問弘。弘謝曰、有之。夫九卿與臣善者無過黯、然今日庭詰弘、誠中弘之病。夫以三公爲布被、誠飾詐欲以釣名。且臣聞管仲相齊、有三歸、侈擬於君、桓公以霸、亦上僭於君。晏嬰相景公、食不重肉、妾不衣絲、齊國亦治、此下比於民。今臣弘位爲御史大夫、而爲布被、自九卿以下至於小吏、無差、誠如汲黯言。且無汲黯忠、陛下安得聞此言。天子以爲謙讓、愈益厚之。卒以弘爲丞相、封平津侯。

[3] 作平津侯列傳第五十二 本篇は「平津侯主父列傳」、『漢書』司馬遷傳は「平津主父列傳」に作る。

漢既平中國、而佗能集楊越以保南藩、納貢職。作南越列傳第五十三。

漢既に中國を平らぐ、而るに佗能く楊越を集め以て南藩を保ち、貢職を納む [1]。南越列傳第五十三を作る。

[1] 而佗能集楊越以保南藩納貢職 南越列傳「秦時已并天下、略定楊越、…漢十一年、遣陸賈因立佗爲南越王、與剖符通使、和集百越、毋爲南邊患害、與長沙接境。…乃頓首謝、願長爲藩臣、奉貢職。」

吳之叛逆、甌人斬濞、葆守封禺爲臣。作東越列傳第五十四。

吳の叛逆 [1]、甌人 濞を斬り [2]、封禺を葆守して臣と爲る [3]。東越列傳第五十四を作る。

[1] 吳之叛逆 「叛逆」は上文「七國叛逆、蕃屏京師、唯梁爲扞。偵愛矜功、幾獲于禍。嘉其能距吳楚、作梁孝王世家第二十八。」・下文「黥布叛逆、子長國之、以填江淮之南、安剽楚庶民。作淮南衡山列傳第五十八。」など『史記』に頻見する*228。

[2] 甌人斬濞 東越列傳「及吳破、東甌受漢購、殺吳王丹徒、」

[3] 葆守封禺爲臣 「封禺」は上文「少康之子、實賓南海、文身斷髮、黿鱉與處、既守封禺、奉禹之祀。句踐困彼、乃用種・蠡。嘉句踐夷蠻能脩其德、滅彊吳以尊周室、作越王句踐世家第十一。」に見える。

燕丹散亂遼間、滿收其亡民、厥聚海東、以集眞藩、葆塞爲外臣。作朝鮮列傳第五十五。

燕丹 遼間に散亂し、滿 其の亡民を收め、厥れ海東を聚め、以て眞藩を集し [1]、

*228 漢興以來諸侯元年表「漢定百年之間、親屬益疎、諸侯或驕奢、怙邪臣計謀爲淫亂、大者叛逆、小者不軌于法、以危其命、殞身亡國。」・天官書「吳楚七國叛逆、彗星數丈、天狗過梁野。及兵起、遂伏尸流血其下。」・平準書「故吳、諸侯也、以卽山鑄錢、富埒天子、其後卒以叛逆。」

葆塞して外臣と爲る [2]。朝鮮列傳第五十五を作る。

[1] 燕丹散亂遼間滿收其亡民厥聚海東以集眞藩 燕世家「二十九年、秦攻拔我薊、燕王亡、徙居遼東、斬丹以獻秦。…三十三年、秦拔遼東、虜燕王喜、卒滅燕。」によれば、燕王喜二十九年（226BC）、秦の薊攻略により、燕は太子丹を斬って秦に獻じ、遼東に退去した。ついで三十三年（222BC）、秦は遼東を攻略し、燕を滅ぼした。「燕丹散亂遼間」は、朝鮮建國の契機を燕の滅亡に置く。對するに本篇「燕王盧綰反、入匈奴、滿亡命、聚黨千餘人、魑結蠻夷服而東走出塞、渡涇水、居秦故空地上下郛、稍役屬眞番、朝鮮蠻夷及故燕、齊亡命者王之、都王險。」は、燕王盧綰の亡命（195BC）を朝鮮建國の契機とし、太史公自序と朝鮮列傳の間における認識の變化を示している。「眞藩」は朝鮮列傳の「眞番」である。

[2] 葆塞爲外臣 「葆塞」は匈奴列傳「匈奴右賢王入居河南地、侵盜上郡葆塞蠻夷、殺略人民。」に見える。漢代には郡縣を設置した領域を「中國」と稱し、その外を「外國」と稱した。漢の皇帝に臣從する「外國」の君長が「外臣」である*229。

唐蒙使略通夜郎、而邛笮之君請爲內臣受吏。作西南夷列傳第五十六。

唐蒙使いして夜郎を略通し [1]、而して邛笮の君 內臣と爲り吏を受けんことを請う [2]。西南夷列傳第五十六を作る。

[1] 唐蒙使略通夜郎 司馬相如列傳「唐蒙已略通夜郎、因通西南夷道、發巴・蜀・廣漢卒、作者數萬人。」・西南夷列傳「乃拜蒙爲郎中將、將千人、食重萬餘人、從巴蜀笮關入、遂見夜郎侯多同。蒙厚賜、喻以威德、約爲置吏、使其子爲令。」

[2] 而邛笮之君請爲內臣受吏 司馬相如列傳「司馬長卿使略定西夷、邛・笮・毋駝・斯榆之君皆請爲內臣。」・西南夷列傳「蜀人司馬相如亦言西夷邛・笮可置郡。使相如以郎中將往喻、皆如南夷、爲置一都尉、十餘縣、屬蜀。」

子虛之事、大人賦說、靡麗多誇、然其指風諫、歸於無爲。作司馬相如列傳第五十七。

子虛の事 [1]、大人賦の説、靡麗 誇多し [2]、然るに其の指は風諫 [3]、無爲に歸す [4]。司馬相如列傳第五十七を作る。

*229 匈奴列傳「丞相長史任敞曰、匈奴新破、困、宜可使爲外臣、朝請於邊。」・西南夷列傳「蒙乃上書說上曰、南越王黃屋左纛、地東西萬餘里、名爲外臣、實一州主也。」・大宛列傳「既連烏孫、自其西大夏之屬皆可招來而爲外臣。」

[1] 子虛之事大人賦說 司馬相如列傳「上讀子虛賦而善之、…相如以爲列僊之傳居山澤間、形容甚臞、此非帝王之僊意也、乃遂就大人賦。」

[2] 靡麗多誇 司馬相如列傳「朕以覽聽餘閑、無事弃日、順天道以殺伐、時休息於此、恐後世靡麗、遂往而不反、非所以爲繼嗣創業垂統也。」

[3] 然其指風諫 司馬相如列傳「相如以子虛、虛言也、爲楚稱。烏有先生者、烏有此事也、爲齊難。無是公者、無是人也、明天子之義。故空藉此三人爲辭、以推天子諸侯之苑囿。其卒章歸之於節儉、因以風諫。」「太史公曰、春秋推見至隱、易本隱之以顯、大雅言王公大人而德逮黎庶、小雅譏小己之得失、其流及上。所以言雖外殊、其合德一也。相如雖多虛辭濫說、然其要歸引之節儉、此與詩之風諫何異。」

[4] 歸於無爲 司馬相如列傳 / 子虛賦「於是楚王乃登陽雲之臺、泊乎無爲、澹乎自持、勺藥之和具而後御之。」

黥布叛逆、子長國之、以填江淮之南、安剽楚庶民。作淮南衡山列傳第五十八。

黥布叛逆し [1]、子長 之に國し、以て江淮の南を填め [2]、剽楚の庶民を安んず [3]。淮南衡山列傳第五十八を作る。

[1] 黥布叛逆 「叛逆」は上文「七國叛逆、蕃屏京師、唯梁爲扞。偵愛矜功、幾獲于禍。嘉其能距吳楚、作梁孝王世家第二十八。」「吳之叛逆、甌人斬淩、葆守封禺爲臣。作東越列傳第五十四。」に見える。

[2] 以填江淮之南 荆燕世家「太史公曰、荆王王也、由漢初定、天下未集、故劉賈雖屬疏、然以策爲王、填江淮之閒。」・上文「維仲之省、厥淩王吳、遭漢初定、以填撫江淮之閒。作吳王濞列傳第四十六。」

[3] 安剽楚庶民 「剽」「楚」を關聯づけることは、留侯世家「漢十一年、黥布反、…留侯病、自彊起、至曲郵、見上曰、臣宜從、病甚。楚人剽疾、願上無與楚人爭鋒。」・絳侯周勃世家「孝景三年、吳楚反。亞夫以中尉爲太尉、東擊吳楚。因自請上曰、楚兵剽輕、難與爭鋒。願以梁委之、絕其糧道、乃可制。上許之。」・貨殖列傳「夫自淮北沛・陳・汝南・南郡、此西楚也。其俗剽輕、易發怒、地薄、寡於積聚。江陵故郢」および上文「漢既譎謀、禽信於陳。越荆剽輕、乃封弟交爲楚王、爰都彭城、以彊淮泗、爲漢宗藩。戊溺於邪、禮復紹之。嘉游輔祖、作楚元王世家第二十。」に見える。

奉法循理之吏、不伐功矜能、百姓無稱、亦無過行。作循吏列傳第五十九。

奉法循理の吏 [1]、功を伐り能を矜らず [2]、百姓 稱する無く [3]、亦た過行無し [4]。循吏列傳第五十九を作る。

[1] 奉法循理之吏 循吏列傳「太史公曰、法令所以導民也、刑罰所以禁姦也。文武不備、良民懼然身修者、官未曾亂也。奉職循理、亦可以爲治、何必威嚴哉。」「公儀休者、魯博士也。以高弟爲魯相。奉法循理、無所變更、百官自正。使食祿者不得與下民爭利、受大者不得取小。」

[2] 不伐功矜能 上文「嘉參不伐功矜能、作曹相國世家第二十四。」

[3] 百姓無稱 魯仲連鄒陽列傳「功敗名滅、後世無稱焉、非智也。」

[4] 亦無過行 孝文本紀「朕既不敏、常畏過行、以羞先帝之遺德。維年之久長、懼于不終。」・大宛列傳「奮行者官過其望、以適過行者皆細其勞。」

正衣冠立於朝廷、而羣臣莫敢言浮說、長孺矜焉。好薦人、稱長者、壯有溉。作汲鄭列傳第六十。

衣冠を正して朝廷に立つ、而して羣臣 敢て浮説を言う莫し [1]、長孺 焉を矜る。好みて人を薦め、長者を稱し [2]、壯 溉有り。汲鄭列傳第六十を作る。

[1] 正衣冠立於朝廷而羣臣莫敢言浮説 汲鄭列傳「黯弃居郡、不得與朝廷議也。然御史大夫張湯智足以拒諫、詐足以飾非、務巧佞之語、辯數之辭、非肯正爲天下言、專阿主意。主意所不欲、因而毀之。主意所欲、因而譽之。好興事、舞文法、內懷詐以御主心、外挾賊吏以爲威重。公列九卿、不早言之、公與之俱受其僂矣。」

[2] 好薦人稱長者 汲鄭列傳「每朝、候上之間、説未嘗不言天下之長者。其推轂士及官屬丞史、誠有味其言之也、常引以爲賢於己。」

自孔子卒、京師莫崇庠序、唯建元・元狩之間、文辭粲如也。作儒林列傳第六十一。

孔子卒せる自り、京師 庠序を崇ぶ莫し [1]、唯だ建元・元狩の間、文辭粲如たるなり [2]。儒林列傳第六十一を作る。

[1] 自孔子卒京師莫崇庠序 儒林列傳「自孔子卒後、…及高皇帝…然尚有干戈、平定四海、亦未暇遑庠序之事也。孝惠、呂后時、公卿皆武力有功之臣。孝文時頗徵用、然孝文帝本好刑名之言。及至孝景、不任儒者、而竇太后又好黃老之術、故諸博士具官待問、未有進者。」

[2] 唯建元元狩之間文辭粲如也 「建元」は儒林列傳「及今上即位、趙綰・王臧之屬

明儒學、而上亦鄉之、於是招方正賢良文學之士。」に見える、武帝即位を契機とする儒家の擡頭を指す。對するに「元狩」は元狩二年（121BC）、丞相在任中に卒した*230 公孫弘を暗喩したものであろう。儒林列傳「太史公曰、余讀功令、至於廣厲學官之路、未嘗不廢書而歎也。…公孫弘爲學官、悼道之鬱滯、乃請曰、…制曰、可。自此以來、則公卿大夫士吏斌斌多文學之士矣。」に見えるように、元朔五年（124BC）、丞相に就任した*231 公孫弘の奏請で博士弟子制度が発足した*232。「斌斌多文學之士矣」は「文辭粲如也」に当たる。「未嘗不廢書而歎也」は慨嘆である*233。

司馬遷において、儒林は酷吏とともに、時代の暗黒面を象徴する。儒林列傳

仲舒弟子遂者、蘭陵褚大・廣川殷忠・溫呂步舒。褚大至梁相。步舒至長史、持節使決淮南獄、於諸侯擅專斷、不報、以春秋之義正之、天子皆以爲是。弟子通者、至於命大夫。爲郎・謁者・掌故者以百數。而董仲舒子及孫皆以學至大官。

では、董仲舒の高弟である呂步舒が春秋學を用いて元狩元年（122BC）の淮南獄*234 に活躍したことを記す。また、前篇である汲鄭列傳

是時、漢方征匈奴、招懷四夷。黯務少事、乘上間、常言與胡和親、無起兵。上方向儒術、尊公孫弘。及事益多、吏民巧弄。上分別文法、湯等數奏決獄以幸。而黯常毀儒、面觸弘等徒懷詐飾智以阿人主取容、而刀筆吏專深文巧詆、陷人於罪、使不得反其眞、以勝爲功。上愈益貴弘・湯、弘・湯深心疾黯、唯天子亦不說也、欲誅之以事。弘爲丞相、乃言上曰、右內史界部中多貴人宗室、難治、非素重臣不能任、請徙黯爲右內史。爲右內史數歲、官事不廢。

では、汲黯が公孫弘・張湯を非難するが、これは司馬遷の主張を代辯するものにほかならない。

民倍本多巧、姦軌弄法、善人不能化、唯一切嚴削爲能齊之。作酷吏列傳第六十二。

*230 『漢書』百官公卿表 / 元狩二年「三月戊寅、丞相弘薨。壬辰、御史大夫李蔡爲丞相。」

*231 『漢書』百官公卿表 / 元朔五年「十一月乙丑、丞相澤免。御史大夫 公孫弘爲丞相。」

*232 『漢書』武帝紀「(元朔)五年…夏六月、詔曰、蓋聞導民以禮、風之以樂、今禮壞樂崩、朕甚閔焉。故許延天下方聞之士、咸薦諸朝。其令禮官勸學、講議洽聞、舉遺興禮、以爲天下先。太常其議予博士弟子、崇鄉黨之化、以厲賢材焉。丞相弘請爲博士置 弟子員、學者益廣。」

*233 十二諸侯年表「太史公讀春秋曆譜課、至周厲王、未嘗不廢書而歎也。」孟子荀卿列傳「太史公曰、余讀孟子書、至梁惠王問、何以利吾國、未嘗不廢書而歎也。」

*234 『漢書』武帝紀「(元狩元年)十一月、淮南王安、衡山王賜謀反、誅。黨與死者數萬人。」

民 本に倍^{そむ}き巧多く [1]、姦軌弄法 [2]、善人 化する能わず [3]、唯だ一切嚴削能く之を齊^{ととの}うと爲す。酷吏列傳第六十二を作る。

[1] 民倍本多巧 外戚世家「陳皇后母大長公主、景帝姊也、數讓武帝姊平陽公主曰、帝非我不得立、已而弃捐吾女、壹何不自喜而倍本乎。」

[2] 姦軌弄法 「姦軌」は、五帝本紀「舜曰、皋陶、蠻夷猾夏、寇賊姦軌、汝作士、五刑有服、五服三就。五流有度、五度三居、維明能信。」*235・周本紀「今殷王紂維婦人言是用、自弃其先祖肆祀不答、昏弃其家國、遺其王父母弟不用、乃維四方之多罪逋逃是崇是長、是信是使、俾暴虐于百姓、以姦軌于商國。」*236、「弄法」は、貨殖列傳「吏士舞文弄法、刻章僞書、不避刀鋸之誅者、沒於賂遺也。」「皆非有爵邑奉祿弄法犯姦而富、盡椎埋去就、與時俯仰、獲其贏利、以末致財、用本守之、以武一切、用文持之、變化有概、故足術也。」に見える。

[3] 善人不能化 貨殖列傳「俗之漸民久矣、雖戶說以眇論、終不能化。故善者因之、其次利道之、其次教誨之、其次整齊之、最下者與之爭。」

漢既通使大夏、而西極遠蠻、引領內鄉、欲觀中國。作大宛列傳第六十三。

漢既に使を大夏に通じ [1]、而して西極遠蠻 [2]、引領して内郷し [3]、中國を觀んと欲す [4]。大宛列傳第六十三を作る。

[1] 漢既通使大夏 大宛列傳「騫因分遣副使使大宛・康居・大月氏・大夏・安息・身毒・于寘・扞采及諸旁國。烏孫發導譯送騫還、騫與烏孫遣使數十人、馬數十匹報謝、因令窺漢、知其廣大。」

[2] 而西極遠蠻 樂書「後伐大宛得千里馬、馬名蒲梢、次作以爲歌。歌詩曰、天馬來兮從西極、經萬里兮歸有德。承靈威兮降外國、涉流沙兮四夷服。」・大宛列傳「初、天子發書易、云、神馬當從西北來。得烏孫馬好、名曰天馬。及得大宛汗血馬、益壯、更名烏孫馬曰西極、名大宛馬曰天馬云。」

[3] 引領內郷 「引領」は、秦始皇本紀「今秦二世立、天下莫不引領而觀其政。」・淮南衡山列傳「往者秦爲無道、殘賊天下。興萬乘之駕、作阿房之宮、收太半之賦、發閭

*235 『書』舜典「帝曰、皋陶、蠻夷猾夏、寇賊姦充、汝作士。五刑有服、五服三就。五流有宅、五宅三居。惟明克允。」

*236 『書』牧誓「今商王受惟婦言是用、昏棄厥肆祀弗答、昏棄厥遺王父母弟不迪、乃惟四方之多罪逋逃、是崇是長、是信是使、是以爲大夫卿士。俾暴虐于百姓、以姦充于商邑。」

左之戎、父不寧子、兄不便弟、政苛刑峻、天下熬然若焦、民皆引領而望、傾耳而聽、悲號仰天、叩心而怨上、故陳勝大呼、天下響應。」に、「内郷」は、李斯列傳「留三日、趙高詐詔衛士、令士皆素服持兵内郷、入告二世曰、山東羣盜兵大至。」に見える。

[4] 欲觀中國 楚世家「我有敝甲、欲以觀中國之政、請王室尊吾號。」

救人於扈、振人不贍、仁者有乎。不既信、不倍言、義者有取焉。作游俠列傳第六十四。
人を扈に救い [1]、人の贍らざるを振う [2]、仁者有るか。信を既わず、言に倍かず [3]、義者取る有り。游俠列傳第六十四を作る。

[1] 救人於扈 『淮南子』齊俗訓「孔子曰、魯國必好救人於患。」

[2] 振人不贍 游俠列傳「振人不贍、先從貧賤始。」

[3] 不倍言 趙世家「午許諾、歸而其父兄不聽、倍言。」

夫事人君能說主耳目、和主顏色、而獲親近、非獨色愛、能亦各有所長。作佞幸列傳第六十五。

夫れ人君に事えて能く主の耳目を説ばせ [1]、主の顏色に和し [2]、而して親近を獲るは、獨り色愛のみに非ず、能く亦た各の長ずる所有り [3]。佞幸列傳第六十五を作る。

[1] 夫事人君能說主耳目 李斯列傳「所以飾後宮充下陳娛心意說耳目者、必出於秦然後可、則是宛珠之簪、傅璣之珥、阿縞之衣、錦繡之飾不進於前、而隨俗雅化佳冶窈窕趙女不立於側也。」

[2] 和主顏色 魏公子列傳「公子顏色愈和。」・淮南衡山列傳「漢中尉至、王視其顏色和、訊王以斥蠶被事耳、王自度無何、不發。」

[3] 能亦各有所長 『春秋繁露』玉杯「詩書序其志、禮樂純其美、易春秋明其知、六學皆大、而各有所長。」

不流世俗、不爭執利、上下無所凝滯、人莫之害、以道之用。作滑稽列傳第六十六。

世俗に流れず、執利を争わず [1]、上下 凝滯する所無く [2]、人 之を害する莫く [3]、道の用を以てす [4]。滑稽列傳第六十六を作る。

[1] 不爭執利 『淮南子』脩務訓「段干木不趨勢利、懷君子之道、隱處窮巷、聲施千里、寡人敢勿軾乎。」

[2] 上下無所凝滯 『淮南子』俶眞訓「若夫神無所掩、心無所載、通洞條達、恬漠無事、無所凝滯、虛寂以待、勢利不能誘也、辯者不能說也、聲色不能淫也、美者不能濫也、

智者不能動也、勇者不能恐也、此真人之道也。」・兵略訓「是故聖人藏於無原、故其情不可得而觀。運於無形、故其陳不可得而經。無法無儀、來而爲之宜。無名無狀、變而爲之象。深哉矚矚、遠哉悠悠、且冬且夏、且春且秋、上窮至高之末、下測至深之底、變化消息、無所凝滯、建心乎窈冥之野、而藏志乎九旋之淵、雖有明日、孰能窺其情。」

[3] 人莫之害 『呂氏春秋』離俗「故如石戶之農・北人無擇・卞隨・務光者、其視天下若六合之外、人之所不能察。其視富貴也、苟可得已、則必不之賴。高節厲行、獨樂其意、而物莫之害。不漫於利、不牽於勢、而羞居濁世。惟此四士者之節。」

[4] 以道之用 『老子』四十章「反者道之動、弱者道之用。天下萬物生於有、有生於無。」
齊・楚・秦・趙爲日者、各有俗所用。欲循觀其大旨、作日者列傳第六十七。

齊・楚・秦・趙 日者を爲す、各の俗の用うる所有り。循いて其の大旨を觀んと欲す。
日者列傳第六十七を作る。

三王不同龜、四夷各異卜、然各以決吉凶。略闕其要、作龜策列傳第六十八。

三王 龜を同じくせず [1]、四夷各の卜を異にす、然るに各の以て吉凶を決す。其の要を略闕す、龜策列傳第六十八を作る。

[1] 三王不同龜 劉敬叔孫通列傳「五帝異樂、三王不同禮。」

布衣匹夫之人、不害於政、不妨百姓、取與以時而息財富、智者有采焉。作貨殖列傳第六十九。

布衣匹夫の人、政に害あらず、百姓を妨げず、取與 時を以てして財富を息やす [1]、智者 采る有り。貨殖列傳第六十九を作る

[1] 取與以時而息財富 『大戴禮』誥志「樂治不倦、財富時節、是故聖人嗣則治。」
維我漢繼五帝末流、接三代（統）〔絕〕業。周道廢、秦撥去古文、焚滅詩書、故明堂石室金匱玉版圖籍散亂。於是漢興、蕭何次律令、韓信申軍法、張蒼爲章程、叔孫通定禮儀、則文學彬彬稍進、詩書往往聞出矣。自曹參薦蓋公言黃老、而賈生・晁錯明申・商、公孫弘以儒顯、百年之間、天下遺文古事靡不畢集太史公。太史公仍父子相續纂其職。曰、「於戲。余維先人嘗掌斯事、顯於唐虞、至于周、復典之、故司馬氏世主天官。至於余乎、欽念哉。欽念哉。」罔羅天下放失舊聞、王迹所興、原始察終、見盛觀衰、論考之行事、略推三代、錄秦漢、上記軒轅、下至于茲、著十二本紀、既科條之矣。竝時異世、年差不明、作十表。禮樂損益、律曆改易、兵權山川鬼神、天人之際、承敝通變、作八書。

二十八宿環北辰、三十輻共一轂、運行無窮、輔拂股肱之臣配焉、忠信行道、以奉主上、作三十世家。扶義俶儻、不令己失時、立功名於天下、作七十列傳。凡百三十篇、五十二萬六千五百字、爲太史公書序略、以拾遺補蕪、成一家之言、厥協六經異傳、整齊百家雜語、藏之名山、副在京師、俟後世聖人君子。第七十。太史公曰、余述歷黃帝以來至太初而訖、百三十篇。

維れ我が漢 五帝の末流を繼ぎ、三代の（統）〔絶〕業を接ぐ [1]。周道廢し、秦 古文を撥去し、詩書を焚滅し、故に明堂石室金匱玉版圖籍散亂す [2]。是に於いて漢興り、蕭何 律令を次し、韓信 軍法をの申べ、張蒼 章程を爲り、叔孫通 禮儀を定むれば、則ち文學彬彬として稍や進み、詩書往往に聞出す。曹參 蓋公を薦めて自り黄老を言い、而して賈生・晁錯 申・商を明らかにし、公孫弘 儒を以て顯われ [3]、百年の間、天下の遺文古事 畢く太史公に集まらざるは靡し [4]。太史公仍りて父子相い續ぎて其の職を纂ぐ。曰く、「於戲。余維うに先人嘗て斯の事を掌り、唐虞に顯われ、周に至り、復た之を典る、故に司馬氏世 天官を主り。余に至るか、欽みて念わん哉。欽みて念わん哉 [5]。」天下の放失せる舊聞を罔羅し、王迹の興る所、始を原ね終を察し、盛を見 衰を觀、之が行事を論考し、三代を略推し、秦漢を録し、上は軒轅を記し、下茲に至るまで、十二本紀を著し、既に之を科條す [6]。竝時異世、年差いて明らかならず、十表を作る [7]。禮樂損益、律曆改易、兵權山川鬼神、天人の際、敝を承け變を通ず、八書を作る [8]。二十八宿 北辰を環り、三十輻 一轂を共にし、運行して窮まる無く、輔拂股肱の臣配し、忠信行道、以て主上を奉ず、三十世家を作る [9]。扶義俶儻、己をして時を失わしめず、功名を天下に立つ、七十列傳を作る [10]。凡そ百三十篇、五十二萬六千五百字 [11]、太史公書序略を爲し、以て遺を拾い蕪を補い、一家の言を成し、厥れ六經の異傳を協せ、百家の雜語を整齊し、之を名山に藏し、副京師に在り、後世の聖人君子を俟つ [12]。第七十。太史公曰く、余 黃帝以來 太初に至るまでを述歷して訖わる、百三十篇。

[1] 維我漢繼五帝末流接三代（統）〔絶〕業 上文「今天子接千歲之統」に相當する。

[2] 周道廢秦撥去古文焚滅詩書故明堂石室金匱玉版圖籍散亂 上文「幽厲之後、王道缺、禮樂衰、…自獲麟以來四百有餘歲、而諸侯相兼、史記放絶。」「周道衰廢」に相當する。秦の焚書については、秦始皇本紀 / 三十四年 (213BC)

丞相臣斯昧死言、…臣請史官非秦記皆燒之。非博士官所職、天下敢有藏詩・書・百家語者、悉詣守、尉雜燒之。有敢偶語詩書者棄市。以古非今者族。吏見知不舉者與同罪。令下三十日不燒、黥爲城旦。所不去者、醫藥卜筮種樹之書。若欲有學法令、以吏爲師。制曰、可。

など、『史記』に見える*237。「明堂石室金匱玉版圖籍」は上文「史記石室金匱之書」に相當する。

[3] 於是漢興蕭何次律令韓信申軍法張蒼爲章程叔孫通定禮儀則文學彬彬稍進詩書往往開出矣自曹參薦蓋公言黃老而賈生晁錯明申商公孫弘以儒顯 上文「今漢興、海內一統、明主賢君忠臣死義之士」に相當する。「蕭何次律令」は蕭相國世家*238・『漢書』刑法志*239に見える。「韓信申軍法」はここにしか見えない。「張蒼爲章程」は張丞相列傳*240、「叔孫通定禮儀」は劉敬叔孫通列傳*241に見える。「文學」は、『論語』先進「德行、顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語、宰我・子貢。政事、冉有・季路。文學、子游・子夏。」に、「彬彬」は雍也「子曰、質勝文則野、文勝質則史。文質彬彬、然後君子。」に初見する。蓋公は曹相國世家*242・樂毅列傳*243に見え、賈生は屈原賈生列傳*244、晁錯

*237 李斯列傳「臣請諸有文學詩書百家語者、燬除去之。令到滿三十日弗去、黥爲城旦。所不去者、醫藥卜筮種樹之書。若有欲學者、以吏爲師。始皇可其議。」そのほか六國年表「秦既得意、燒天下詩書、諸侯史記尤甚、爲其有所刺譏也。詩書所以復見者、多藏人家、而史記獨藏周室、以故滅。惜哉、惜哉。獨有秦記、又不載日月、其文略不具。」・樂書「秦二世尤以爲娛。丞相李斯進諫曰、放棄詩書、極意聲色、祖伊所以懼也。輕積細過、恣心長夜、紂所以亡也。」・封禪書「諸儒生疾秦焚詩書、誅僂文學、」・淮南衡山列傳「昔秦絕聖人之道、殺術士、燔詩書、棄禮義、尚詐力、任刑罰、轉負海之粟致之西河。」・儒林列傳「及至秦之季世、焚詩書、阬術士、六藝從此缺焉。」

*238 蕭相國世家「漢二年、漢王與諸侯擊楚、何守關中、侍太子、治櫟陽。爲法令約束、立宗廟社稷宮室縣邑、」

*239 『漢書』刑法志「漢興、高祖初入關、約法三章曰、殺人者死、傷人及盜抵罪。燬削煩苛、兆民大說。其後四夷未附、兵革未息、三章之法不足以禦姦、於是相國蕭何摭摭秦法、取其宜於時者、作律九章。」

*240 張丞相列傳「若百工、天下作程品。」

*241 劉敬叔孫通列傳「漢五年、已并天下、諸侯共尊漢王爲皇帝於定陶、叔孫通就其儀號。」

*242 曹相國世家「聞膠西有蓋公、善治黃老言、使人厚幣請之。既見蓋公、蓋公爲言治道貴清靜而民自定、推此類具言之。參於是避正堂、舍蓋公焉。其治要用黃老術、故相齊九年、齊國安集、大稱賢相。」

*243 樂毅列傳「太史公曰、…樂臣公學黃帝、老子、其本師號曰河上丈人、不知其所出。河上丈人教安期生、安期生教毛翁公、毛翁公教樂瑕公、樂瑕公教樂臣公、樂臣公教蓋公。蓋公教於齊高密・膠西、爲曹相國師。」

*244 屈原賈生列傳「賈生名誼、雒陽人也。年十八、以能誦詩屬書聞於郡中。吳廷尉爲河南守、

は袁盎晁錯列傳*245、公孫弘は平津侯主父列傳*246に見える。

[4] 百年之間天下遺文古事靡不畢集太史公 「遺文」は『史記』に初見。上文「獵儒墨之遺文、明禮義之統紀、絕惠王利端、列往世興衰。作孟子荀卿列傳第十四。」にも見える。「古事」も楚世家「靈王喜曰、析父善言古事焉。」に初見。「天下遺文古事」の収集はもとより太史公の職責ではない。『周禮』春官 / 外史

外史掌書外令、掌四方之志、掌三皇五帝之書、掌達書名于四方。若以書使于四方、則書其令。

の如き理念化された史官の職責に擬えた虚構である。

[5] 於戲余維先人嘗掌斯事顯於唐虞至于周復典之故司馬氏世主天官至於余乎欽念哉 欽念哉 「於戲」は『禮記』大學*247に初見する。『史記』においては、三王世家*248の武帝の策命以外は、本條と韓信盧綰列傳*249・游俠列傳*250の太史公曰にしか見えず、太史公の専用語といってよい。「余維先人嘗掌斯事顯於唐虞至于周復典之故司馬氏世主天官」は上文「余先周室之太史也。自上世嘗顯功名於虞夏、典天官事。」に相當する。また、「嘗掌」は、上文「且余嘗掌其官」に見える。「至于周」は上文「至于夏商」と、「司馬氏世主天官」は上文「重黎氏世序天地」「司馬氏世典周史」と句法を共有する。「至於余乎」は上文「絶於予乎」に呼應する。「欽念哉」は上文の司馬談の遺命「汝其念哉」に對する回答となろう。一體、太史公自序においては、司馬氏の祖先である重黎が「唐虞」の時代に功績があったことが再三強調されている。留意すべきは、陳杞世家

聞其秀才、召置門下、甚幸愛。孝文皇帝初立、聞河南守吳公治平爲天下第一、故與李斯同邑而常學事焉、乃徵爲廷尉。廷尉乃言賈生年少、頗通諸子百家之書。文帝召以爲博士。」

*245 袁盎晁錯列傳「晁錯者、潁川人也。學申商刑名於軹張恢先所、與雒陽宋孟及劉禮同師。以文學爲太常掌故。」

*246 平津侯主父列傳「丞相公孫弘者、齊菑川國薛縣人也、字季。少時爲薛獄吏、有罪、免家貧、牧豕海上。年四十餘、乃學春秋雜說。養後母孝謹。」

*247 『禮記』大學「詩云、於戲前王不忘。君子賢其賢而親其親、小人樂其樂而利其利、此以沒世不忘也。」

*248 三王世家「維六年四月乙巳、皇帝使御史大夫湯廟立子闕爲齊王。曰、於戲、小子闕、受茲青社。…於戲念哉。…於戲、保國艾民、可不敬與。」「維六年四月乙巳、皇帝使御史大夫湯廟立子且爲燕王。曰、於戲、小子且、受茲玄社。…於戲。…於戲。」「維六年四月乙巳、皇帝使御史大夫湯廟立子胥爲廣陵王。曰、於戲、小子胥、受茲赤社。…於戲。…於戲、保國艾民、可不敬與。」

*249 韓信盧綰列傳「太史公曰、…於戲悲夫。」

*250 游俠列傳「太史公曰、…於戲、惜哉。」

舜之後、周武王封之陳、至楚惠王滅之、有世家言。禹之後、周武王封之杞、楚惠王滅之、有世家言。契之後爲殷、殷有本紀言。殷破、周封其後於宋、齊潛王滅之、有世家言。后稷之後爲周、秦昭王滅之、有本紀言。皋陶之後、或封英・六、楚穆王滅之、無譜。伯夷之後、至周武王復封於齊、曰太公望、陳氏滅之、有世家言。伯翳之後、至周平王時封爲秦、項羽滅之、有本紀言。垂・益・夔・龍、其後不知所封、不見也。右十一人者、皆唐虞之際名有功德臣也。其五人之後皆至帝王、餘乃爲顯諸侯。滕・薛・驪・夏・殷・周之間封也、小、不足齒列、弗論也。

である。ここには「唐虞之際」の功臣の子孫は帝王諸侯となる資格をもつことが主張されている。司馬氏もまた帝王諸侯の資格をもつことになる。それは孔子が「素王」*251であったことに準ずるものである。司馬遷が重黎氏の子孫たることを標榜するのは、自らを孔子に、太史公書を『春秋』に比擬する正当性を主張するものともなる。

[6] 罔羅天下放失舊聞王迹所興原始察終見盛觀衰論考之行事略推三代錄秦漢上記軒轅下至于茲著十二本紀既科條之矣 「放失」の「放」は上文「史記放絶」に見える。「舊聞」は上文「請悉論先人所次舊聞」さらに十二諸侯年表「論史記舊聞、興於魯而次春秋」に見える。「原始察終」は、『易』繫辭傳上*252の「原始反終」、繫辭傳下*253の「原始要終」に相當する。「行事」は、上文「子曰、我欲載之空言、不如見之於行事之深切著明也。」に、「推三代」は上文「春秋采善貶惡、推三代之德」に見える。やはり『春秋』への比擬である。「科條」は『春秋繁露』十指の「分科條別」*254に当たる。

[7] 竝時異世年差不明作十表 「竝時」は司馬相如列傳*255に、「異世」は『禮記』樂

*251 『淮南子』主術訓「孔子之通、智過於萇弘、勇服於孟賁、足躡郊菟、力招城關、能亦多矣。然而勇力不聞、伎巧不知、專行教道、以成素王、事亦鮮矣。春秋二百四十二年、亡國五十二、弑君三十六、采善鉅醜、以成王道、論亦博矣。然而圍於匡、顔色不變、絃歌不輟、臨死亡之地、犯患難之危、據義行理而志不懼、分亦明矣。然爲魯司寇、聽獄必爲斷、作爲春秋、不道鬼神、不敢專己。」

*252 『易』繫辭傳上「原始反終、故知死生之說。」

*253 『易』繫辭傳下「易之爲書也、原始要終、以爲質也。」

*254 『春秋繁露』十指「能說鳥獸之類者、非聖人所欲說也。聖人所欲說、在於說仁義而理之、知其分科條別、貫所附、明其義之所審、勿使嫌疑、是乃聖人所貴而已矣。不然、傳於眾辭、觀於眾物、說不急之言、而以惑後進者、君子之所甚惡也、奚以爲哉。」

*255 司馬相如列傳 / 封禪文「亦各竝時而榮、咸濟世而屈、說者尚何稱於後、而云七十二君乎。」

記*256に見える。

[8] 禮樂損益律曆改易兵權山川鬼神天人之際承敝通變作八書 「損益」は、『論語』爲政

子張問、十世可知也。子曰、殷因於夏禮、所損益、可知也。周因於殷禮、所損益、可知也。其或繼周者、雖百世可知也。

に初見する。「律曆改易」は上文「改正朔、易服色」に相當する。「天人之際」は、『韓詩外傳』*257に初見する。「承敝通變」は、高祖本紀*258の「承敝易變」に相當する。

[9] 二十八宿環北辰三十輻共一轂運行無窮輔拂股肱之臣配焉忠信行道以奉主上作三十世家 「北辰」は、『論語』爲政「子曰、爲政以德、譬如北辰、居其所而眾星共之。」に初見する。「三十輻共一轂」は『老子』第十一章に見える。「忠信」は『論語』*259に頻見し、「行道」は上掲『孝經』開宗明義に見える。

[10] 扶義俶儻不令己失時立功名於天下作七十列傳 「儻」は司馬相如列傳*260に、「令己」「立功名」は、『呂氏春秋』具備*261に見える。「失時」は『論語』陽貨

陽貨欲見孔子、孔子不見、歸孔子豚。孔子時其亡也、而往拜之、遇諸塗。謂孔子曰、來。予與爾言。曰、懷其寶而迷其邦、可謂仁乎。曰、不可。好從事而亟失時、可謂知乎。曰、不可。日月逝矣、歲不我與。孔子曰、諾。吾將仕矣。

に初見する。

*256 『禮記』樂記「五帝殊時、不相頌樂。三王異世、不相襲禮。」

*257 『韓詩外傳』卷七「傳曰、善爲政者、循情性之宜、順陰陽之序、通本末之理、合天人之際、如是、則天地奉養、而生物豐美矣。」

*258 高祖本紀「太史公曰、夏之政忠。忠之敝、小人以野、故殷人承之以敬。敬之敝、小人以鬼、故周人承之以文。文之敝、小人以僿、故救僿莫若以忠。三王之道若循環、終而復始。周秦之間、可謂文敝矣。秦政不改、反酷刑法、豈不繆乎。故漢興、承敝易變、使人不倦、得天統矣。朝以十月。車服黃屋左纛。葬長陵。」

*259 『論語』學而「子曰、君子不重則不威、學則不固。主忠信。無友不如己者。過則勿憚改。」・公冶長「子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉、不如丘之好學也。」・子罕「子曰、主忠信、毋友不如己者、過則勿憚改。」・顏淵「子張問崇德、辨惑。子曰、主忠信、徙義、崇德也。愛之欲其生、惡之欲其死。既欲其生、又欲其死、是惑也。誠不以富、亦祇以異。」・衛靈公「子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立、則見其參於前也。在輿、則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳。」

*260 司馬相如列傳 / 封禪文「鬼神接靈囿、竇於閒館。奇物譎詭、俶儻窮變。」

*261 『呂氏春秋』具備「故凡立功名、雖賢必有其具然後可成。宓子賤治亶父、恐魯君之聽讒人、而令己不得行其術也。」

[11] 凡百三十篇五十二萬六千五百字 現行本『史記』は司馬遷以降の増補脱落を経ているのであまり當てにはならないが、試みに字數を數えてみると 545586 字となる。526500 字に近いが、とはいえこれが實際の字數であったとは考えがたい。526500 = 4050 × 130 であり、實際の字數が奇しくも 130 の倍數になったと考えることはよほど困難である。一篇平均 4050 字と見積もった上で、それを 130 倍したものである。4050 = 50 × 81 で、50 は『易』繫辭傳上「大衍之數五十」、81 は『淮南子』天文訓「故曰、一生二、二生三、三生萬物。天地三月而爲一時、故祭祀三飯以爲禮、喪紀三踊以爲節、兵重三罕以爲制。以三參物、三三如九、故黃鐘之律九寸而宮音調。因而九之、九九八十一、故黃鐘之數立焉。」に見え、いずれも象徴的な數字である。現行本に近い數字になっているのは、この見積もりが妥當であったことを示すが、逆に 526500 がきわめて作爲的な數字であることは、太史公自序が書かれた時點で、『史記』が未完成であったことを重ねて明示するものとなろう。

[12] 以拾遺補蕝成一家之言厥協六經異傳整齊百家雜語藏之名山副在京師俟後世聖人君子 「六經」は『莊子』外篇 / 天運^{*262}に、「百家」は雜篇 / 天下^{*263}に初見する。「整齊」は上文「整齊其世傳」に見える。「京師」は『詩』『春秋經』および三傳に見えるのみでそれ以外の先秦文獻には見えない。前漢では『新語』『春秋繁露』に各 1 例を見るのみである。『史記』に散見するのは、『詩』『春秋經』および三傳に基本的に専用されていたものが、儒學官學化によって、一般的に用いられるようになったということであろう。「俟後世聖人君子」は、『公羊』哀十四「制春秋之義、以俟後聖、以君子之爲、」に據る。

結語

司馬遷は、『左傳』の登場人物が用いた一人稱代名詞「余」を獨占することで、『史記』の言語空間における自らの言説を特權化する。個々の言語表現においても、孔門の言説を自身のそれとして多用し、あるいは孔子に用いる表現を自身のみが共有する。

*262 『莊子』外篇 / 天運「孔子謂老聃曰、丘治詩・書・禮・樂・易・春秋六經、自以爲久矣、」

*263 『莊子』雜篇 / 天下「其數散於天下而設於中國者、百家之學時或稱而道之。」

太史公自序は、明示的には、「繼春秋」を「正易傳」「本詩書禮樂之際」に並列することで相對化し、あるいは太史公書は「述」であるに過ぎず、『春秋』の「作」に比べうるものではないとする。しかしそれにも関わらず、太史公書を『春秋』に比擬し、したがって『春秋』と同様に同時代を刺譏するものとするを、反語的ながら暗示している。司馬氏系譜が唐虞に仕えた重黎の子孫であることを強調するのも、自身が帝王諸侯たるの資格をもつこと、したがって自身が「素王」たる孔子に準じ、太史公書が『春秋』に準ずることを正當化するものとなる。

しかし、自序のこれらの言説は、「設論」の形式に組み込まれることで殊更に戯畫化される。『春秋』に関する教科書的記述を並べ、『春秋』は刺譏だけの書物ではないとし、あるいは漢王朝を手放しで禮贊することで、太史公書の『春秋』への比擬は後景化されてしまう。矛盾に満ち虚構が明らかな系譜とも相俟って、司馬遷の「真意」は隱喩化され、結局のところ、讀者の臆測に委ねられてしまう。

このように韜晦を徹底しつつも、筆禍の可能性はやはり免れ得ない。ここで想起されるのが、前漢末の揚雄である。揚雄は『易』を模して『太玄』を、『論語』を模して『法言』を著した。『論衡』案書に「漢作書者多、司馬子長・揚子雲、河漢也、其餘涇渭也。」とあるように、揚雄は司馬遷と並ぶ前漢文人の雙璧として賞贊された。しかし、その揚雄にしても、『漢書』揚雄傳に「諸儒或譏以爲雄非聖人而作經、猶春秋吳楚之君僭號稱王、蓋誅絕之罪也。」とあるように、一部には聖人に對する不遜と非難するものもあった。太史公書が「後世の聖人君子を俟つ」ことを強いられ、司馬遷の死後ようやく出現した*264 所以である。

附論 報任安書

ここでは、とくに「報任安書」の語彙句法について、先行文献の引用が明らかなもの、ないしは『史記』における用例を確認する。「報任安書」には、『史記』に特徴的な語彙句法が頻見し、『史記』と使用言語を共有するといつてよい。このことは、「報任安書」

*264 『漢書』司馬遷傳「遷既死後、其書稍出。宣帝時、遷外孫平通侯楊惲祖述其書、遂宣布焉。至王莽時、求封遷後、爲史通子。」

を司馬遷の眞作とすることを支持する。

遷既被刑之後、爲中書令、尊寵任職。故人益州刺史任安予遷書、責以古賢臣之義。遷報之曰、少卿足下、曩者辱賜書、教以慎於接物、推賢進士爲務、意氣勤勤懇懇、若望僕不相師用、而流俗人之言。僕非敢如是也。雖罷驚、亦嘗側聞長者遺風矣。顧自以爲身殘處穢、動而見尤、欲益反損、是以抑鬱而無誰語。諺曰、「誰爲爲之。孰令聽之。」蓋鍾子期死、伯牙終身不復鼓琴。何則。士爲知己用、女爲說己容。若僕大質已虧缺、雖材懷隨和、行若由夷、終不可以爲榮、適足以發笑而自點耳。

遷既に刑を被るの後、中書令 [1] と爲り、尊寵せられ職に任ず [2]。故人益州刺史任安 [3] 遷に書を予え、責むるに古賢臣の義を以てす。遷 之に報じて曰く、少卿足下 [4]、曩者辱くも書を賜り、教うるに接物に慎み [5]、推賢進士を務と爲すを以てす [6]、意氣勤勤懇懇 [7]、僕 相い師用せずして [8]、俗人の言に流るる [9] を望むが若し。僕 敢て是くの如くするに非ざるなり [10]。罷驚と雖も [11]、亦た嘗て長者の遺風を側聞す [12]。顧だ自ら以爲らく身残し穢に處り [13]、動きて尤められ [14]、益さんと欲して反って損う、是を以て抑鬱して誰に語る無し [15]。諺に曰く、「誰が爲に之を爲す。孰れにか之を聽かしむ。」蓋し鍾子期死し、伯牙終身 復た琴を鼓せず [16]。何となれば、士 己を知るものの爲に用い、女 己を説ぶものの爲に容る [17]。僕の若きは^{かたちづく}大質已に虧缺し [18]、材 隨和を懷き [19]、行 由夷の若し [20] と雖も、終に以て榮と爲す可からず、適ま以て笑を發して自ら^{けが}點すに足るのみ。

[1] 中書令 『漢書』百官公卿表「少府、秦官、掌山海池澤之稅、以給共養、有六丞。屬官有…又中書謁者、黃門、鉤盾、尚方、御府、永巷、內者、宦者（七）〔八〕官令丞。」『續漢書』百官志三「尚書令一人、千石。本注曰、承秦所置、武帝用宦者、更爲中書謁者令、成帝用士人、復故。掌凡選署及奏下尚書曹文書眾事。」

[2] 尊寵任職 『史記集解』太史公自序に引く衛宏說「衛宏漢書舊儀注曰、司馬遷作景帝本紀、極言其短及武帝過、武帝怒而削去之。後坐舉李陵、陵降匈奴、故下遷蠶室。有怨言、下獄死。」はもとより妄言である。

[3] 任安 任安は田叔列傳 / 褚少孫補に見える。「報任安書」の年代については後述する。

[4] 少卿足下 『文選』卷四十一 / 書上に収める「報任安書」では、「少卿足下」の前に「太史公牛馬走司馬遷再拜言」の一句がある。文選注は「太史公、遷父談也。走、猶僕也。言己爲太史公掌牛馬之僕、自謙之辭也。」とするが、不可解といわざるをえない。林祜乾は、「牛馬走」を「先馬走^{*265}」の誤寫とし、巡幸に扈從する職務を稱したものとするが^{*266}、なお確解とはいいがたい。二人稱「足下」は『韓非子』^{*267}に初見し、『史記』にも頻見する。

[5] 教以慎於接物 「接物」は、『新書』道術^{*268}に初見。

[6] 推賢進士爲務 商君列傳「孔丘有言曰、推賢而戴者進、聚不肖而王者退」に「推賢」「進」が見える。商君列傳の表現は下文にも見える。「報任安書」は『史記』の特定の篇の表現を複数回にわたって用いる。これらの篇、ひいてはその主題となった人物を想起しつつ、「報任安書」が執筆されたことをうかがわせる。

[7] 意氣勤勤懇懇 李將軍列傳「會日暮、吏士皆無人色、而廣意氣自如、益治軍。」下文は李陵を詳述する。李將軍列傳の引用は容易に推認される。

[8] 若望僕不相師用 一人稱謙稱「僕」は、『呂氏春秋』高義^{*269}に初見し、『史記』にも頻見する。「師用」は『漢書』董仲舒傳「文王順天理物、師用賢聖、是以閔夭、大顛、

*265 『淮南子』道應訓「越王句踐與吳戰而不勝、國破身亡、困於會稽。忿心張膽、氣如涌泉、選練甲卒、赴火若滅、然而請身爲臣、妻爲妾、親執戈爲吳兵先馬走、果擒之於干遂。」

*266 林祜乾「司馬遷〈報任少卿書〉「太史公牛馬走」辨正」(『國文天地』23-11、2008)

*267 『韓非子』內儲說下「齊中大夫有夷射者、御飲於王、醉甚而出、倚於郎門、門者別跪請曰、足下無意賜之餘瀝乎。」・雜三「今足下雖強、未若知氏。韓・魏雖弱、未至如其在晉陽之下也。」・問田「且足下獨不聞楚將宋觚而失其政、魏相馮離而亡其國。」

*268 『新書』道術「曰、數聞道之名矣、而未知其實也。請問道者何謂也。對曰、道者、所從接物也。其本者謂之虛、其末者謂之術。虛者、言其精微也、平素而無設施也。術也者、所從制物也、動靜之數也。凡此皆道也。曰、請問虛之接物、何如。對曰、鏡儀而居、無執不臧、美惡畢至、各得其當。衡虛無私、平靜而處、輕重畢懸、各得其所。明主者、南面而正、清虛而靜、令名自宣、命物自定、如鑑之應、如衡之稱、有豐和之、有端隨之、物鞠其極、而以當施之。此虛之接物也。曰、請問術之接物何如。對曰、人主仁而境內和矣、故其士民莫弗親也。人主義而境內理矣、故其士民莫弗順也。人主有禮而境內肅矣、故其士民莫弗敬也。人主有信而境內貞矣、故其士民莫弗信也。人主公而境內服矣、故其士民莫弗戴也。人主法而境內軌矣、故其士民莫弗輔也。舉賢則民化善、使能則官職治、英俊在位則主尊、羽翼勝任則民顯、操德而固則威立、教順而必則令行。周聽則不蔽、稽驗則不惶、明好惡則民心化、密事端則人主神。術者、接物之隊。凡權重者必謹於事、令行者必謹於言、則過敗鮮矣。此術之接物之道也。其爲原無屈、其應變無極、故聖人尊之。夫道之詳、不可勝述也。」

*269 『呂氏春秋』高義「殺人者、僕之父也。」

散宜生等亦聚於朝廷。」に見える。

[9] 而流俗人之言 下文「事未易一二爲俗人言也」「流俗之所輕也」「難爲俗人言也」「故且從俗浮湛」「於俗不信」など、「報任安書」には「俗」が頻見する。また、太史公自序に「不流世俗、不爭執利、上下無所凝滯、人莫之害、以道之用。作滑稽列傳第六十六。」と見える。

[10] 僕非敢如是也 吳王濞列傳「寡人何敢如是。」

[11] 雖罷鶯 萬石張叔列傳「丞相慙不任職、乃上書曰、慶幸得待罪丞相、罷鶯無以輔治、城郭倉庫空虛、民多流亡、罪當伏斧質、上不忍致法。願歸丞相侯印、乞骸骨歸、避賢者路。」・平津侯主父列傳「今臣弘罷鶯之質、無汗馬之勞、陛下過意擢臣弘卒伍之中、封爲列侯、致位三公。」

[12] 亦嘗側聞長者遺風矣 「側聞」は屈原賈生列傳 / 賈誼弔屈原賦「側聞屈原兮、自沈汨羅」に見える。弔屈原賦の表現は下文にも見える。「長者」は『史記』に頻見するが、刺客列傳 / 荊軻「荊軻雖游於酒人乎、然其爲人沈深好書。其所游諸侯、盡與其賢豪長者相結。…田光曰、吾聞之、長者爲行、不使人疑之。…太子曰、樊將軍窮困來歸丹、丹不忍以己之私而傷長者之意、願足下更慮之。」*270 を特に指摘しておきたい。「報任安書」には刺客列傳の引用が頻見する。「遺風」は、『楚辭』*271 に初見する。『詩序』唐風 / 蟋蟀「蟋蟀、刺晉僖公也。儉不中禮、故作是詩以閔之、欲其及時以禮自虞樂也。此晉也、而謂之唐。本其風俗、憂深思遠、儉而用禮、乃有堯之遺風焉。」は、『左傳』襄二十九「爲之歌唐、曰、思深哉。其有陶唐氏之遺民乎。」に基づき、「遺民」を「遺風」に改める。『史記』では、吳太伯世家「歌唐。曰、思深哉、其有陶唐氏之遺風乎。」が、『詩序』と同様に『左傳』の「遺民」を「遺風」に改めるほか、貨殖列傳「關中自汧、雍以東至河・華、膏壤沃野千里、自虞夏之貢以爲上田、而公劉適邠、大王・王季在岐、文王作豐、武王治鎬、故其民猶有先王之遺風、好稼穡、殖五穀、地重、重爲邪。」など「遺風」が頻見する。「報任安書」には貨殖列傳の引用が頻見する。

[13] 顧自以爲身殘處穢 刺客列傳 / 豫讓「以子之才、委質而臣事襄子、襄子必近幸子。

*270 『戰國策』燕策三「田光曰、光聞長者之行、不使人疑之、…太子曰、樊將軍以窮困來歸丹、丹不忍以己之私、而傷長者之意、願足下更慮之。」

*271 『楚辭』(屈原)九章 / 哀郢「哀州土之平樂兮、悲江介之遺風。」・(宋玉)九辯「竊慕詩人之遺風兮、願託志乎素餐。」・(賈誼)惜誓「涉丹水而駝騁兮、右大夏之遺風。」

近幸子、乃爲所欲、顧不易邪。何乃殘身苦形、欲以求報襄子、不亦難乎。」は『戰國策』趙策一*272に據ったものだが、「殘身苦形」は『史記』の潤色に係り、「殘身」の強調が認められる。

[14] 動而見尤 『楚辭』（屈原）九章 / 惜往日「何貞臣之無罪兮、被離謗而見尤。」

[15] 是以抑鬱而無誰語 『楚辭』（屈原）遠遊「遭沈濁而汙穢兮、獨鬱結其誰語。」なお『文選』は「是以獨鬱悒而與誰語」に作る。

[16] 蓋鍾子期死伯牙終身不復鼓琴 『呂氏春秋』本味「伯牙鼓琴、鍾子期聽之、方鼓琴而志在太山、鍾子期曰、善哉乎鼓琴、巍巍乎若太山。少選之間、而志在流水、鍾子期又曰、善哉乎鼓琴、湯湯乎若流水。鍾子期死、伯牙破琴絕弦、終身不復鼓琴、以爲世無足復爲鼓琴者。」

[17] 士爲知己用女爲說己容 刺客列傳 / 豫讓「豫讓遁逃山中、曰、嗟乎。士爲知己者死、女爲說己者容。今智伯知我、我必爲報讎而死、以報智伯、則吾魂魄不愧矣。」*273

[18] 若僕大質虧缺 樂書「治道虧缺而鄭音興起、封君世辟、名顯鄰州、爭以相高。」

[19] 雖材懷隨和 「隨侯之珠」は『莊子』雜篇 / 讓王に初見し、「和氏之璧」については、『韓非子』に和氏篇がある。「隨侯之珠」「和氏之璧」を並列することは『墨子』耕柱・『淮南子』說山訓に見え、「隨和」は『楚辭』（莊忌）哀時命 / 株昭「瓦礫進寶兮、捐棄隨和。」に見える。

[20] 行若由夷 『韓非子』用人「聖人德若堯、舜、行若伯夷、而位不載於世、則功不立、名不遂」に似る。伯夷は『論語』に、許由は『莊子』內篇 / 逍遙遊「堯讓天下於許由」に初見する。伯夷・許由を並べることは、『韓非子』說疑*274・『淮南子』齊俗

*272 『戰國策』趙策一「以子之才、而善事襄子、襄子必近幸子。子之得近而行所欲、此甚易而功必成。」本章はさらに『呂氏春秋』恃君「以子之材而索事襄子、襄子必近子、子得近而行所欲、此甚易而功必成。」に據る。

*273 『戰國策』趙策一「豫讓遁逃山中、曰、嗟乎。士爲知己者死、女爲悅己者容。吾其報知氏之讎矣。」

*274 『韓非子』說疑「若夫許由・續牙・晉伯陽・秦顛頡・衛僑如・狐不稽・重明・董不識・卞隨・務光・伯夷・叔齊、此十二人者、皆上見利不喜、下臨難不恐、或與之天下而不取、有萃辱之名、則不樂食穀之利。」

訓*275・秦族訓*276に見える。伯夷列傳

夫學者載籍極博、猶考信於六藝。詩書雖缺、然虞夏之文可知也。堯將遜位、讓於虞舜、舜禹之間、嶽牧咸薦、乃試之於位、典職數十年、功用既興、然後授政。示天下重器、王者大統、傳天下若斯之難也。而說者曰堯讓天下於許由、許由不受、恥之逃隱。及夏之時、有卞隨、務光者。此何以稱焉。太史公曰、余登箕山、其上蓋有許由冢云。孔子序列古之仁聖賢人、如吳太伯、伯夷之倫詳矣。余以所聞由、光義至高、其文辭不少概見、何哉。孔子曰、伯夷・叔齊、不念舊惡、怨是用希。求仁得仁、又何怨乎。余悲伯夷之意、睹軼詩可異焉。其傳曰、

は、その開頭に許由を置くことで、許由・伯夷を關聯づける。

書辭宜答、會東從上來、又迫賤事、相見日淺、卒卒無須臾之間得竭指意。今少卿抱不測之罪、涉旬月、迫季冬、僕又薄從上上雍、恐卒然不可諱。是僕終已不得舒憤懣以曉左右、則長逝者魂魄私恨無窮。請略陳固陋。闕然不報、幸勿過。

書辭宜しく答うべきも、^{たまた}會東のかた上に從いて來たり [1]、又た賤事に迫られ、相見ること日に淺く、卒卒として須臾の間の指意を竭くすを得る無し [2]。今少卿不測の罪を抱き [3]、旬月に涉り、季冬に迫る、僕又た上に從いて雍に上るに薄る、卒然と諱む可からざるを恐る [4]。是れ僕終に已に憤懣を^の舒べて以て左右に^{あき}曉らかにするを得ざれば [5]、則ち長逝者の魂魄^{ひそ}私かに恨みて窮まる無し。請う固陋を略陳せん [6]。闕然として報ぜざる [7]、幸いに^{とが}過むる勿かれ。

[1] 會東從上來 任安は、征和二年(91BC)の巫蠱の亂における對應を咎められ處刑された*277。何焯『義門讀書記』卷十八/前漢書/列傳/司馬遷傳は、下文「迫季冬」に對し、「時安爲北軍使者。坐受戾太子節。當腰斬。」と注する。對するに王國維「太史公行年考」は、武帝の東方への巡幸が認められないことから、征和二年説を否定し、

*275 『淮南子』齊俗訓「伯夷・叔齊非不能受祿任官以致其功也、然而樂離世伉行以絕眾、故不務也。許由・善卷非不能撫天下、寧海內以德民也、然而羞以物滑和、故弗受也。」

*276 『淮南子』秦族訓「舜・許由異行而皆聖、伊尹・伯夷異道而皆仁、箕子・比干異趨而皆賢。」

*277 田叔列傳/褚少孫補「是時任安爲北軍使者護軍、太子立車北軍南門外、召任安、與節令發兵。安拜受節、入、閉門不出。武帝聞之、以爲任安爲詐邪、不傳事、何也。任安答辱北軍錢官小吏、小吏上書言之、以爲受太子節、言、幸與我其鮮好者。書上聞、武帝曰、是老吏也、見兵事起、欲坐觀成敗、見勝者欲合從之、有兩心。安有當死之罪甚衆、吾常活之、今懷詐、有不忠之心。下安吏、誅死。」

三月～五月に泰山に、十二月に雍に行幸した太始四年（93BC）に繋げる^{*278}。従うべきであろう。

[2] 卒卒無須臾之間得竭指意 魯仲連鄒陽列傳「太史公曰、魯連其指意雖不合大義、然餘多其在布衣之位、蕩然肆志、不詘於諸侯、談說於當世、折卿相之權。鄒陽辭雖不遜、然其比物連類、有足悲者、亦可謂抗直不撓矣、吾是以附之列傳焉。」

[3] 今少卿抱不測之罪 春申君列傳「妾賴天有子男、則是君之子爲王也、楚國盡可得、孰與身臨不測之罪乎。」^{*279}・樂毅列傳「臨不測之罪、以幸爲利、義之所不敢出也。」^{*280}

[4] 恐卒然不可諱 商君列傳「公叔病有如不可諱、將柰社稷何。」^{*281}

[5] 是僕終已不得舒憤懣以曉左右 「終已」は、刺客列傳 / 荊軻「於是荊軻就車而去、終已不顧。」^{*282}に、「憤懣」は『漢書』終軍傳「臣年少材下、孤於外官、不足以充一方之任、竊不勝憤懣。」に見える。

[6] 請略陳固陋 司馬相如列傳 / 上林賦および難蜀父老文に「鄙人固陋」が見える。

[7] 闕然不報 封禪書「厥曠遠者千有餘載、近者數百載、故其儀闕然堙滅、其詳不可得而記聞云。」

僕聞之、修身者智之府也、愛施者仁之端也、取予者義之符也、恥辱者勇之決也、立名者行之極也。士有此五者、然後可以託於世、列於君子之林矣。故禍莫憐於欲利、悲莫痛於傷心、行莫醜於辱先、而詬莫大於宮刑。刑餘之人、無所比數、非一世也、所從來遠矣。昔衛靈公與雍渠載、孔子適陳。商鞅因景監見、趙良寒心。同子參乘、爰絲變色、自古而恥之。夫中材之人、事關於宦豎、莫不傷氣。況忼慨之士乎。如今朝雖乏人、柰何令刀鋸之餘薦天下豪雋哉。僕賴先人緒業、得待罪輦轂下、二十餘年矣。所以自惟、上之、不能納忠效信、有奇策材力之譽、自結明主。次之、又不能拾遺補闕、招賢進能、顯巖穴之士。外之、不能備行伍、攻城（戰野）〔野戰〕、有斬將奪旗之功。下之、不能

*278 『漢書』武帝紀「（太始）四年（93BC）春三月、行幸泰山。壬午、祀高祖于明堂、以配上帝、因受計。癸未、祀孝景皇帝于明堂。甲申、修封。丙戌、禪石闕。夏四月、幸不其、祠神人于交門宮、若有鄉坐拜者。作交門之歌。夏五月、還幸建章宮、大置酒、赦天下。…十二月、行幸雍、祠五畤、西至安定、北地。」

*279 『戰國策』楚策四「妾賴天而有男、則是君之子爲王也、楚國封盡可得、孰與其臨不測之罪乎。」

*280 『戰國策』燕策二「臨不測之罪、以幸爲利者、義之所不敢出也。」

*281 『戰國策』魏策一「公叔病、即不可諱、將柰社稷何。」

*282 『戰國策』燕策三「於是荊軻遂就車而去、終已不顧。」

累日積勞、取尊官厚祿、以爲宗族交遊光寵。四者無一遂、苟合取容、無所短長之效、可見於此矣。郷者、僕亦嘗廁下大夫之列、陪外廷末議。不以此時引維綱、盡思慮、今已虧形爲掃除之隸、在闢茸之中、乃欲叩首信眉、論列是非、不亦輕朝廷、羞當世之士邪。嗟乎。嗟乎。如僕、尚何言哉。尚何言哉。

僕 之を聞く、修身なる者は智の府なり [1]、愛施なる者は仁の端なり [2]、取予なる者は義の符なり [3]、恥辱なる者は勇の決なり [4]、立名なる者は行の極なり [5]。士 此の五者有り、然る後に以て世に託し [6]、君子の林に列す可し。故に禍 欲利より憊いたきは莫く [7]、悲 傷心より痛きは莫く [8]、行 辱先より醜みにきは莫く [9]、而して詬 宮刑より大なるは莫し [10]。刑餘の人 [11]、比數する所無きは [12]、一世に非ざるなり [13]、従りて來たる所遠し [14]。昔衛靈公 雍渠と載り、孔子 陳に適く [15]。商鞅 景監に因りて見まえ、趙良寒心す [16]。同子參乘し、爰絲 色を變ず [17]。古自りして之を恥ぢず [18]。夫れ中材の人も [19]、事 宦豎に關れば、氣を傷つけざる莫し。況んや忼慨の士をや [20]。今の如きは朝 人に乏しと雖も、柰何んぞ刀鋸の餘をして天下の豪雋を薦めしめんや [21]。僕 先人の緒業に頼り [22]、罪を輦轂下に待つを得ること [23]、二十餘年なり [24]。所以に自ら惟うに、之を上あにすれば [25]、忠を納れ信を效し、奇策材力の譽有りて [26]、自ら明主に結ぶ能わず [27]。之に次で [28]、又た遺を拾い闕を補い [29]、賢を招き能を進め [30]、巖穴の士を顯らかにする能わず [31]。之を外とにすれば [32]、行伍に備わり [33]、城を攻め (戰野) [野に戦い] [34]、將を斬り旗をと奪るの功有る能わず [35]。之を下あにすれば [36]、日を累ねを勞を積み [37]、尊官厚祿を取り [38]、以て宗族交遊の光寵と爲す能わず [39]。四者 一の遂ぐる無く [40]、苟合取容し [41]、短長する所の效 [42]、此に見わす可き無し [43]。郷者、僕亦た嘗て下大夫の列まに廁り [44]、外廷の末議に陪す。此の時を以て維綱を引き [45]、思慮を盡くさざるに [46]、今已に形を虧きて掃除の隸と爲り [47]、闢茸の中に在り [48]、乃ち首を叩あげ眉のを信のべ [49]、是非を論列せんと欲するも [50]、亦た朝廷を輕んじ、當世の士を羞はずかしめざるや。嗟乎。嗟乎 [51]。僕の如きは、尚お何をか言わんや [52]。尚お何をか言わんや。

[1] 修身者智之府也 『左傳』僖二十七「詩書、義之府也。禮樂、德之則也。德義、利之本也。」に似る。「脩身」は『禮記』曲禮上に初見。

[2] 愛施者仁之端也 「愛施」は、『管子』版法解*283・『韓非子』八經*284 に、「仁之端」は『孟子』公孫丑上「惻隱之心。仁之端也。羞惡之心。義之端也。辭讓之心。禮之端也。是非之心。智之端也。」に見える。

[3] 取予者義之符也 下文に「取予義」とある。「取予」は、仲尼弟子列傳 / 澹臺滅明「南游至江、從弟子三百人、設取予去就、名施乎諸侯。」・游俠列傳「而布衣之徒、設取予然諾、千里誦義、爲死不顧世、此亦有所長、非苟而已也。」・貨殖列傳「是故其智不足與權變、勇不足以決斷、仁不能以取予、彊不能有所守、雖欲學吾術、終不告之矣。」に見える。

[4] 恥辱者勇之決也 仲尼弟子列傳 / 有若「有若曰、…信近於義、言可復也。恭近於禮、遠恥辱也。因不失其親、亦可宗也。」*285

[5] 立名者行之極也 伯夷列傳「君子疾沒世而名不稱焉。賈子曰、貪夫徇財、烈士徇名、夸者死權、衆庶馮生。同明相照、同類相求。雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩。伯夷・叔齊雖賢、得夫子而名益彰。顏淵雖篤學、附驥尾而行益顯。巖穴之士、趣舍有時若此、類名堙滅而不稱、悲夫。閭巷之人、欲砥行立名者、非附青雲之士、惡能施於後世哉。」

[6] 然後可以託於世 『論語』泰伯「曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也。君子人與。君子人也。」

[7] 禍莫慳於欲利 『老子』四十六章「天下有道、卻走馬以糞。天下無道、戎馬生於郊。罪莫大於可欲、禍莫大於不知足、罪莫大於欲得。故知足之足、常足。」に對し、『道德經古本篇』第四十六章「天下有道、卻走馬以播、天下無道、戎馬生於郊、罪莫大於可欲、禍莫大於不知足、咎莫慳於欲得、故知足之足、常足矣。」・『韓非子』解老「故欲利甚於憂、憂則疾生、疾生而智慧衰、智慧衰則失度量、失度量則妄舉動、妄舉動則禍害至、禍害

*283 『管子』版法解「凡眾者、愛之則親、利之則至、是故明君設利以致之、明愛以親之。徒利而不愛、則眾至而不親。徒愛而不利、則眾親而不至。愛施俱行、則說君臣、說朋友、說兄弟、說父子、愛施所設、四固不能守。故曰、說在愛施。凡君所以有眾者、愛施之德也愛有所移、利有所并、則不能盡有。故曰、有眾在廢私。愛施之德、雖行而無私、內行不修、則不能朝遠方之君。是故正君臣上下之義、飾父子兄弟夫妻之義、飾男女之別、別疏數之差、使君德臣忠、父慈子孝、兄愛弟敬、禮義章明、如此、則近者親之、遠者歸之、故曰、召遠在修近。」

*284 『韓非子』八經「民以法難犯上、而上以法撓慈仁、故下明愛施而務賅紋之政、是以法令隳。」

*285 『論語』學而「有子曰、信近於義、言可復也。恭近於禮、遠恥辱也。因不失其親、亦可宗也。」

至而疾嬰内、疾嬰内則痛禍薄外、痛禍薄外則苦痛雜於腸胃之間、苦痛雜於腸胃之間則傷人也慥、慥則退而自咎、退而自咎也生於欲利、故曰、咎莫慥於欲利。」・喻老「虞君欲屈產之乘、與垂棘之璧、不聽宮之奇、故邦亡身死、故曰、咎莫慥於欲得。」がより近い。

[8] 悲莫痛於傷心 『書』酒誥「民罔不盡傷心」

[9] 行莫醜於辱先 『孝經』感應「子曰、昔者明王、事父孝、故事天明。事母孝、故事地察。長幼順、故上下治。天地明察、神明彰矣。故雖天子、必有尊也、言有父也。必有先也、言有兄也。宗廟致敬、不忘親也。脩身慎行、恐辱先也。宗廟致敬、鬼神著矣。孝悌之至、通於神明、光于四海、無所不通。詩云、自西自東、自南自北、無思不服。」・蒙恬列傳「不敢辱先人之教、」

[10] 而詬莫大於宮刑 「詬莫大於」は、李斯列傳「故詬莫大於卑賤、而悲莫甚於窮困。」に見える。「宮」は、『書』呂刑「宮辟疑赦」「宮罰之屬三百」に初見し、「宮刑」は『禮記』文王世子に「公族無宮刑」が二見する。

[11] 刑餘之人 晉世家「宦者曰、臣刀鋸之餘、不敢以二心事君倍主、故得罪於君。君已反國、其母蒲、翟乎。且管仲射鉤、桓公以霸。今刑餘之人以事告而君不見、禍又且及矣。」『左傳』僖二十四*286 ⇒『國語』晉語四*287 ⇒晉世家の繼受關係が認められるが、「刑餘之人」對應部を『左傳』は「刑臣」、『國語』は「罪戾之人」に作り、「刑餘之人」が、晉世家独自の表現であることを知る。

[12] 無所比數 『晏子春秋』外篇第八「有工女託于晏子之家焉者、曰、婢妾、東廓之野之也。願得入身、比數于下陳焉。」

[13] 非一世也 平津侯主父列傳「夫匈奴難得而制、非一世也。」

[14] 所從來遠矣 『史記』には孝文本紀「相坐坐收、所以累其心、使重犯法、所從

*286 『左傳』僖二十四「對曰、臣謂君之入也、其知之矣。若猶未也、又將及難。君命無二、古之制也。除君之惡、惟力是視。蒲人、狄人、余何有焉。今君即位、其無蒲、狄乎。齊桓公置射鉤而使管仲相、君若易之、何辱命焉。行者甚眾、豈唯刑臣。」

*287 『國語』晉語四「對曰、吾以君爲已知之矣、故入。猶未知之也、又將出矣。事君不貳是謂臣、好惡不易是謂君。君君臣臣、是謂明訓。明訓能終、民之主也。二君之世、蒲人、狄人、余何有焉。除君之惡、唯力所及、何貳之有。今君即位、其無蒲、狄乎。伊尹放太甲而卒以爲明王、管仲賊桓公而卒以爲侯伯。乾時之役、申孫之矢集于桓鉤、鉤近於袂、而無怨言、佐相以終、克成令名。今君之德宇、何不寬裕也。惡其所好、其能久矣。君實不能明訓、而棄民主。余、罪戾之人也、又何患焉。且不見我、君其無悔乎。」

來遠矣。」「立嗣必子、所從來遠矣。」のほか、晉世家

二十一年、驪姬謂太子曰、君夢見齊姜、太子速祭曲沃、歸釐於君。太子於是祭其母齊姜於曲沃、上其薦胙於獻公。獻公時出獵、置胙於宮中。驪姬使人置毒藥胙中。居二日、獻公從獵來還、宰人上胙獻公、獻公欲饗之。驪姬從旁止之、曰、胙所從來遠、宜試之。祭地、地墳。與犬、犬死。與小臣、小臣死。驪姬泣曰、太子何忍也。其父而欲弑代之、況他人乎。且君老矣、且暮之人、曾不能待而欲弑之。謂獻公曰、太子所以然者、不過以妾及奚齊之故。妾願子母辟之他國、若早自殺、毋徒使母子爲太子所魚肉也。始君欲廢之、妾猶恨之。至於今、妾殊自失於此。太子聞之、奔新城。

に見える。晉世家は『左傳』僖四

姬謂大子曰、君夢齊姜、必速祭之。大子祭于曲沃、歸胙于公。公田、姬寘諸宮六日。公至、毒而獻之。公祭之地、地墳。與犬、犬斃。與小臣、小臣亦斃。姬泣曰、賊由大子。

に據るが、「所從來遠」を含む部分は晉世家の潤色に係る。

[15] 昔衛靈公與雍渠載孔子適陳 孔子世家「居衛月餘、靈公與夫人同車、宦者雍渠參乘、出、使孔子爲次乘、招搖市過之。…去衛、過曹。…孔子去曹適宋、…孔子適鄭、…孔子遂至陳、」・陳世家「潛公六年、孔子適陳。」

[16] 商鞅因景監見趙良寒心 商君列傳「趙良見商君。…趙良曰、…今君之見秦王也、因嬖人景監以爲主、非所以爲名也。」「寒心」は刺客列傳 / 荆軻「夫以秦王之暴而積怒於燕、足爲寒心、又況聞樊將軍之所在乎。」など『史記』に散見する。

[17] 同子參乘爰絲變色 袁盎晁錯列傳「袁盎常引大體慷慨。宦者趙同以數幸、常害袁盎、袁盎患之。盎兄子種爲常侍騎、持節夾乘、說盎曰、君與門、廷辱之、使其毀不用。孝文帝出、趙同參乘、袁盎伏車前曰、臣聞天子所與共六尺輿者、皆天下豪英。今漢雖乏人、陛下獨奈何與刀鋸餘人載。於是上笑、下趙同。趙同泣下車。」

[18] 自古而恥之 封禪書「八神將自古而有之、或曰太公以來作之。」

[19] 夫中材之人 「中材」は『史記』に初見。魏豹彭越列傳「太史公曰、魏豹・彭越雖故賤、然已席卷千里、南面稱孤、喋血乘勝日有聞矣。懷畔逆之意、及敗、不死而虜囚、身被刑戮、何哉。中材已上且羞其行、況王者乎。彼無異故、智略絕人、獨患無

身耳。得攝尺寸之柄、其雲蒸龍變、欲有所會其度、以故幽囚而不辭云。」下線部は本文の「夫中材之人、…況忼慨之士乎。」に似る。

[20] 況忼慨之士乎 刺客列傳 / 荊軻「復爲羽聲慷慨、士皆瞋目、髮盡上指冠。」*288・袁盎晁錯列傳（上掲）「袁盎常引大體慷慨。」

[21] 如今朝雖乏人奈何令刀鋸之餘薦天下豪雋哉 袁盎晁錯列傳（上掲）「臣聞天子所與共六尺輿者、皆天下豪英。今漢雖乏人、陛下獨奈何與刀鋸餘人載。」を踏まえる。「刀鋸之餘」は晉世家（上掲）「宦者曰、臣刀鋸之餘、不敢以二心事君倍主、故得罪於君。」に見える。「豪雋」は『史記』に「豪俊」が散見する。秦始皇本紀「太史公曰、…善哉乎賈生推言之也。曰、…於是山東大擾、諸侯竝起、豪俊相立*289。…於是廢先王之道、焚百家之言、以愚黔首。墮名城、殺豪俊、收天下之兵聚之咸陽、銷鋒鑄鏃、以爲金人十二、以弱黔首之民。…陳涉、甕牖繩樞之子、叱隸之人、而遷徙之徒、才能不及中人、非有仲尼・墨翟之賢、陶朱・猗頓之富、躡足行伍之間、而倔起什伯之中、率罷散之卒、將數百之眾、而轉攻秦。斬木爲兵、揭竿爲旗、天下雲集響應、贏糧而景從、山東豪俊遂竝起而亡秦族矣*290。」

[22] 僕賴先人緒業 父司馬談を「先人」と稱することは太史公自序に見える*291。「緒業」は周本紀「武王即位、太公望爲師、周公旦爲輔、召公、畢公之徒左右王、師脩文王緒業」に見える。太史公自序「無澤爲漢市長」「喜爲五大夫」によれば、司馬無澤は漢の市長をつとめたが、司馬喜は仕官しなかった。「創業」は司馬談における司馬氏官歴の再開を指す。

[23] 得待罪輦轂下 「待罪」は『史記』に頻見。萬石張叔列傳（上掲）「丞相慙不任職、乃上書曰、慶幸得待罪丞相、罷駑無以輔治、城郭倉庫空虛、民多流亡、罪當伏斧質、

*288 『戰國策』燕策三「復爲忼慨羽聲、士皆瞋目、髮盡上指冠。」

*289 『新書』過秦下「於是山東諸侯竝起、豪俊相立、」

*290 『新書』過秦上「於是廢先王之道、燔百家之言、以愚黔首。墮名城、殺豪俊、收天下之兵、聚之咸陽。銷鋒鏃、鑄以爲金人十二、以弱天下之民。…然而陳涉、甕牖繩樞之子、氓隸之人、而遷徙之徒也。材能不及中人、非有仲尼・墨翟之賢、陶朱・猗頓之富、躡足行伍之間、倏起阡陌之中、率疲弊之卒、將數百之眾、轉而攻秦。斬木爲兵、揭竿爲旗、天下雲合響應、贏糧而景從。山東豪傑竝起、而亡秦族矣。」

*291 太史公自序「小子不敏、請悉論先人所次舊聞、弗敢闕。」「先人有言、自周公卒五百歲而有孔子。孔子卒後至於今五百歲、有能紹明世、正易傳、繼春秋、本詩書禮樂之際。」「余聞之先人曰、伏羲至純厚、作易八卦。…」

上不忍致法。願歸丞相侯印、乞骸骨歸、避賢者路。」

[24] 二十餘年矣 封禪書に「太史公曰、余從巡祭天地諸神名山川而封禪焉。入壽宮侍祠神語」とあり、武帝の「壽宮」設置は、元鼎元年(116BC)に当たる。太始四年(94BC)までで二十三年となる。

[25] 上之 『國語』楚語上「夫子承楚國之政、其法刑在民心而藏在王府、上之可以比先王、下之可以訓後世、雖微楚國、諸侯莫不譽。」・『管子』白心「上之隨天、其次隨人。」

[26] 有奇策材力之譽 「奇策」は淮陰侯列傳「齊人蒯通知天下權在韓信、欲爲奇策而感動之。」に見える。「材力」は『史記』に頻見し、また下文に「日夜思竭其不肖之材力」とある。「之譽」は下文に「長無鄉曲之譽」とある。

[27] 自結明主 呂不韋列傳「今夫人事太子、甚愛而無子、不以此時蚤自結於諸子中賢孝者、舉立以爲適而子之、夫在則重尊、夫百歲之後、所子者爲王、終不失勢、此所謂一言而萬世之利也。」

[28] 次之 貨殖列傳「是故本富爲上、末富次之、姦富最下。無巖處奇土之行、而長貧賤、好語仁義、亦足羞也。」

[29] 又不能拾遺補闕 太史公自序「拾遺補蕪」。

[30] 招賢進能 上文に「招賢進士」とある。

[31] 顯巖穴之士 伯夷列傳「伯夷・叔齊雖賢、得夫子而名益彰。顏淵雖篤學、附驥尾而行益顯。巖穴之士、趣舍有時若此、類名堙滅而不稱、悲夫。閭巷之人、欲砥行立名者、非附青雲之士、惡能施于後世哉。」・商君列傳「君之危若朝露、尚將欲延年益壽乎。則何不歸十五都、灌園於鄙、勸秦王顯巖穴之士、養老存孤、敬父兄、序有功、尊有德、可以少安。」・貨殖列傳「由此觀之、賢人深謀於廊廟、論議朝廷、守信死節隱居巖穴之士設爲名高者安歸乎。歸於富厚也。」

[32] 外之 司馬相如列傳 / 難蜀父老文「內之則犯義侵禮於邊境、外之則邪行橫作、放弑其上。」

[33] 不能備行伍 秦始皇本紀「太史公曰、…善哉乎賈生推言之也。曰、…陳涉、甕牖繩樞之子、叱隸之人、而遷徙之徒、才能不及中人、非有仲尼・墨翟之賢、陶朱・猗

頓之富、躡足行伍之間、而倔起什伯之中、率罷散之卒、將數百之眾、而轉攻秦。」*292

[34] 攻城野戰 袁盎晁錯列傳「夫陳平・絳侯輔翼高帝、定天下、爲將相、而誅諸呂、存劉氏。君乃爲材官蹶張、遷爲隊率、積功至淮陽守、非有奇計攻城野戰之功。」

[35] 有斬將奪旗之功 叔孫通列傳「叔孫通聞之、迺謂曰、漢王方蒙矢石爭天下、諸生寧能鬪乎。故先言斬將奪旗之士。諸生且待我、我不忘矣。」・貨殖列傳「故壯士在軍、攻城先登、陷陣卻敵、斬將奪旗、前蒙矢石、不避湯火之難者、爲重賞使也。」

[36] 下之 『國語』楚語上(上掲)。

[37] 不能累日積勞 「累日積久」は、『春秋繁露』立元神・『淮南子』泰族訓に、「積勞」は、酷吏列傳「今上時、禹以刀筆吏積勞、稍遷爲御史。」に見える。また高祖功臣侯者年表に「太史公曰、古者人臣功有五品、以德立宗廟定社稷曰勳、以言曰勞、用力曰功、明其等曰伐、積日曰閱。」とある。

[38] 取尊官厚祿 日者列傳「尊官厚祿、世之所高也、賢才處之。」

[39] 以爲宗族交遊光寵 滑稽列傳「若朋友交遊、久不相見、卒然相覩、歡然道故、私情相語、飲可五六斗徑醉矣。」

[40] 四者無一遂 司馬相如列傳 / 子虛賦「章君之惡而傷私義、二者無一可、而先生行之、必且輕於齊而累於楚矣。」・汲鄭列傳「公爲正卿、上不能褒先帝之功業、下不能抑天下之邪心、安國富民、使囹圄空虛、二者無一焉。」

[41] 苟合取容 酈生陸賈列傳「平原君爲人辯有口、刻廉剛直、家於長安。行不苟合、義不取容。」

[42] 無所短長之效 六國年表「務在彊兵并敵、謀詐用而從衡短長之說起。」

[43] 可見於此矣 秦始皇本紀「太史公曰、…善哉乎賈生推言之也。曰、…秦使章邯將而東征、章邯因以三軍之眾要市於外、以謀其上。羣臣之不信、可見於此矣。」*293

[44] 僕亦嘗廁下大夫之列 『漢書』百官公卿表によれば、相國 / 丞相・太尉・御史大夫・太傅・太師・前後左右將軍は金印紫綬を佩し、ついで、

凡吏秩比二千石以上、皆銀印青綬、光祿大夫無。秩比六百石以上、皆銅印黑綬、

*292 『新書』過秦上「然而陳涉、甕牖繩樞之子、氓隸之人、而遷徙之徒也。材能不及中人、非有仲尼・墨翟之賢、陶朱・猗頓之富、躡足行伍之間、俛起阡陌之中、率疲弊之卒、將數百之眾、轉而攻秦。」

*293 『新書』過秦下「章邯因其三軍之眾、要市於外、以謀其二。羣臣之不相信、可見於此矣。」

大夫・博士・御史・謁者・郎無。其僕射・御史治書尚符璽者、有印綬。比二百石以上、皆銅印黃綬。

とある。『漢書補注』宣帝紀に引く王啟原説は、紫綬・青綬・黒綬を公・卿・大夫に比定する*294。卿・大夫は、『論語』郷黨

孔子於郷黨、恂恂如也、似不能言者。其在宗廟・朝廷、便便言、唯謹爾。朝、與下大夫言、侃侃如也。與上大夫言、誾誾如也。

の邢疏に「上大夫、卿也」とあるように、上大夫・下大夫とも稱される。本條および『漢書』朱博傳「刺史位下大夫、而臨二千石、輕重不相準、失位次之序。」では、『續漢書』百官志によれば六百石の太史令・刺史を下大夫と稱する。青綬・黒綬が上大夫・下大夫となろう*295

[45] 不以此時引維綱 『莊子』外篇 / 天運「天其運乎。地其運乎。日月其爭於所乎。孰主張是。孰維綱是。」

[46] 盡思慮 太史公自序「夫天下稱誦周公、言其能論歌文武之德、宣周邵之風、達太王・王季之思慮、爰及公劉、以尊后稷也。」

[47] 今已虧形爲掃除之隸 『周禮』夏官 / 隸僕「隸僕掌五寢之掃除糞洒之事。祭祀、脩寢。王行、洗乘石。掌蹕宮中之事。大喪、復于小寢・大寢。」

[48] 在闢茸之中 屈原賈生列傳 / 賈誼弔屈原賦「闢茸尊顯兮、讒諛得志。」

[49] 叩首信眉 樗里子甘茂列傳「今雍氏圍、秦師不下殺、公仲且叩首而不朝、公叔且以國南合於楚。」*296

[50] 論列是非 『荀子』王霸「相者、論列百官之長、要百事之聽、以飾朝廷臣下百吏之分、度其功勞、論其慶賞、歲終奉其成功以效於君。」

[51] 嗟乎嗟乎 「嗟乎」を重ねることは、越世家

王乃大怒、曰、伍員果欺寡人。役反、使人賜子胥屬鏤劍以自殺。子胥大笑曰、我

*294 『漢書補注』宣帝紀「王啟原曰、吏六百石有罪先請、即周禮議貴之遺意。周官小司寇注、議貴、若今時吏墨綬有罪先請、是也。百官表、秩比六百石以上皆銅印墨綬、先鄭以爲貴者蓋漢制以紫綬爲公、青綬爲卿、墨綬比大夫。六百石比大夫。然有其法而無明文。」

*295 阿部幸信「漢朝の「統治階級」について：前漢期における變遷を中心に」（『中央大學文學部紀要（史學）』63、2018）

*296 『戰國策』韓策二「今雍氏圍、而秦師不下殺、是無韓也。公仲且叩首而不朝、公叔且以國南合於楚。」

令而父霸、我又立若、若初欲分吳國半予我、我不受、已、今若反以讒誅我。嗟乎、嗟乎、一人固不能獨立。報使者曰、必取吾眼置吳東門、以觀越兵入也。

に見える。『左傳』哀十一

反役、王聞之、使賜之屬鏹以死。將死、曰、樹吾墓檟、檟可材也。吳其亡乎。三年、其始弱矣。盈必毀、天之道也。

に基づくが、下線部の如く潤色が甚だしい。潤色部分は必ずしも司馬遷の創作ではないとしても、司馬遷によって選擇されたものであり、そこに「嗟乎嗟乎」が見えることは、司馬遷の好尚を反映したものといえる。ちなみに伍子胥列傳

吳王曰、微子之言、吾亦疑之。乃使使賜伍子胥屬鏹之劍、曰、子以此死。伍子胥仰天歎曰、嗟乎。讒臣韜爲亂矣、王乃反誅我。我令若父霸。自若未立時、諸公子爭立、我以死爭之於先王、幾不得立。若既得立、欲分吳國予我、我顧不敢望也。然今若聽諛臣言以殺長者。乃告其舍人曰、必樹吾墓上以梓、令可以爲器。而抉吾眼縣吳東門之上、以觀越寇之入滅吳也。乃自剄死。

も独自の潤色を施すが、ここでもまた「嗟乎」を用いる。

[52] 尚何言哉 『莊子』雜篇 / 說劍「夫子弗受、慚尚何敢言。」

且事本末未易明也。僕少負不羈之才、長無鄉曲之譽、主上幸以先人之故、使得奉薄技、出入周衛之中。僕以爲戴盆何以望天、故絕賓客之知、忘室家之業、日夜思竭其不肖之材力、務壹心營職、以求親媚於主上。而事乃有大謬不然者。夫僕與李陵俱居門下、素非相善也、趣舍異路、未嘗銜盃酒接殷勤之歡。然僕觀其爲人自奇士、事親孝、與士信、臨財廉、取予義、分別有讓、恭儉下人、常思奮不顧身以徇國家之急。其素所畜積也、僕以爲有國士之風。夫人臣出萬死不顧一生之計、赴公家之難、斯已奇矣。今舉事壹不當、而全軀保妻子之臣隨而媒孽其短、僕誠私心痛之。且李陵提步卒不滿五千、深踐戎馬之地、足歷王庭、垂餌虎口、橫挑疆胡、叩億萬之師、與單于連戰十餘日、所殺過當。虜救死扶傷不給、旃裘之君長咸震怖、乃悉徵左右賢王、舉引弓之民、一國共攻而圍之。轉鬪千里、矢盡道窮、救兵不至、士卒死傷如積。然李陵一呼勞軍、士無不起、躬流涕、沫血飲泣、張空拳、冒白刃、北首爭死敵。陵未沒時、使有來報、漢公卿王侯奉觴上壽。後數日、陵敗書聞、主上爲之食不甘味、聽朝不怡。大臣憂懼、不知所出。僕竊不自料其卑賤、見主上慘悽怛悼、誠欲效其款款之愚。以爲李陵素與士大夫絕甘分少、能得人

之死力、雖古名將不過也。身雖陷敗、彼觀其意、且欲得其當而報漢。事已無可奈何、其所摧敗、功亦足以暴於天下。僕懷欲陳之、而未有路。適會召問、即以此指推言陵功、欲以廣主上之意、塞睚眦之辭。未能盡明、明主不深曉、以爲僕沮貳師、而爲李陵游說、遂下於理。拳拳之忠、終不能自列、因爲誣上、卒從吏議。家貧、財賂不足以自贖、交遊莫救、左右親近不爲壹言。身非木石、獨與法吏爲伍、深幽囹圄之中、誰可告愬者。此正少卿所親見、僕行事豈不然邪。李陵既生降、隳其家聲、而僕又茸以蠶室、重爲天下觀笑。悲夫。悲夫。

且つ事の本末未だ明らかにし易からざるなり。僕少くして不羈の才を負^{たの}むも [1]、長じて郷曲の譽無し [2]、主上幸いに先人を以ての故に [3]、薄技を奉じ [4]、周衛の中に入出するを得しむ。僕以爲えらく戴盆何を以てか天を望む、故に賓客の知を絶ち [5]、室家の業を忘れ [6]、日夜 其の不肖の材力を竭くすを思い [7]、務めて壹心に職を營み [8]、以て親媚を主上に求む [9]。而るに事乃ち大いに謬りて然らざる者有り [10]。夫れ僕 李陵と俱に門下に居るも [11]、素より相い善きに非ざるなり [12]、趣舍 路を異にし [13]、未だ嘗て盃酒を衞み殷勤の歡に接せず [14]。然るに僕 其の人と爲りを觀るに自ら奇士 [15]、親に事えて孝 [16]、士と與にして信、財に臨みて廉 [17]、取予義あり [18]、分別に讓有り、恭儉にして人に下り [19]、常に奮いて身を顧みず以て國家の急^{したが}に徇わんことを思う [20]。其の素より畜積する所なり [21]、僕以て國士の風有りと爲す [22]。夫れ人臣 萬死 一生を顧みざるの計を出し [23]、公家の難に赴く [24]、斯れ已に奇なり。今 事を擧ぐるに壹たび當たらず、而して軀を全うし妻子を保つ^{ひつさ}の臣隨いて其の短を媒孽す、僕誠に私かに心に之を痛む [25]。且つ李陵 歩卒^{ひつさ}を提ぐる^{おさ}こと五千に滿たず、深く戎馬の地を踐み [26]、足 王庭を歴^へ [27]、餌を虎口に垂れ [28]、横ざまに彊胡に挑み [29]、億萬の師^{おさ}を叩え、單于と連戦すること十餘日 [30]、殺す所 當に過ぐ [31]。虜 死を救い傷を扶けて給せず、旃裘の君長咸な震怖し [32]、乃ち悉く左右賢王を徴し [33]、引弓の民を擧げ [34]、一國共に攻めて之を圍む。轉鬪千里、矢盡き道窮まり、救兵 至らず [35]、士卒死傷 積むが如し。然るに李陵一たび勞軍に呼すれば [36]、士 起たざるは無く、躬ら流涕し、血を沫^{あら}い泣^{なみだ}を飲み、空拳を張り、白刃を冒し [37]、北首して争いて敵に死す [38]。陵未だ没せざるの時、使 來報有り、漢の公卿王侯 觴を奉り壽を上る [39]。後數日、

陵敗書聞す、主上 之が爲に食 味を甘しとせず [40]、朝を聴くに^{よろこ}怡ばず。大臣憂懼し、出だす所を知らず [41]。僕竊かに自ら其の卑賤を料らず [42]、主上の慘悽怛悼するを見 [43]、誠に其の款款の愚を效さんと欲す [44]。以爲えらく李陵素より士大夫と甘を絶ち少を分かち、能く人の死力を得、古の名將と雖も過ぎざるなり [45]。身陷敗すと雖も、彼れ其の意を觀、且つ其の當を得て漢に報いんと欲す [46]。事已に奈何ともす可き無きも [47]、其の摧敗する所、功亦た以て天下^{あらわ}に暴すに足る [48]。僕^{おも}懐いて之を陳べんと欲するも、而るに未だ路有らず [49]。適^{たまた}ま召問に會し [50]、即ち此の指を以て陵の功を推言し [51]、以て主上の意を廣げ [52]、睚眦の辭を塞がんと欲す [53]。未だ能く盡く明らかにせざるに、明主 深曉せず、以て僕 貳師^{はば}を沮み、而して李陵の爲に游説すと爲し、遂に理に下す [54]。拳拳の忠 [55]、終に自ら列する能わず、因りて誣上と爲し、卒に吏議に従う。家貧しく、財賂 以て自ら贖うに足らず [56]、交遊 救う莫く [57]、左右親近 爲に壹言せず [58]。身 木石に非ず [59]、獨り法吏と伍を爲し、深く囹圄の中に幽せられ [60]、誰か告愬す可き者ぞ [61]。此れ正に少卿の親しく見る所 [62]、僕行事豈に然らざらんや。李陵既に生降し、其の家聲を^{こぼ}潰つ [63]、而して僕又た^お茸すに蠶室を以てし [64]、重ねて天下の觀笑と爲る [65]。悲しきかな。悲しきかな [66]。

[1] 僕少負不羈之才 魯仲連鄒陽列傳「今人主沈於諂諛之辭、牽於帷裳之制、使不羈之士與牛驥同皁、此鮑焦所以忿於世而不留富貴之樂也。」

[2] 長無鄉曲之譽 平津侯主父列傳「陳涉無千乘之尊、尺土之地、身非王公大人名族之後、無鄉曲之譽、非有孔・墨・曾子之賢、陶朱・猗頓之富也、然起窮巷、奮棘矜、偏袒大呼而天下從風、此其故何也。」

[3] 主上幸以先人之故 「主上」は太史公自序に見える*297。

[4] 使得奉薄技 貨殖列傳「夫織耆筋力、治生之正道也、而富者必用奇勝。田農、掘業、而秦揚以蓋一州。掘冢、姦事也、而田叔以起。博戲、惡業也、而桓發用（之）富。行賈、丈夫賤行也、而雍樂成以饒。販脂、辱處也、而雍伯千金。賣漿、小業也、而張氏千萬。洒削、薄技也、而邳氏鼎食。胃脯、簡微耳、濁氏連騎。馬醫、淺方、張里擊鍾。

*297 太史公自序「主上明聖而德不布聞、有司之過也。」「二十八宿環北辰、三十輻共一轂、運行無窮、輔拂股肱之臣配焉、忠信行道、以奉主上、作三十世家。」

此皆誠壹之所致。」

[5] 故絕賓客之知 儒林列傳「申公游學長安、與劉郢同師。已而郢爲楚王、令申公傅其太子戊。戊不好學、疾申公。及王郢卒、戊立爲楚王、胥靡申公。申公恥之、歸魯、退居家教、終身不出門、復謝絕賓客、獨王命召之乃往。」

[6] 忘室家之業 『左傳』襄十八「人其以不穀爲自逸而忘先君之業矣。」

[7] 日夜思竭其不肖之材力 『左傳』襄二十五「子產曰、政如農功、日夜思之、思其始而成其終、朝夕而行之。行無越思、如農之有畔、其過鮮矣。」

[8] 務壹心營職 『左傳』昭二十五「臧昭伯率從者將盟、載書曰、戮力壹心、好惡同之。信罪之有無、繾綣從公、無通外內。」

[9] 以求親媚於主上 「求媚」は『左傳』に四例^{*298}、『國語』に一例^{*299} 見える。

[10] 而事乃有大謬不然者 『莊子』外篇 / 繕性「古之所謂隱士者、非伏其身而弗見也、非閉其言而不出也、非藏其知而不發也、時命大謬也。」

[11] 夫僕與李陵俱居門下 「門下」は郎官を指す^{*300}。司馬遷は郎中をつとめたが^{*301}、他方、李陵については、『漢書』李陵傳に「陵字少卿、少爲侍中建章監。」とある。

[12] 素非相善也 匈奴列傳「楊信爲人剛直屈彊、素非貴臣、單于不親。」

[13] 趣舍異路 伯夷列傳「伯夷・叔齊雖賢、得夫子而名益彰。顏淵雖篤學、附驥尾而行益顯。巖穴之士、趣舍有時若此、類名堙滅而不稱、悲夫。閭巷之人、欲砥行立名者、非附青雲之士、惡能施于後世哉。」・太史公自序「夫陰陽・儒・墨・名・法・道德、此務爲治者也、直所從言之異路、有省不省耳。」

[14] 未嘗銜盃酒接殷勤之歡 「盃酒」は魏其武安侯列傳「御史大夫韓安國曰、魏其言灌夫父死事、身荷戟馳入不測之吳軍、身被數十創、名冠三軍、此天下壯士、非有大惡、爭杯酒、不足引他過以誅也。」「太史公曰、魏其、武安皆以外戚重、灌夫用一時決策而名顯。魏其之舉以吳楚、武安之貴在日月之際。然魏其誠不知時變、灌夫無術而不遜、

*298 『左傳』成二「鄭人懼於邲之役、而欲求媚於晉、其必許之。」・襄七「叔仲昭伯爲隄正、欲善季氏、而求媚於南遺。」・昭二十「進退無辭、則虛以求媚。」・哀十六「不爲利諂、不爲威惕、不洩人言以求媚者、去之。」

*299 『國語』晉語一「夫翟祖之君、好專利而不忌、其臣競諂以求媚、其進者壅塞、其退者拒違。」

*300 杉村伸二「漢初の郎官」(『史泉』94、2001)。

*301 太史公自序「於是遷仕爲郎中、」

兩人相翼、乃成禍亂。武安負貴而好權、杯酒責望、陷彼兩賢。嗚呼哀哉。遷怒及人、命亦不延。眾庶不載、竟被惡言。嗚呼哀哉。禍所從來矣。」に、「殷勤」は司馬相如列傳「既罷、相如乃使人重賜文君侍者通殷勤。」に見える。

[15] 然僕觀其爲人自奇士 「奇士」は『史記』に散見する。貨殖列傳「是故本富爲上、末富次之、姦富最下。無巖處奇士之行、而長貧賤、好語仁義、亦足羞也。」

[16] 事親孝 太史公自序「且夫孝始於事親、中於事君、終於立身。揚名於後世、以顯父母、此孝之大者。」*302『漢書』李陵傳は、「報任安書」の「事親孝」から「遂下於理」までの一節を節略している。

司馬遷傳	李陵傳
夫僕與李陵俱居門下、素非相善也、趣舍異路、未嘗銜盃酒接殷勤之歡。然僕觀其爲人自奇士、事親孝、與士信、臨財廉、取予義、分別有讓、恭儉下人、常思奮不顧身以徇國家之急。其素所畜積也、僕以爲有國士之風。夫人臣出萬死不顧一生之計、赴公家之難、斯已奇矣。今舉事壹不當、而全軀保妻子之臣隨而媒孽其短、僕誠私心痛之。且李陵提步卒不滿五千、深踐戎馬之地、足歷王庭、垂餌虎口、橫挑疆胡、印億萬之師、與單于連戰十餘日、所殺過當。虜救死扶傷不給、旃裘之君長咸震怖、乃悉徵左右賢王、舉引弓之民、一國共攻而圍之。轉鬪千里、矢盡道窮、救兵不至、士卒死傷如積。然李陵一呼勞軍、士無不起、躬流涕、沫血飲泣、張空拳、冒白刃、北首爭死敵。陵未沒時、使有來報、漢公卿王侯奉觴上壽。後數日、陵敗書聞、主上爲之食不甘味、聽朝不怡。大臣憂懼、不知所出。僕竊不自料其卑賤、見主上慘悽怛悼、誠欲效其款款之愚。以爲李陵素	羣臣皆罪陵、上以問太史令司馬遷、遷盛言、 陵事親孝、與士信、 常奮不顧身以殉國家之急。其素所畜積也、有國士之風。 今舉事一不幸、全軀保妻子之臣隨而媒孽其短、誠可痛也。且陵提步卒不滿五千、深鞣戎馬之地、 抑數萬之師、 虜救死扶傷不暇、 悉舉引弓之民 共攻圍之。轉鬪千里、矢盡道窮、 士張空拳、 冒白刃、北首爭死敵、

*302 『孝經』開宗明義「仲尼居、曾子侍、…子曰、夫孝、德之本也、教之所由生也。復坐、吾語汝。身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。夫孝、始於事親、中於事君、終於立身。大雅云、無念爾祖、聿脩厥德。」

<p>與士大夫絕甘分少、能得人之死力、雖古名將不過也。身雖陷敗、<u>彼觀其意、且欲得其當而報漢</u>。事已無可奈何、其所摧敗、功亦足以暴於天下。僕懷欲陳之、而未有路。適會召問、即以此指推言陵功、欲以廣主上之意、塞睚眦之辭。未能盡明、明主不深曉、以為僕沮貳師、而為李陵游說、遂下於理。</p>	<p>得人之死力、雖古名將不過也。身雖陷敗、然其所摧敗亦足暴於天下。<u>彼之不死、宜欲得當以報漢也</u>。 初、上遣貳師大軍出、財令陵為助兵、及陵與單于相值、而貳師功少。上以遷誣罔、欲沮貳師、為陵游說、下遷腐刑。</p>
---	--

[17] 臨財廉 『禮器』曲禮上「賢者狎而敬之。畏而愛之。愛而知其惡。憎而知其善。積而能散。安安而能遷。臨財毋苟得。臨難毋苟免。很毋求勝。分毋求多。疑事毋質。直而勿有。」

[18] 取予義 上文「取予者義之符也」

[19] 分別有讓恭儉下人 仲尼弟子列傳 / 子貢「陳子禽問子貢曰、…又問曰、孔子適是國必聞其政。求之與。抑與之與。子貢曰、夫子溫良恭儉讓以得之。夫子之求之也、其諸異乎人之求之也。」*303、又 / 顏孫師「子張問、士何如斯可謂之達矣。孔子曰、何哉、爾所謂達者。子張對曰、在國必聞、在家必聞。孔子曰、是聞也、非達也。夫達者、質直而好義、察言而觀色、慮以下人、在國及家必達。夫聞也者、色取仁而行違、居之不疑、在國及家必聞。」*304

[20] 常思奮不顧身以徇國家之急 「不顧身」は、太史公自序「敢犯顏色以達主義、不顧其身、為國家樹長畫。作袁盎朝錯列傳第四十一。」に、「國家之急」は、平準書「冶鑄煮鹽、財或累萬金、而不佐國家之急、黎民重困。」・廉頗藺相如列傳「吾所以為此者、以先國家之急而後私讎也。」に見える。

[21] 其素所畜積也 下文「素所自樹立使然」

[22] 僕以為有國士之風 刺客列傳 / 豫讓「豫讓曰、臣事范、中行氏、范、中行氏皆眾人遇我、我故眾人報之。至於智伯、國士遇我、我故國士報之。」

*303 『論語』學而「子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政、求之與。抑與之與。子貢曰、夫子溫良恭儉讓以得之。夫子之求之也、其諸異乎人之求之與。」

*304 『論語』顏淵「子張問、士何如斯可謂之達矣。子曰、何哉、爾所謂達者。子張對曰、在邦必聞、在家必聞。子曰、是聞也。非達也。夫達也者、質直而好義、察言而觀色、慮以下人、在邦必達、在家必達、夫聞也者、色取仁而行違、居之不疑、在邦必聞、在家必聞。」

[23] 夫人臣出萬死不顧一生之計 張耳陳餘列傳「將軍瞋目張膽、出萬死不顧一生之計、爲天下除殘也。」

[24] 赴公家之難 司馬相如列傳 / 喻巴蜀父老檄「計深慮遠、急國家之難、而樂盡人臣之道也。」

[25] 僕誠私心痛之 「私心」は下文「恨私心有所不盡」にも見える。

[26] 深踐戎馬之地 韓長孺列傳「今匈奴負戎馬之足、懷禽獸之心、遷徙鳥舉、難得而制也。」

[27] 足歷王庭 匈奴列傳「是後匈奴遠遁、而幕南無王庭。」

[28] 垂餌虎口 酈生陸賈列傳「酈生日、足下起糾合之眾、收散亂之兵、不滿萬人、欲以徑入強秦、此所謂探虎口者也。」・叔孫通列傳「通曰、公不知也、我幾不脫於虎口。」

[29] 橫挑疆胡 建元以來侯者年表「太史公曰、…自是後、遂出師北討疆胡、南誅勁越、將卒以次封矣。」・司馬相如列傳 / 難蜀父老文「故北出師以討疆胡、南馳使以誚勁越。」・太史公自序「北討疆胡、南誅勁越、征伐夷蠻、武功爰列。作建元以來侯者年表第八。」

[30] 與單于連戰十餘日 李將軍列傳「而單于以兵八萬圍擊陵軍。陵軍五千人、兵矢既盡、士死者過半、而所殺傷匈奴亦萬餘人。且引且戰、連鬪八日、還未到居延百餘里、匈奴遮狹絕道、陵食乏而救兵不到、虜急擊招降陵。」

[31] 所殺過當 匈奴列傳「漢使博望侯及李將軍廣出右北平、擊匈奴左賢王。左賢王圍李將軍、卒可四千人、且盡、殺虜亦過當。」・衛將軍驃騎列傳「善騎射、再從大將軍、受詔與壯士、爲剽姚校尉、與輕勇騎八百直奔大軍數百里赴利、斬捕首虜過當。」「匈奴左賢王將數萬騎圍郎中令、郎中令與戰二日、死者過半、所殺亦過當。」

[32] 旃裘之君長咸震怖 「旃裘」は天官書「其西北則胡・貉・月氏諸衣旃裘引弓之民、爲陰。」・匈奴列傳「自君王以下、咸食畜肉、衣其皮革、被旃裘。」「其得漢繒絮、以馳草棘中、衣袴皆裂敝、以示不如旃裘之完善也。」に、「君長」は匈奴列傳「各分散居谿谷、自有君長、往往而聚者百有餘戎、然莫能相一。」に見える。

[33] 乃悉徵左右賢王 「乃悉」は秦始皇本紀「閻樂歸報趙高、趙高乃悉召諸大臣公子、告以誅二世之狀。」など『史記』に初見する。

[34] 舉引弓之民 匈奴列傳「諸引弓之民、并爲一家。」

[35] 救兵不至 李將軍列傳（上掲）。

[36] 然李陵一呼勞軍 孝文本紀「十四年冬、匈奴謀入邊爲寇、…帝親自勞軍、勒兵申教令、賜軍吏卒。」·絳侯周勃世家「文帝之後六年、匈奴大入邊。…上自勞軍。…於是上乃使使持節詔將軍、吾欲入勞軍。」

[37] 冒白刃 司馬相如列傳「夫邊郡之士、聞烽舉燧燔、皆攝弓而馳、荷兵而走、流汗相屬、唯恐居後、觸白刃、冒流矢、義不反顧、計不旋踵、人懷怒心、如報私讎。」

[38] 北首爭死敵 田叔列傳「匈奴冒頓新服北夷、來爲邊害、孟舒知士卒罷敝、不忍出言、士爭臨城死敵、如子爲父、弟爲兄、以故死者數百人。孟舒豈故驅戰之哉。是乃孟舒所以爲長者也。」

[39] 奉觴上壽 滑稽列傳 / 淳于髡「若親有嚴客、髡奉酒於前、時賜餘瀝、奉觴上壽、數起、飲不過二斗徑醉矣。」

[40] 食不甘味 『新書』論誠「豫讓事中之行、智伯滅中行氏、豫讓徙事智伯。及趙襄子破智伯、豫讓劑面而變容、吞炭而爲喑、乞其妻所、而妻弗識。乃伏刺襄子、五起而弗中。襄子患之、食不甘味、一夕而五易臥、見不全身。人謂豫讓曰、子不死中行、而反事其讎、何無恥之甚也。今必碎身糜軀、以爲智伯、何其與前異也。豫讓曰、我事中之行、與帷而衣之、與關而枕之。夫眾人畜我、我故眾人事之。及智伯分吾以衣服、餽吾以鼎實、舉被而爲禮、大夫國士遇我、我固國士爲之報。故曰、士爲知己者死、女爲悅己者容。非冗言也、故在主而已。」

[41] 大臣憂懼不知所出 范雎蔡澤列傳「應侯懼、不知所出。」·刺客列傳 / 荊軻「於期仰天太息流涕曰、於期每念之、常痛於骨髓、顧計不知所出耳。」*305·李斯列傳「李斯恐懼、重爵祿、不知所出、」·張丞相列傳「高祖曰、然。吾私憂之、不知所出。」

[42] 僕竊不自料其卑賤 『漢書』鄒陽傳「鄒陽留數日、乘間而請曰、臣非爲長君無使令於前、故來侍也。愚竊不自料、願有謁也。」

[43] 見主上慘悽怛悼 『楚辭』(宋玉)九辯「心閱憐之慘悽兮、願一見而有明。」「霜露慘悽而交下兮、心尚幸其弗濟。」

[44] 誠欲效其款款之愚 「誠欲」は留侯世家「沛公誠欲倍項羽邪。」に、「款款」は『楚辭』(屈原)卜居「吾寧惘惘款款、朴以忠乎。」に見える。「效愚×」は『史記』に類見する。平津侯主父列傳「所言九事、其八事爲律令、一事諫伐匈奴。其辭曰、臣聞明主

*305 『戰國策』燕策三「樊將軍仰天太息流涕曰、吾每念、常痛於骨髓、顧計不知所出耳。」

不惡切諫以博觀、忠臣不敢避重誅以直諫、是故事無遺策而功流萬世。今臣不敢隱忠避死以效愚計、願陛下幸赦而少察之。」

[45] 雖古名將不過也 淮南衡山列傳「王又謂被曰、山東即有兵、漢必使大將軍將而制山東、公以爲大將軍何如人也。被曰、被所善者黃義、從大將軍擊匈奴、還、告被曰、大將軍遇士大夫有禮、於士卒有恩、眾皆樂爲之用。騎上下山若蜚、材幹絕人。被以爲材能如此、數將習兵、未易當也。及謁者曹梁使長安來、言大將軍號令明、當敵勇敢、常爲士卒先。休舍、穿井未通、須士卒盡得水、乃敢飲。軍罷、卒盡已度河、乃度。皇太后所賜金帛、盡以賜軍吏。雖古名將弗過也。王默然。」

[46] 且欲得其當而報漢 「得其當」は『新書』道術（上掲）に見える。

[47] 事已無可奈何 范雎蔡澤列傳「范雎既相、王稽謂范雎曰、事有不可知者三、有不可奈何者亦三。宮車一日晏駕、是事之不可知者一也。君卒然捐館舍、是事之不可知者二也。使臣卒然填溝壑、是事之不可知者三也。宮車一日晏駕、君雖恨於臣、無可奈何。君卒然捐館舍、君雖恨於臣、亦無可奈何。使臣卒然填溝壑、君雖恨於臣、亦無可奈何。范雎不懌、乃入言於王曰、非王稽之忠、莫能內臣於函谷關。非大王之賢聖、莫能貴臣。今臣官至於相、爵在列侯、王稽之官尚止於謁者、非其內臣之意也。昭王召王稽、拜爲河東守、三歲不上計。又任鄭安平、昭王以爲將軍。范雎於是散家財物、盡以報所嘗困辱者。一飯之德必償、睚眦之怨必報。」・屈原賈生列傳 / 屈原「然終無可奈何、故不可以反、卒以此見懷王之終不悟也。」・酷吏列傳「散卒失亡、復聚黨阻山川者、往往而羣居、無可奈何。」なお『戰國策』燕策三「既已、無可奈何、乃遂收盛樊於期之首、函封之。」を刺客列傳 / 荊軻は「既已不可奈何、乃遂盛樊於期首函封之。」に作る。

[48] 功亦足以暴於天下 仲尼弟子列傳 / 顏淵「回也如愚。退而省其私、亦足以發、回也不愚。」*306

[49] 而未有路 魏公子列傳「如姬之欲爲公子死、無所辭、顧未有路耳。」

[50] 適會召問 魯仲連鄒陽列傳「適會魏公子無忌奪晉鄙軍以救趙、擊秦軍、秦軍遂引而去。」*307・爰盎鼂錯列傳「呂后崩、大臣相與共畔諸呂、太尉主兵、適會其成功、所謂功臣、非社稷臣。」

*306 『論語』爲政「子曰、吾與回言終日、不違如愚。退而省其私、亦足以發。回也、不愚。」

*307 『戰國策』趙策三「適會魏公子無忌奪晉鄙軍以救趙擊秦、秦軍引而去。」

[51] 即以此指推言陵功 「推言」は秦始皇本紀（上掲）に見える。

[52] 欲以廣主上之意 楚世家「將戰、庚寅、昭王卒於軍中。子閭曰、王病甚、舍其子讓羣臣、臣所以許王、以廣王意也。今君王卒、臣豈敢忘君王之意乎。乃與子西・子綦謀、伏師閉塗、迎越女之子章立之、是爲惠王。然後罷兵歸、葬昭王。」*308

[53] 塞睚眦之辭 「睚眦」は范雎蔡澤列傳（上掲）・刺客列傳 / 聶政「夫賢者以感忿睚眦之意而親信窮僻之人、而政獨安得嘿然而已乎。」*309 に見える。

[54] 遂下於理 「理」は廷尉。『漢書』百官公卿表「廷尉、秦官、掌刑辟、有正、左右監、秩皆千石。景帝中六年更名大理、武帝建元四年復爲廷尉。」

[55] 拳拳之忠 『禮記』中庸「子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺而弗失之矣。」

[56] 因爲誣上卒從吏議家貧財賂不足以自贖 『漢書』司馬遷傳「初、上遣貳師大軍出、財令陵爲助兵、及陵與單于相值、而貳師功少。上以遷誣罔、欲沮貳師、爲陵游說、下遷腐刑。」「卒從吏議」は、魯仲連鄒陽列傳

臣聞忠無不報、信不見疑、臣常以爲然、徒虛語耳。昔者荆軻慕燕丹之義、白虹貫日、太子畏之。衛先生爲秦畫長平之事、太白蝕昴、而昭王疑之。夫精變天地而信不喻兩主、豈不哀哉。今臣盡忠竭誠、畢議願知、左右不明、卒從吏訊、爲世所疑、是使荆軻、衛先生復起、而燕、秦不悟也。願大王孰察之。

に似る。

[57] 交遊莫救 「交遊」は上文「以爲宗族交遊光寵」に見える。

[58] 左右親近不爲壹言 魯仲連鄒陽列傳「今欲使天下寥廓之士、攝於威重之權、主於位勢之貴、故回面汙行以事諂諛之人而求親近於左右、則士伏死堀穴巖（巖）〔藪〕之中耳、安肯有盡忠信而趨闕下者哉。」

[59] 身非木石 『呂氏春秋』精通「鍾子期夜聞擊磬者而悲、使人召而問之曰、子何擊磬之悲也。答曰、臣之父不幸而殺人、不得生。臣子母得生、而爲公家爲酒。臣之身得生、而爲公家擊磬。臣不睹臣之母三年矣。昔爲舍氏睹臣之母、量所以贖之則無有、

*308 『左傳』哀六「將戰、王有疾。庚寅、昭王攻大冥、卒于城父。子閭退、曰、君王舍其子而讓、群臣敢忘君乎。從君之命、順也。立君之子、亦順也。二順不可失也。與子西・子期謀、潛師、閉塗、逆越女之子章立之、而後還。」には「以廣王意」相當部分が無い。

*309 『戰國策』韓策二「夫賢者以感忿睚眦之意、而親信窮僻之人、而政獨安可嘿然而止乎。」

而身固公家之財也。是故悲也。鍾子期歎嗟曰、悲夫、悲夫。心非臂也、臂非椎非石也。悲存乎心而木石應之、故君子誠乎此而論乎彼、感乎己而發乎人、豈必彊說乎哉。」

[60] 深幽囹圄之中 李斯列傳「趙高案治李斯。李斯拘執束縛、居囹圄中、仰天而歎曰、嗟乎、悲夫。不道之君、何可爲計哉。昔者桀殺關龍逢、紂殺王子比干、吳王夫差殺伍子胥。此三臣者、豈不忠哉、然而不免於死、身死而所忠者非也。今吾智不及三子、而二世之無道過於桀・紂・夫差、吾以忠死、宜矣。且二世之治豈不亂哉。日者夷其兄弟而自立也、殺忠臣而貴賤人、作爲阿房之宮、賦斂天下。吾非不諫也、而不吾聽也。凡古聖王、飲食有節、車器有數、宮室有度、出令造事、加費而無益於民利者禁、故能長久治安。今行逆於昆弟、不顧其咎。侵殺忠臣、不思其殃。大爲宮室、厚賦天下、不愛其費、三者已行、天下不聽。今反者已有天下之半矣、而心尚未寤也、而以趙高爲佐、吾必見寇至咸陽、麋鹿游於朝也。」

[61] 誰可告愬 「誰可」は『史記』に類見する。『書』堯典「帝曰、疇咨。」を五帝本紀は「堯又曰、誰可者。」に作る。「告愬」は、平津侯主父列傳「於是疆國務攻、弱國備守、合從連橫、馳車擊轂、介胄生蟣蝨、民無所告愬。」・東越列傳「今小國以窮困來告急天子、天子弗振、彼當安所告愬。」に見える。

[62] 此正少卿所親見 劉敬叔孫通列傳「秦以不蚤定扶蘇、令趙高得以詐立胡亥、自使滅祀、此陛下所親見。」

[63] 李陵既生降隕其家聲 李將軍列傳「單于既得陵、素聞其家聲、及戰又壯、乃以其女妻陵而貴之。漢聞、族陵母妻子。自是之後、李氏名敗、而隴西之士居門下者皆用爲恥焉。」

[64] 而僕又茸以蠶室 『漢書』張安世傳「初、安世兄賀幸於衛太子、太子敗、賓客皆誅、安世爲賀上書、得下蠶室。」・西域傳 / 鄯善國「征和元年、樓蘭王死、國人來請質子在漢者、欲立之。質子常坐漢法、下蠶室宮刑、故不遣。」・烏孫國「都還、坐知狂王當誅、見便不發、下蠶室。」・外戚傳 / 孝宣許皇后「孝宣許皇后、元帝母也。父廣漢、昌邑人、少時爲昌邑王郎。從武帝上甘泉、誤取它郎鞍以被其馬、發覺、吏劾從行而盜、當死、有詔募下蠶室。」

[65] 重爲天下觀笑 「爲天下笑」に「重」「觀」を加える。「爲天下笑」は『史記』に類見する。楚世家「太史公曰、楚靈王方會諸侯於申、誅齊慶封、作章華臺、求周九

鼎之時、志小天下。及餓死于申亥之家、爲天下笑。操行之不得、悲夫。」は、「重爲天下觀笑。悲夫。悲夫。」に似る。

[66] 悲夫悲夫 「悲夫」は『史記』に頻見するが、李斯列傳（上掲）・司馬相如列傳*310・酷吏列傳*311を除けば、六國年表*312・楚世家（上掲）・絳侯周勃世家*313・伯夷列傳（上掲）・孫子吳起列傳*314・伍子胥列傳*315・韓信盧綰列傳*316・平津侯主父列傳*317・汲鄭列傳*318の全てが太史公の發言に屬する。司馬遷の常套句である。

事未易一二爲俗人言也。僕之先人非有剖符丹書之功、文史星曆近乎卜祝之間、固主上所戲弄、倡優畜之、流俗之所輕也。假令僕伏法受誅、若九牛亡一毛、與螻蛄何異。而世又不與能死節者比、特以爲智窮罪極、不能自免、卒就死耳。何也。素所自樹立使然。人固有一死、死有重於泰山、或輕於鴻毛、用之所趨異也。太上不辱先、其次不辱身、其次不辱理色、其次不辱辭令、其次詘體受辱、其次易服受辱、其次關木索被箠楚受辱、其次鬻毛髮嬰金鐵受辱、其次毀肌膚斷支體受辱、最下腐刑、極矣。傳曰、「刑不上大夫」、此言士節不可不厲也。猛虎處深山、百獸震恐、及其在穿檻之中、搖尾而求食、積威約之漸也。故士有畫地爲牢勢不入、削木爲吏議不對、定計於鮮也。今交手足、受木索、暴肌膚、受榜箠、幽於圜牆之中、當此之時、見獄吏則頭搶地、視徒隸則心惕息。何者。積威約之勢也。及已至此、言不辱者、所謂彊顏耳、曷足貴乎。且西伯、伯也、拘牖里。

*310 司馬相如列傳 / 難蜀父老文「且夫王事固未有不始於憂勤、而終於佚樂者也。然則受命之符、合在於此矣。觀者未睹指、聽者未聞音、猶鷦明已翔乎寥廓、而羅者猶視乎藪澤。悲夫。」

*311 酷吏列傳「光祿徐自爲曰、悲夫、夫古有三族、而王溫舒罪至同時而五族乎。」

*312 六國年表「太史公讀秦記、…學者牽於所聞、見秦在帝位日淺、不察其終始、因舉而笑之、不敢道、此與以耳食無異。悲夫。」

*313 絳侯周勃世家「太史公曰、…亞夫之用兵、持威重、執堅刃、穰苴曷有加焉。足已而不學、守節不遜、終以窮困。悲夫。」

*314 孫子吳起列傳「太史公曰、…吳起說武侯以形勢不如德、然行之於楚、以刻暴少恩亡其軀。悲夫。」

*315 伍子胥列傳「太史公曰、怨毒之於人甚矣哉。王者尚不能行之於臣下、況同列乎。向令伍子胥從奢俱死、何異螻蛄。嗒小義、雪大恥、名垂於後世、悲夫。」

*316 韓信盧綰列傳「太史公曰、…陳豨、梁人、其少時數稱慕魏公子。及將軍守邊、招致賓客而下士、名聲過實。周昌疑之、疵瑕頗起、懼禍及身、邪人進說、遂陷無道。於戲悲夫。夫計之生孰成敗於人也深矣。」

*317 平津侯主父列傳「太史公曰、…主父偃當路、諸公皆譽之、及名敗身誅、士爭言其惡。悲夫。」

*318 汲鄭列傳「太史公曰、夫以汲・鄭之賢、有勢則賓客十倍、無勢則否、況眾人乎。下邳翟公有言、始翟公爲廷尉、賓客闐門。及廢、門外可設雀羅。翟公復爲廷尉、賓客欲往、翟公乃人署其門曰、一死一生、乃知交情。一貧一富、乃知交態。一貴一賤、交情乃見。汲・鄭亦云、悲夫。」

李斯、相也、具五刑。淮陰、王也、受械於陳。彭越・張敖南鄉稱孤、繫獄具罪。絳侯誅諸呂、權傾五伯、囚於請室。魏其、大將也、衣赭關三木。季布爲朱家鉗奴。灌夫受辱居室。此人皆身至王侯將相、聲聞鄰國、及罪至罔加、不能引決自財。在塵埃之中、古今一體、安在其不辱也。由此言之、勇怯、勢也。彊弱、形也。審矣、曷足怪乎。且人不能蚤自財繩墨之外、已稍陵夷至於鞭箠之間、乃欲引節、斯不亦遠乎。古人所以重施刑於大夫者、殆爲此也。夫人情莫不貪生惡死、念親戚、顧妻子、至激於義理者不然、乃有不得已也。今僕不幸、蚤失二親、無兄弟之親、獨身孤立、少卿視僕於妻子何如哉。且勇者不必死節、怯夫慕義、何處不勉焉。僕雖怯懦欲苟活、亦頗識去就之分矣、何至自湛溺累絀之辱哉。且夫臧獲婢妾猶能引決、況若僕之不得已乎。所以隱忍苟活、函糞土之中而不辭者、恨私心有所不盡、鄙沒世而文采不表於後也。

事未だ一二 俗人の爲に言うに易からざるなり。僕の先人 剖符丹書の功有るに非ず [1]、文史星曆 卜祝の間に近し、固より主上の戲弄する所、倡優もて之を畜い、流俗の輕んずる所なり。假令僕 法に伏し誅を受くるも [2]、九牛の一毛を亡うが若し、螻蛄と何ぞ異ならん [3]。而るに世又た能く節に死する者と比せず [4]、特だ以て智窮まり罪極まり [5]、自ら免ずる能わず [6]、卒に死に就くと爲すのみ。何ぞや。素より自ら樹立する所 然らしむ。人固より一死有り、死 泰山より重き、或いは鴻毛より輕き有り [7]、之を用うるに趨く所異なるなり [8]。太上は先を辱しめず [9]、其の次は身を辱しめず [10]、其の次は理色を辱しめず、其の次は辭令を辱しめず [11]、其の次は體を誦して辱を受け [12]、其の次は服を易えて辱を受け、其の次は木索を關し箠楚を被りて辱を受け、其の次は毛髮を鬚り金鐵を嬰いて辱を受け、其の次は肌膚を毀ち支體を斷ちて辱を受け [13]、最下は腐刑 [14]、極なり。傳に曰く、「刑 大夫に上さず」、此れ士節 厲まさざる可からざるを言うなり [15]。猛虎 深山に處り、百獸震恐す [16]、其の奔檻の中に在るに及び、尾を搖りて食を求め、威約の漸を積むなり。故に士 地を畫して牢と爲すも勢い入らず、木を削りて吏と爲すも議 對えず [17]、計を鮮に定むること有るなり。今 手足を交え、木索を受け、肌膚を暴し、榜箠を受け、圍牆の中に幽せらる、此の時に當たり、獄吏を見れば則ち頭 地に檜り、徒隸を視れば則ち心に惕息す。何となれば、威約の勢を積めばなり。已に此に至るに及び、辱しめられずと言う者、所謂彊顏なるのみ、曷ぞ貴ぶに足らんや [18]。且つ

西伯、伯なり、牖里に拘わる [19]。李斯、相なり、五刑を具^{そな}う [20]。淮陰、王なり、械を陳に受く [21]。彭越・張敖南郷して孤を稱し、獄に繋ぎ罪を具う [22]。絳侯諸呂を誅し、權 五伯を傾くるも、請室に囚わる [23]。魏其、大將なり、赭を衣^き 三木を關す [24]。季布朱家の鉗奴と爲る [25]。灌夫 辱を居室に受く [26]。此の人皆な身 王侯將相に至り、聲 鄰國に聞こえ [27]、罪至り罔加わるに及び、引決自財する能わず [28]。塵埃の中に在るは [29]、古今一體、安んぞ其の辱しめられざるに在らんや。此れに由りて之を言え [30]、勇怯、勢なり。彊弱、形なり [31]。審^{つまびら}らかなり、曷ぞ怪しむに足らんや。且つ人^{つと}蚤に自ら繩墨の外に財する能わず [32]、已に稍や陵夷して鞭箠の間に至り [33]、乃ち節を引かんと欲するも、斯れ亦た遠かざらんや [34]。古人 刑を大夫に施すを重んずる所以の者は [35]、殆ど此れが爲なり。夫れ人情 生を貪り死を惡み [36]、親戚を念い、妻子を顧みざるは莫きも [37]、義理に激する者に至りては然らず、乃ち已むを得ざる有るなり [38]。今僕不幸にして [39]、^{つと}蚤に二親を失い、兄弟の親無く [40]、獨身孤立 [41]、少卿 僕を妻子に視るに何如ぞや [42]。且つ勇者 必ずしも節に死せず、怯夫 義を慕う [43]、何れの處に勉めざらんや。僕 怯栗にして苟しく活くるを欲すと雖も [44]、亦た頗る去就の分を識る。何ぞ自ら累紲の辱に湛溺するに至らんや [45]。且つ夫れ臧獲婢妾猶お能く引決す [46]、況んや僕の已むを得ざるが若きをや。隱忍して苟しく活き [47]、糞土の中に函して辭せざる所以の者は [48]、私かに心に盡くさざる所有るを恨み [49]、世を没して文采後に表れざるを鄙^{いや}しめばなり [50]。

[1] 僕之先人非有剖符丹書之功 『漢書』高帝紀「又與功臣剖符作誓、丹書鐵契、金匱石室、藏之宗廟。雖日不暇給、規摹弘遠矣。」

[2] 假令僕伏法受誅 「伏法」は、田叔列傳「今梁王不伏誅、是漢法不行也。如其伏法、而太后食不甘味、臥不安席、此憂在陛下也。」に、「受誅」は、淮南衡山列傳「上下公卿治、所連引與淮南王謀反列侯二千石豪傑數千人、皆以罪輕重受誅。」に見える。

[3] 與螻螳何異 「螻螳」は伍子胥列傳 / 太史公曰（上掲）に見える。「與…何異」は、鄭世家 / 太史公曰*319 に見える。

*319 鄭世家「太史公曰、語有之、以權利合者、權利盡而交疏、甫瑕是也。甫瑕雖以劫殺鄭子內厲公、厲公終背而殺之、此與晉之里克何異。守節如荀息、身死而不能存奚齊。變所從來、亦多故矣。」

[4] 而世又不與能死節者比 「死節」は下文「且勇者不必死節」にも見え、貨殖列傳(上掲)など『史記』に頻見する。

[5] 特以爲智窮罪極 孫子吳起列傳「龐涓自知智窮兵敗、乃自剄、」

[6] 不能自免 魯仲連鄒陽列傳「昔者司馬喜黷脚於宋、卒相中山。范雎摺脅折齒於魏、卒爲應侯。此二人者、皆信必然之畫、捐朋黨之私、挾孤獨之位、故不能自免於嫉妒之人也。…昔者魯聽季孫之說而逐孔子、宋信子罕之計而囚墨翟。夫以孔、墨之辯、不能自免於讒諛、而二國以危。」

[7] 死有重於泰山或輕於鴻毛 『戰國策』楚策四「是以國權輕於鴻毛、而積禍重於丘山。」

[8] 用之所趨異也 『淮南子』齊俗訓「故所趨各異、而皆得所便。」

[9] 太上不辱先 「太上」「其次」を連ねることは、天官書「太上脩德、其次脩政、其次脩教、其次脩禳、正下無之。」に、「辱先」は上文「行莫醜於辱先」に見える。

[10] 其次不辱身 「辱身」は、孔子世家「不降其志、不辱其身、伯夷・叔齊乎。謂柳下惠・少連降志辱身矣。謂虞仲・夷逸隱居放言、行中清、廢中權。我則異於是、無可無不可。」*320・刺客列傳 / 聶政「聶政曰、臣所以降志辱身居市井屠者、徒幸以養老母。老母在、政身未敢以許人也。」*321・季布欒布列傳「布迺稱曰、窮困不能辱身下志、非人也。富貴不能快意、非賢也。」に見える。

[11] 其次不辱辭令 屈原賈生列傳「屈原者、名平、楚之同姓也。爲楚懷王左徒。博聞彊志、明於治亂、嫻於辭令。」「屈原既死之後、楚有宋玉、唐勒、景差之徒者、皆好辭而以賦見稱。然皆祖屈原之從容辭令、終莫敢直諫。」・刺客列傳 / 曹沫「既已言、曹沫投其匕首、下壇、北面就羣臣之位、顏色不變、辭令如故。」

[12] 其次詘體受辱 「屈體」は、太史公自序「能信意彊秦、而屈體廉子、用徇其君、俱重於諸侯。作廉頗藺相如列傳第二十一」に見える。「受辱」は『史記』に散見し、季布欒布列傳に「太史公曰、以項羽之氣、而季布以勇顯於楚、身履(典)軍塞旗者數矣、

*320 『論語』微子「逸民、伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連。子曰、不降其志、不辱其身、伯夷叔齊與。謂柳下惠・少連、降志辱身矣、言中倫、行中慮、其斯而已矣。謂虞仲・夷逸、隱居放言、身中清、廢中權。我則異於是、無可無不可。」

*321 『戰國策』韓策二「聶政曰、臣所以降志辱身、居市井者、徒幸而養老母。老母在、政身未敢以許人也。」

可謂壯士。然至被刑戮、爲人奴而不死、何其下也。彼必自負其材、故受辱而不羞、欲有所用其未足也、」とある。

[13] 其次毀肌膚斷支體受辱 孝文本紀「夫刑至斷支體、刻肌膚、終身不息、何其楚痛而不德也、豈稱爲民父母之意哉。其除肉刑。」

[14] 最下腐刑 「最下」は貨殖列傳（上掲）および「是故本富爲上、末富次之、姦富最下。無巖處奇土之行、而長貧賤、好語仁義、亦足羞也。」に見える。「腐」は『史記』に初見する。呂不韋列傳「始皇帝益壯、太后淫不止。呂不韋恐覺禍及己、乃私求大陰人嫪毐以爲舍人、時縱倡樂、使毐以其陰關桐輪而行、令太后聞之、以昭太后。太后聞、果欲私得之。呂不韋乃進嫪毐、詐令人以腐罪告之。不韋又陰謂太后曰、可事詐腐、則得給事中。太后乃陰厚賜主腐者吏、詐論之、拔其鬚眉爲宦者、遂得侍太后。」・佞幸列傳「延年坐法腐、給事狗中。」

[15] 傳曰刑不上大夫此言士節不可不厲也 『新書』階級「故古者禮不及庶人、刑不至君子、所以厲寵臣之節也。」「刑不上大夫」は、『禮記』曲禮上「禮不下庶人。刑不上大夫。刑人不在君側。」を引く。「傳曰」は『史記』に散見する。六國年表「傳曰、法後王」は『荀子』儒效^{*322}、禮書「傳曰、威厲而不試、刑措而不用」は『荀子』宥坐および議兵^{*323}、封禪書「傳曰、三年不爲禮、禮必廢。三年不爲樂、樂必壞。」は『論語』陽貨^{*324}、李將

*322 『荀子』儒效「故有俗人者、有俗儒者、有雅儒者、有大儒者。不學問、無正義、以富利爲隆、是俗人者也。逢衣淺帶、解果其冠、略法先王而足亂世術、繆學雜舉、不知法後王而一制度、不知隆禮義而殺詩書。其衣冠行僞已同於世俗矣、然而不知惡。其言談說已無以異於墨子矣、然而明不能別。呼先王以欺愚者而求衣食焉、得委積足以揜其口、則揚揚如也。隨其長子、事其便辟、舉其上客、億然若終身之虜而不敢有他志——是俗儒者也。法後王、一制度、隆禮義而殺詩書。其言行已有大法矣、然而明不能齊法教之所不及、聞見之所未至、則知不能類也。知之曰知之、不知曰不知、內不自以誣、外不自以欺、以是尊賢畏法而不敢怠傲——是雅儒者也。」

*323 『荀子』宥坐「故先王既陳之以道、上先服之。若不可、尚賢以綦之。若不可、廢不能以單之。綦三年而百姓從風矣。邪民不從、然後俟之以刑、則民知罪矣。詩曰、尹氏大師、維周之氏、秉國之均、四方是維、天子是庠、卑民不迷。是以威厲而不試、刑措而不用、此之謂也。」・議兵「古之兵、戈矛弓矢而已矣、然而敵國不待試而誦。城郭不辨、溝池不扞、固塞不樹、機變不張、然而國晏然不畏外而固者、無它故焉、明道而鈞分之、時使而誠愛之、下之和上也如影響、有不由令者、然後俟之以刑。故刑一人而天下服、罪人不郵其上、知罪之在己也。是故刑罰省而威流、無它故焉、由其道故也。古者帝堯之治天下也、蓋殺一人、刑二人、而天下治。傳曰、威厲而不試、刑措而不用。此之謂也。」ともに「威厲而不試、刑措而不用」の後に「此之謂也」とあり、さらに議兵では前に「傳曰」がある。『荀子』が先行する「傳」を引用したものである。

*324 『論語』陽貨「宰我問、三年之喪、期已久矣。君子三年不爲禮、禮必壞。三年不爲樂、樂

軍列傳「傳曰、其身正、不令而行。其身不正、雖令不從」は『論語』子路*325の引用であり、樂書「傳曰、治定功成、禮樂乃興」についても『禮記』樂記*326に類似の一節が見える。

[16] 猛虎處深山百獸震恐 「猛虎」は張儀列傳*327・淮陰侯列傳*328に見え、「虎」「百獸」を連ねることは、『戰國策』楚策一*329に見える。

[17] 故土有畫地爲牢勢不入削木爲吏議不對 『漢書』路溫舒傳「故俗語曰、畫地爲獄、議不入。刻木爲吏、期不對。此皆疾吏之風、悲痛之辭也。」

[18] 曷足貴乎 下文に「曷足怪乎」とある。平準書「古者嘗竭天下之資財以奉其上、猶自以爲不足也。無異故云、事勢之流、相激使然、曷足怪焉。」・游俠列傳「至若北道姚氏・西道諸杜・南道仇景・東道趙他・羽公子・南陽趙調之徒、此盜跖居民間者耳、曷足道哉。」

[19] 且西伯伯也拘牖里 文王が西伯に任ぜられたことは、殷本紀*330に見える。「拘牖里」は、魯仲連鄒陽列傳「魯仲連曰、固也、吾將言之。昔者九侯・鄂侯・文王、紂之三公也。九侯有子而好、獻之於紂、紂以爲惡、醢九侯。鄂侯爭之疆、辯之疾、故脯鄂侯。文王聞之、喟然而歎、故拘之牖里之庫百日、欲令之死。曷爲與人俱稱王、卒就脯醢之地。」*331に據る。

必崩。」

*325 『論語』子路「子曰、其身正、不令而行。其身不正、雖令不從。」

*326 『禮記』樂記「王者功成作樂。治定制禮。其功大者其樂備。其治辯者其禮具。」

*327 張儀列傳「且夫爲從者、無以異於驅羣羊而攻猛虎、虎之與羊不格明矣。今王不與 猛虎而與羣羊、臣竊以爲大王之計過也。」『戰國策』楚策一に據る。

*328 淮陰侯列傳「故曰、猛虎之猶豫、不若蜂蠆之致螫。騏驥之踟躕、不如駑馬之安步。孟賁之狐疑、不如庸夫之必至也。雖有舜禹之智、吟而不言、不如瘖聵之指麾也。」

*329 『戰國策』楚策一「虎求百獸而食之、得狐。狐曰、子無敢食我也。天帝使我長百獸、今子食我、是逆天帝命也。子以我爲不信、吾爲子先行、子隨我後、觀百獸之見我而敢不走乎。虎以爲然、故遂與之行。獸見之皆走。虎不知獸畏己而走也、以爲畏狐也。」

*330 殷本紀「百姓怨望而諸侯有畔者、於是紂乃重刑辟、有炮格之法。以西伯昌・九侯・鄂侯爲三公。九侯有好女、入之紂。九侯女不憚淫、紂怒、殺之、而醢九侯。鄂侯爭之疆、辨之疾、并脯鄂侯。西伯昌聞之、竊嘆。崇侯虎知之、以告紂、紂囚西伯羸里。西伯之臣閔夭之徒、求美女奇物善馬以獻紂、紂乃赦西伯。西伯出而獻洛西之地、以請除炮格之刑。紂乃許之、賜弓矢斧鉞、使得征伐、爲西伯。」

*331 『戰國策』趙策三「魯仲連曰、固也、待吾言之。昔者、鬼侯・鄂侯・文王、紂之三公也。鬼侯有子而好、故入之於紂、紂以爲惡、醢鬼侯。鄂侯爭之急、辨之疾、故脯鄂侯。文王聞之、

[20] 李斯相也具五刑 李斯列傳「秦王乃除逐客之令、復李斯官、卒用其計謀。官至廷尉。二十餘年、竟并天下、尊主爲皇帝、以斯爲丞相。…二世二年七月、具斯五刑、論腰斬咸陽市。」

[21] 淮陰王也受械於陳 淮陰侯列傳「漢四年、…乃遣張良往立信爲齊王、…漢五年正月、徙齊王信爲楚王、都下邳。…漢六年、人有上書告楚王信反。高帝以陳平計、天子巡狩會諸侯、南方有雲夢、發使告諸侯會陳、吾將游雲夢。實欲襲信、信弗知。高祖且至楚、信欲發兵反、自度無罪、欲謁上、恐見禽。人或說信曰、斬昧謁上、上必喜、無患。信見昧計事。昧曰、漢所以不擊取楚、以昧在公所。若欲捕我以自媚於漢、吾今日死、公亦隨手亡矣。乃罵信曰、公非長者。卒自剄。信持其首、謁高祖於陳。上令武士縛信、載後車。信曰、果若人言、狡兔死、良狗亨。高鳥盡、良弓藏。敵國破、謀臣亡。天下已定、我固當亨。上曰、人告公反。遂械繫信。至雒陽、赦信罪、以爲淮陰侯。…」

[22] 彭越張敖南鄉稱孤繫獄具罪 魏豹彭越列傳「(五年)項籍已死。春、立彭越爲梁王、都定陶。…十年秋、陳豨反代地、高帝自往擊、至邯鄲、徵兵梁王。梁王稱病、使將將兵詣邯鄲。高帝怒、使人讓梁王。梁王恐、欲自往謝。其將扈輒曰、王始不往、見讓而往、往則爲禽矣。不如遂發兵反。梁王不聽、稱病。梁王怒其太僕、欲斬之。太僕亡走漢、告梁王與扈輒謀反。於是上使使掩梁王、梁王不覺、捕梁王、囚之雒陽。有司治反形已具、請論如法。上赦以爲庶人、傳處蜀青衣。西至鄭、逢呂后從長安來、欲之雒陽、道見彭王。彭王爲呂后泣涕、自言無罪、願處故昌邑。呂后許諾、與俱東至雒陽。呂后自上曰、彭王壯士、今徙之蜀、此自遺患、不如遂誅之。妾謹與俱來。於是呂后乃令其舍人告彭越復謀反。廷尉王恬開奏請族之。上乃可、遂夷越宗族、國除。」·張耳陳餘列傳「漢五年、張耳薨、諡爲景王。子敖嗣立爲趙王。…漢九年、貫高怨家知其謀、乃上變告之。於是上皆并逮捕趙王、貫高等。…上乃赦趙王。…張敖已出、以尚魯元公主故、封爲宣平侯。」なお「南面稱孤」は『史記』に頻見する。魏豹彭越列傳「太史公曰、魏豹·彭越雖故賤、然已席卷千里、南面稱孤、喋血乘勝日有聞矣。懷畔逆之意、及敗、不死而虜囚、身被刑戮、何哉。中材已上且羞其行、況王者乎。彼無異故、智略絕人、獨患無身耳。得攝尺寸之柄、其雲蒸龍變、欲有所會其度、以故幽囚而不辭云。」

[23] 絳侯誅諸呂權傾五伯囚於請室 絳侯周勃世家「呂祿以趙王爲漢上將軍、呂產以

喟然而歎、故拘之於牖里之車、百日而欲舍之死。曷爲與人俱稱帝王、卒就脯醢之地也。」

呂王爲漢相國、秉漢權、欲危劉氏。勃爲太尉、不得入軍門。陳平爲丞相、不得任事。於是勃與平謀、卒誅諸呂而立孝文皇帝。」·袁盎晁錯列傳「及絳侯免相之國、國人上書告以爲反、徵繫清室^{*332}、宗室諸公莫敢爲言、唯袁盎明絳侯無罪。絳侯得釋、盎頗有力。絳侯乃大與盎結交。」

[24] 魏其大將也衣赭關三木 魏其武安侯列傳「孝景三年、吳楚反、…乃拜嬰爲大將軍、賜金千斤。…於是上使御史簿責魏其所言灌夫、頗不讎、欺謾。劾繫都司空。孝景時、魏其常受遺詔、曰、事有不便、以便宜論上。及繫、灌夫罪至族、事日急、諸公莫敢復明言於上。魏其乃使昆弟子上書言之、幸得復召見。書奏上、而案尚書大行無遺詔。詔書獨藏魏其家、家丞封。乃劾魏其矯先帝詔、罪當弃市。五年十月、悉論灌夫及家屬。魏其良久乃聞、聞即悲、病痲、不食欲死。或聞上無意殺魏其、魏其復食、治病、議定不死矣。乃有蜚語爲惡言聞上、故以十二月晦論弃市渭城。」

[25] 季布爲朱家鉗奴 季父爰布列傳「季布者、楚人也。爲氣任俠、有名於楚。項籍使將兵、數窘漢王。及項羽滅、高祖購求布千金、敢有舍匿、罪及三族。季布匿濮陽周氏。周氏曰、漢購將軍急、迹且至臣家、將軍能聽臣、臣敢獻計。即不能、願先自剄。季布許之。迺髡鉗季布、衣褐衣、置廣柳車中、并與其家僮數十人、之魯朱家所賣之。」

[26] 灌夫受辱居室 魏其武安侯列傳「夏、丞相取燕王女爲夫人、有太后詔、召列侯宗室皆往賀。魏其侯過灌夫、欲與俱。夫謝曰、夫數以酒失得過丞相、丞相今者又與夫有郟。魏其曰、事已解。彊與俱。飲酒酣、武安起爲壽、坐皆避席伏。已魏其侯爲壽、獨故人避席耳、餘半膝席。灌夫不悅。起行酒、至武安、武安膝席曰、不能滿觴。夫怒、因嘻笑曰、將軍貴人也、屬之。時武安不肯。行酒次至臨汝侯、臨汝侯方與程不識耳語、又不避席。夫無所發怒、乃罵臨汝侯曰、生平毀程不識不直一錢、今日長者爲壽、乃效女兒咕囁耳語。武安謂灌夫曰、程李俱東西宮衛尉、今衆辱程將軍、仲孺獨不爲李將軍地乎。灌夫曰、今日斬頭陷匈、何知程李乎。坐乃起更衣、稍稍去。魏其侯去、麾灌夫出。武安遂怒曰、此吾驕灌夫罪。乃令騎留灌夫。灌夫欲出不得。籍福起爲謝、案灌夫項令謝。夫愈怒、不肯謝。武安乃麾騎縛夫置傳舍、召長史曰、今日召宗室、有詔。劾灌夫罵坐不敬、繫居室。遂按其前事、遣吏分曹逐捕諸灌氏支屬、皆得弃市罪。」

*332 『史記集解』絳侯周勃世家「漢書作請室。應劭曰、請室、請罪之室、若今鍾下也。如淳曰、請室、獄也、若古刑於甸師氏也。」

[27] 此人皆身至王侯將相聲聞鄰國 陳涉世家「王侯將相寧有種乎。…陳勝 雖已死、其所置遣侯王將相竟亡秦、由涉首事也。高祖時爲陳涉置守冢三十家碭、至今血食。』『漢書』陳勝傳は「侯王將相寧有種乎」に作り、「王侯將相」は『史記』固有の表現となる。

[28] 不能引決自財 「引決」は、『漢書』萬石衛直周張傳「或勸慶宜引決」に初見する。「自財」は、『新書』階級（上掲）の下文「其有大罪者、聞命則北面再拜、跪而自裁、上不使人捽抑而刑也。」に「自裁」が見え、呂太后本紀「七年正月、太后召趙王友。友以諸呂女爲后、弗愛、愛他姬、諸呂女妒、怒去、讒之於太后、誣以罪過、曰、呂氏安得王。太后百歲後、吾必擊之。太后怒、以故召趙王。趙王至、置邸不見、令衛圍守之、弗與食。其羣臣或竊饋、輒捕論之、趙王餓、乃歌曰、諸呂用事兮劉氏危、迫脅王侯兮彊授我妃。我妃既妒兮誣我以惡、讒女亂國兮上曾不寤。我無忠臣兮何故弃國。自決中野兮蒼天舉直。于嗟不可悔兮寧蚤自財。爲王而餓死兮誰者憐之。呂氏絕理兮託天報仇。丁丑、趙王幽死、以民禮葬之長安民冢次。」に「自財」が見える。

[29] 在塵埃之中 屈原賈生列傳「屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷。離騷者、猶離憂也。夫天者、人之始也。父母者、人之本也。人窮則反本、故勞苦倦極、未嘗不呼天也。疾痛慘怛、未嘗不呼父母也。屈平正道直行、竭忠盡智以事其君、讒人間之、可謂窮矣。信而見疑、忠而被謗、能無怨乎。屈平之作離騷、蓋自怨生也。國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂。若離騷者、可謂兼之矣。上稱帝嚳、下道齊桓、中述湯武、以刺世事。明道德之廣崇、治亂之條貫、靡不畢見。其文約、其辭微、其志潔、其行廉、其稱文小而其指極大、舉類邇而見義遠。其志潔、故其稱物芳。其行廉、故死而不容自疏。濯淖汙泥之中、蟬蛻於濁穢、以浮游塵埃之外、不獲世之滋垢、皜然泥而不滓者也。推此志也、雖與日月爭光可也。」

[30] 由此言之 日者列傳「自伏羲作八卦、周文王演三百八十四爻而天下治。越王句踐放文王八卦以破敵國、霸天下。由是言之、卜筮有何負哉。」

[31] 勇怯勢也彊弱形也 『孫子』兵勢「治亂、數也。勇怯、勢也。強弱、形也。

[32] 且人不能蚤自財繩墨之外 「蚤自財」は呂太后本紀（上掲）に、「繩墨之外」は酷吏列傳「太史公曰、…自張湯死後、網密、多詆嚴、官事寢以耗廢。九卿碌碌奉其官、救過不贖、何暇論繩墨之外乎。」に見える。

[33] 已稍陵夷至於鞭箠之間 高祖功臣侯者年表「太史公曰、…始未嘗不欲固其根本、

而枝葉稍陵夷衰微也。」

[34] 斯不亦遠乎 『論語』堯曰「子張問於孔子曰、何如斯可以從政矣。子曰、尊五美、屏四惡、斯可以從政矣。子張曰、何謂五美。子曰、君子惠而不費、勞而不怨、欲而不貪、泰而不驕、威而不猛。子張曰、何謂惠而不費。子曰、因民之所利而利之、斯不亦惠而不費乎。擇可勞而勞之、又誰怨。欲仁而得仁、又焉貪。君子無眾寡、無小大、無敢慢、斯不亦泰而不驕乎。君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之、斯不亦威而不猛乎。子張曰、何謂四惡。子曰、不教而殺謂之虐。不戒視成謂之暴。慢令致期謂之賊。猶之與人也、出納之吝。謂之有司。」

[35] 古人所以重施刑於大夫者 商君列傳「太子、君嗣也、不可施刑、刑其傅公子虔、黥其師公孫賈。」

[36] 夫人情莫不貪生惡死 『呂氏春秋』論威「人情欲生而惡死、欲榮而惡辱。」・孝文本紀「當今之時、世咸嘉生而惡死、厚葬以破業、重服以傷生、吾甚不取。」

[37] 顧妻子 酷吏列傳「已倍親而仕、身固當奉職死節官下、終不顧妻子矣。」

[38] 乃有不得已也 下文に「況若僕之不得已乎。」が見える。

[39] 今僕不幸 仲尼弟子列傳「越王大恐、曰、孤不幸、少失先人、」・『漢書』淮南衡山濟北王傳「臣不幸早失先帝、少孤、呂氏之世、未嘗忘死。」

[40] 兄弟之親 匈奴列傳*333 に三見する。

[41] 獨身孤立 「獨身」は『史記』に類見する。「孤立」は、秦始皇本紀「太史公曰、…善哉乎賈生推言之也。曰、…子嬰孤立無親、危弱無輔*334。」に見える。

[42] 少卿視僕於妻子何如哉 伯夷列傳「或曰、天道無親、常與善人。若伯夷・叔齊、可謂善人者非邪。積仁絜行如此而餓死。且七十子之徒、仲尼獨薦顏淵爲好學。然回也屢空、糟糠不厭、而卒蚤夭。天之報施善人、其何如哉。盜蹠日殺不辜、肝人之肉、暴

*333 匈奴列傳「其明年、單于遣漢書曰、天所立匈奴大單于敬問皇帝無恙。前時皇帝言和親事、稱書意、合歡。漢邊吏侵侮右賢王、右賢王不請、聽後義盧侯難氏等計、與漢吏相距、絕二主之約、離兄弟之親。…」 「孝文皇帝前六年、漢遣匈奴書曰、皇帝敬問匈奴大單于無恙。使郎中係雩淺遣朕書曰、右賢王不請、聽後義盧侯難氏等計、絕二主之約、離兄弟之親、漢以故不和、鄰國不附。今以小吏敗約、故罰右賢王使西擊月氏、盡定之。願寢兵休士卒養馬、除前事、復故約、以安邊民、使少者得成其長、老者安其處、世世平樂。朕甚嘉之、此古聖主之意也。漢與匈奴約爲兄弟、所以遺單于甚厚。倍約離兄弟之親者、常在匈奴。…」

*334 『新書』過秦中「子嬰孤立無親、危弱無輔。」

戾恣睢、聚黨數千人橫行天下、竟以壽終。是遵何德哉。此其尤大彰明較著者也。若至近世、操行不軌、專犯忌諱、而終身逸樂、富厚累世不絕。或擇地而蹈之、時然後出言、行不由徑、非公正不發憤、而遇禍災者、不可勝數也。余甚惑焉、儻所謂天道、是邪非邪。」

[43] 怯夫慕義 「怯夫」は張儀列傳「夫秦卒與山東之卒、猶孟賁之與怯夫。以重力相壓、猶烏獲之與嬰兒。」^{*335}に、「慕義」は『新書』數寧「因德窮至遠、近者匈奴、遠者四荒、苟人跡之所能及、皆鄉風慕義、樂爲臣子耳。」に見える。

[44] 僕雖怯戾欲苟活 廉頗藺相如列傳「太史公曰、知死必勇、非死者難也、處死者難。方藺相如引璧睨柱、及叱秦王左右、勢不過誅、然士或怯懦而不敢發。相如一奮其氣、威信敵國、退而讓頗、名重太山、其處智勇、可謂兼之矣。」

[45] 何至自湛溺累繼之辱哉 「何至自」は留侯世家「會高帝崩、呂后德留侯、乃彊食之、曰、人生一世間、如白駒過隙、何至自苦如此乎。留侯不得已、彊聽而食。」・司馬相如列傳「文君久之不樂、曰、長卿第俱如臨邛、從昆弟假貸猶足爲生、何至自苦如此。」に見える。「累繼」につき、仲尼弟子列傳「孔子曰、長可妻也、雖在累繼之中、非其罪也。以其子妻之。」は『論語』公冶長「子謂公冶長、可妻也。雖在縲紲之中、非其罪也。以其子妻之。」の「縲紲」を「累繼」に作る。

[46] 且夫臧獲婢妾猶能引決 「臧獲」は魯仲連鄒陽列傳「且吾聞之、規小節者不能成榮名、惡小恥者不能立大功。昔者管夷吾射桓公中其鉤、篡也。遺公子糾不能死、怯也。束縛桎梏、辱也。若此三行者、世主不臣而鄉里不通。鄉使管子幽囚而不出、身死而不反於齊、則亦名不免爲辱人賤行矣。臧獲且羞與之同名矣、況世俗乎。故管子不恥身在縲紲之中而恥天下之不治、不恥不死公子糾而恥威之不信於諸侯、故兼三行之過而爲五霸首、名高天下而光燭鄰國。曹子爲魯將、三戰三北、而亡地五百里。鄉使曹子計不反顧、議不還踵、勿頸而死、則亦名不免爲敗軍禽將矣。曹子棄三北之恥、而退與魯君計。桓公朝天下、會諸侯、曹子以一劍之任、枝桓公之心於壇坫之上、顏色不變、辭氣不悖、三戰之所亡一朝而復之、天下震動、諸侯驚駭、威加吳、越。若此二士者、非不能成小廉而行小節也、以爲殺身亡軀、絕世滅後、功名不立、非智也。故去忿忿之怨、立終身之名。棄忿恚之節、定累世之功。是以業與三王爭流、而名與天壤相契也。願公擇一而

*335 『戰國策』韓策一「夫秦卒之與山東之卒也、猶孟賁之與怯夫也。以重力相壓、猶烏獲之與嬰兒也。」

行之。」に、「婢妾」は季布欒布列傳「太史公曰、以項羽之氣、而季布以勇顯於楚、身屢（典）軍擐旗者數矣、可謂壯士。然至被刑戮、爲人奴而不死、何其下也。彼必自負其材、故受辱而不羞、欲有所用其未足也、故終爲漢名將。賢者誠重其死。夫婢妾賤人感慨而自殺者、非能勇也、其計畫無復之耳。欒布哭彭越、趣湯如歸者、彼誠知所處、不自重其死。雖往古烈士、何以加哉。」に見える。

[47] 所以隱忍苟活 伍子胥列傳「太史公曰、怨毒之於人甚矣哉。王者尚不能行之於臣下、況同列乎。向令伍子胥從奢俱死、何異螻蟻。弃小義、雪大恥、名垂於後世、悲夫。方子胥窘於江上、道乞食、志豈嘗須臾忘郢邪。故隱忍就功名、非烈丈夫孰能致此哉。白公如不自立爲君者、其功謀亦不可勝道者哉。」

[48] 函糞土之中而不辭者 「糞土」は仲尼弟子列傳「宰予晝寢。子曰、朽木不可雕也、糞土之牆不可圻也。」*336に、「不辭」は魏豹彭越列傳（上掲）に見える。

[49] 恨私心有所不盡 高祖功臣侯者年表「居今之世、志古之道、所以自鏡也、未必盡同。帝王者各殊禮而異務、要以成功爲統紀、豈可緝乎。觀所以得尊寵及所以廢辱、亦當世得失之林也、何必舊聞。於是謹其終始、表其文、頗有所不盡本末。著其明、疑者闕之。後有君子、欲推而列之、得以覽焉。」

[50] 鄙沒世而文采不表於後也 「沒世」は『論語』衛靈公「子曰、君子疾沒世而名不稱焉。」に據り、孔子世家「子曰、弗乎弗乎、君子病沒世而名不稱焉。吾道不行矣、吾何以自見於後世哉。乃因史記作春秋、上至隱公、下訖哀公十四年、十二公。據魯、親周、故殷、運之三代。約其文辭而指博。故吳楚之君自稱王、而春秋貶之曰子。踐土之會實召周天子、而春秋諱之曰、天王狩於河陽、推此類以繩當世。貶損之義、後有王者舉而開之。春秋之義行、則天下亂臣賊子懼焉。」・伯夷列傳「君子疾沒世而名不稱焉。賈子曰、貪夫徇財、烈士徇名、夸者死權、眾庶馮生。同明相照、同類相求。雲從龍、風從虎、聖人作而萬物睹。伯夷・叔齊雖賢、得夫子而名益彰。顏淵雖篤學、附驥尾而行益顯。巖穴之士、趣舍有時若此、類名堙滅而不稱、悲夫。閭巷之人、欲砥行立名者、非附青雲之士、惡能施於後世哉。」はこれを引用する。「文采」は『春秋繁露』玉杯「春秋論十二世之事、人道浹而王道備、法布二百四十二年之中、相爲左右、以成文采、其居參錯、非襲古也。」に見える。

*336 『論語』公冶長「宰予晝寢。子曰、朽木不可雕也、糞土之牆不可圻也、於予與何誅。」

古者富貴而名摩滅、不可勝記、唯俶儻非常之人稱焉。蓋西伯拘而演周易。仲尼^に辱^を而作春秋。屈原放逐、乃賦離騷。左丘失明、厥有國語。孫子^の黜^を脚、兵法修列。不韋遷蜀、世傳呂覽。韓非囚秦、說難・孤憤。詩三百篇、大氏賢聖發憤之所爲作也。此人皆意有所鬱結、不得通其道、故述往事、思來者。及如左丘明無目、孫子斷足、終不可用、退論書策以舒其憤、思垂空文以自見。僕竊不遜、近自託於無能之辭、網羅天下放失舊聞、考之行事、稽其成敗興壞之理、凡百三十篇、亦欲以究天人之際、通古今之變、成一家之言。草創未就、適會此禍、惜其不成、是以就極刑而無愠色。僕誠已著此書、藏之名山、傳之其人通邑大都、則僕償前辱之責、雖萬被戮、豈有悔哉。然此可爲智者道、難爲俗人言也。

^{いにしえ}古者富貴にして名の摩滅するは [1]、勝げて記す可からず、唯だ俶儻非常の人のみ稱せらる [2]。蓋し西伯拘われて周易を演ず [3]。仲尼^{くろし}辱みて春秋を作る。屈原放逐せられ、乃ち離騷を賦す。左丘明を失い、厥れ國語有り。孫子脚を黜せられ、兵法修列す。不韋蜀に遷り、世呂覽を傳う。韓非秦に囚われ、說難・孤憤あり。詩三百篇、大氏賢聖發憤の爲作する所なり。此の人皆意に鬱結し、其の道を通ずるを得ざる所有り、故に往事を述べ、來者を思う。左丘明目無く [4]、孫子足を斷つが如きに及びては [5]、終に用う可からず [6]、退きて書策を論じ [7] 以て其の憤を舒べ [8]、空文を垂れて以て自ら^{あら}見わすを思う [9]。僕竊かに不遜、近ごろ自ら無能の辭に託し [10]、天下の放失せる舊聞を網羅し、之が行事を考え、其の成敗興壞の理を稽^{かんが}え、凡そ百三十篇、亦た以て天人の際を究め、古今の變を通じ、一家の言を成さんと欲す [11]。草創して未だ就らず [12]、適ま此の禍に會い、其の成らざるを惜しみ、是を以て極刑に就きて愠色無し [13]。僕誠に已に此の書を著し、之を名山に藏し [14]、之を其の人に通邑大都に傳うれば [15]、則ち僕前辱の責を償い、萬たび戮せらると雖も [16]、豈に悔いること有らんや [17]。然るに此れ智者の爲に^い道^う可きも、俗人の爲に言い難きなり。

[1] 古者富貴而名摩滅 「富貴」「名」を連ねることは、『淮南子』人間訓「非其事者勿勿也、非其名者勿就也、無故有顯名者勿處也、無功而富貴者勿居也。」に見える。

[2] 不可勝記唯俶儻非常之人稱焉 「俶儻」は太史公自序「扶義俶儻、不令己失時、立功名於天下、作七十列傳。」にも見える。「不可勝記」「俶儻」を連ねることは、司馬

相如列傳 / 子虛賦「若乃倏儻瑰偉、異方殊類、珍怪鳥獸、萬端鱗萃、充仞其中者、不可勝記、禹不能名、契不能計。」に見える。「非常之人」は、司馬相如列傳 / 難蜀父老文「蓋世必有非常之人、然後有非常之事。有非常之事、然後有非常之功。非常者、固常〔人〕之所異也。故曰非常之原、黎民懼焉。及臻厥成、天下晏如也。」に見える。

[3] 蓋西伯拘而演周易 以下、「思來者」までは太史公自序に重複する。

『史記』太史公自序	『漢書』司馬遷傳
昔西伯拘羑里演周易。孔子厄陳蔡、作春秋。屈原放逐、著離騷。左丘失明、厥有國語。孫子贗脚、而論兵法。不韋遷蜀、世傳呂覽。韓非囚秦、說難、孤憤。詩三百篇、大抵賢聖發憤之所爲作也。此人皆意有所鬱結、不得通其道也、故述往事、思來者。	蓋西伯拘而演周易。仲尼厄而作春秋。屈原放逐、乃賦離騷。左丘失明、厥有國語。孫子贗脚、兵法修列。不韋遷蜀、世傳呂覽。韓非囚秦、說難、孤憤。詩三百篇、大抵賢聖發憤之所爲作也。此人皆意有所鬱結、不得通其道、故述往事、思來者。

[4] 及如左丘明無目 「及如」は十二諸侯年表「及如荀卿・孟子・公孫固・韓非之徒、各往往摺摭春秋之文以著書、不可勝紀。」に、「無目」は『淮南子』説林訓「瞽無目、而耳不可以察、精于聽也。」に見える。

[5] 孫子斷足 『左傳』文十八「齊懿公之爲公子也、與邴歆之父爭田、弗勝。及即位、乃掘而刖之、而使歆僕。納閭職之妻、而使職驂乘。夏五月、公游于申池。二人浴于池、歆以扑扶職。職怒。歆曰、人奪女妻而不怒、一扶女、庸何傷。職曰、與刖其父而弗能病者何如。乃謀弑懿公、納諸竹中。歸、舍爵而行。齊人立公子元。」の「刖」を齊世家「懿公四年春、初、懿公爲公子時、與丙戎之父獵、爭獲不勝、及即位、斷丙戎父足、而使丙戎僕。庸職之妻好、公內之宮、使庸職驂乘。五月、懿公游於申池、二人浴、戲。職曰、斷足子。戎曰、奪妻者。二人俱病此言、乃怨。謀與公游竹中、二人弑懿公車上、弃竹中而亡去。」は「斷足」に作る。

[6] 終不可用 『易』剝「上九。碩果不食。君子得輿。小人剝廬。象曰。君子得輿。民所載也。小人剝廬。終不可用也。」・豐「九三。豐其沛。日中見沫。折其右肱。无咎。象曰。豐其沛。不可大事也。折其右肱。終不可用也。」・太史公自序「身毀不用矣。」

[7] 退論書策 封禪書「太史公曰、余從巡祭天地諸神名山川而封禪焉。入壽宮侍祠神語、究觀方士祠官之意、於是退而論次自古以來用事於鬼神者、具見其表裏。後有君子、

得以覽焉。若至俎豆珪幣之詳、獻酬之禮、則有司存。」

[8] 以舒其憤思 上文「是僕終已不得舒憤懣以曉左右。」

[9] 垂空文以自見 「垂空文」は、太史公自序「孔子之時、上無明君、下不得任用、故作春秋、垂空文以斷禮義、當一王之法。」に、「自見」は孔子世家（上掲）・平原君虞卿列傳「太史公曰、…然虞卿非窮愁、亦不能著書以自見於後世云。」に見える。

[10] 僕竊不遜近自託於無能之辭 魯仲連鄒陽列傳「太史公曰、…鄒陽辭雖不遜、然其比物連類、有足悲者、亦可謂抗直不撓矣、吾是以附之列傳焉。」

[11] 網羅天下放失舊聞考之行事稽其成敗興壞之理凡百三十篇亦欲以究天人之際通古今之變成一家之言 太史公自序「罔羅天下放失舊聞、王迹所興、原始察終、見盛觀衰、論考之行事、略推三代、錄秦漢、上記軒轅、下至于茲、著十二本紀、既科條之矣。…禮樂損益、律曆改易、兵權山川鬼神、天人之際、承敝通變、作八書。…凡百三十篇、五十二萬六千五百字、爲太史公書。序略、以拾遺補蕪、成一家之言、厥協六經異傳、整齊百家雜語、藏之名山、副在京師、俟後世聖人君子。第七十。」「稽其」は、三代世表「稽其曆譜課終始五德之傳、古文咸不同、乖異。」に、「興壞」は、六國年表「余於是因秦記、踵春秋之後、起周元王、表六國時事、訖二世、凡二百七十年、著諸所聞興壞之端。後有君子、以覽觀焉。」・孟子荀卿列傳「荀卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道而營於巫祝、信禱祥、鄙儒小拘、如莊周等又猾稽亂俗、於是推儒・墨・道德之行事興壞、序列著數萬言而卒。因葬蘭陵。」に、「天人之際」は、天官書「夫天運、三十歲一小變、百年中變、五百載大變。三大變一紀、三紀而大備、此其大數也。爲國者必貴三五。上下各千歲、然后天人之際續備。」・司馬相如傳 / 封禪文「披藝觀之、天人之際已交、上下相發允答。」に、「古今之變」は、太史公自序「維三代之禮、所損益各殊務、然要以近性情、通王道、故禮因人質爲之節文、略協古今之變。作禮書第一。」に見える。

[12] 草創未就任 『論語』憲問「子曰、爲命、裨諶草創之、世叔討論之、行人子羽脩飾之、。東里子產潤色之。」

[13] 是以就極刑而無愠色 「極刑」は、魯仲連鄒陽列傳「昔卞和獻寶、楚王刖之。李斯竭忠、胡亥極刑。」・酷吏列傳「是時九卿罪死即死、少被刑、而成極刑、自以爲不復收、於是解脫、詐刻傳出關歸家。」に、「無愠色」は『論語』公冶長「子張問曰、令

尹子文三仕爲令尹、無喜色。三已之、無愠色。舊令尹之政、必以告新令尹。何如。子曰、忠矣。曰、仁矣乎。曰、未知。焉得仁。」に見える。

[14] 藏之名山 太史公自序「凡百三十篇、五十二萬六千五百字、爲太史公書序略、以拾遺補遺、成一家之言、厥協六經異傳、整齊百家雜語、藏之名山、副在京師、俟後世聖人君子。」

[15] 傳之其人通邑大都 「通邑大都」は、貨殖列傳^{*337}に見える。

[16] 雖萬被戮 酷吏列傳「孝景時、鼂錯以刻深頗用術輔其資、而七國之亂、發怒於錯、錯卒以被戮。」

[17] 豈有悔哉 「有悔」は『易』に類見する。『易』乾「上九。亢龍有悔。」

且負下未易居、下流多謗議。僕以口語遇遭此禍、重爲鄉黨戮笑、汙辱先人、亦何面目復上父母之丘墓乎。雖累百世、垢彌甚耳。是以腸一日而九回、居則忽忽若有所亡、出則不知所如往。每念斯恥、汗未嘗不發背霑衣也。身直爲閹閤之臣、寧得自引深臧於巖穴邪。故且從俗浮湛、與時俯仰、以通其狂惑。今少卿乃教以推賢進士、無乃與僕之私指謬乎。今雖欲自彫琢、曼辭以自解、無益、於俗不信、祇取辱耳。要之死日、然後是非乃定。書不能盡意、故略陳固陋。

且つ負下未だ居り易からず、下流 謗議多し [1]。僕 口語を以て此の禍に遇遭し、重ねて郷黨の戮笑と爲り [2]、先人を汙辱す [3]、亦た何の面目ありて復た父母の丘墓に上らんや [4]。百世を累ぬと雖も [5]、垢彌よ甚しきのみ。是を以て腸一日にして九回し、居れば則ち忽忽として亡う所有るが若く、出づれば則ち如往する所を知らず [6]。毎に斯の恥を念い、汗未だ嘗て背に發し衣を霑らさずんばあらざるなり [7]。身直だ閹閤の臣と爲る [8]、寧んぞ自ら引きて深く巖穴に臧れんや [9]。故に且らく俗に従いて浮湛し [10]、時と俯仰し [11]、以て其の狂惑を通ず [12]。今少卿乃ち教うるに賢を推し士を進むるを以てす、乃ち僕の私指と謬つこと無からんや。今 自ら

*337 貨殖列傳「通邑大都、酷一歲千釀、醃醬千瓠、漿千甌、屠牛羊彘千皮、販穀糶千鍾、薪橐千車、船長千丈、木千章、竹竿萬个、其輶車百乘、牛車千兩、木器髹者千枚、銅器千鈞、素木鐵器若卮茜千石、馬蹄躑千、牛千足、羊彘千雙、僮手指千、筋角丹沙千斤、其帛絮細布千鈞、文采千匹、榻布皮革千石、漆千斗、檿麴鹽豉千荅、鮐鮓千斤、鰔千石、鮑千鈞、棗栗千石者三之、狐鼯裘千皮、羔羊裘千石、旃席千具、佗果菜千鍾、子貸金錢千貫、節貳會、貪賈三之、廉賈五之、此亦比千乘之家、其大率也。」

彫琢し [13]、曼辭して以て自解せんと欲すと雖も [14]、益無く、俗に於いて信ぜられず、^た祇だ取辱を取るのみ [15]。之を要するに死日 [16]、然る後に是非乃ち定まる [17]。書 意を盡くす能わず [18]、故に固陋を略陳す。

[1] 下流多謗議 「下流」は、『論語』陽貨「子貢曰、君子亦有惡乎。子曰、有惡。惡稱人之惡者、惡居下流而訕上者、惡勇而無禮者、惡果敢而窒者。曰、賜也亦有惡乎。惡徼以爲知者、惡不孫以爲勇者、惡訐以爲直者。」・子張「子貢曰、紂之不善、不如是之甚也。是以君子惡居下流、天下之惡皆歸焉。」に、「謗議」は、『淮南子』齊俗訓「於是乃有翡翠犀象、黼黻文章以亂其目、芻豢黍粱、荊吳芬馨以噉其口、鐘鼓管簫、絲竹金石以淫其耳、趨舍行義、禮節謗議以營其心。」に見える。

[2] 重爲鄉黨戮笑 上文「重爲天下觀笑」。『公羊』莊三十二「秋七月癸巳、公子牙卒。何以不稱弟。殺也。殺則曷爲不言刺。爲季子諱殺也。曷爲爲季子諱殺。季子之過惡也。不以爲國獄、緣季子之心而爲之諱。季子之過惡奈何。莊公病、將死、以病召季子。季子至而授之以國政。曰、寡人即不起此病、吾將焉致乎魯國。季子曰、般也存、君何憂焉。公曰、庸得若是乎。牙謂我曰、魯一生一及、君已知之矣。慶父也存。季子曰、夫何敢。是將爲亂乎。夫何敢。俄而牙弑械成。季子和藥而飲之、曰、公子從吾言而飲此、則必可以無爲天下戮笑、必有後乎魯國。不從吾言而不飲此、則必爲天下戮笑、必無後乎魯國。於是從其言而飲之、飲之無僂氏、至乎王堤而死。公子牙今將爾、辭曷爲與親弑者同。君親無將、將而誅焉。然則善之與。曰、然。殺世子母弟直稱君者、甚之也。季子殺母兄、何善爾。誅不得辟兄、君臣之義也。然則曷爲不直誅而酖之。行誅乎兄、隱而逃之、使託若以疾死然、親親之道也。」

[3] 汙辱先人 『韓詩外傳』卷九「脩身不可不慎也、嗜慾侈則行虧、讒毀行則害成。患生於忿怒、禍起於纖微。汙辱難湔灑、敗失不復追。不深念遠慮、後悔何益。徼幸者、伐性之斧也、嗜慾者、逐禍之馬也、謾誕者、趨禍之路也、毀於人者、困窮之舍也。是故君子不徼幸、節嗜慾、務忠信、無毀於一人、則名聲尚尊、稱爲君子矣。詩曰、何其處兮、必有與也。」・『淮南子』脩務訓「今以中人之才、蒙愚惑之智、被汙辱之行、無本業所脩、方術所務、焉得無有睥面掩鼻之容哉。」

[4] 亦何面目復上父母之丘墓乎 「何面目復」は、孟嘗君列傳「今賴先生得復其位、客亦有何面目復見文乎。」・張耳陳餘列傳「且人臣有篡殺之名、何面目復事上哉。」に、「丘

墓」は范雎蔡澤列傳「范雎曰、汝罪有三耳。昔者楚昭王時而申包胥爲楚卻吳軍、楚王封之以荊五千戶、包胥辭不受、爲丘墓之寄於荊也。今雎之先人丘墓亦在魏、公前以雎爲有外心於齊而惡雎於魏齊、公之罪一也。當魏齊辱我於廁中、公不止、罪二也。更醉而溺我、公其何忍乎。罪三矣。然公之所以得無死者、以綈袍戀戀、有故人之意、故釋公。」に見える。

[5] 雖累百世 孔子世家「孔子之時、周室微而禮樂廢、詩書缺。追迹三代之禮、序書傳、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事。曰、夏禮吾能言之、杞不足徵也。殷禮吾能言之、宋不足徵也。足、則吾能徵之矣。觀殷夏所損益、曰、後雖百世可知也、以一文一質。周監二代、郁郁乎文哉。吾從周。*338 故書傳、禮記自孔氏。」

[6] 居則忽忽若有所亡出則不知所如往 「居則…、出則…」は『漢書』鼂錯傳「臣又聞古之制邊縣以備敵也、使五家爲伍、伍有長。十長一里、里有假士。四里一連、連有假五百。十連一邑、邑有假候、皆擇其邑之賢材有護、習地形知民心者、居則習民於射法、出則教民於應敵。」に見え、「忽忽若有所亡」は『淮南子』原道訓「解車休馬、罷酒徹樂、而心忽然若有所喪、悵然若有所亡也。」に類似し、「不知所如往」は、『莊子』雜篇 / 庚桑楚「吾聞至人、尸居環堵之室、而百姓猖狂、不知所如往。」に見える。

[7] 汗未嘗不發背霑衣也 陳丞相世家「勃又謝不知、汗出沾背、愧不能對。」

[8] 身直爲閨閣之臣 汲鄭列傳「黯多病、臥閨閣內不出。」

[9] 寧得自引深臧於巖穴邪 「自引」は『荀子』大略「小雅不以於汗上、自引而居下、疾今之政以思往者、其言有文焉、其聲有哀焉。」に、「巖穴」は、上文「顯巖穴之士」に見える。

[10] 故且從俗浮湛 「從俗」は屈原賦に頻見する。『楚辭』(屈原)離騷「委厥美以從俗兮、苟得列乎眾芳。」「浮湛」は袁盎晁錯列傳「袁盎病免居家、與閭里浮沈、相隨行、鬪雞走狗。」に見える。

[11] 與時俯仰 貨殖列傳「皆非有爵邑奉祿弄法犯姦而富、盡椎埋去就、與時俯仰、獲其贏利、以末致財、用本守之、以武一切、用文持之、變化有概、故足術也。」

[12] 以通其狂惑 『漢書』鼂錯傳「昧死上狂惑中茅之愚、臣言唯陛下財擇。」

*338 『論語』爲政「子張問、十世可知也。子曰、殷因於夏禮、所損益、可知也。周因於殷禮、所損益、可知也。其或繼周者、雖百世、可知也。」

[13] 今雖欲自彫琢 「雖欲自」は、『論語』子張「叔孫武叔毀仲尼。子貢曰、無以爲也。仲尼不可毀也。他人之賢者、丘陵也、猶可踰也。仲尼、日月也、無得而踰焉。人雖欲自絕、其何傷於日月乎。多見其不知量也。」に、「彫琢」は、『漢書』東方朔傳 / 非有先生論「二人皆詐僞、巧言利口以進其身、陰奉雕琢刻鏤之好以納其心。」に見える。

[14] 曼辭以自解 老子韓非列傳「然善屬書離辭、指事類情、用剽剝儒、墨、雖當世宿學不能自解免也。」

[15] 祇取辱耳 周本紀「虞・芮之人未見西伯、皆慙、相謂曰、吾所爭、周人所恥、何往爲、祇取辱耳。」・楚世家「王曰、大福不再、祇取辱耳。」*339・韓長孺列傳「今單于聞、不至而還、臣以三萬人眾不敵、祇取辱耳。」

[16] 要之死日 『新書』禮容語下「魯叔孫昭聘于宋、宋元公與之燕、飲酒樂。昭子右坐、歌終而語、因相泣也。樂祁曰、過哉君。非哀所也。已而告人曰、今茲君與叔孫其皆死乎。吾聞之、哀樂而樂哀、皆喪心也。心之精爽、是謂魂魄、魂魄已失、何以能久。且吾聞之、主民者不可以媮、媮必死。今君與叔孫其語皆媮、死日不遠矣。居六月、宋元公薨、間一月、叔孫媮卒。」

[17] 是非乃定 『呂氏春秋』離謂「鄭國大亂、民口謹譁。子產患之、於是殺鄧析而戮之、民心乃服、是非乃定、法律乃行。」

[18] 書不能盡意 『易』繫辭傳上「子曰。書不盡言。言不盡意。」

*339 『左傳』昭十三「王曰、大福不再、祇取辱焉。」